はてしない物語＝壬生川一族、かく戦えけり＝

みかみ　てれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はてしない物語＝壬生川一族、かく戦えけり＝

【Ｎコード】
Ｎ７９１０Ｗ

【作者名】
みかみ　てれん

【あらすじ】
「へぇ～、そうか……“死”って意外と柔らかかったのね」
神に力を与えられた彼らは、天界と鬼の争いに巻き込まれてゆく。変わってゆく彼ら一族は人か？　神か？　それとも鬼と成り果てるのか？　世代を変え、めまぐるしく人物を変え、彼らは生き続ける。コメディからシリアスに、時に涙し、そして抗い、燃え尽きるまで。

※こちらの物語は、２００５年7月より、ブログ『ｈｔｔｐ：／／ｍｉｂｕｋａｗａ．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ』にて、約5年間に渡って

連載された“俺屍プレイ日記”に加筆修正を加えたものです

前書き

※こちらの物語は、
２００５年7月より、ブログ『ｈｔｔｐ：／／ｍｉｂｕｋａｗａ．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／ｉ１０』にて、
約５年間に渡って連載された“俺屍プレイ日記”に加筆修正を加えたものです

＝前書き＝

◇俺の屍を越えてゆけ、ってどんなゲーム？

プレイステーションにて１９９９年に発売された、ＲＰＧです
ＯＰで主人公の先祖がいきなり鬼に敗北しちゃいます
それで日本は滅亡する予定が、主人公母の色っぽい懇願（鬼大喜び）により、
京の都は主人公一族がふたつの呪いをかけられただけで、済むのです

その１、短命の呪い――主人公一族の寿命は長くても二年
その２、種絶の呪い――主人公一族は人とアレしても子供が出来ない

もう鬼ですね、まさに鬼
「この鬼！」とかなきり声で叫びたいです、いや鬼なんですけど

さらに同じく鬼にイジメられている神様たちのご加護で、
美女揃い（男神はカエルとかハニワとか擬人揃い）の神様と、子を為すことはかろうじてできるようになったのですが、その1、これがホント酷い
短命の呪いにより、0才でも喋ったり走ったり、刀で斬りつけたり天変地異を引き起こす術を使ったり、
……出来るんですけど、その寿命はたったの二年

生まれてから死ぬまで、二年間ぽっちの人生です

こんな呪いをかけられた一族は、復讐に燃えます

戦い、戦い、戦い抜いて、鬼の部下を倒し、強くなり、
強くなり、より強い子供を産んで、また戦って、戦って、咲いては枯れる花のような人生を過ごし……
いつの日か朱点童子を見事に打ち倒し、京の都を再興するのです

それが俺の屍を越えてゆけ、というゲームの概要です

この物語は、実際に作者がゲームをしたプレイ記録に基づき、作成されております
ゲームモード（難易度）は『しっかり』
※縛り内容は、初見プレイ&攻略サイト／リセット禁止です

お付き合いいただけましたら、幸いです

〜〜

＞僕がコミックの編集者なら　ｈｔｔｐ：／／ｐ．ｔｌ／ＦＹＹｑ
ここんちの小説を原作に、
＞Ｒの追加要素を上手く絡めて、俺屍のコミカライズの企画書をＳＣＥに出すな。
＞どこかやんない？タイトルの認知度は高いし、Ｒの発売に合わせれば、そうそう外れないよ　４／２１

Ｔｗｉｔｔｅｒより、桝田省治氏推薦済

第初話－1　「馬鹿」　1018年4月（前書き）

玄輝　8ヶ月
伊織　4ヶ月

第初話－1　「馬鹿」　１０１８年４月

ひとりの天女が人の男に恋をした
それが全ての、始まりだった

～～

光に包まれた彼は、奇妙な浮遊感を味わっていた
天も地もおぼろげで、自分の形が掴めなかった
「ここは、一体……」
つぶやきは、光に溶ける
いったい自分がなにものなのか、それすらもわからない

そこに、新たな光が産まれた
「お、おお……？」
先ほど現れた光が、ふよふよと漂いながら空から降りてくる
少年の眼前で止まると、光は広がって人の形を作った

それとともに、声
意思ある言葉
世界に意味が産まれる

「勇者の血を継ぐ子、玄輝（げんき）よ、目覚めなさい。あなたに大切な話があります」

そう、
名は玄輝（げんき）
彼の名は、壬生川玄輝（みぶがわげんき）だ

次の瞬間、光の線であった彼は、青年の姿となる

「……俺は、玄輝……」

思考がまとまらない
それもそのはずだ
なぜなら彼の正体は、いまだ赤子であったのだ
神の手により、身体だけが大人のものへと変わったことを、彼は知らない

そんな彼に為された説明
『朱点童子（しゅてんどうじ）』と呼ばれる、凶に仇なす大敵の存在
強者であった両親が朱点童子に立ち向かい敗北したことにより、
その子であった玄輝に与えられたふたつの呪い
“短命の呪い”と“種絶の呪い”
二年にも満たない寿命と、人の間に子を作ることができぬ運命も、彼にはまだ早い
悪鬼羅刹を打ち滅ぼす、などという使命も、あまりにも遠い
生後四ヶ月の彼の手には余った
恐らくそれは、彼よりもよほど神のほうが理解しているらしく、

「最後の希望の光は、あなたの血の中にしかないのですから…」

ああ、俺自身には期待されていない！？　と、幼心に衝撃を受けてしまう

「地上には平和と繁栄を、あなたの血で取り戻すのです」

血で、血で、と強調されてしまう
つまり彼の秘めたる力は途方もないのだが、それは彼ではなく、
その後の代によってようやく意味を持つものなのだろう
この物語では、いかに彼が窮地に陥っても、それを打開する力が
覚醒したりはしない

ただ死に、ただ朽ちる

しかし、そのままでは終わらない
彼が宿命を全うできなくても、子が、孫がそれを継ぐ
玄輝はまだ自分が、長い長い、一族と世界を巻き込んだ戦いの渦
に引きこまれたことを、知らず、到底理解できていない
目の前で浮かぶ光の形をした神の言葉を、飲み込むだけだ

そんな玄輝の前、神は乾いた手を打った

すると現れる、四柱の美女
女神である

「……え？」

唐突な展開に、思わず玄輝も半笑い
生後四ヶ月の青年に、選べ、という
『人とが無理なら、神と子を作ればいいじゃない？』と言ったかど
うかはわからないが、異国の姫の格言のような場面
これなんて卑猥遊戯？　である

いつまでも玄輝がまごまごとしていることに痺れを切らしたのか、歩み寄ってきたのはひとりの女神
赤い着物を気崩したささらノお焔は、竹を割ったような笑みで手を伸ばしてくる
「イイじゃない、タダでこんな良い女を抱けるんだからサ」
抱くとか抱かないとか、意味がまだわからない玄輝０さい
「あー、雲の上までつれてってあげるのは、アタシなんだから！」
と、玄輝の腕を取るのは、まさに天女
飛天ノ舞子だ
「え、いや、その！」
こちらの娘、胸が、その、あの、かなり大きい
一歩離れて余裕気な笑みを見せるのが、お地母ノ木実
「焦ることはないよ。自分に合った相手を選びなさいな」
その悠然とした笑顔は、大地を育む地母神そのものだ
そうして最後のひとりは、光の神よりも離れた位置に立ち、小袖で口元を隠している
「……がんばってください、玄輝さま」
奥ゆかしき女神、魂寄せお蛍
彼女だけは、暗雲立ち込める玄輝の未来に思いを馳せていた
一方、ささらノお焔と飛天ノ舞子に両腕を絡め取られた玄輝は、もうなにがなにやらわからない

「ヽ（。∀。）ノ」

刺激が強すぎた
結局自分で選べなかった彼は、ささらノお焔に押し切られる形となった

「ヽ（。∀。）ノ、ヽ（。∀。）ノ」

〜〜

ささらノお焔が傍らに座って「アンタなかなか良かったヨ」とか言ってる
火を司る神様だけあって、相当に布団の上でも積極的だった、と将来玄輝は語っていたという

〜〜

……あっという間に子は生まれた
人と神の尺度は違う
一瞬を永劫に為すこともできるのなら、その逆もまた然り
誕生したのは、かわいい女の子だ

名前は伊織（いおり）
伸ばした緑色の髪を頭の上でお団子に結った、と赤い目の優しそうな子だ

玄輝はその後、神様から様々な贈り物を受け取る
気取った『黒―青』の着物一式、両親の形見の品の武器防具に、道具
更には元気で明るく、働き者が自慢の女中

そこで彼は自分の両親について思い出そうとしたが、その記憶はおぼろげであった
両親ともに、高名な武士であったらしいが、それについては覚え

ていない
ただ、暖かな腕の感触がかすかに残っているような気がした
あるいはそれは、ささらノお焔の感触の印象があまりにも強すぎて、なにからなにまで塗りつぶされてしまっただけかもしれないが

とりあえず、玄輝は決意する

朱点童子さえ倒せば呪いも消えるそうなので、
難しいことは良く分からんが、頑張ってみるかー、（ﾟ∀ﾟ）ノ
と

＜それから四ヵ月後＞

壬生川玄輝　剣士　０才８ヶ月
伊織　薙刀士０才４ヶ月

両親の住んでいた屋敷に帰ると、玄関でメイド女中が待っていた
「今日から身の回りのお世話をさせていただくイツ花（いつか）です、よろしくお願いしまーす！！」

明るい栗色の髪を長く伸ばして、小さな眼鏡をかけている少女だ
言われた通り元気で明るく、桔梗の花飾りがよく似合っている

「とりあえず風邪を引かないだけが取り柄の私ですから！」

神様の下から派遣されたというイツ花は、神たちを束ねる大神、
大照天昼子（たいしょうてんひるこ）を祭った、由緒正しい神社の将来有望な巫女さんらしい
彼女はグッと拳を握って、斜め上に突き出す

「じゃ、バーンとォさっそく鬼退治にお出掛けください！」
「よし！　っていきなりかっ！？」

まだ家に着いたばかりである
四ヶ月差の娘、伊織なんて、喋ってもいないというのに
しかしイツ花は朗らかに、

「今は戦って戦って、とにかく力をつけること、それしかないンです！」

そんな風に押されたら、玄輝思わずうなずいてしまう
「そ、そうか！」
流されっぱなしの壬生川家初代当主である
「よーしそれじゃ当主さま戦っちゃうゾー！」

「え、あ、あの……」

ようやく口を開いた伊織
第一声は、父親への呆れの声である

「武器や防具なんて後回し、細かい事なんて後回し、出陣！　ヒャッホーイ！」

すっかり気分の乗った玄輝

中身は子供そのものなのだが、誰がどう見ても成人男性の姿をしているので、なおさら痛々しい

「突入場所は、勘と気合で決めちゃってください！」

「分かった、バーンとォ、（ﾟ∀ﾟ）ノ！」

ちなみに現在向かうことのできる迷宮は、

鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）、相翼院（そうよくいん）、九重楼（くじゅうろう）、の三箇所である

それぞれに特色や仕掛けがあるのだが、それはまた後々

イツ花は思い出したように、指を立てる

「あ、でもその前にィ、武器や防具はちゃんと装備して、道具も選別してから行かないとダメですからネ、それに説明もパパパっとくらいでいいですから、目を通してくださ……あ、あれ？」

と振り返ったときにはもう、そこには伊織の姿しかなかった

肩を落としながら、娘はため息をつく

「父様なら……もぅ」

伊織が指した先には、『壬生川家最凶』ののぼりをつけた、玄輝の姿が

まるで馬鹿の看板だ

「……伊織さま、しっかり戻ってきてくださいね」

「……頑張ります……」

イツ花に堅く手を握られ、伊織は苦笑いを浮かべるしかなかった

～～

行き先も決めずに走っていった父親になんとか追いつき、伊織は『説明書』と呼ばれる書を広げる
「現在選べるのは、大江山（おおえやま）、九重楼、相翼院、鳥居千万宮の四箇所ですね」
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「大江山は朱点童子の棲む鬼の総本山で、１１月と１２月しかその扉は開かないらしいです。今は４月ですので、三箇所のうち、どこかですね」
「バーンとォヽ（ ゜∀ ゜）ノ！」
「と、父様？」
「大江山に朱点童子がいるなら、大江山に突撃だッ」
「いやだから、まだ四月ですから！　話聞いてなかったんですか！？」
「えー」
「駄々っ子みたいな声！」
「よしじゃあこの、五重の塔の１．８倍高い、九重楼へ向かうゾ！ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「わ、分かりました、バカと煙は高いところが好きと申しますものね」
「よっし行くゾー！」
ついに娘からも馬鹿認定の玄輝は、元気よく拳を突き上げた

九重楼へと入る直前、ふたりの前にふわふわと人影が下りてきた
「やっ、ボクの名前は――」

にやけた笑みを浮かべたその横を、
「突撃ィィィィ！！」
「父様待ってくださいいいい！」

ドダダダダダ……
砂煙をあげて走りさってゆく壬生川家の親子

残された影は、肩を竦めながら乾いた笑みを漏らす

「……キミたち一族を助けるように言われてきたんだけど、ね……
アハ、ハハ」

第初話－1　「馬鹿」　1018年4月（後書き）

出陣・九重楼（玄輝・伊織）

第初話－2　「却走」　１０１８年４－５月（前書き）

玄輝　９ヶ月
伊織　５ヶ月

第初話－2　「却走」　１０１８年４－５月

＜九重楼・玄輝＞

林の中を、中央の塔に向けて突き進む壬生川一家
首切り大将、鬼ワラ、手目坊主、ドーマン僧、雲霞のごとく湧いてくる魔物を総称して“鬼”と呼ぶ
塔へと向かう道に、無数の“鬼”が立ちはだかる

玄輝（げんき）の獲物は刀、伊織（いおり）は薙刀
どちらも戦などしたことはなく、鍛錬すらもわずかな日数しか費やしていないはずなのに、鬼と対等以上に渡り合うことができた
これこそが、ふたりの身体を流れる『神の血』の効力である
でたらめに振り回した刃すらも岩を断ち、力任せに叩きつけた柄が鉄を砕くのなら、武術など修めずとも戦い抜くことはできるのだ
それこそが、壬生川（みぶがわ）家
神と“交神（こうしん）”したものの御力である

～～

しかしいかに力が強かろうが、頭までよくなるわけではなかった
「傷を負ってしまったけれど、誰も回復を使えない！（。д。）」
道端に座り込んでいた玄輝が、この世の終わりのような顔をする
そこに、静かに道具袋を差し出す伊織

「……私が、いくつか丸薬を持って参りました。これで体力を回復できます」
「（ ゜д ゜）ウマー」
「……父様（ホロリ」
序盤の若葉ノ丸薬（わかばのがんやく）は、大事なのだ

～～

「奥へ進め進めー、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「と、父様……私の健康度（けんこうど）が損なわれる前に、退却してくださいね……？」
体力が減った状態で戦い続けると、“健康度”が減少してしまう
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「健康度が減った状態で帰ると、下手したら私、死にますからね……？」
そして、健康度が一定以下の状態で帰還すると、死亡する可能性が生まれる
伊織の顔色は、少し青くなっていた
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「き、聞いているのかな……？」
さすがにというかなんというか、玄輝と伊織を比べると、あらゆる面で玄輝の能力が優っているのだ
伊織は足手まといにならないようについていくので精一杯だ
「ぜぇ、父様、そんなに走っていったら、体力が……わ、わたしたち、×ダッシュするごとに体力が減るんですから……」
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「体力がぁぁぁぁぁ」

～～

討伐の残り帰還も、あとわずか
ふたりは奥へ奥へと進んでいた

（六年坂ってココ、もしかして割と奥なんじゃ）
「よし伊織、帰ったらパパ子供作っちゃうゾー」
「え、あ……は、はい？」
突然の子作り宣言に、傷だらけの娘はどういう反応をすればいいのか
しかし、玄輝は至って真剣だ
「そのためにもたくさん戦って奉納点稼がなきゃナー」
奉納点をより捧げれば捧げるほど、高位の神と子を為すことができる
そうすれば、さらに強い子が誕生するのだ
一族は四人まで進軍することができるのだから、今は家族の数が多ければ多いほどが良いに決まっている
伊織は思わず玄輝を見返す
「え、父様がイノシシのように進んでいたのって、何も考えてなかったわけではなかったの……？」
そして、奉納点を手に入れる術は、鬼を狩るしかない
父は笑う
「当たり前サー、（ ゜∀ ゜）ノ」
（何て信じられない目をしているんだろう）
これには娘も半信半疑
「そして四人ＰＴを組んで、親子四人で朱点童子を討つ！　万事解決！」
「父様……」

しかしながら、半分は信じてしまう伊織であった

～～

再び、奥地

「七天門ー、（ﾟ∀ﾟ）ノ」

「次からは絶対、回復の術を覚えてこよう……そうしよう」

「む、かがり火が全部消えてしまう！」

「今月の探索は終了ですね。かばんの中ももういっぱいですし、帰りましょうか父様」

火時計が全て消えてしまうと、その月の探索は終了となる

帰還するか、さらにひと月残って探索を続けるかを選ぶことができるのだ

ただし月をまたいで探索を続けた場合、全ての能力が低下してしまう

玄輝は即座に決断をした

「うむ、続行、と、（ﾟ∀ﾟ）ノ」

「父様ぁぁぁぁっぁぁぁ」

～～

というわけで、１０１８年の５月である

林道を抜けると、ついにふたりは九重楼へと続く門の前に出た

「八起苑に着いたが、ここは一体」

「父様、アレはここに巣食う鬼ですよ！」

伊織が指さす先には、巨大な達磨のような化物がいた
今までの雑魚とは、そもそも大きさがまったく違う
となると、その身体から放つ重圧もだ

ふたりの意見がまっぷたつに割れる
「なにぃ、退治せねば！ヽ（ °∀ °）ノ」
「いやいやいやいや戻りましょう、私たちでは太刀打ちできませんって！」
となると当然優先されるべきは当主の意見
「覚悟ォォォ！」
「いやぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
七天斎八起（しちてんさいはっき）「ファーッファッファッファ」

戦いが、始まる

鬼の一撃で、最大体力１５２の玄輝が一撃７２も食らう
「（ °д °）」
これにはさすがの玄輝も唖然
「だから言ったじゃないですかお父様ぁぁぁぁ！」
早くも漂う、『これは無理だろ』感
玄輝はすかさず指輪を空に掲げる
「ええい、必殺！　当主の指輪！」
一回の討伐ごとに、一度だけ使える、秘具である
先祖の英霊が今ここに蘇り、七天斎八起を乱切りするだが、しかし……
「き、効いてませんよぉ……」

そのダメージすら、門番の鬼の回復の術一回で、癒されてしまう！

かといって、退却できない以上、負ければ即、死が訪れる

諦めることは許されない

「こうなったら、持ってきたアイテム全部使って、総力戦だ！」

当主の指輪に続き、ナマズの符を惜しげもなく使うが、一向に体力の減る気配がない！

対する七天斎八起は、そんな微量なダメージすらも念入りに＜お雫＞の術で体力を回復させてゆく

「父様……」

もう、持ってきた癒やしの丸薬も尽きてしまった

「くっ、通常攻撃は通るんだけどナ……！」

そのとき、伊織はもう覚悟を決めていた

齢０才４ヶ月の少女が、

額から血を流しながら、前に歩み出る

「……父様、どうか、生きてください」

唯一七天斎の体力を奪える剣士・玄輝がやられては、と、

伊織は少ない体力で当主をかばう

「伊織！」

「もう、無茶ばかり、しないでくださいね……」

娘の覚悟を無駄にするわけにはいかないと、さすがの玄輝もここ一番に奮闘する

もし彼に秘められた力が眠っているのなら、ここでこそ開花すべきだろう

だが――

そういった“慈悲”は、ない

玄輝の心意気も叶わず、伏せる二人

敗走した壬生川一族、命からがら京へと逃げ延びたのであった……

＝１０１８年　６月　屋敷に戻り＝

「いやぁ、参った……最初からボスに挑むものじゃないな……」

一ヶ月の休養で何とか傷も癒えた玄輝

包帯だらけの肩を抱きながら、さすがに反省をしていた

「伊織が色々補助してくれねば、もっと早くに命を落としていたか……」

九重楼の門番の相手にもならなかったという現実

どうやら朱点童子を討つためには、まだまだ力が足りないようだ

それでも当主の玄輝はへこたれない

「しかし、新しい巻物も一本手に入った事で。実りのある良い旅だったとは言えないだろうか！ヽ（。∀。）ノ」

強敵の強さを知ることにより、今の自分の身の丈がわかる

それもひとつの収穫であった

居間に座する玄輝に、影が落ちた
見あげれば、イツ花
出陣の前に見た、あの笑顔は欠片もない
玄輝にすら、ただならぬ事態だと知れた

「玄輝様…！」
「ん、イツ花……？　そういえば、伊織の姿が見えないが……」
「玄輝様…！　命の炎が燃え尽きようとされている方がいらっしゃいます」
「え、」
「お気を強く持って、こちらへ……」

イツ花に連れられて、玄輝は娘の寝間へとやってきた
そこには、布団の上に横たわる伊織の姿があった

伊織「神様…　いい夢を、ありがとう…」

壬生川　伊織　享年五ヶ月

玄輝はしばらくジッとしていた
伊織の亡骸の傍で、呆けたように座っていた

初陣、娘の死
それらの現実を受け止めるには、玄輝はまだ幼すぎたのだ

第初話－2　「却走」　１０１８年４－５月（後書き）

出陣・九重楼（玄輝・伊織）　伊織・落命

第初話－3　「孤立」　1018年6月（前書き）

玄輝　10ヶ月

第初話－3　「孤立」　１０１８年６月

＜交神の儀＞

広い壬生川家に壬生川一族がたった一人

ぽつーん

「す、隙間風が……」

室内なのにびゅうびゅうと風がなだれ込む、そんな雰囲気に途方に暮れる玄輝

伊織がいなくなってから、ぼんやりと佇むことが多くなった

だが、いつまでもこうしているわけにはいかない

彼は自らの頬を張って気合を入れる

「え、ええい、交神の儀だ、子孫繁栄だ！」

ちなみに平均寿命2才というと、ネズミとほぼ同程度ということになる壬生川家

つまり、飢え死がないにせよ、ネズミのような早さで子供を産まないと滅亡してしまう計算になってしまう

というわけで、早くも壬生川家滅亡の危機に、今月は子作りに励むと決めた玄輝

料亭のおしながきのような神様一覧表と、お家の奉納点を見比べる

「どの神様と交わるか、迷ったら時間が惜しいです」

「いやでも、これだけいるとなぁ」

うーんと腕組みする
「ならこの際、顔で決めちゃいましょ！」
「よしじゃあ顔で決めるかっ、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
というわけで、玄輝は奉納点ギリギリの女神を選ぶ

「よしじゃあ、水母のくららさんだ」
言われた通り顔で決める玄輝
水色の髪に、伝来した陶磁器のような肌、奥ゆかしそうな瞳が色っぽい

「おしとやかな方が好みなんですね！」
笑顔で了承するイツ花（いつか）
玄輝とささらノお焔の間になにがあったか、彼女は知らない

水母のくらら「はい、承りました…」

というわけで、あっという間に交神の儀は終わり……

「お子様に会えるのは、今から1ヶ月後ですから」
「なるほど、ガチャガチャみたいにポンと出てくるわけではないのか」
「いや一応神様にもご準備がありますから……」

第初話－3　「孤立」　１０１８年６月（後書き）

交神の儀・玄輝×水母ノくらら

第初話－４　「有縁」　１０１８年７月（前書き）

玄輝　１１ヶ月

第初話－４　「有縁」　１０１８年７月

＜続・交神（こうしん）の儀＞

「さて、今月は」
「よーしきょうも結ばれちゃうゾー」
「ヤッてばっかりですね、当主様」
さらりととんでもないことをつぶやくイツ（いつか）花
聞き流す玄輝（げんき）
なにはともあれ、人、である

「……福招き　美也、ってこれ、倫理的に大丈夫なのか」
擬人化した黒猫のような容姿
「どこからどう見ても、中学生ぐらいじゃないか？」
「神様ですから、容姿とご年齢は関係ありませんって！」
「そ、そうか」
「それを言ったら、当主様とかまだ生後十ヶ月じゃないですかァ」
「本来ならまだ赤子か、俺は……」

福招き　美也「にゃははは」

交神の儀も三度目、さすがに慣れてきた玄輝である

＜第二子誕生＞

「当主様、先月交神の儀を結んだ水母ノくらら様より、お子様を預かってますよ！」
「おお」
「洗濯とお掃除が大好きな男の子で、助かってますっ」
「人の息子に何をさせているんだっ！？　女中！」

「さ、名前と職業をお選びになりましょ」
「お、おう」

委任で命名、名前は臥蛇丸（がじゃまる）だ

「なんともまぁ、勇ましい名前だな」
鬼を対峙する一族にはふさわしいだろう
「職業はどうなさいますか？」
「そうだな、薙刀士がいいなー」
「当主様……」
「何だか後ろに薙刀士が控えてないと、背中がスースーしてなぁ、（。∀。）ノ」
一瞬ほろりとするも、その何も考えてなさそうな玄輝の顔に思い直すイツ花だった

「よろしく御願いします。お父様」
恭しく一礼する、臥蛇丸（がじゃまる）
長身で、緑色の髪を後ろに流している赤目の美男子だ

「さすが水母ノくららの息子、言葉遣いが丁寧なっ」
「玄輝様に似てませんね、素晴らしいです！」
「……イツ花」
ジト目でにらむが、イツ花は気にしない
頬に手を当てながら、まじまじと臥蛇丸を観察する
（なんだか、伊織さんの面影が残ってますねェ）
火系と水系、正反対の女神の子供なのに、不思議なものだ

玄輝はやってきた息子に向けて、笑みを見せる
「よーしそれじゃあ、早速薙刀の修行だ！　なにはともあれ、強くなきゃいけないからな、ヽ（。∀。）ノ」
ひゃっほう、と庭に降りると、臥蛇丸も慌ててついてくる
「は、はい、お父様」

そんなふたりの姿を、イツ花は暖かく見守る
「玄輝様、ようやくお元気になられましたね……」
微笑むイツ花であった

第初話－４　「有縁」　１０１８年７月（後書き）

交神の儀・玄輝×福招き美也　臥蛇丸↓薙刀士・初見

第初話－5　「双美」　1018年8月（前書き）

玄輝　　1才

臥蛇丸　1ヶ月

第初話－5　「双美」　１０１８年８月

＜お買い物＞

「じゃあ今月は、売買で道具などを購入しておくか！」
庭の縁側で右手を空に突き上げて、決意表明する玄輝（げんき）
いつもの突飛な行動に、洗濯板で肌着を洗っていたイツ花（いつか）がビクッ
「ど、どうしたんですか突然？」
玄輝はしたり顔
「いやホラ、丸薬とかないと困るかもしれないと、気づいてな！」
携帯鞄の中の道具は、前回の死闘でスッカスカになったのだった
遅すぎる当主の決断にも、できた娘のイツ花は笑顔
「当主様はここで指示するだけ、イツ花がお使いに走りますよ」
「いやぁ、家にいても臥蛇丸（がじゃまる）の訓練だけだし、京の町とやらも見てみたいんだよな」
ぞんざいに扱われる臥蛇丸の訓練
だが、そわそわと落ち着きのない辺り、やはりまだまだ子供なのだ
イツ花は額の汗を拭い、よいしょっと立ち上がる
「はいはい、それじゃこれを干したら、一緒に参りましょうネ」

「年に1度はお蔵の肥やしを景気よく売っちゃって、スッキリするのも良いですよ」
かっぽかっぽと町を歩きながら、世間話に興じるふたり
「一回の出陣で、ずいぶん持ち物が溜まるもんなー」
玄輝は頭の後ろで腕を組む

「あーでもぅ、お買い物のほうはかなり投資してあげないと、ゼ～ンゼンお話にならないんですよー」
「何ぃ」
「朱点（しゅてん）のおかげで都は荒れ放題！　まともな品揃えのお店なんか１軒もありゃしないンですもん」

そうしてお店に入るも、イツ花が言ったような散々な現状とは思えなかった玄輝

「でも、結構にぎわっていないか？」
「あ、これは、復興のおかげですネ」
「復興？」
「復興は朱点童子に荒らされたこの都に、美しさと賑わいを取り戻すための投資です！」
身振り手振りを交えつつ解説するイツ花
「ほほー、立派な奴もいたもんだナァ」
「お金をつぎ込んでェ、店が増えれば商品も増える！　腕のいい職人さんも集まってきます！って、あのー」
「うん？」
「お店に復興のお金を援助してくださったの、その、伊織（いおり）様なンですよ」
おずおずと切り出すイツ花
「ははぁ」
「帰ってきてからです、怪我で床に伏せながらも、これからのために、って……」
「なるほど」
武器屋や防具屋を、目を細めて眺める玄輝
「器量のよい娘だったなぁ」
「……」

その後、玄輝は一ヶ月間、臥蛇丸の薙刀の訓練を行った
臥蛇丸はその素質を、メキメキと伸ばしていくのであった

＜賑やかになる壬生川家＞

「当主様、福招き美也様の下より、双子をお連れしました！」
「双子！」
「奉納点がお得ですね！」
「ヒャッホーイ！」

いつも以上に楽しそうなイツ花の笑顔に、玄輝も膝を叩いて喜ぶ

「それに、おふたりとも、女のお子様です！」
「なにぃ！　でかしたぞイツ花！」
「別に私が産んだわけじゃありませんけどネ！」
「なら今度はお前が産んでみるか！？　なんつってな！」
「アハハ、当主さま！　私が身ごもっても産まれる前に当主さま死んじゃいますよ！」

軽いセクハラに対する返しは、壮絶なブラックジョークであったと、それはともかく、

本来なら駆け寄って赤ん坊を抱きかかえるのだろうけれども、あいにく短命の呪いにかかっている壬生川家の稚児は、来る頃にはもう常人で言う、5歳くらいの背丈の子供だ
というわけで、双子は堂々と襖を開けて、父の前に顔を出してきた

緑の髪、茶の目を持つ、後ろで髪を結い上げた凛々しい娘が夏海（なつみ）
ふわふわの水色の髪、紫の目に、のんびりとした娘がのの（ののか）の香

「よし第一印象から、夏海（なつみ）は剣士、のの（ののか）の香は弓使いだ！」
「はーい、お父上」
「はぁ～い、パパ」
見た目に反して、軽い口調のふたり
特にのの香は、ずいぶんと間延びしている
「ぱ、パパ！？」
玄輝もさすがに驚いた
イツ花も感心する
「さっすが美也様に似て、ご奔放ですネェ」
「……そのうちニャとか言い出すんだろうか」

生まれてから屋敷に来るまでの教育は、神様がするのか
これから交神相手は慎重に選ぼう、と心に決める玄輝であった

その後、玄輝とイツ花は町へ復興の支援へと向かう

＜屋敷にて、臥蛇丸ｖｓ双子＞

屋敷に残った臥蛇丸は、年長者として双子に挨拶をする

「僕は臥蛇丸（がじゃまる）、ふたりとも宜しくね」
伸ばした手を一瞥する夏海

「私たちにお兄上がいると聞いて、どんな方か思っていたら……なんか、普通ね」
「な！？」
ののの香がくすくすと笑う
「それに影薄そう～」
「なな！？」

会ってそうそう手加減のないちびっ子の双子だ

「こんなのが当主になったら、きっとお決まり事やしきたりにうるさそうな、お家柄になりそうねー」
「17時門限になっちゃったりぃ～」
「ケータイメール勝手に見られて『おい夏海、この男の名前はなんなんだい！？』とか」
「さいて～」

良く分からない事を言い出すふたり
臥蛇丸はたじろぐ

「き、君たちは、お母様からどんな教育を受けてきたんだ……？」

自分の母親くららとのギャップに、臥蛇丸は思わずたじろぐ

「別に？　普通よ、ねえ、ののの香」
「にゃは」
笑顔だけは無垢な童のそれだというのに

「と、とりあえず宜しくお願いするよ、これからも……」
懲りずに握手を求める臥蛇丸だったが、やはり夏海も応じない
代わりにずばっと言い放った

「言っておくけれど、次期当主の座はあなたには上げませんからね」
「な！？」

後ずさりする臥蛇丸
自分の胸元ほどしかない背の妹に、気圧される気弱な兄の図である

「のの香が当主になったらぁ、毎日絵師さん呼んでぇ、美人画にしてもらったりぃ～……きゃ」
「ああ、それも面白そうね。じゃあ行きましょう、のの香」
「はぁ～い、なっちゃん～」

ばいばいも言わずに立ち去ってゆく双子たち
そんな妹の衝撃に、臥蛇丸はがくがくと震えだす

「が、臥蛇丸、しっかりせねば……あの二人が当主になったら、壬生川家が終わってしまう……！」

生後２ヶ月にして、臥蛇丸は長男としての責任と、壬生川家の未来に怯えてしまうのであった

第初話－5　「双美」　１０１８年８月（後書き）

訓練・玄輝→臥蛇　夏海→剣士／のの香→弓使い・初見

第初話－6　「独力」　1018年9月（前書き）

玄輝　　1才1ヶ月
臥蛇丸　2ヶ月
夏海　　1ヶ月
のの香　1ヶ月

第初話－6　「独力」　１０１８年９月

夏の終わりを感じさせる、小雨の降る朝

「あの、お忙しい中、宜しいでしょうかお父様」

当主の間

正座して襖を開く臥蛇丸（がじゃまる）

「おー臥蛇、どうした難しい顔をして」

父――玄輝（げんき）が寝転びながら読んでいるものが、週刊『京美人の落とし方』だとは知らない臥蛇丸が、かしこまって現れる

「いえこの顔は生まれつきですが……」

「そうかそうか、そういえばお前はそんな顔をしていたな、（。∀。）ノ」

「はあ……」

適当にもほどがある

しばらく黙り込んだ後、臥蛇丸は顔をあげた

「あの、お父上の跡継ぎは、もう決まってらっしゃるのですか？」

もやもやしているよりは聞いてしまった方が早い、と一気に尋ねる

玄輝は間髪入れずにうなずいた

「うむ、決まっているゾ」

予想外の答えに息を呑む臥蛇丸

「！……迷いがないとは、さすが、お父様だ……あの、ご僭越なが

ら、どなたが次期当主に抜擢されるのでしょう？」
「そりゃぁ普通は長男がなる、って決まっているんだろうけど、俺の場合は一味違う」
本を閉じて、玄輝はにやりと笑う
（まさか……！？）
臥蛇丸の脳裏に、角の生えた双子の顔が浮かんでは消えてゆく
その直後、玄輝が親指を立てた
「一番強い奴が当主になる！」
「……へ」
それはまだ決まっていない、ということでは
「そして絶えず強い血を残していくのだ、一刻も早く朱点童子（しゅてんどうじ）を討つためにな」
玄輝は目をギラリと輝かせて、剣士の顔になる
「そ、そうですか……なるほど……」
臥蛇丸は生唾を飲み込む
（お父様も、鬼退治の事を真剣に考えていたのか）
普段は脊髄反射で生きているような父を見て、考えを改める
だが……
「朱点童子さえ倒してしまえば、一日中ゴロゴロして、寝て食って寝ていいんだろう？　いいなあ、俺も朱点童子を倒したい！　役目を終えて、だらけたい！　ラクしたいぞ！」
「……」
改めた考えを、さらに改めようかと思う臥蛇丸だった

＜二度目の出陣と父子＞

陣羽織を着込んで、刀を腰に差す玄輝
「よしそれでは、行って来るぞ！」

生後２ヶ月の臥蛇丸と１ヶ月の夏海（なつみ）との（ののか）の香はまだ戦場には出られないため、玄輝たったひとりでの出陣となる

「気をつけてねー」
「お土産に術を取ってきてくださぁ～い」
「お、お父様おひとりで、大丈夫ですか……？」
皆で屋敷の外までお見送り、である

子供たちは三者三様の表情
普段通りの夏海に、ニコニコとしたのの香、かたや臥蛇丸は心配そうに父を見つめている

そんな臥蛇丸を、夏海たちが冷やかす
「えー臥蛇丸兄上ってば、お父上が信用出来ないんですかー」
「できないんですかにゃ～」
嫌な笑みで兄のわき腹をつつく妹ふたり
「そ、そのような意味ではない！　ただ、お父様は無茶をしすぎるきらいが……」
「大丈夫大丈夫、最近勉強して、＜泉源氏＞の術も覚えたしな！、（ ゜∀ ゜）ノ」
泉源氏とは、最下級の回復術のことである
「これさえあれば、いくらでも戦えるんだろ？　無敵！　俺無敵！

丶（ °∀ °）ノ」
（心配だ……）
思わず胸を抑えてしまう臥蛇丸

「そうそう、忘れるところでした」
「無敵当主チョウゲンキー！丶（ °∀ °）ノ　って、ン？」
夏海が臥蛇丸の横を過ぎ、玄輝の前に立つ
「お父上、せめてもとこちらをお持ちください。＜引波の御守＞と言って、危険な戦闘からすぐに撤退することができます」
ニッコリ
臥蛇丸が一度も見たことのないような笑顔で、父に御守りを渡す
夏海
玄輝も喜びながら受け取る
「おお、そいつは便利だ、良いゾ良いゾ」
思わぬ娘の贈り物に、玄輝は夏海の頭をくしゃくしゃと撫でる

（あ、あんなもの、いつの間に持っていたんだ……！？）
臥蛇丸が訓練に明け暮れている間、夏海は遊び歩いているものだとばかり思っていたのに

「パパ、元気で帰ってきてね～」
今度は、どさくさにまぎれて抱きつくのの香
「うむ、ありがとう夏、のの」

（え、僕の名前は！？）
世渡り上手な妹を眺めながら、途方にくれる臥蛇丸であった

＜途中道＞

黄川人（きつと）「やあ！」

ふわふわと漂ってくる幽霊に、思わず刀を向ける玄輝

「え、誰！？」

「今日は黄川人くんの戦闘初級こうｚ……って、前にも一度会った、よね？」

「いや誰」

「……ほら、緑の髪の女の子と一緒に、九重楼に行ったじゃないかァ」

「とっつげーきぃ！、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」

「いやだからちょっと人の話を聞きなさーーい！！」

こうして剣士・玄輝のひとり旅が始まった

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

『赤青黄緑の４色の鳥居のうちの１色が、本道へ続く唯一の道です
季節によりつながりが変化するので、ややこしそうなンですが、
規則を覚えてしまえばカンタン！！
お稲荷御殿にはキツネに取り付かれて、
鬼に変じたかわいそうな女の人の幽霊が出るってウワサです
土と火の属性が高い鬼や妖怪がやや多いようです』

イツ花の渡してくれたメモを見ながら、首をひねる玄輝
「土と火の属性が高い鬼って、だからどうなんだ……？」
もっとわかりやすく書かなければ玄輝が理解できないことは、イツ花の想定外だったようだ
次は漢字もなるべく少なくしてもらわねばならない
「ま、いいか、ヽ（。∀。）ノ」
急くものも止めるものもいない一人旅だ
とりあえず玄輝は、先に進むことにした

「どんな雑魚を倒すのにも同じだけターンがかかるって、ひどいな！」

「こりゃ、泉源氏が使えなくなったら、すぐさま撤退だな……」

「ちくしょう、全部独り言か……」

イツ花や娘たちの作ってくれた握り飯を食べながら、なお頑張る父

「疲れたヨー」

「あら当主様、わたくしが癒してさしあげてよ」

「え、お前は……？」

「誰だって良いじゃない……ホラ、こちらへいらっしゃい……」

「まぁ、一人芝居なんだけどナ」

「ふぅ……さ、帰るか……ゝ（ ﾟ∀ ﾟ）ノ」

３００ほど奉納点（ほうのうてん）を稼ぎ、玄輝は五体満足で帰路へ着いたのであった

第初話－６　「独力」　１０１８年９月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（玄輝）

第初話－7　「水練」　１０１８年１０月（前書き）

玄輝　　１才２ヶ月
臥蛇丸　３ヶ月
夏海　　２ヶ月
のの香　２ヶ月

第初話－7　「水練」　１０１８年１０月

勢いよく、父の部屋の襖を開く
「お父様、今月から僕も戦えます！」

勇んで鉢巻まで締めた臥蛇丸（がじゃまる）の前、パチッ、というのん気な音が聞こえてきた

「お父様……？」
玄輝（げんき）の正面に夏海（なつみ）が座している、ふたりはどうやら囲碁をしているようだ
「おー、お前ももうそんな年か」
パチと玄輝が指し、間髪入れずに夏海が返す
「え、ええ、ですから！」
「おっし、それじゃ一ヶ月待って、来月から出陣だ。夏ののも戦えるようになるしな……って、どうした臥蛇」

玄輝の横目、床に崩れ落ちる臥蛇丸

「い、いえ……何でもありません」
パチ、とようやく玄輝が指したが、再び夏海が即打ち返す
「む、むぅ……」
「お父上、意外と弱いのね……」
困った顔の夏海に、玄輝が顔を赤らめる
「ば、バカな！　こっから世紀の大逆転イン壬生川家だ！」

２ヶ月の娘に良いようにあしらわれる玄輝

父がうなりながら打った手も、すぐに夏海に見切られて勝敗は決したようだ

「いやー参った、どうやら夏は戦術の才能があるんだろうナァ」
額を叩いて悔しがる
「そうなのかなぁ、自分では良く分からないんだけど……」
「うむ、俺があっという間に負けるなんて、それが証拠だ！」
（……アテにならない）
夏海がうなる
玄輝は立ち上がり、さっさと碁盤をしまう
それから首を鳴らして、臥蛇丸に向き直った

「よしそれじゃ、俺は飯の後でののを訓練するから、臥蛇は夏を指導してくれな」

「え、えええ」
「えーーーー」
同時に声が上がった

「ん、どうした？」
なにも知らぬは父ばかり
「臥蛇のが一個年上だろう？　薙刀相手だからこそ、結構な訓練になると思うぞ？」
夏海が父にすがりつく
「お、お父上、囲碁の続きしよう！　して！」
「いやだから俺はののを」
「うー」
「ううう……」
口を尖らせる夏海と、その隣で諦めムードを漂わせる臥蛇丸であった

～～

庭に出て、夏海とふたりっきり
なぜだか、すごく空気が冷たかった
「……」
素振りをする夏海の隣で、身を切るような寒さに凍える
（……おかしい、まだ１０月だというのに……）
「……」

あまりの緊張に、思わずいらぬ言葉をかける臥蛇丸

「……ええと、脇が、甘い、ですよ？」

何故か敬語の臥蛇丸

「……ああ、こう？」
「……え、あ、はい」
「……」
寒風が吹きすさぶ

（な、何て息が詰まる訓練なんだ……！）

顔には出さず涙する臥蛇丸であった

～～

一方、玄輝のお部屋ではののの香が術を覚えるために、読み書きの勉強をしていた

「いろはにほへと〜」
「うむ、早くののの香も一人前にならないとな」
「のの香頑張るをわかよ〜」
「混ざってる混ざってる」

進み具合を眺めながら、玄輝は思わずうなる
「ふぅむ、のの香は弓も達者だが、それ以上に術の才があるのかもしれないな」
「新しい術を覚えるのって大好きぃ」

にっこりと言う

「何だか、術をいっぱい覚えていると頭良く見られそうだからぁ」
「なっ――なるほどォ！！」
それ自体もあまり頭の良い発想ではなかろうに
玄輝は目を輝かせた
そしてのの香の横、玄輝もまた術の書にかぶりつく
「パパ、一緒に頭良く見られようね〜」
「おう！」
娘よりも必死な父ここにひとり
そんな父親を見て、のの香は楽しそうに微笑んでいた

第初話－７　「水練」　１０１８年１０月（後書き）

訓練・玄輝↓のの　臥蛇↓夏海

第初話－8　「四始」　１０１８年１１月（前書き）

玄輝　　１才３ヶ月
臥蛇丸　０才４ヶ月
夏海　　０才３ヶ月
のの香　０才３ヶ月

第初話－8　「四始」　１０１８年１１月

一家四人、居間に集合する

それぞれが雄雄しい黒と青の羽織を着て、戦衣装での登場だ
「というわけで、お父上」
「今月からぁ、よろしくお願いしまぁ～す」

剣士の夏海（なつみ）と弓使いののの（ののか）の香も、なかなかに似合っていた

「これで初めての、全員出撃隊だな、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「ええ、この刀、お父上のために振るいたく存じ上げます」
「ふつつかものですけど、術でしっかりさぽーとしますにゃ！」
「いやぁ心強い、しっかり頼むゾ」

勇ましい姉妹に、当主玄輝（げんき）もご満悦だ
負けてはならぬと、臥蛇丸（がじゃまる）も声を張り上げる

「ぼ、僕も、命を賭けて、お尽くします！」
それまでボケボケだった玄輝がゆっくりと首を振り、
「……臥蛇丸、そんな事は言うものじゃないゾ」
諭すような声だ
「ホントホント、ありえないわよね」
「さいてぇ～」
嬉しそうにはやし立てる夏海とののの香

（どうして僕だけ……）

なにが父親の癇に障ったのかわからない
るるるーと心で涙を流す臥蛇丸だった

「それでは、初陣行くぞー！」
『おー！』

ようやく四人揃った壬生川（みぶがわ）一族の、これが新たな一歩であった

～～

黄川（きつと）人「やあ！　今月はここの探索かい？　さすが目の付け所がいいね！」

「うわ誰だ！？」
「お化け！？」
「きゃぁ、のの香こわぁい～」

黄川人の背中がすすけて見える
薄れているのは間違いないのだが

「え、えっと、こんにちは」
「やあ！！」
臥蛇丸が声をかけると、すごく嬉しそうに顔を向けてくる
「は、初めまして、僕は壬生川臥蛇丸と申します」
「ボクの名前は黄川人、なんだか君とは友達になれそうだよ！」
「え、ええ、何だか僕もです」

「ありがとう、臥蛇丸くん」
「いえ、こちらこそ……って、アレ……？」

臥蛇丸が目を向けると、周りには黄川人の姿しか見えなかった
玄輝も夏海ものの香も、どうやら先に行ってしまったようだ

「……本当に、君とは友達になれそうだ」
「ハハ……」

～～

＜相翼院＞

「あら、兄上どこに行っていたの？」
「いや、うん、あの、もう良いんだそれは……」
疲れ果てた顔で抗弁を諦める臥蛇丸
「さって、突撃ィィィヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「とつげきぃぃぃ～～」

水の上に立てられたこの院には、その名の通り水妖たちが無数に巣食っていた
朱点童子（しゅてんどうじ）を倒す足がかりとして、とりあえずの奉納点（ほうのうてん）兼経験値稼ぎに、一行は奥へと足を踏み入れた

さすがに二世代目の力は強く、向かってくる尻子玉大将らの軍を、次々に打ち破る

「ハハーン、超余裕ー」

「はぁはぁ、なかなか疲れるものですね……」
「だらしなぁ～い」
「あなた方だって、お父様の陰で守ってもらっているだけだろう！
というか夏海、剣士なのに後列とか意味がわからない！」
「こ、攻撃するときは、ちゃんと前に出てるわよ！」

息を切らしながらもにらみ合う臥蛇丸と夏海

「お前ら仲良いな、（。∀。）ノ」
「なっちゃんとお兄ちゃん、仲良しぃ～」
玄輝とのの香は、のほほんと眺めている

「誰がですか、汚らわしい！」
「……次に変な事言ったら、のの香の弓へし折ってやるからね」

どうやら本気で言っているであろう臥蛇丸と夏海に、さすがの玄輝もそれが嘘ではないことに気づく
（……何でお前らそんなに、仲が悪いんだ？）

それでも一度戦場に立てば、いがみ合う暇もなく、一心不乱に戦うのだ
こうして一ヶ月を丸々戦い抜く壬生川家

「フフーン、ま、こんなところよね」
「お父様、見ててくださいましたか僕の戦いを！」
「のの香の癒しの術も、役に立ったでしょ～」
自らの働きを強調するのも忘れない三人
当主である父上に詰め寄る

「うむ、これで奉納点もバッチリ集まったなヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
玄輝は満足気に笑う
その後の言葉に、一同は騒然とした
「これで跡継ぎ候補の、立派な五人目の子供が作れそうだナ」
えー？　との香が甘えたような声を出す横
『え、えええええええええええええええええ！？』
絶叫が、響いた

第初話－8　「四始」　１０１８年１１月（後書き）

出陣・相翼院（玄輝・臥蛇・夏海・のの）

第初話－9　「鶴首」　１０１８年１２月（前書き）

玄輝　１才４ヶ月

臥蛇丸　５ヶ月

夏海　４ヶ月

のの香　４ヶ月

第初話－9　「鵺首」　1018年12月

＜交神（こうしん）の儀＞

「みどろ御前様でよろしいですネ？」
「おー、よろしくお願いします、御前さん」

みどろ御前「今は……何もかも忘れて……」

～～

玄輝（げんき）が次期当主作りに励んでいる頃
稽古場で、落ち込んでいる娘がいた

「父上ももう一才と五ヶ月というお年……跡継ぎは絶対、私たちの誰かに決まると思っていたのに」

端っこで「の」を書いていじける姿からは、普段の気丈な面影も見えない
夏海（なつみ）だ

「なっちゃん、どうしてそんなにショックなのさ～」
朗らかに声をかけるのの香（ののか）は、対照的に普段通りだ

夏海はがばっと起き上がる
「ショックに決まっているでしょううう！」
双子の妹に、獣のように襲いかかってゆく

「ちょ、ちょっと、そんな、掴まないで、何その静と動っ」
姉のご乱心に、さすがに慌てるのの香
「分家と宗家じゃ身分もお墓も全然違うのよ！？　私とのの香が差別されてもいいの！？」
目が恐い、超恐い
「ど、どこの知識なのぉ……」
「私はちゃんと勉強しているのよ！」
「そ、そうなんだ～……」
というか、明確な理由があったことにまず驚いた
（なっちゃん、あの人を当主にさせたくないだけじゃなかったんだ……）
冷や汗を流すのの香
墓も身分も、二年も生きられない自分たちには、なにも関係のない話のように思えたのだ

～～

一方で、庭で薙刀の素振りをしながらも悶々としている人がいた

（次期当主、か……）

臥蛇丸（がじゃまる）は素振りしながら考える

自分が選ばれないことに関しては、特に異論はない
夏海かのの香でないのなら、でしゃばるような真似はすまい
考えていたのは、男か女か、どちらか、ということだ
現在の戦力バランスは非常に悪い

（もし男の次期当主が生まれれば、男女比は2：2……）

仲間ができたら、これであの姉妹の横暴にも少しは歯止めが利くかもしれない
臥蛇丸の願望がそこはかとなく入っていた

（そうだ、あのふたりの性格も落ち着くかもしれない……）

夏海は稽古では、待ったと言っているのに執拗な小手ばっかり攻めてくるし、のの香なんて「寝る前の水菓子は太りますよ？」と忠告しただけで、翌日、臥蛇丸の部屋の障子が全て破かれていた、しかも破け目で「アホー」と書いてあった
おかげで雪焼けしてしまったため、今の臥蛇丸の顔は、アホーとだけ黒くなっている
イツ花にも、大笑いされてしまった……

（お父様には、何としてでも男子を産んでもらわねば……っ！）

再び、素振りを続ける
だがしかし、とも思う
このまま女子が産まれれば……？
ゾッとしてしまった

「い、いやいや！　良くないことばかりを考えるのは、僕の悪い癖だ！」

そうだ、楽観的な方向に考えを修正しよう
例えば生まれてきた子が、すごく可愛くて、あの姉妹とは全然違う優しい子だとしよう
それで、知的で思慮深い臥蛇丸に懐いてくれて、お兄ちゃんお兄ちゃんと慕ってくれるとする
それならどうだろう、その子が当主になっても、やっていけるかもしれない……！
瞬間、夏海の嫌な笑顔が脳裏をよぎる

「……ありえないこと、か……」

どっちみち、男の子でも女の子でも、すぐに夏海に懐柔される気がしてならなかった
あの子はとにかく要領と外面が良い
どちらも自分にはないものだ
「……生まれてくる子が、一番可哀想だ」
せめて自分は強くなって末の子を守らねば、と素振りを続ける

もし伊織（いおり）が生きていたら「一番可哀想なのは間違いなく臥蛇丸さんですから！」と、勢いよくツッコミをいれてくれたに違いない

第初話－９　「鵠首」　１０１８年１２月（後書き）

交神の儀・玄輝×みどろ御前

第初話－１０　「新風」　１０１９年1月（前書き）

玄輝　　１才５ヶ月
臥蛇丸　５ヶ月
夏海　　４ヶ月
のの香　４ヶ月

第初話－１０　「新風」　１０１９年１月

元日、玄輝（げんき）が真剣な顔で刀を研いでいた
「よし」
磨きあがった刀を見て、満足気にうなずく

「イツ花（いつか）、出陣の用意を頼んだ！」
「はぁい承りましたァ！」

しばらく後、玄関に集合した面々に、玄輝は告げる
「きょうは、ちょっと久々に無茶をするかもしれないので、みんなよろしくぃ（ ゜∀ ゜）ノ！」

あの父親がそんな言い方をするだなんて、よっぽどのことじゃないか
夏海（なつみ）と臥蛇丸（がじゃまる）が思わず顔を見合わせた

「……裸に刀一丁で戦う、とかですかお父上？」
「いやそれは、全力で止めますよ……」

～～

＜九重楼（くじゅうろう）＞

三度、九重楼に突撃をする四人
壬生川家は息の合った戦法で、近づく鬼たちをバッサバッサと斬り捨ててゆく

さすがにもはや、首切り大将の軍勢には苦戦をしなくなっていたそれでも物量に物をいわせた鬼の攻勢に、徐々に技力を削られてゆく

先へ先へと進みたがる玄輝をいさめる臥蛇丸
「お父様、そんなに急いで進軍すれば、すぐに体力がなくなりますよ……？」
「だから言ったではないか、無茶をする、と、（ﾟ∀ﾟ）ノ」
「言いましたけど、言っておけば許される、というものではないです！」
「皆もう泉源氏の術を使えるのだから、バーンとォ、行くぞぉー、（ﾟ∀ﾟ）ノ」
「ひー」

「ねぇ、お父上なんだか、焦ってない？」
隣ののの香に、ひそひそと話しかける夏海
「え、そぉ？」
「うん、なんだか、あのいつもの、その、馬鹿顔のお父上が……」
（ど、毒舌だなァ相変わらず……）
言いよどんではいるものの、ハッキリとした表現を突きつけてくる夏海に冷や汗
「……でもなっちゃんって、それだけパパのこと良く見ている、ってことだよね～」
「え！？」

と、振り返ってきた夏海の顔が、赤い
「だってのの香ぁ、そんな風に気づけなかったしぃ～」
「そ、そんなの、別に、いつもお父上のそばにいれば誰でも……」
「のの香、そんなにパパにべったりしてないし～」
「っ――って、ほ、ほら、お父上、足を止めたわよ！」

「来た」
玄輝は、大きな門の前でゆっくりと息をついた
「お父様、ここは……？」
「うむ、今回の目的だヽ（ °∀ °）ノ」

「八起苑、と書いてあるわね」
「ってもしかして、のの香たちのお姉ちゃんが……？」
夏海ものの香も、上にひとりの姉がいたという話を、イツ花から聞いていた

「さて、ちょっとしんどいと思うけれど、頼むぞ皆ヽ（ °∀ °）ノ」
「……分かりました、そういう事ならこの命、お父様にお預けします」
「私たちの姉上の弔い合戦ってわけね、上等よ」
「のの香も頑張るよぉ～」
「突撃ィィィィィィィィィヽ（ °∀ °）ノ」

七天斎八起（しちてんさいはっき）「ファーッファッファッファ！」

先制した七天斎八起の攻撃で、前列の体力が1／3ほど削り取られる！

「ちょ、お父上、この鬼強いわよ!?」

さすがに夏海が悲鳴をあげながら、一旦後列へと下がる
玄輝は自分に武人をかけて攻め続け、息子娘たちはその援護に回る

「だ、ダメだ、僕たちの武器じゃ刃が立たない……!」
「術で併せるにゃ!」

のの香の＜赤玉＞に、続く夏海、臥蛇丸!
3人併せて威力五倍の＜赤玉＞がほとばしるが、それも回避されてしまう

「なっ!」

どうしても防戦が続く壬生川二世代目たち
このままでは技力が切れて、追い詰められてしまう……!
特に前列で刀を振っている夏海の体力が、もう限界に近づく

「当主の指輪!」

指輪を掲げるが、それも決定打にはならない
＜お雫＞で回復する鬼の体力を、一族は削りきれない
あの時の悪夢が蘇ってしまう
どうしても玄輝は焦ってしまう

そこで再びのの香が術を紡ぐ
「＜風車＞の併せ、行きますにゃ!」
すかさず、加わる面々

「臥蛇丸乗った！」
当主もまた
「玄輝、続くゾー、（ ゜∀ ゜）ノ」

そうして風車の３人併せが発動した
三人の背後から吹き抜けてゆく風が刃となりて達磨の身体を滅多に斬りつける

七天斎八起に１４５のダメージ！

その瞬間、悪鬼の身体が光ったかと思うと七天斎八起の身体が崩れ始めた
黒い影となりながら揺らぎ、地面に吸い込まれてゆく

七天斎八起を、討ち取った！！

全身から力が抜けてゆく
壬生川家は、初めてボス戦に勝利を収めたのだ
フッと息をつく玄輝
「……やった」
抱き合って喜ぶ娘や息子たちを眺めて、ニッコリと笑う
「伊織（いおり）……これで俺も、胸を張ってそっちへ行けそうだ、（ ゜∀ ゜）ノ」

一段落する玄輝とは裏腹に、夏海はまだ余力が残っているようだ
「じゃあお父上、中に入って探索しましょうよ！」
「お、おう」

引っ張られて、楼閣の中へと立ち入る

壬生川家は意気揚々と楼閣の中の探索をするものの、鉄クマ大将のあまりの強さにビビって、すぐに逃げ帰ったのであった
ひとつの壁を越えたら、またひとつの壁が立ちはだかる
朱点童子への道のりは、長く険しいものであった

第初話－１０　「新風」　１０１９年１月（後書き）

出陣・九重楼（玄輝・臥蛇丸・夏海・のの）　幸四郎→剣士・初見

第初話－１１　「門出」　１０１９年2月（前書き）

玄輝　　１才６ヶ月
臥蛇丸　６ヶ月
夏海　　５ヶ月
のの香　５ヶ月
幸四郎　１ヶ月

第初話－11　「門出」　1019年2月

＜みどろ御前の元から＞

「みどろ御前さまから、お子様を預かってまいりましたァー！」
イツ花が喜び勇んでやってくる
「おお、元気な男の子か」
「はい、長い髪も黄金色で、当主さまによく似ておりますネ！」

当主の間の障子に耳を当てていた夏海が、ボソッとつぶやく

「お父上に似たら、大変なコになるわね……」
「良いじゃないか、それも……」

隣には臥蛇丸もいた
隙間から伺う夏海の目は、まるで水揚げされた魚を物色する板前のようだ

「顔はお父上より引き締まっているけれど、やっぱり母上のおかげなのかしら……」

（あのコも、いきなりこんな姉が出来て大変だろうに……）
末っ子の運命を、障子に耳を当てながら憂慮する臥蛇丸だった

名前は幸四郎

金髪赤眼の将来有望な、新たな剣士の誕生だった

～～

「初めまして！　僕の名前は幸四郎（こうしろう）です、よろしくお願いします！」
幸四郎は居間で元気いっぱいに挨拶する
はつらつとした若武者に、玄輝（げんき）の頬も緩む
「うむ、来てくれて嬉しいぞ幸四郎」
「はい！　僕の力を壬生川（みぶがわ）家のために、役立ててください！」
一体どんな教育を受けてきたのか、まったくすれていない模範的な笑顔だった

「僕が長男の臥蛇丸だよ、よろしくね幸四郎」
「はい、臥蛇丸兄さん、色々とご指導よろしくお願いします！」

（……な、何だか良い子そうだ！）

新しくやってきた弟に、クラッと来る臥蛇丸
そうだ、これこそが年少者の正しい反応ではないか？
ちらりと夏海、のの香（ののか）を見る臥蛇丸
「なによ」
「にゃ？」
視線に気づいた双子が眉をひそめる
あいつらは間違っているのだ

幸四郎はキラキラとした瞳で、臥蛇丸を見つめる
美少年だ、なんて愛らしいんだ
「こ、これから共に学んでいこう！」

「はい！」
しかしあまりにもできすぎた子に、一抹の不安が芽生える
（いや、でも……期待してはいけないぞ、もしかしたらこのコもとんでもない一面を隠し持っているかもしれないのだから……！）
夏海のの香の前例は、そこまで臥蛇丸を毒しているようだ

「私は夏海、こっちが妹ののの香よ、よろしくね」
「のの香で～す、よろしっくぅ～」

ぶすっとしている夏海と、えへらぁと微笑む対照的なのの香

「幸四郎です！　お姉さん方、これからよろしくお願いします！」
純白の笑顔を前に、夏海も鼻白む
（どんな次期当主が来るかと思ったら……何だか、憎めないわね……？）
なんだか毒気を抜かれてしまう
「幸四郎くんは、みどろ御前様の元で育てられたんだね～」
「はい、お母さんから壬生川家はとってもステキな場所だと教わってきました！」
その若々しさが、何だか夏海には眩しい
年は半年も離れていないというのに
「そっかぁ、とっても優しいお母様だったんだね」

膝を曲げて、目線を合わせて喋るのの香に、幸四郎は照れ笑う

「はい、お母さんも『玄輝さんには久々に熱くされました……』ってよく言ってました！」
口笛を吹く玄輝
相手も四人目となれば、もはや手練なのかもしれない
父親の情事など聞き流す双子

「……うんまあ、これから鬼退治のために、一緒に頑張っていきましょうね」
「はい！」
そのあまりの素直さに、思わず眉尻を下げる夏海であった
～～
＜出陣＞
「それでは本日も、奉納点（ほうのうてん）を稼ぎに、あるいはお宝をかっさらいに行くか！」
玄輝の号令に、次々と腕を突き上げる子ら
「新しい術を探しにぃ～」
「より強くなるために、ね」
「それでは、行って来るからな、幸四郎」
出陣する四人と、それを見送る幸四郎とイツ花
「はい、お父さん方、いってらっしゃい！」
「幸四郎さまのことは、このイツ花にバーンとォ！　お任せくださいッ」
「うむ、それでは壬生川家とつげきぃぃぃぃ、（ﾟ∀ﾟ）ノ」
『おー！』

～～

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

「何このワープゾーンだらけ！」
迷宮に立ち入った途端、夏海が悲鳴をあげる
「どうやら何かしら規則性はあるよう、ですが……」
首をひねる臥蛇丸
夏海はあっという間に考えを切り替える
「まっ、手当たり次第入ってみましょうか！　きっと何とかなるわよね」
（何だかなっちゃん、豪放なところが最近パパに似てきてないかな～……）

そんな姉を苦笑半分、不安半分に眺めるのの香

鳥居の色は四種類、赤、青、緑、黄色

「あっ」
突然声を上げるのの香
「ど、どしたの？　のの香」
「もしかしてこれって、季節をあらわしているんじゃないかにゃ？」
四季を色に当てはめてみれば、見事に合致する
「……そうか、今は2月だから青色の鳥居をくぐっていけば、奥に着くってことか？」
「そうそぅ～」
「すっごーい、さすがのの香っ」

「うん、どうやら合っているみたいだ」

いくつかの鳥居を覗いて、うなずく臥蛇丸

「えへ、でもあんまり奥に行き過ぎて、この前みたいなボスに会わないようにしなきゃ……」

「強いのが出たら、それもそれよ！」

拳を固める威勢の良い夏海の後ろで、ひそひそ声

（なあ、のの香……最近、夏海のやつ……）

（だ、大丈夫だよぉ～、た、多分……きっと……）

遺伝というものは恐ろしい

改めて感じる臥蛇丸とののの香であった

道中を突き進もうとするが、予想以上に耐久力の高い紅こべ大将たちの軍勢に阻まれて、一同は思うように迷宮を探索できていなかった

「風の車か……風車の術を連発されると、なかなか厳しいね……」

「しかもあの紅こべ大将っての、仲間がいなくなるとお宝を持ち逃げして逃げるし！」

きぃぃっと刀を振り回す夏海

「今回は、ここらへんで探索終了かな～……」

「火時計も残り少ないし、仕方ないわねー」

そういえば、と気づいて夏海は先頭にいる玄輝の袖を引っ張る

ずっと静かにしていた父を見つめる

「お父上？」

「……ん？」

玄輝が足を止めて振り返る

「そろそろ帰ろうって話してたんだけど、どうする？」

「あー……そうだな、帰ろうかヽ（ °∀ °）ノ」

その身体は切り傷や打ち身だらけの様子で、陣羽織もところどころが擦り切れていた

「ええ、じゃあ早速、」

と、夏海が振り返った瞬間、玄輝がその場に片膝をついた

「パパ！？」

「お、お父様！」

「ん、あ、あれ？　何だ……？」

自分でも驚く

笑う玄輝

「おかしいな、急に、何か、ちからが抜けてきて……」

立とうとしているのに立てず、何だか風呂の中に入っているように意識がとろけてゆく

その耳に、夏海の悲鳴

「は、早く、屋敷に戻るのよ！——早く！」

～～

＜玄輝の部屋＞

玄輝はイツ花ひとりを残して、子供たちを退出させた
「ふぅ……」
「玄輝さま……」
そばに控えるイツ花が、痛ましげな顔をしていた
「何かな、気が抜けちまったんだな……伊織（いおり）の仇を討って、幸四郎を産んで、」
天井を見ながらぽつりぽつりと話す玄輝
「臥蛇も、夏も、ののもみんな、みんな強くなって……安心したのかもしれないナー」
ふっと息をつく
「俺の代では朱点童子を倒せないことも分かって、気が抜けてナ……」
まだまだ先は長い、長すぎる
初めての戦で娘を亡くしてから、出来る限りの事はしてきたつもりだったのに
自分の生は、たかが千里の道を一歩歩んだに過ぎないのだとわかったのだ
一年と数ヶ月
なんと短い一生であろうか
結局、玄輝は“大人”にはなれなかった
伊織が戦死しても、彼の本質は変わらなかったのだ
だが、そんな自分を見て、少しでも次の世代が慎重になってくれればいい

ひとつの失敗が、多生の後悔を生むこの人生
それでも、精一杯生きて、前に進むしかないのだから

「次の当主様は、幸四郎さまでよろしいですね……？」

イツ花の言葉に、玄輝は床でうなずく
「うむ、まだ若いが、あの三人が傍にいてくれれば、大丈夫だろう
……」

ふふふと口元から笑みが漏れる
この家の誇りは、臥蛇丸が守ってくれるだろう
この家の鋭気は、夏海が満たしてくれる
この家の温もりは、のの香が受け継いでくれる

そして壬生川家の血筋は、幸四郎へと繋がれるだろう

少しの沈黙が部屋に訪れる

「玄輝さま……」
「……ん？」

まどろみに、陽だまりのような声

「長い間のお勤め、ご苦労様でした」

「おう」

心地良い虚脱感に、全身が満たされてゆく

「イツ花も、ありがとさん……（ ﾟ∀ ﾟ）」

娘を戦場で亡くして、それでもこんな風に床の上で逝けるとは思わなかった
安らいだ顔で、目を閉じる

翌日、イツ花は玄輝の机を片付ける際、
鳥居千万宮の出陣前に書いたとされる、各子供宛ての置手紙を発見した
どの文字も下手で読みづらかったが、
その結びに、格別にデタラメな筆跡で書かれた一行があった

「子供たちよ……俺の屍を越えてゆけ、（ ﾟ∀ ﾟ）ノ」

壬生川　玄輝　享年1才6ヶ月

第初話－１１　「門出」　１０１９年２月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（玄輝・臥蛇・夏海・のの）　玄輝・老死

第二話－1　「振起」　1019年3月（前書き）

臥蛇丸　7ヶ月
夏海　6ヶ月
のの香　6ヶ月
幸四郎　1ヶ月

第二話－1　「振起」　１０１９年3月

皆の前で幸四郎（こうしろう）は、第二代目当主を襲名した

「まだまだ未熟ですけど、僕、お父さんを越える立派な当主になります！」

玄輝（げんき）が亡くなって、数日ほど泣きじゃくって過ごした幸四郎も、その日にはもう屋敷に来た時のような、明るい笑顔を取り戻していた

「はぁ……」

一方、自室にて臥蛇丸（がじゃまる）

「お父様が亡くなって……いつの間にか最年長が僕か」

もう自分のことを僕だなんて言わない方が良いのかもしれないな、とも思った

「そして、予定通り二代目当主は幸四郎……」

雪も溶けてきたというのに、心は大雪山だ、遭難が相次ぎそうだ

「何ウジウジしているのよ！」

襖を蹴り倒して入ってきたのは、玄輝が亡くなって以来人一倍凶暴になった妹――夏海（なつみ）だ

倒れた襖が、臥蛇丸の頭を突き破って、何だか襖から生えた竹の

子のようになる

「ちょ、何するんだいきなり夏海！」

「てぃ！」

鞘で臥蛇丸の頭を強打する

目から星が出た

「――おぁぁあぁぁ」

転げまわる臥蛇丸の前で、夏海は偉そうに腕組みをする

「お父上が亡くなったから何よ、月日に関守なし！　私たちには足踏みしている時間はないんだからね！？」

「うっ、く……そ、それは分かってるけれど、現当主があれじゃ、なにも決められないし、まだなにもできないじゃないか！」

いまだ幸四郎は生後1ヶ月、戦場に出れるような年ではない

しかし夏海は目を釣り上げる

「じゃあ、私たち三人で戦いに出れば良いじゃない」

「三人で、か……？」

確かに夏海は玄輝の筋を継いで、良い剣士になった

ののの香も術士としての資質は高く、安心して背中を任せられるだろう

自分たちを今引っ張っていくのは、夏海のような積極さかもしれない

「ていうか、今すぐ行くわよ！？」

積極的すぎる

「ちょ、ちょっと待ってくれよ、まだ、支度が……！」

夏海は猫を捕まえるように、臥蛇丸の襟首を持ってずるずる引っ張る

「いい？」

臥蛇丸の顔にぐいっと顔を近づける夏海
「な、なんだい……？」
「私はお父上の遺書で、皆の面倒を見るように頼まれているの」
「め、めんどうって……」
僕は1ヶ月年上なのに……、と思う
「のの香もめそめそして、アンタは腑抜けになって……、もう、父上が亡くなったくらいで何よ！」
ぎっと歯を食いしばった顔に、うっすらと涙が見えた
「夏海……」
「さぁ、早く準備して、鬼退治に行くわよ！」
「あ、ああ、分かった」
どうしてだか、素直に頷く臥蛇丸
肩をいからせながら廊下を歩いていく夏海を、襟を整えながら見送る

「そうだよな……」

臥蛇丸は自らの頬を張る

「僕は……、俺は、皆の兄なんだからな」

夏海の空元気を無駄にしないためにも、臥蛇丸は出陣の支度を急ぐことにした

＜出陣前＞

臥蛇丸と夏海が玄関で待っていると、少し遅れてののの香がやって

きた
「支度できましたぁ～」
「お、のの香、もう良いの？」
「あ、うん、色々と……もう大丈夫」
のの香は頬をかき、力なく微笑む
「そっか、弓を乱して私に当てたりしないでよ」
べし、とのの香の頭にチョップする
うぅと額を押さえて後退するのの香
「じゃあなるべくお兄ちゃんの方を向いて撃つことにするぅ」
「それならおっけ」
何がおっけなんだ！、臥蛇丸は心で叫ぶ
だが、のの香が少しでも前向きになってくれたことはなによりだ

それよりも、臥蛇丸はひとつだけ納得出来なかった
「あの、夏海」
「うんー？」
「どうして部隊の隊長が、夏海なんだ……？」
「え？」

素で聞き返す夏海

「いや、そんな意外そうな顔されても、だってここは普通は俺が……」
「お父上の遺言よ、遺言！」
「そ、そうなのか……？」
「ええ、夏海が一番可愛かったから、夏海のしたいことをさせよ、って」
（絶対ありえないだろう）

とは思うものの、あの父親だからもしかしたら、とも頭をよぎっ

てしまう臥蛇丸だった

「やっぱり、パパはなっちゃんを一番可愛いと思ってたのかぁ～」
素直に信じ込んだのの香が、夏海に賞賛の笑みを見せる
どうしてその笑顔が、兄に向けられることはないのだろう
「フフン」
胸を張る夏海

（何だか俺は、一生この妹には勝てない気がする……）
臥蛇丸が遠い目をして、もたもたしていると、
もう遠くにいって、こちらに手を振ってくる夏海
「はーやーくー」

「……はいはい」
ため息をつきながら、臥蛇丸は彼女の後に続く

「やっぱり、これ言わないと雰囲気出ないわよね」
「これ……？」
息を吸って、駆け出す夏海
「壬生川家、突撃ぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
「お、おお！？」
「そんなところまで似せなくてもっ」
慌てながら、臥蛇丸、のの香が後を追う

父がつけていた壬生川家最凶ののぼりは、父親の亡骸と一緒に火葬して良かった、と走りながら臥蛇丸は思った

＜相翼院（そうよくいん）＞

ひたすらに走り続けて、一気に院まで駆け抜ける三人
天女の小宮に入るまで、合計で２００近い体力を消費していた

「ぜぇ、ぜぇ……着いた、わね……」
「お父様のような無茶だな！」
「つ、疲れたぁ～～～……」
のの香が水筒の口を開けて、呼吸を整える
それから＜泉源氏＞の術で、とりあえず全員を全回復させた
「さ、本番はこっからよ！」
「お、おー！」
「がんばろぉ～」

相変わらず燃え髪大将の軍は強い
一方的に健康度が（臥蛇丸だけ極度に）減ってゆく

というわけで、一ヶ月がむしゃらに戦い抜き、
一人大怪我をしたものの（臥蛇丸だけ健康度２０）全員ご無事に戻る事ができた

「お父様の亡くなった翌月に、俺も逝くところだった……」

部屋に見舞いにきた妹たちは、手ぬぐいを冷やしながら、

「お父上も、寂しがっているのかもね」

「臥蛇やーぃ、こっちこーぃ、なんて～」
生死の境をさまよった臥蛇丸としては、笑い事ではなかった

第二話－１　「振起」　１０１９年３月（後書き）

二代目当主→幸四　出陣・相翼院（夏海・臥蛇・のの）

第二話－2　「若枝」　1019年4月（前書き）

臥蛇丸　8ヶ月
夏海　7ヶ月
のの香　7ヶ月
幸四郎　2ヶ月

第二話－２　「若枝」　１０１９年４月

庭の桜も咲き誇る４月
臥蛇丸（がじゃまる）の元服の儀が、厳かに行われた

「これで臥蛇丸さまも、立派に成人なされましたネ！」
「はは、ありがとうございます」

まだ全身に負った火傷や打ち身は癒えていないため、包帯だらけの儀式だ
そういえば、と思い出す

（父上が初めて鬼退治をなさった時と、俺は同い年になったんだな）
その初めての戦場で、父上はご子女を亡くされたのだ
（もし俺に子供がいて、そのコが自分の無鉄砲さにより失われたら……）
きっと自分は立ち直れないだろう、と思う

父様は強かった
ともすれば滅入ってしまうようなこの境遇で、最期まで明るさを絶やさなかった
……なにも考えていなかっただけだったのかもしれないが

「これでやっと、臥蛇丸さまもお子を残せられますネ！」
不意をつかれて、思わず臥蛇丸はお神酒を噴き出した
「え！？」

0才8ヵ月、それは交神の儀が可能になる年でもあった
身近にあんな妹がふたりもいる臥蛇丸は、女性に対してウブだった

～～

「おー」
「お～」

夏海(なつみ)とのの(ののか)香は実戦部隊に入った幸四郎(こうしろう)の、晴れ姿を見に、庭にやってきていた

「えへへ」
照れ笑いの幸四郎を品評する双子
「うん、なかなか様になっているじゃない、ねぇのの香?」
「うんうん、こうちゃんカッコイイねぇ～」

幸四郎の頭をなでなでするのの香、されるがままの幸四郎
年の離れた弟ということで、目に入れても痛くないような可愛がりようだ
さらに現当主で美少年、京の都で壬生川(みぶがわ)家人気投票があったら一位間違いないだろう

「そうしたら今月はね、二代目当主の初陣と行きましょうか」
「お～」
「うん!」

幸四郎が幼顔で胸を叩く

「お姉ちゃんたちは、僕が守ってあげるからね！」
「うっわ、生意気」
夏海は笑いながら、幸四郎の伸びた金髪を引っ張りまわす
「ちょ、ちょっとお姉ちゃん！」
「そんなのアンタ、６ヶ月早いっての」
「いた、いたいたいいいいい」
「な、なっちゃん～！」
途中から本気で嫌がる幸四郎と、慌てて止めに入るのの香

そこをたまたま、成人の儀を終えた臥蛇丸が通りがかった

（当主をイジめる姉……）
壬生川家はやっぱりダメかもしれない、と思う

＜出陣＞

「それじゃ、行くわよー！」
「お～！」
「おー！」

出かける三人と見送る一人

「どうか気をつけるんだよ、幸四郎」
「あれ、アンタは来ないの？」
「ああ、先月に受けた傷がまだ癒えていなくて、満足に薙刀も振れないんだ」

包帯で巻かれた左腕は痛々しく、確かに動かせそうもない

夏海はぼそっとつぶやく

「情けないこと……」

「思いっきり聞こえているから」

さすがにばつが悪いのか、臥蛇丸は咳払いをして、

「それまで、しばらく町の復興作業に協力しようと思ってね」

「あ～、それナイスだね～」

「ああ、商業部門を中心に、図面を引いてお手伝いしてこようと思っている」

「いつの間にそんな勉強をしてたの？　アンタ」

「俺たちには足踏みしている時間はないんだもの、だからね」

恥ずかしいセリフをさらっとはく臥蛇丸

「はいはい、そーですねー」

夏海は手をぴらぴらと振りながらも、臥蛇丸が無事立ち直ったことに、まんざらではなさそうな表情をしていた

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

「それじゃ、幸四郎のためにも、あんまり無茶はしないでおきましょうか」

「うわ、なっちゃんがマトモだぁ」

「うわってなによ、うわって！」

ののの香の耳を弄り倒す夏海

「ちょ、や、悪かったからやめて～っ」

そんな二人のやり取りに緊張をほぐされたのか、幸四郎もほっと息をつく
「お姉ちゃんたちは凄いなぁ、やっぱり戦場慣れているんだね！」
顔を見合わせる、夏海とのの香
「でもそういえば、この屋敷に来てから、すっごいペースで戦っている気がする」
「そういえば今月で、臥蛇お兄ちゃんの討伐回数を上回っちゃったにゃ」
指折り数えるのの香
「すごいやお姉ちゃん！　僕も頑張らなきゃ！」
「あんまり頑張りすぎて、今頃屋敷にいる誰かさんみたいにならないようにね」
夏海とのの香はそんな若き剣士を、苦笑しながら見守っていた

三人はそれから順調に鬼を狩り続け、意気揚々と凱旋したのであった

第二話－２　「若枝」　１０１９年４月（後書き）

元服→臥蛇　出陣・鳥居千万宮（夏海・のの・幸四）

第二話－3　「藤花」　1019年5月（前書き）

臥蛇丸　9ヶ月
夏海　8ヶ月
のの香　8ヶ月
幸四郎　3ヶ月

第二話－3　「藤花」　１０１９年5月

屋敷の庭では、幸四郎（こうしろう）がひとりで素振りをしていた
「あれれ、当主さまおひとりですか？　他のみなさんは？」
イツ花（いつか）が歩み寄ると、幸四郎は素振りをやめて額の汗を手でぬぐう
「分かんない！　みんな難しい話があるから、僕はひとりで訓練でもしてなさい、って夏海（なつみ）お姉ちゃんがー」
ないがしろにされて、ぷくぅと拗ねる
幼い当主を微笑ましく見守るイツ花

「あれぇ、当主さま、その訓練刀は前当主さまの？」
「あ、うん、僕のもうちっちゃくなっちゃったから」

手に持っている刀は大きくて、幸四郎の背丈には不釣合いの代物だったが、幸四郎はそれを、ブンブンと振り回してみせる
年の割に大きな手のひらなのかもしれない、それは基礎を固めた訓練により培ったものだった

「これはこれは、将来有望な剣士さんですねェ」
その元気な様子に、目を細めるイツ花
「それにしても残念ですねェ……せっかくみなさんで、夏海（なつみ）さまとのの香（ののか）さま元服のお祝いに、お花見でもしようと思ってたのに」
お庭の木々を見上げて口を尖らす

そこには雨のように、満開の藤の花がなだれていた

～～

一方その三人は、空き部屋となった元玄輝（げんき）の私室で、難しそうに顔を見合わせていた

「それじゃ、第一回壬生川（みぶがわ）家、家族会議を始めるわよ！」

外の『元当主の間』と書かれた板は、上から筆で『会議の間』と乱暴に殴り書きされていた

「当主抜きで開催するなんて、なんて大胆な……」

「そっちのほうが、話が早いからです」

（どうしてなっちゃん、ですます口調なんだろう）

のの香がお茶をすすりながら疑問に思う

「じゃあ本日の議題だけど……何か、のの香はともかく、兄上は気づいてなさそうね」

「？　一体何が？」

先々月に燃え髪大将に食らった傷もすっかり癒えた臥蛇丸が、オウム返しに尋ねる

「ようやく、三人とも交神（こうしん）の儀が出来る年になったわけだから、奉納点（ほうのうてん）の使い道よ」

「あー、そうか、俺たちも子供を作らなきゃいけない代になったのか」

早いもんだと思うのも当たり前の話だ、まだ臥蛇丸は生後９ヶ月

なのだから

「今、２０００とちょっとだよね、あるの」
ぺらぺらと台帳をめくるのの香
「ええ、ちなみに幸四郎の母上のみどろ御前さまは、６９２点よ」
「なんと……すごい、幸四郎並の子供を、三人も産めるのか！」
臥蛇丸が仰天する

幸四郎の剣術は、３ヶ月にして、亡くなった父様に迫るか、それと同等の実力をつけていた
もう数ヶ月すれば、夏海とて、追い抜かされるだろう

「ええ、そしてこれは決まりごとなのだけど、朱点童子（しゅてんどうじ）が住む大江山（おおえやま）の門は、１１月と１２月しか開かれない」

現在５月だから、最低でもあと６ヶ月後という計算になる

「子供が戦場に出られるようになるまで２ヶ月、つまり、この４ヶ月の間に、３人の子を為さなければならない、と」
「そういうことね」

でも、とのの香が声を上げる

「奉納点を集めた子をふたり産んで、わたしたちの誰かが大江山に行くというのはどぅ？」
６ヶ月後なら、臥蛇丸でも１才３ヶ月、戦えない年ではない
「それが上策なのは分かるけれど、」
夏海は思わず声を上げた
「でも、それだと……」
視線を左右に迷わせる夏海

「……ひとりが、子孫を残せない？」
ののの香がうつむく夏海の顔を覗き込んで、尋ねる
小さくうなずく夏海

６ヶ月も経てば、幸四郎が成人する
道義からも効率からおいても、その時点で３人の誰かが交神するのは無駄なのだ

「そっかぁ夏海……３人交神するより、２人に良い血を集中させた方が、朱点童子を倒すのは早くなるんだね」
臥蛇丸も、ののの香の意見に同意する
しかし、夏海が断固として異を唱える
「嫌よ！」

思わず刀を抜こうとする夏海を、押しとどめるののの香

「な、なっちゃん、どうどう……」
「嫌なの、私は、子を遺したい！　当主になれなかった以上、それだけは叶えたいのよ……」

幸四郎と同じ『剣士』という職業の以上、大江山の戦いに夏海が選ばれることはない
６ヶ月後の大江山選抜は、臥蛇丸かのの香、幸四郎、それにふたりの新たなる子供たちだろう

「よし……分かった」
臥蛇丸が重々しくうなずく
ここは最年長者として、決断をしなければならないと思ったのだ
夏海とのの香の目が、臥蛇丸に向く
彼は言った

「誰が外れるか、くじ引きで決めよう」

「くじ引き!?」
思わず叫んだのの香だったが、
「……良いわよ」
「良いんだ!?」
左右へと突っ込む

「俺たちの悲願は、朱点童子を仕留める事だ。そのために、私情を挟むわけにはいかない。そうだろう?」
「……そうよ、その通りよ、当たり前じゃないの!」
弱みを見せてしまった悔しさと子を遺せないかもしれない恐怖を押し殺し、しっかりとうなずく夏海
先ほどの気弱な表情はもうそこにはなく、瞳には確かな決意が宿っていた

「のの香も、それでいいのね?」
「うん、わたしは……なっちゃんがいいなら、それでいいよ」
のの香もまた、了承する
臥蛇丸もうなずいた

「それなら、くじ引きを今から作るから、当たった人は今月に交神の儀をして、1ヶ月の出陣後、再び交神の儀だ」
「ええ、良いわ」
「誰が外れても、恨みっこなしだからねぇ~」
「のの香こそ、当たったけど奉納点ギリギリの神様がハニワしかいなくて、やり直しぃ~とか叫ばないでよ」
のの香をからかう夏海の声は、いつも通りで、
「ひっど~ぃ」

玄輝の部屋には、再び穏やかな空気が流れていた

～～

くじ引きが終わり……

「それでは、交神の儀を始めてよろしいですかァ？」
巫女姿のイツ花がやってくる

「あ、ああ、よろしく頼む」
多少緊張した面持ちの臥蛇丸が、儀式の間に正座していた
「やだァ、臥蛇丸さま、リラックスリラックスですよッ！」
「そ、そうは言っても……なにぶん、こういうのは……」
儀式の間の隣の部屋から、ちらりと敷かれた布団が見える
臥蛇丸の思考はパニック寸前だ
「お、お相手の人は、どんな方かな、ハ、ハハ」
「……臥蛇丸さま、笑い声が乾いてます」
臥蛇丸は神様一覧の巻物も見ず、全てイツ花に『お任せコース』だ
「はぁ、それではですネェ、二つ扇ノ前さまなんていかがでしょ？」
「ど、どどどんな方だ！？」
ウマのように襲い掛かって、イツ花の手から巻物を奪い取る臥蛇丸

「きゃっ、も、もう臥蛇丸さまッ」
「ふ、ふむ……俺の母様の水母ノくららさまとはまた違った、なんていうか、こう……夏海みたいな顔の神様だな」
「火の神様ですからネェ」

「ふ、ふむ……い、いいだろう、この方を、頼む……」
「何だか半死人みたいな声になってますけど、大丈夫ですかァ？」
「だ、だいじょうぶ、だ……少し、緊張しているだけだ」
本当に少しかな、と思いながらもイツ花は言われた通りに神様を呼び出すことにした
「それじゃ、いきますヨォ」
「あ、ああ……」

二つ扇ノ前「まッ、気軽にいきましょ……♪」

こうして、臥蛇丸の交神の儀は、無事終了したのだった

第二話－3　「藤花」　１０１９年5月（後書き）

元服↓のの夏海　交神の儀・臥蛇×二つ扇ノ前

第二話－４　「恋火」　１０１９年６月（前書き）

臥蛇丸　１０ヶ月
夏海　　９ヶ月
のの香　９ヶ月
幸四郎　４ヶ月

第二話－４　「恋火」　１０１９年６月

あれほど咲き誇っていた藤の花も散り、
すっかり青々とした葉が茂る庭

夏海（なつみ）とののか（ののか）の香は、縁側に座って、空を眺めていた

「ねぇ、ののか香ぁ」
「はーぃー？」

そのいつもの間延びした声に、夏海は心地よさそうに目を閉じる

「藤の花、散っちゃったね」
「うん、ゆっくり見る暇も、なかったねぇ～」
「もう、見れないよね」
来年の今頃、自分たちはもう
その声ににじむ侘しさを知ってか知らぬか、ののかはのんびりとうなずく
「そうだね、もう、見れないねぇ～」
「二度と、見れないんだよね……」

ののかは膝元で寝転がる夏海の頭を、優しく撫でる

「なっちゃんは、藤の花、可哀想だと思う？」
「え？」
「藤の花、ののかたちの寿命よりもっと短い時で枯れちゃったけれ

ど、可哀想かなぁ？」
「……どう、かな、藤の花の気持ちなんて考えたことないや」
「のの香はなっちゃんと違って、お家のこととか、難しいこと良く分からないけれど……っていうか、分からないからそんなことばっかり考えているんだけどぅ」
「うん……」

夏海は縁側で猫のように横になりながら、のの香の言葉の続きを待つ

「藤の花は、たぶん、自分の事を誇りに思っていたよ」
「誇り、に？」
「うん、だって花を咲かせたんだもん、それが藤の役目でしょう？立派に果たしたんだから、偉いもんだよぉ」
「誇りに、ねぇ……」
「だからのの香は、藤の花を可哀想だなんて全然思わないんだ、むしろ逆に羨ましいくらいだよ、あんなに綺麗だったんだから」

立派な樹木を笑顔で見つめるのの香

「だから、うん、なっちゃん」
「んー」
「なっちゃんのこと、のの香尊敬しているし、大好きだし、羨ましいんだ」
「私が何かしたかしらねぇ……」
照れ隠しに、のの香のわき腹やらそこらを突っつきまわす夏海
「ちょ、やぁ、やめてっ」
「お花とお話出来たらよかったのにね、のの香！」
「あ～それいいなぁ、イツ花さんだったら出来たかなぁ～」
「まあ藤の花が本当はどう思っているのか、こっちが勝手に想像し

ているだけだしね」
「そうなんだよねぇ～」
「羨ましいんですのの香、藤の花さんのこと、って言ったら『じゃあテメェが花になってみっか？　ケッ』とか言われたり」
「藤の花さん黒いよ！」
「血の花咲かすカァ？とか」
「何でチンピラみたいになってるの！？」
「私に聞かれても」

夏海はよいしょと立ち上がって、伸びをする

「さ、そろそろ出陣の準備しましょうかー」
「ん、それじゃあ、一花咲かせますかぁ～」

ののの香も立ち上がって、それから夏海の手を取って握手する

「何よ？」
「なっちゃんの血はののの香の血、ののの香の血はなっちゃんの血、だよぉ？」
「……どういうことよ」
「どうでしょ～」

遠くで臥蛇丸（がじゃまる）の声が響いた

「さ、ホラ、出陣行くわよ」
「は～い」

顔も性格もまったく似てない双子は、それぞれの支度へと向かう

＜出陣＞

「さ、行くぞー皆ー」
「おーおー、さすがパパさん、気合入っているねぇ」
「子供が出来ると違うんだねぇ～」
「いやいやきっとアレは、＊＊を卒業したからよ」
「は、オトナへの階段登っちゃったんだっ」
「そこの妹うるさいぞ！」

顔を真っ赤にして怒る臥蛇丸

「オトナへの階段？」
幸四郎（こうしろう）が首を傾げると、臥蛇丸が眉間にシワを寄せる
「幸四郎も、そういうのを尋ねてくるんじゃない……」
すかさず夏海が耳打ち
「オトナへの階段ってのはね……ごにょごにょ……」
「まだ教えなくて良いいいいい！！」

怒鳴った後に、からかわれるネタがこれで一個増えたと、どっと疲れが増すのを感じる臥蛇丸であった

＜白骨城（はっこつじょう）＞

夏の三ヶ月間だけ姿を現すと言われる城

大江山で朱点童子に敗れ、成仏できないお侍さんの魂が行き場もなく集まっているとか……

「しかも、その日屋敷には誰もいなかったハズなのに……」
語っているのは夏海、手を握り合って震えるのがのの香と幸四郎
「ごくっ…」
「ガクガクブルブル　」
「聞こえてきた音は、死んだはずのお婆さんが包丁を研ぐ、しゃーしゃー……って音だったの、そうして、こちらに気づいたお婆さんは……」
「ひっ」
「あぅぅぅ」
「ひとりじゃ寂しくて、戻ってきたんだよお前のもみ上げをよこせェェェ！！」

「いやあああああああああ」
「ひいいいいいいいいい」

「うるさい！」
すぱこーんと夏海の後頭部を叩く臥蛇丸
「それは白骨城の伝説と、全然関係ない！」
出陣中にはしゃいでいる夏海に、怒声を飛ばす
不機嫌げに後頭部を抑えていた夏海が、気づく
「……は、兄上に叩かれた」
「……なっちゃんの初体験」
頬を赤らめるのの香
「無理矢理そっちに話を進めるんじゃないよ……」

幸四郎が臥蛇丸に笑いかける
「何だか臥蛇お兄ちゃん、ちょっぴり力強くなったね！」

「そう、かな？」
「うん、何だか女の人に対して免疫がついてる感じがする！」
無邪気で的確な批評に、思わず黙り込む臥蛇丸
「よ～し、それじゃ突撃ぃ～にゃ～」
というわけで、ショックを受けている夏海に代わって、のの香が人差し指を元気良く空に向かって突き出すのであった
～～
中に入ってみると、意外にもというわけではないが、前半は低級な妖怪が辺りをうろついていた
「何だ、白骨城の妖気に集まってきた物の怪どもか」
「へへーん、一網打尽ー」
実際に幸四郎の腕はすでに3人に肉薄しており、油断さえしなければもう誰の助けも要らないだろう
そんな折、のの香が目ざとく妖怪の落とした術を拾う
「あ～術ぅ～」
「お、でかしたのの香、えっとこれは……二つ扇の術？」
ボッと臥蛇丸の顔が赤くなる
ちなみに術法については、開発者の名前がつけられるそうで、当然この術を開発したのは二つ扇ノ前
先月、臥蛇丸と交神の儀をした女神だ

「な、ななんだって？」
「炎の術だよねー？」
「妖怪だけじゃなくて、誰かの胸も熱くすることが出来る術ねー」
にやにやと笑う夏海
「な、ななんで夏海が僕の――」
「お兄ちゃん、口調が僕に戻ってるぅ～」
「こ、この……！」
「二つ扇ねぇ、よぅし、帰ったらこの術何が何でも覚えようっと」
「な、なんだって？」
「そうして戦闘になったら、二つ扇ーっ、って何度も叫んでやろうっと」
発想が幼すぎる夏海
「ちょ、ちょ、それは、夏海っ！」
それに見事におちょくられる臥蛇丸
術書を取り返そうと手を伸ばすも、夏海はひらりと避ける
「わー面白そう～」
「イッけぇー、二つ扇ーっ！」
「おいっ！」
先ほど叩かれた仕返しか、妖しく繰り返す夏海
「二つ扇ー！」
「二つ扇～」
幸四郎やのの香までも真似をする
「みんな……」
「二つ扇ー、好きだー！」
「おいいいいいいいいい！」
「二つ扇、僕は、キミじゃなきゃダメなんだ……！」
「いい加減にしないか夏海！」

陰りを帯びるのの香

「え、でも、臥蛇丸さま、そんな……私たちは身分違いの恋……」
「良いんだ、人間と神の差だなんて、僕は死ぬまでキミを愛し抜く……！」
夏海がのの香に手を伸ばし……
「お前らあああああああああああああ！」
臥蛇丸が爆発

～～

そうこうしているうちに、一同は何と白骨城を登りきってしまった
白骨城の上部である六階に近づくと、途端に禍々しい気配に襲われる

いち早く気づいたのは幸四郎
「みんな、これって！」
さっきまで騒いでいたはずの3人も、真顔で頷く
「似た感じを、九重楼で味わったよねぇ」
「ああ、間違いない……これは、鬼だ」
「どうするの？　引き返すなら今のうちだけど、って」

言うよりも早く、臥蛇丸は薙刀を構えていた

「俺たちは、足踏みしている時間はない、んだよな」
「……もちろんよ！」
「鬼、成敗するよー！」
「無事帰って、二つ扇習得なきゃ！」

壬生川家一同は、白骨城内部へと突撃する
その途端、巨大な鬼――恨み足が襲い掛かってきた！

力をためる恨み足
対して武人で当主幸四郎の力を高める一同
力をためた恨み足の一撃が、幸四郎の体力を六割削り取る！

「ひえええ」
一瞬にして体力が黄色になる幸四郎

「＜泉源氏＞～！」
「＜泉源氏＞！」

臥蛇丸とのの香が、剣士ふたりを援護するという形が続く
しぶとく抗戦を続ける恨み足だったが、回復の術を上回る打撃を
壬生川に与えることはできなかった
ついには年長者3人の＜赤玉＞の併せ術により、崩れ去る！
奉納点を７００も獲得し、一同は喜びに手を合わせた
「何よ、たいしたことないじゃないっ」
夏海が凛と刀を鞘にしまう
「えへへ、僕たち強いよね！」
「いや顔色が悪いからな、幸四郎……」
健康度が減っている幸四郎を気遣う兄
「うん、でも、傷は深くないみたいだね～」
その場の応急手当で、何とか動き回れるようにはなったようだ

四人での戦いにも慣れてきた壬生川一族

一家はそのまま白骨城の探索を続けて、たくさんの宝と二つ扇の術書を持って、凱旋したのであった

第二話－４　「恋火」　１０１９年６月（後書き）

出陣・白骨城（夏海・臥蛇・のの・幸四）

第二話－5　「孫祝」　2019年7月（前書き）

臥蛇丸　11ヶ月
夏海　10ヶ月
のの香　10ヶ月
幸四郎　5ヶ月

第二話－5　「孫祝」　１０１９年7月

＜第三世代＞

「臥蛇丸（がじゃまる）さまー、二つ扇ノ前の下より新しいご家族が――きゃっ」

風よりも早く駆け抜けてきた臥蛇丸が、イツ（いつか）花の前にずざざざーっと滑り込む

「そ、それで、子供は!?　手はあるか、耳は、目はちゃんとついているか!?」

「は、はい、元気な女の子ですよォ」

「そ、そうか……なっ、女の子、女の子か!?」

安心したのもつかの間、みるみるうちに顔色が青ざめる

「ど、どうなさいましたか……？」

女の子、夏海（なつみ）とののか（ののか）の香に似てしまうようなら、大変なことになる……！

しかし、いやいやと思い直す

あのふたりも今や１０ヶ月、昔の辛らつな性格もだいぶ丸くなってきた頃だ、たぶん

自分のことを『兄上』と呼ぶようになるなんて、来たばかりの頃は想像できなかった

それにもしもの場合は、反面教師だと言いくるめれば良い

「よ、よし……それにして、お子は？」

「はい、いらっしゃってますよ」

名前を考えるのに臥蛇丸が数時間かかったというのは、置いといて……

委任で決まった名前は、巻絵（マキエ）

「初めましてー、お父しゃんー（ˊ・ω・ˋ）」

まん丸の顔に、にっこりと笑ったおめめ

父に似た緑色の髪を、両耳の上でお団子にしている

「お、おお……巻絵、か」

何とも縁起の良さそうな顔をしている

「はい、これからお世話になりますー（ˊ・ω・ˋ）」

「うむ、うむ……宜しく頼むよ、巻絵……」

その小さな身体をぎゅっと抱きしめる臥蛇丸

ふたりを微笑ましく見てから、イツ花は次の用事に取り掛かることにした

玄輝（げんき）の息子・臥蛇丸の薙刀術を受け継ぐ第三世代、その登場であった

～～

「さて、と」

巫女姿に着替えたイツ花が、その娘の前に現れる

「それでは、交神の儀を始めましょうネ」

「はい、よろしくお願いしますぅ～」

ぺこりと頭を下げるのは、白無垢に着替えたのの香だった

「あれ、先ほどまで夏海さまがいらっしゃいましたよね？」

「あ、ええ、でもなっちゃん、悪態つきながら出てっちゃいました」

「あ、悪態ですか……」

「ひとりヤるのもふたりヤるのも一緒でしょーが神様よぉ、とか何とか」

声真似をしつつ再現するのの香

「あ、あはは、そういうわけにもいかないみたいですネェ」

何て罰当たりな、と冷や汗を流すイツ花

「まッ、それじゃ始めちゃいましょっか、お相手は選びましたか？」

「はい、このぉ、根来ノ双角って神様でお願いします～」

何だか強そう、との理由で決めたのの香だった

「もしなっちゃんが好きなお相手がいたら、わたしはその人でも良かったんだけど」

夏海は結局、交神の表も見ずに出ていってしまった

「はーぃ、それでは参りますッ」

根来ノ双角「拙者、未熟者ゆえ、不手際をご容赦あれ……！」

もしこの場に夏海がいたら、未熟者と不手際の部分をしつこく問い詰めていたに違いない、とのの香はこっそり思った

第二話－5　「孫祝」　１０１９年7月（後書き）

交神の儀・のの×根来ノ双角　巻絵→薙刀士・初見

第二話－６　「都路」　１０１９年８月（前書き）

臥蛇丸　１才
夏海　１１ヶ月
のの香　１１ヶ月
幸四郎　６ヶ月

巻絵　１ヶ月

第二話－6　「都路」　1019年8月

＜初めての交神の儀を終えて＞

「お疲れさん、ののの香（ののか）」

「あ、うん、ありがとうなっちゃん」

布団に横になっていたのの香の元に、見舞いに現れる夏海（なつみ）

「やーねぇもう、幸四郎（こうしろう）と稽古してたらさ、3本に1本は取られるようになっちゃった、私も年かしらねぇ」

大げさに首を回す夏海の様子に、のの香はくすくすと微笑む

「それで、交神（こうしん）の儀は巧くいったの？」

「うん、あ、いや、あんまり巧くなかったかなぁ……でもうん、巧くいったよぉ～」

「前半のが気になるけれど、まぁいいとして、あれ、お腹膨らんでないの？」

「あ、うん、不思議だよねぇ、なんか神様が持ってっちゃったみたい」

「……深く考えない子なのね」

「えへ」

「全然褒めてないから」

ため息をつく

「あはは、でも、生まれてくる子は、のの香となっちゃんの子だからね」

のの香は柔和に微笑む
「お母さんがふたり、か……臥蛇丸（がじゃまる）じゃないけど、大変そうねぇ」

その臥蛇丸は、予想通り親馬鹿街道まっしぐら中だ
箸の上げ下げまで注意して、残命中に、全ての知識と経験を叩き込みかねない勢いであった

「うん、でもパパみたいに、のの香たちはたくさん子供を遺すのがお仕事じゃないもんね、それだけひとりひとりに構ってあげられるよ」
「そうね、父上は何かとお忙しい人だったから……」
考えてみれば、今一家が分担して行っていたようなことを、父はたったひとりで担っていたのだ
幼少の頃、と言っても数ヶ月前だが、父と遊んでもらった記憶は夏海には、囲碁を打ってもらったことくらいしかなかった

「でもまぁ何にせよ、元気そうだね」
「うん、もう疲れも取れたし、パワフルだよ～」
「それなら良かった、都で面白い催しがあるみたいなんだけど――」

＜御前試合＞

「えっ、都で選考試合が！？」
腕試し、その単語に全力で興味を示す幸四郎
「うん、あるらしいの、だから幸四郎も腕を磨く良い機会かな、っ

て――」
「いくいくいくいく、絶対行くっ！」
「ちょ、そんなイヌみたいに引っ付いてこないのっ」
夏海の腕にかぶりつく二代目当主
「いやぁわくわくするなぁ、僕の刀がどこまで通用するかな！」
ところ構わず刀を振り回す幸四郎に、うーんとこめかみを押さえる夏海
「力、有り余っているわね……」
「まぁ正確に言うと、大江山（おおえやま）に討伐に向かう隊を選考する、そんな試合らしいけどな」
あら兄上、と夏海がつぶやく
「そうかぁ、僕らみたいなのがたくさん出てくるんだね！」
「幸四郎には楽しいかもしれないし、俺たちにも良い機会だろう」
「ええ、八月しか開催されていないっていうし、討伐よりも価値があるかもね」
「燃えてきたあああああ、僕、一足先に行っているね！」
「ちょ、待つんだ幸四郎っ」
「ホント、元気ねぇ……」
「いや元気ねぇ、じゃなくて、おーいっ」
夏海は幸四郎を追って駆け出した臥蛇丸に、いってらっしゃーいと手を振る
それから遅れてやってきたのの香と一緒に、巻絵（まきえ）をイツ花に任せて、のんびりと後を追いかけるのであった

＜出場＞

『正々堂々の悔いなき戦いを出場者全員に希望するぞよ』

都には、京の町の全土どころか地方からも出張してきたと思われる、さまざまな格好をした武士たちが勢ぞろいしていた

「うわー、すっごいすっごい！」

会場に到着して、目を輝かせてはしゃぐ幸四郎

夏海と臥蛇丸が見定めるように辺りを眺める

「……でも、思ったよりは人数が少ないな？」

「出場者を選抜しているとか？　さすがにごろつきみたいなのは出れないでしょうしねえ」

「それにしても、俺たちを合わせて１６組とは……存命している猛き者は、もしかしたら相当少ないかもしれん」

「そうかもねぇ、あ、勝ち進んだら賞金と奉納点（ほうのうてん）がもらえるんだ」

「なるほど、討伐よりも割が良いかもしれんな、毎年８月は予定を空けるように、幸四郎に言っておこうか」

その幸四郎はと、首をきょろきょろ振るが、近くにはいない

「幸四郎……？」

夏海が頭を抱えながら指差す、その方向には、

「何その木槌、すっごいすっごい！」

他の出場者の持っている武具に見とれて、大興奮している壬生川家二代目当主の姿があった

「何ていうか……」

「無邪気、だな……」

田舎者とは言わないよう、思いとどまる

「ふたりとも～、みんなの分買ってきたよ～」
ニコニコとやってくるのの香
「のの香、あんたはどこに行ってたの、っていうか、それは？」
「お土産屋で売ってた、選考試合団子ぉ」

手提げに下げて、そのうちの一本を食べながら微笑む
「うわ美味しいっ、そうだイツ花さんにもお土産買ってきてあげなきゃっ」

ぱたぱたと、再びお土産屋さんに戻るのの香
先行きが非常に不安な夏海と臥蛇丸であった

～～

『ではこれより夏の朱点童子（しゅてんどうじ）公式討伐隊選考試合第五回を開催する！』
組み合わせが発表され、すぐに壬生川家の試合が開始された
『三十三間会（さんじゅうさんげんかい）の試合を執り行う！　両者参られい！』

初戦の相手は三十三間会、弓使いが３人の徒党だ

「よーし、僕頑張る！」
刀を構えた幸四郎のその姿に、炎のような気迫が見え隠れする
相手は武人や防人で、大将をひたすらに強化する作戦のようであったが、
壬生川家剣士ふたりの鋭い剣技の前では、その自慢の援護の術も、形無しのようで、前半を押し切った壬生川一家が、判定勝ちという結果となった

調子に乗って、続く二回戦
その相手は本願院選抜（ほんがんいんせんばつ）、一撃の威力が極端に高く、防御も侮れない壊し屋3人の僧兵団だ
「ああいう連中には術が一番よ、防人後、併せから入って六手で詰むわよ！」
大将である幸四郎に、防御力上昇の術をかける夏海
それでも皆の体力は削り取られる、短期決戦はこの場合最上の手だろう
「併せって、一体何の術を……」
「それじゃのの香いきま～す」

4人の中でもっとも術を得意とするのの香が、土台となって術を紡ぐ

「＜二つ扇＞！」
思わず臥蛇丸が、崩れかける
「はい、＜二つ扇＞！」
2人併せで、威力三倍
「乗っかるわよ、＜二つ扇＞！」
3人併せで、威力五倍
「ふ、二つ、扇！」
頭の中に何かの光景が思い浮かぶが、4人併せで威力は七倍
「ちょいや～」
火炎の術を完成させたのの香が、そのまま本願院選抜衆を焼き尽くす

本A「ギャー」
本B「く、苦しいー」

本C「もうだめだー、ひー」

台本通りのようなやられ役の台詞を発しながら、ばたりばたりと倒れる僧兵たち
こうして壬生川一家は、二回戦も突破したわけだったが

三回戦の京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）という徒党に、
そりゃもうボッコボコに、グウの音も出ないほどにやられる

戦闘不能に追い込まれたのは、臥蛇丸と幸四郎
ふたりは回復力を信じられながら、翌月を迎えるのであった……

第二話－６　「都路」　１０１９年８月（後書き）

選考試合（夏海・臥蛇・のの・幸四）

第二話－7　「夏茜」　１０１９年９月（前書き）

臥蛇丸　１才１ヶ月
夏海　１才
のの香　１才
幸四郎　７ヶ月

巻絵　２ヶ月

第二話－７　「夏茜」　１０１９年９月

まだ先月の傷も癒えないまま幸四郎（こうしろう）は、庭で木刀を振るっていた
「……」
井の中の蛙と思い知らされるには、十分過ぎた敗北だった
幸四郎は今や7ヶ月、来月の元服を傷ついたまま迎えることになる
（……僕は、壬生川（みぶがわ）家、二代目当主なんだから！）

前回の選考試合が終わって、幸四郎は夏海（なつみ）とのの香（ののか）に猛烈に怒られた
無茶をして傷を負うということは、それだけで人生の数割を棒に振ることになるのだ
人生生きて１才６ヶ月
その中で戦場に出られる回数は８回か１０回か
当主が一ヶ月戦場に出られない事の意味は、酷く重かった

「僕は、うん、もう負けない……父さん！」
大江山（おおえやま）の門が開くまで、あと二ヶ月
幸四郎は決戦に備え、その決意を固めていくのだった

＜二人目の第三世代＞

「お喜びください、根来ノ双角さまより、お子様を預かってきましたァー！」
最近めっきり陰が薄くなったイツ花が、喜び勇んで登場する
「わーぃ」
のの香手を叩いて喜ぶ
「神秘的な瞳の、女のお子様です！」
壬生川家はもしかして、女性が産まれやすい家系なのかもしれない
のの香は、やってきた女の子に佐和と名づけて、弓使いの道を歩ませた

「はーぃ、佐和デスー！」
「はーぃ、ママですよ〜」

ニコニコと佐和を抱くのの香

「……えー、ママ二号でーす」
手を開いて、赤子をあやすようにぎこちない笑みを佐和に向けるのは、いつの間にか隣にいた夏海だ

「え、え、え、お母さんがふたり？」
「そうなの〜」
目を白黒させる佐和の髪は、のの香と同じ水色だが、その強気な瞳は、確かに夏海と同じ金色のモノだった
こんなことをして戸惑うかと思ったが、佐和は意外にも早く受け入れた
「何かトクした気分！　でもまぎらわシイネ！」

「そっかぁ」
顎に指を当てて、うーんと考える

「じゃあ、パパ」
「指差すなっ」
　のの香の頭をぺしりと叩く夏海
「ハーィ、お父さんー」
「呼ぶな佐和っ」

　こうして、一家は過去最高の六人家族となったのだった

＜動けるのは、3人＞

「今月から実戦部隊に入りました、よろしゅーお願いしますー（、・ω・´）」
　ぺこりと小さく頭を下げる巻絵（まきえ）
「あらぁ、兄上に比べて、ずいぶん素直そうねぇ」
「箱入り娘みたいねぇ～」

　双子ふたりして、よしよしと巻絵の頭を撫でる

「く、どうしても、行くのか……！」
　その和やかな3人に近づく、全身傷だらけの男
「あらあら、前回の試合でまたまた大怪我をした兄上じゃありませんか」
　夏海は手を口元に当てて、いやらしく笑う
「せっかく、なっちゃんに食べられないように、大切に育てたのにねぇ～」
　巻絵の頭を撫でながら、残念そうに言うのの香
「この……鬼、め……」
　行くなら俺を倒してから行け、と言わんばかりの臥蛇丸（がじゃまる）

夏海はさすがに、この扱いは一体、と悩む

「でもお父しゃん、いっつも『あの人みたいに強くなれ』とか、言ってるじゃないですかぁー（´・ω・`）」

「へー」

「ほー」

「いやそれは違う！　断じて違うぞ！」

声をがなり上げて、むせる

そこまで否定しなくても、と思う双子

「まぁでも、実際出陣できるのは、私とのの香と巻絵ちゃんの3人だけなんだから、兄上と幸四郎はお留守番よ」

「さーちゃんのご教育、お願いしま～す」

佐和を一流訓練師の臥蛇丸に託す

「く……わ、わかった……」

傍から見て心配になるくらい青ざめた表情の臥蛇丸

「そこまで心配なのね……」

「着いていってやりたい……」

このまま話していたら、何だか泣き出しそうだったので、さっさと出かける事にする

「そういえば、こうちゃんは？」

まだ戦えない年でも必ずお見送りにきていた、あの戦い大好きッコの姿が見えず、思わず気になる

「幸四郎なら、庭で一心不乱に稽古をしていたな」

「そう、まぁ悔しかったんでしょうね」

「最近顔つきが精悍になってきて、やっと当主に相応しい姿になってきたよ」

臥蛇丸は、そこでやっと、本日初の笑みを見せた
「それじゃ、行って来るわね」
「さーちゃんのこと、よろしくぅ～」
「お父しゃん、いってきます～（、・ω・、）」

「生きて帰ってこいよぉぉおぉぉぉ」
風車のように見境なく手を振る臥蛇丸に、やれやれとため息をつく娘たちであった

＜相翼院＞

「初めての戦場なんで、どきどきします～……（、・ω・、）」
薙刀を持って、初々しい反応をする巻絵
「誰だって、最初の戦場はそんなもんよ」
（なっちゃんは最初から堂々としていた気がするけど）
妹は人知れず思った
「でも～、夏海おばしゃんは、昔っから強かったってお父しゃんが（、・ω・、）」
「お、おばさん……」

夏海は急にガクッと膝をついた

「え、ど、どうしたんでしゅかっ（、・ω・、）」
「い、いえ、何でもないのよ……そうよね、もう1才だものね……」

「あはは～」
どことなく年を取って見える夏海の隣で、壬生川家に来てから一

貫して性格が変わらないのの香が笑う
「もぅ、良いからさっさと行くわよ！」
そうして、奥まで進み、天女の小宮に足を踏み入れる
「もうこんなとこまでやるんだぁ」
「だって、尻子玉大将じゃ、相手にならないんだもの」

大将の夏海が、燃え髪大将に斬りかかる
巻絵も何とか奮起して、そんな夏海のあとを着いて回る

「うくっ、」
燃え髪大将の放った渾身の花乱火の術が、夏海の体力の五割を奪う
「なっちゃん！」
白波の術の併せを結んでいるのの香は、泉源氏で援護することができない
巻絵はそもそも泉源氏を覚えていない

「ま、大丈夫よコレくらい、体力が黄色になっても、もう一発来なけりゃ――」

夏海が見たのは、再び術の詠唱に入っている燃え髪大将だった

～～

「当主さま、出撃隊が帰還されました…」

「あれ、まだ9月の中頃じゃない？」

「それが、あの……」

「え、夏海お姉ちゃんが！？」

ののの香が血相を変え、巻絵が泣きじゃくっていた
臥蛇丸とイツ花が、全身の大火傷を治療したが、

その命のともし火を復活させることは、ついに叶わなかった

「みんな、何を集まっているの…？　出陣の準備は、できたの…？
ホラ、早く……！」

壬生川　夏海　享年１才０ヶ月

ののの香が夏海の手を握って、首を振った

１才０ヶ月の生涯、８度の戦場に赴いた夏海の、最期だった

第二話－７　「夏茜」　１０１９年９月（後書き）

出陣・相翼院（夏海・のの・巻絵）
佐和→弓使い・初見　訓練・臥蛇→佐和　夏海・落命

第二話－8　「秋分」　1019年10月（前書き）

臥蛇丸　1才2ヶ月
のの香　1才1ヶ月
幸四郎　8ヶ月

巻絵　3ヶ月
佐和　1ヶ月

第二話－8　「袂分」　１０１９年１０月

「なっちゃん、そんなそんな！」

「夏海（なつみ）おばしゃんは、巻絵（まきえ）をかばって……」

「く、どうして、どうして目を覚まさないんだよ夏海！」

「夏海お母さん……？　どうしたの、ねえ……」

～～

……幸四郎（こうしろう）はゆっくりと目を覚ました

紺色の着物に着替えて、冷たくなってきた井戸水で顔を洗い、居間を訪れる

西方より伝来した兵法書をいつも広げていた夏海の姿は、そこには無い

囲碁に興じる夏海の姿も、もう無い

つい先日まで響いていた姉の声も、もう聞こえる事は無い

幸四郎の元服の晴れ姿を、夏海は見ることは出来なかったのだ

「大江山（おおえやま）への出陣は、１２月にしようと思います！」

玄輝の間もとい、会議室に集まる壬生川御三方、幸四郎、臥蛇丸（がじゃまる）、
ののか（ののか）の香だ

「再来月か、でも一体どうしてなんだ？」
「今月出陣して奉納点（ほうのうてん）を稼ぎ、そうして来月、僕が交神（こうしん）の儀を行います」

現在の奉納点は１６００、このままでは中途半端な位の神様としか交えない、幸四郎はそう判断したのだ

「ふむ……なるほど、それもひとつの手かもしれないな」
「もし僕たち大江山討伐隊が帰らなかったら、その時はそのコを次期当主にします」

皆の前でさらっと次期当主を宣言する幸四郎

「……わかった、さーちゃんにも、そう言っておくね」

夏海が亡くなって、変わったことがひとつ
ののの香の語尾から幼さが失われた

「そして、大江山討伐隊の参加者は……僕、巻絵、佐和（さわ）ちゃん、それにののの香お姉ちゃん、お願いします」
「うん、覚悟は出来ているよ」

ののの香も瞳を閉じて、しっかりと頷く
一族の仇を、夏海の仇を討つために

「俺は……置いてけぼり、なのか」

臥蛇丸は思わずつぶやいた
それが、生まれた頃から続いていた役割、のような気もした
だとしても――

「お兄ちゃんは、もし僕が戻らなかった場合……どうか、僕の子供を、よろしくお願いします」
「酷いな」
たまらず苦笑する

「自分の娘と兄弟たちを死地へ行かせて、その上で俺は屋敷で赤子を抱いていろというのか」
「ごめんなさい……！」
「佐和ちゃんじゃなくて、俺じゃダメなのか？　あるいは、巻絵の代わりに俺とか……」

臥蛇丸は食い下がる

「あの二人は、来年の大江山があるかもしれないんです、そのために、見てもらうのも悪くないと思うんです」
「来年の、大江山……のの香の代わりに俺でも、いや、それはダメか、術でも武芸でもののの香にはもう俺は勝てないか……」
かぶりを振る
「お兄ちゃん……」
「もしかしたら今月が、俺にとって最後の出陣になるかもしれないんだな」
臥蛇丸はそうして、外を眺めた

「巻絵に遺してやらなきゃいけないな、死ぬ前に」

臥蛇丸の父、玄輝は幸四郎と共に戦場を駆け巡ることはできなか

った
夏海もまた佐和に何も遺すことができなかった、それが彼女にとって心残りだっただろう
「同じ想いでも、悔いを遺すわけには、いかないものな」

＜出陣＞

「それじゃ行ってらっしゃーい」
土間で手を振るのの香
「のの香おばしゃん、一緒に行かないの？」
「うん、わたしは佐和の指導をしなきゃいけないの」

今月出陣できない佐和は、来月は交神の儀で潰れてしまうことから、大江山が初陣ということになる

「初陣の際に、＜泉源氏＞くらいは覚えておかないとね」
そう言って、佐和の髪を指で梳く
ニャフ、と奇声を発する幼い佐和
「3人での出陣か」

そのうちのひとりは、まだ幼く、前回もほとんど戦えていない巻絵だ
雰囲気を察して、当主が声を張り上げる
「じゃあ、僕が二人分頑張りますって！」

「不安だが、もうお前も元服したわけだしな……」
口では戒める言葉をはきつつも、何だか幸四郎の背中が頼もしくなったように思える
「よーしそれじゃー」
いつもは夏海がしていた儀式を、幸四郎もまた繰り返す
「とつげきぃぃぃ！」

＜再び相翼院（そうよくいん）＞

「のの香がいたら、ここには絶対に来たがらなかっただろうな……」
火の粉の幻影が、いまだまぶたの奥に焼き付いているのかもしれない
彼女が負った心の傷は、簡単には癒えないだろう

しかし今月は、相翼院の討伐が奨励されている期間だ
たくさんの妖怪を狩れば、それに応じた銭金が支払われる
京の都に資財を投げ打っている壬生川家は、いつだってお金がないのだ、強い武具を購入するために、機会は活かさねば
川から奇襲してくる物の怪を斬り捨て、臥蛇丸が先導する
その後ろを、おっかなびっくり着いていく巻絵だ

「お父しゃん……（、・ω・、）」
「戦場は怖いか？」
「うん、すごく、怖いでしゅ（、・ω・、）」

父の玄輝も夏海も、二代目当主の幸四郎も、戦場所を怖いと言っ

たことはなかった
妖怪と戦うのも、定めと受け入れていたのだった

「でも、一家にひとりくらい、そんな役目の奴が居るべきだよな……」

幼い頃から、無茶な父や妹に囲まれて暮らしていた臥蛇丸の役目だったのだ

「おまえは、幸四郎や佐和が無理をしたら、止めるんだよ」
「は、はぃ……」
「それはおまえにしか出来ない、立派なお務めだからね」
「戦場は怖いでしゅけど、それなら、出来るかも、しましぇん……（、・ω・´）」

巻絵は優しい子だ、大事に育てたかいがあった

「俺がしたように、巻絵は治癒の術を大切にするんだよ」
「はぃ（、・ω・´）」
巻絵の頭を撫でる臥蛇丸
「みんなにおっかなビックリ着いていって、暴れる子をなだめて、張り切る子に癒やしの術を唱えて……みんなを頼んだよ、巻絵」
「お父しゃん……」

遠くで幸四郎が叫んでいた

「鬼が何だか変な書物を落としたよーーー！」
臥蛇丸は巻絵の手を引かずに、幸四郎に駆け寄っていった
巻絵はその後ろから、ひょこひょこと、くっ付いていくのであった

第二話－8　「袂分」　１０１９年１０月（後書き）

元服→幸四　出陣・相翼院（臥蛇・巻絵・幸四）　訓練・のの→佐和

第二話ー9　「穂先」　1019年11月（前書き）

臥蛇丸　1才3ヶ月
のの香　1才2ヶ月
幸四郎　9ヶ月

巻絵　4ヶ月
佐和　2ヶ月

第二話－９　「穂先」　１０１９年１１月

＜槍使いの指南書＞

「ふぅむ……」

臥蛇丸（がじゃまる）は部屋でひとり、首をかしげていた

「どうやら、先人によって書かれた武芸書のようだが……難解だ」

指南書から目を上げ、眉の間を指で揉みほぐす

先月相翼院から入手した槍の指南書を、何時間もかけて読み解いていたところだった

「夏海（なつみ）が生きていれば、もっと詳しいことが分かったかもしれんが……」

臥蛇丸ものの香（ののか）も、さらには幸四郎（こうしろう）も京の武術に精通しているとは言いがたかった

常に新たな知識を得ようと努力をしていた夏海ならば、あるいはといったところか

もはや考えたところで、詮ないことではあったが

「お父しゃん、お茶をお持ちしました～」

襖を開けて入ってくる娘、巻絵（まきえ）

「ん、すまないな」

熱くて渋いお茶が、胃の中に染み渡る

「そうだ巻絵、おまえならこれ分かるか？」
巻物を差し出す

「うーん、こういうのはちょっと……光源氏とか、耽美なお話なら大好きでしゅけど」

「そ、そうか」
少し引く臥蛇丸
「まぁ仕方ない、のの香と佐和（さわ）に見せて、あとは蔵にしまっておくか」
それがダメなら、自分たちの代では復活させられない、ということだろう
「ま、こういうのを次の世代に託す、というのは何だか無責任な感じがするものだな」
相変わらずの気難しそうな表情で、ため息をつく臥蛇丸であった

＜交神（こうしん）の儀＞

一方その頃、

「幸四郎さまも、本当に立派になられましたネ！」

交神の部屋に、正装した幸四郎が参上する
その晴れ姿に、思わず目をうるうるとさせるイツ花（いつか）だった
「うん、おかげでこうして子供を遺すことも出来るよ、みんなイツ花のおかげだね」

「そんな、イツ花は何もして無いですよ、壬生川家の皆様の尽力があったからこそ！　です」
「そうだなぁ……特にのの香お姉ちゃんの術には、ずいぶん助けられたっけ」

幸四郎は恥じらい、頭をかく
そんな幸四郎も９ヶ月、そろそろ子供の頃のヤンチャは鳴りを潜め、大人の色香と貫禄が備わってきた頃であった

「でもホント、幸四郎さまは格好良くなられましたネ！」
「そっちの方は分からないけど……でも、武芸は昔とは比べ物にならないくらい、成長したと思う」
昔から夏海のの香姉妹の玩具であったため、身なりに気を使うのは性分になってしまったらしい
「僕は末の子だったから、早く早く強くなりたいって、ずっと思っていたんだ」

そう言って、はにかんだ笑みを見せる
歴代当主好感度の中でも、上位に居続けるであろう微笑みだった、姉妹の教育の成果はこんなところにも現れているらしい

「さ、さって、それじゃ始めますかッ」
「うん、そうだね」

目録の中から、お目当ての神様を選び出す幸四郎
「現在の奉納点（ほうのうてん）から、ええっと、木曽ノ春菜さまか、陽炎ノ由良さまが丁度良いのかな」
木曽ノ春菜は土の神であり、奉納点は１９１８点
対する陽炎ノ由良は火を司る神様で、奉納点は２０３０点だ
「そうですねェ、幸四郎さまのお子様は次期当主なんですから、慎

重に決めませんとネェ」

「でもやっぱり、当主たるもの積極的で勇猛果敢な方が良いよねー」

カラカラと笑う幸四郎

母親が水神（みどろ御前）だというのに竹を割ったような性格の幸四郎を見ると、大事なのは遺伝より育った環境という気がするイツ花だった

「それじゃあ、陽炎ノ由良さまでよろしいですネ？」

幸「うん、よろしく！」

陽炎ノ由良「あーら、良い男ネェ」

後に陽炎ノ由良が二つ扇ノ前に語ったところによると、

なぜだか壬生川（みぶがわ）家二代目当主は女性の扱いが妙に手馴れていて、

壬生川家遊び人説が流れることになるのだが……それはまた別のお話

第二話－９　「穂先」　１０１９年１１月（後書き）

交神の儀・幸四×陽炎ノ由良

第二話－１０　「天来」　１０１９年１２月前編（前書き）

臥蛇丸　１才４ヶ月
のの香　１才３ヶ月
幸四郎　１０ヶ月

巻絵　５ヶ月
佐和　３ヶ月

第二話－１０　「天来」　１０１９年１２月前編

その日は、奇しくも初雪が壬生川家に天来していた

「雪だぁ……そういえば、僕が壬生川家に来たときも、雪が積もっていたなぁ」

二代目当主・幸四郎は縁側に立って庭を眺める

「何だかこれが最期のうちの景色だとしても、納得できそうだなぁ」

名残の雪を見て育ち、初雪が終雪となる、何となくみやびじゃないだろうか

縁起でもないことを考えて、カラカラと笑う

本日は、大江山へ出陣する日だ

＜倉庫の蔵出し品出し＞

その日の壬生川家は、朝から騒がしかった

「ちょっと佐和、ちゃんと自分の弓手入れしたのぉー？」

「わーもう、今やっているからお母さんー！」

「戦場で弦が切れたら、大変なことになるんだから、よく油を塗っ

ておくんだよぉ」
「はーぃはいはいはいはい、もうそれ耳タコだってばぁ！」
「何を言うの、佐和ってば初めてのいくさなんだから、念には念だからねっ！」
（まったくもぅ、お母さんってば臥蛇丸（がじゃまる）オジサンみたい）
「何か言ったぁ？」
「何でもないからナイカラ！」

居間では、親子が弓の手入れをしている真っ最中だった

（どうして居間で）
幸四郎は思ったが、恐らくこれが最期になるかもしれないと感じているから、一番馴染みの深かった場所で支度をしたいのだろうとはいえ、油まみれの居間を見渡して、うぅーんとうなる

一家で蕎麦をすすった居間、いつも幸四郎は食べるのが遅くて、姉妹にからかわれていた
夏海（なつみ）には囲碁の相手もしてもらった、まったく歯が立たなかったけれど
お腹が空いて仕方なかった稽古後、夕餉の前にイツ（いつか）花に握り飯を作ってもらったこともあった
臥蛇丸とはよく壬生川家の事を話し合っていた、町の発展がいかに鬼退治の助けとなるのか、幸四郎は教えてもらった

あの頃父親の背は、見上げるほど高かった

いつか届きたいと思っていた、幸四郎の背は今では晩年の玄輝（げんき）を越えていた

「あれ、こうちゃんどうしたの、ボーっとしてぇ」

「え、ああいや、居間を見てたんだ」

正直に答える幸四郎

「そっか」

1才3ヶ月となったのの香は特に追求しない、何となく感じているのだろう幸四郎の感慨を

「僕、もう準備が終わったから、お兄ちゃんと巻絵(まきえ)ちゃんの様子を見てくるね」

「はーぃ、こっちはもう少しかかるかもぉ」

「ん、分かった」

幸四郎は居間に背を向ける

後ろからのの香の「佐和、それが終わったら次は戦衣装にお着替えだからねぇー」と「ハーィ！」という元気の良い声が聞こえてきた

～～

「すまん巻絵、この槍はそっちに立てかけておいてくれ」

「ふぁーぃ」

「まったく、こんなに時間がかかるとは思わなかったな……」

「もう出発の時間が迫ってましゅぅぅ（´・ω・、）」

臥蛇丸親子は、なにやら倉庫でドタバタとしていた

「お兄ちゃん、大丈夫？」

庭にまで埃が噴き出している、幸四郎は中を覗き込んで、少しむ

せた
「おお幸四郎、すまんな準備が遅れて」
「それは大丈夫だけど、何をしているの？」

倉庫の中では、顔に手ぬぐいを巻いて割烹着を着た臥蛇丸と巻絵が、荷物を整理しているようだった

「なぁに、倉庫の中がごちゃごちゃしていたもので、今イツ花さんに頼んで町へ売却してもらってきているのだ」
「倉庫の整理……全然思いつかなかった」
「古い弓や、もう錆びた刀なども、砥ぎ屋に頼んでから仕出しをな」

夜通し掃除をしていたのか、臥蛇丸は全身煤だらけのようだ

「まぁこれで支度金も出来たし、ついでにいくらか上等な鎧も買えるだろう、ハハ」
「お兄ちゃん……ありがとう」
「なぁに、俺に出来るのはこんなことくらいだ、ほら巻絵、もうおまえは出陣の準備をするんだ」
「はーぁい」
「ありがとうな、手伝ってくれて」

臥蛇丸は黒ずんだ手を割烹着で拭いて、巻絵の頬を撫でた

「行って、幸四郎を守ってやるんだぞ」
「あぃ（、・ω・´）」

僕は守られるのか、と苦笑する幸四郎
とたたたと走っていく巻絵の後姿を、臥蛇丸は目を細めて眺める

「そうだ、俺に出来るもうひとつの事があったっけな」
「ええ、どうかお願いします」

幸四郎は頭を下げる

「ああ任せておけ、おまえの留守中、子供は俺が守る」
「僕が帰らなかった時は、そのコを当主に……よろしくお願いします」
「……名前はもう、決めているのか？」
「そうですね、帰ってきたら決めることにします」

幸四郎はにっこりと微笑んだ
「ハハハ、そうだな、それが良い、それが一番だ！」
臥蛇丸も男臭く笑う

「それじゃあ、行ってきますね、お兄ちゃん」
「ああ、奮って来い！」

～～

「さって、みんな集まったかな」
「お～」
「おー！」
「はい、わたし頑張りますでしゅ（、・ω・´）」

四人は外に、ひとりは玄関に

「どんな結末になっても、俺は待っているからな」

死地へと赴く、四人を眺める臥蛇丸

「それでは、壬生川家、出陣！！」
刀を抜いて、叫ぶ

「目的地は大江山山頂、朱点童子（しゅてんどうじ）の首ひとつ！！」

見送られる側と、見送る側
「さ、イツ花、居間に戻って片付けでもするか」
「……そうですネ」
「あの油まみれの部屋じゃ、皆が帰ってきた時に、くつろぎにくいだろうからな」
「はい、おっしゃるとおりです、臥蛇丸さま」

すっかり掃除夫と化している臥蛇丸であった

第二話－11　「去来」　1019年12月後編

＜大江山（おおえやま）＞

かつて神が降臨した聖地との伝承もありますが、とにかく現在は宿敵朱点童子（しゅてんどうじ）のいる　鬼の総本山です
当然　ここに巣くう鬼や妖怪は他の迷宮に比べて、ケタ違いに強い！

イツ（いつか）花の書き置きが強い風に揺れている
幸四郎（こうしろう）は紙をしまって、山を見上げた
鬼の総本山――大江山

緊張した面持ちで、四人はその入り口までやってきた
「うわ～、おっきぃねぇ～」

と思ったら、緊張していたのは3人だけだったようだ
見上げて口笛を吹くのは、ひとりのんきなののか（ののか）の香

「この山登るのかぁ、疲れそぅ」
うぇ～って顔をするまだまだ現役、一児の母だ
「途中で腰抜けたら、ウチがおぶっちゃるヨ、もう年だしねっ！」
「うっわ生意気っ」

頬を引っ張り合う仲の良い母子

「緊張、緊張感が……」
山から吹く風に、吹き散らかされてしまったようだ
「ま、まぁまぁみなしゃん、そろそろ……（´・ω・`）」
「行かないと日が暮れちゃうからね、今月中に到達できなかったら
……次の挑戦は来年、だものね」

壬生川家にとって、一年はとてつもなく、長い
しかし、比較的若いメンバーで構成された現出撃部隊
１才３ヶ月ののの香は例外としても、１０ヶ月の幸四郎、５ヶ月
の巻絵はまだ可能性があり、３ヶ月の佐和は確実に来年の主力だろう
来年の、その次の挑戦のためにも、この四人は山頂を目指すべき
なのだ
誰かひとりでも生きて帰れたら、そのときの経験を活かして、来
年に繋げるためにも

「じゃあ……参りましょう」
「お～」
「ホイヤー」
「はぃ（、・ω・´）」
四人は山を駆け登ってゆく
打倒・朱点童子の旗を掲げて

～～

それが佐和にとっての、初戦闘となった

壬生川家において現在最高の戦闘経験を持つのの香は、驚いた
大江山の一合目にうろつく妖怪ですら、他の地では中腹に位置す
るような大物ばかりなのだ

「これは、手ごわいなぁ」
佐和を援護しようと、幸四郎や巻絵が動く
ところが当の本人はというと、
「ひー、ヤバイ、ヤバイィィィ」
怪異たちからひょいひょいと逃げ回る佐和

（ひょいひょい……？）

身軽だ、とても弓使いとは思えないほどに
「ちょっと、佐和ちゃん」
射った矢が、幸四郎の方にビシバシ飛んでいく
「佐和しゃん、何て荒れ矢……」
ばら撒いている本人はすこぶる楽しそうだ

「ビャー」

幸四郎も慌てて避ける、矢をつがえるまでも非常に早く、その威
力もまた痛快だ
３人は思わず息を呑む
（滅多矢鱈……！）
注・めったやたら――考えもなく手当たり次第に何かをしたり、
数量・度合いなどがむやみに多かったりするさま
外れなかった矢は、妖怪の胴体を一撃で貫く

「タノシー！」
壬生川家の三世は、その頭角を徐々に現してゆくのであった

〜〜

一同は傷つきながらも、二合目に達する

「泉源氏（、・ω・′）」

臥蛇丸から受け継いだ、見事な技力で、皆の傷を癒やす巻絵

「いやぁ〜、みんな泉源氏の術を覚えてて良かったねぇ〜」

均等に技力を使っていけば、強敵が現れたときにも併せの術が使えるというわけだ

「僕らはまだ、回復量の少ない＜泉源氏＞しか使えないから、常盤ノ秘薬は残しておかなきゃね」

そうして道具を節約して、強敵――朱点童子との戦いに備えるのだ

「イヤッハッハ、１０月にさんざんお母さんにシゴかれましたからぁ〜」

「酷い言い方」

ののの香がすぱーんと佐和の後頭部を叩く、佐和はぎょふぅと呻く

「こんなところで体力使わないでくださいよ……」

「泉源氏（、・ω・、）」

一同の薬箱、巻絵

「さ、二合目に入って新たな妖怪が現れるよ、気を引き締め直そう」

短い休憩は終了だ、一同はさらに雪山を登る

一ヶ月で登頂するため、体力を消耗しつつも壬生川一家は駆け足

で急ぐ

そこへ、突如として巨大な鬼が襲い掛かる

「デカッ！」

「な、何この鬼ぃ！」

巨大な鬼の正体は、夜叉という獰猛な怪物だった

避けきれず夜叉の横薙ぎを受け、体力の三割を持っていかれる幸四郎

「うっわ、痛いな」

まだ二合目だというのに、こんな化け物が出てくるなんて！

「早めに大将を倒して、撤退させよう！」

ここであまり技力を消費するわけにはいかない、そう思っていた矢先だった

＜花乱火＞の炎が、幸四郎を襲った

幸四郎とのの香は知らなかったが、それはかつて夏海を沈めた術と同等のモノだった

「くあああ！」

「幸四郎しゃん！」

慌てて回復に駆け寄る巻絵、その後ろからのの香と佐和が援護をする

「相手の番が来る前に、沈めるよ！」

「ヤバイ、お母さんと術を併せる方が緊張するぅぅ」

温存なんて言っている場合ではない、＜白波＞の術印を結ぶののの香、続く佐和

家族の中でもっとも速さに長けている弓使いふたりの、高速連携が夜叉ごと大将を押し潰す！

怒号の響く白波が去った後、その場に残っている妖怪はいなかった

「ふぅ……これでゆっくり、治療できるよね」

（お母さん、ケッコー無茶だ）

母の意外な素顔を垣間見た佐和だった

「それにしても、あちち……二合目でこんな相手なんだね」

「泉源氏の術じゃ、回復が追いつかないでしゅね（´・ω・`）」

上位回復の術の必要性を痛感する

「僕が回復したら、先を急ごうか」

健康度の減少が気に掛かるが、幸四郎たちは進まなければならないのだ

～～

三合目に到達した時、もう残りのともし火は半分だった

幸四郎の提案で、ここから先は時間短縮のため、出来る限り敵を避けていこうという事になった

四人は気配を消してちょこまかと登り、そのまま四合目に達した

四合目に立ちふさがる鬼は、今までに見たことがないほど凶悪だった

悪羅大将、夜叉を従えるほどの上等な鬼

それらが、あちこちを跋扈しているのだ

さらに四合目から先は、壬生川一家から笑顔が消えるほどの豪雪だった

歩くのも辛い積雪の中、四人は走り続ける

～～

五合目にたどり着いたとき、前線に立つ当主・幸四郎の健康度は、69まで低下していた
防御をあげる防人の術を重ねがけても、悪羅大将の力を溜めた一撃は軽々しく幸四郎の体力を持っていく
「いやぁ、さすがに大江山は高いねぇ」
あははと笑うが、その顔も少し強張っている
「とりあえず応急手当はしておきましたけど、怪我はおうちに帰って養生しないと……」
「ううん、僕たちは、先に進まないといけないよ」
やんわりと否定するが、佐和がその場にへたり込む

「えー、でも、まだ来年もぅ」

ふふと笑って、佐和を立たせるのの香
「のの香には、来年なんてないんですからね」
「お母さん……」
身体が疲れきっていても、母親の想いを知ると進む力も沸いてくる
「さ、みんな、もう時間が少ない。進まなきゃ」
一番の深手を負っている幸四郎が、先陣を切る
それが当主の役目だと言うように

一同はついに終合目を越えた

〜〜

大きなつり橋を渡って、大江山の中へと足を踏み入れようとする時、
法螺貝のような声が行く手を塞いだ
「大江山仁王門の、門番……！？」
刀を抜く幸四郎と、その横に巻絵、少し後ろにのの香と佐和が武具を構える
仁王門の両側に飾られていた、巨大な木仏像が、そして動き出した
痩せ仁王（におう）・太り仁王（におう）「ウォオオオオオオオオオオオオオオ！」
「壬生川家が当主、壬生川幸四郎、参る！」
幸四郎が雄叫びを上げて、斬りかかる
二匹の仁王は先制攻撃をし、続けざまに術を放った
＜光無し＞の術で巻絵、のの香、佐和の術が封じられ、＜夢子＞の術で幸四郎は大幅に命中力を下げられる
「拓け、当主ノ腕輪！」
先祖を呼び出すも、その一撃が避けられてしまう
「そんな、当主ノ腕輪が……！？」
今までの相手とは次元が違うと、否応もなく思い知らされる
のの香は神仙水（しんせんすい）――ステータス異常を治癒――を飲み、術を復活させた
「お母しゃん……お願いします！（、・ω・´）」
術を封印されたままの巻絵が、七光ノ御玉（ななひかりのみたま）を掲げ、二つ扇ノ前の

力を召喚する
二つ扇ノ前の放った火の鳥は、仁王らに威力を発揮した！
「巻絵ちゃん、てぃ」
巻絵の頭に神仙水をぶっかける佐和、濡れ鼠と化した巻絵は、とりあえず術の封印が解けた
そうして相手の攻撃
痩せ仁王と太り仁王は、剣撃を二代目当主に集中させた！
二発の攻撃で、最大３００のうち、２００もの体力を奪われる
「僕がやられたら、一家は退散だよね……」
へろへろになりながらも、防人で自らの防御を上げる
巻絵も同じく防人で、幸四郎の防御を援護する
ののの香や佐和も続こうとしたところ、仁王は再び＜光無し＞の術を唱えた
「えぇぇぇ、術がぁ～～～」
「うーわー、弓での攻撃が一桁しか通らないよ！」

防戦一方の壬生川一家に、仁王らの弱体術が次々と効力を発揮する
＜みどろ＞の術により敏捷性まで減らされた四人では、回復が追いつかない

「うー、丸薬まで尽きました……」
巻絵の元へ、仁王の一撃が繰り出される

「何だか、お役に、立てなかったでしゅね……（，・ω・、）」

吹き飛ばされて、そのまま地に伏せる巻絵

「巻絵ちゃん！」
「こっのぉ～～～～！」
ののの香は叫びながら、七光ノ御玉を掲げる

「ママ～～～、なっちゃんの分まで力を貸して！」

福招き美也を呼び出すのの香、がってん承知と美也は竜巻を作り出す

神様の唱えた術の力は凄まじく、あの仁王にも浅くない傷をつけた

「どうだっ」

そんなのの香にも、仁王の鉄刀が振り下ろされる

「や、お母サンッ！」

のの香をかばう佐和

「佐和ちゃん！　どうして！」

かばったまま仁王の攻撃を受け、その場に倒れこむ佐和

「だって、ウチの弓、全然効かないんだモン……お母さんが倒してヨネ……きゅぅ」

「佐和ちゃん……」

歴然とした力の差の元、遺された幸四郎とのの香

「うあああああああ！」

がむしゃらに刀を振るう幸四郎

神仙水ももう切れてしまった以上、のの香もひたすらに矢を射る

武人と防人の効力も薄れゆく中、幸四郎は仁王たちの攻撃を受け止め、その剛剣を叩きつける

「僕らの力は、こんな、こんなものなのか！」

叫びが、ほとばしる

「僕の刀は、大江山の、門番にさえ勝てないのか！」

人生を賭けて臨んだ、大一番の勝負だったというのに

「こんなに届かないなんて、くっそぉおおおおおおお！」

死ねえええええと刀を振り回す
そのすぐ後ろ、のの香が倒れた

「こうちゃん……強くなったよね、とっても……」
仁王の攻撃、たった二発での撃沈だった
「パパが見たら、絶対驚くのに……でも、こんなことって……」
雪の中に倒れこんで、そのまま意識を失っていく

「あああああああ！」
幸四郎の渾身の一閃――クリティカルが、仁王を薙いだ
太り仁王の身体が、ゆらりと揺れ、そのまま巨体が倒れこんだ

「ハァ、ハァ……くっそう、くっそう……！」
だが、残る痩せ仁王が、両手を振り上げ――

「朱点童子めがぁあああああああああああああ！」

大江山仁王門内、二匹の仁王によって壬生川家は壊滅させられた

そして１２月が終わり、大江山の戸は再び閉じられたのであった

……

第二話－１１　「去来」　１０１９年１２月後編（後書き）

出陣・大江山（幸四・のの・巻絵・佐和）

第二話ー12　「雪遊」　1020年1月（前書き）

臥蛇丸　1才5ヶ月
のの香　1才4ヶ月
幸四郎　11ヶ月

巻絵　6ヶ月
佐和　4ヶ月

第二話－１２　「雪遊」　１０２０年１月

＜大江山（おおえやま）での激戦の翌月＞

壬生川（みぶがわ）家は、居間を家族で囲み、餅を肴に盛り上がっていた

「そうだ、今から雪合戦しよう～！」

手を挙げてはしゃぐ、半死人

「お母さん、全身包帯だらけデショーガー！」

そう言う佐和（さわ）も、掘りごたつに隠れて見えないが、右手を包帯で吊っている

「えー、じゃあまきちゃんとやるから良いしぃ～」

「ふぇえぇ（´・ω・、）」

突然話を振られた巻絵（まきえ）は、困惑する

「おまえら、怪我人は怪我人らしく落ち着いてなさい……」

臥蛇丸（がじゃまる）が眉間にシワを寄せる

ピカピカにお掃除した居間で、思い思いくつろぐ壬生川一家

「でもまぁ、何だろう」

みかんを剥きながら、ごちる幸四郎（こうしろう）

「何か、みんな無事で、良かったよね、本当に」

あははと笑う、前回の死闘から一ヶ月

奇跡的に、壬生川家決死隊は、誰一人として死者が出なかった

「死にぞこないの体で戻ってきた時は、誰が生きているのかも分からない有様だったがな……」
渋いお茶をすする
「あのときのことは、もう思い出したくないぞ……」
本当にひどかったのだ

「えー、じゃあ幸四郎オジサンと組むー」
今度は雪合戦のメンバー決めで、争っているようだ
佐和が幸四郎の腕に抱きつく
「え、僕も？」

「幸四郎は当主の上怪我をしているからな、それなら代わりに俺がやろう」
心なしか嬉しそうな臥蛇丸

「エー、臥蛇丸オジサンかー」
怪我ならウチもしてるしぃ、と露骨に嫌な顔をする佐和、なぜだか臥蛇丸には人望がないようだ

「いいね～、親子で別チーム対決だね～」
のの香はきゃいきゃいと嬉しそうだ
「お父しゃんと敵同士でしゅか（´・ω・、）」
「うむ、手加減はせぬぞ、はっはっは」
ボソリと年だから身体ダイジョブかなと言った佐和が、のの香と臥蛇丸に殴られていた
幸四郎はそんなやり取りを、みかんを頬張りながら眺める

壬生川家には、ひと時の平穏が戻っていた

＜新職業＞

「当主さまー、新たなお子様がいらっしゃいましたァー！」
「やぁやぁ、嬉しいなぁ」
一時は二度と会えないことも覚悟していたのだ
幸四郎は頬を緩めて、その子を迎え入れる

「とにかくよく笑う女のお子様です！」
「女の子、かぁ」
このまま何事もなくいけば、三代目当主は初の女性当主ということになる
「それにしても、壬生川家は、女の子ばっかりだなあ」
これで巻絵、佐和と、三人連続で女子が産まれたことになる

一月に生まれたということで、名前は（委任で）初子（はつこ）
職業は壬生川家初めての、槍使いだ

「あははー、よろしくお願いしまーす♪」

元気良くやってきた初子は、父譲りの橙色の髪に、茶色の瞳を持っていた

「これから頼むね、初子」
「はい、お父さま♪」

幸四郎に似て、笑顔が眩しく、人を惹きつける何かがある女の子だった

＜四人が大怪我＞

「それじゃ、今月はみんなで休養するよー」
初子を連れて、幸四郎は庭で雪合戦に励む一同に声をかける

はーいという声が、あちこちから上がった

「ていうかみんな、先月大怪我したんだから、運動はほどほどにねー」
遊んでいる人たちの中には、マジになっている人もちらほら

「雪合戦も、合戦よ～！」
雪玉を臥者丸や佐和に投げつけ、のの香

「く、こうなったら、やじりに雪玉を固メテ……」
弓を引っ張り出す佐和
「いやそれは人死が出るぞ！」
臥蛇丸が叫ぶ
雪玉ならぬ、雪矢だ

「お、幸四郎」
ふと気づいた臥者丸が雪合戦をやめて、幸四郎を向いて――
投げつけられた大きな雪玉を頭に食らって、雪に倒れ込む
「ああっ、お父しゃんごめんなしゃいいい」

慌てて臥者丸に駆け寄る、雪を投げつけた娘

それはともかく、のの香と佐和が幸四郎の元へとやってくる
「わ～、その子が？」
「うん、僕の娘、さ、挨拶するんだよ」
幸四郎は初子をうながす

「はーい、初めまして、わたし初子と申します♪」
ぺこりと頭を下げて、黄金色の三つ編みを揺らす

「うわ、可愛～っ」
幸四郎に似て、品の良さそうな顔立ちに、仔猫のような愛らしさがある
間違いなく壬生川家きっての美少女だ

「オー、ウチは佐和、よろしくねっ」
「はい、初めまして♪」
のの香はそのふたりを見て、うっとりとつぶやく
「玄輝パパの孫なのに、どうしてこんなに違いがあるんだろぅ……」
「ウチ負けてないし！？」
母の素直な感想に、たまらず叫ぶ

「ねぇねぇお父さま、わたしも雪合戦してみたいですっ♪」
幸四郎を見上げて、ねだる初子
「んーでも、まだ初子はちっちゃいからなぁ」
庭の積雪を眺めて、雪に埋まってしまわないかと悩む
「大丈夫っ、できるもん！」
「そう？　埋まらない？」
「埋まったら、雪なんて食べちゃいます！」
それはお腹を壊すからやめてほしいな、と思う幸四郎

「んーそうだね、僕もやろうかな」
「ワーィワーィ、やろうやろうー！」

佐和とのの香が手を叩いて喜ぶ

「相手を動けなくするまで雪玉をぶつけた方が勝ちですよね、本で読みました♪」
「イヤそんな恐ろしげな遊びじゃ……」
まだ幼い初子に、じわりと汗ばむ佐和

「だがなぁ、ちょっとコレは、気を抜きすぎじゃないのか？」
雪合戦に興じる壬生川一家を見て、幸四郎につぶやく雪まみれの臥蛇丸
「まぁ何ていうか、僕たちの技量ではまだまだ朱点童子には届かないのも、分かったし」
「ふむ……」
討伐までの期限は残り１０ヶ月

「ま、気長にやろうよ」
幸四郎はニッコリと微笑んで、壬生川家にとても似合わない言葉で締めくくった

こうしてそれぞれは、短い休暇を存分に楽しむのであった

第二話－１２　「雪遊」　１０２０年１月（後書き）

休養　初子↓槍使い・初見

第二話―13　「狐罠」　1020年2月（前書き）

臥蛇丸　1才6ヶ月
のの香　1才5ヶ月
幸四郎　1才

巻絵　7ヶ月
佐和　5ヶ月
初子　1ヶ月

第二話－１３　「狐罠」　１０２０年２月

半分まで減らされた健康度（けんこうど）は、ほぼ全員が先月の休養で完治していた

ただ一人を除いて……

＜ののの香の部屋にて＞

ののの香（ののか）はきょうも床に伏せっていた

先月の雪合戦のあとから、どうも身体の不調が続いている

「お母さん、ナッカナカ良くならないねぇ～」

「そうねぇ、わたしももうそろそろ年なのかしらねぇ～」

布団から身を起こして、力なく微笑む

その顔は熱に浮かされ、桃色に火照っていた

「イツ花（いつか）サンが、鬼たちが市中に悪しき病をばらまいて、もしかしたらののの香さんもそれにかかっているんじゃないか、って言ってたヨォ」

「え～、でもわたしは病気じゃないもの、怪我の治りが遅れているだけよ」

外見は未だ２０台前半に見えるのの香が、ビシと佐和（さわ）のオデコを突っつく

「そうだよネー、しぶといモンねー、じゃあうちはちょっくら出陣してくるよー」

「はいはい、こうちゃんやまきちゃんに、あんまり矢を当てないのよ」

あんまりで済ますのの香

「ハーイ」

元気良く出てゆく、５ヶ月の佐和

のの香は、ふふと微笑みながら、手を振った

＜出陣＞

「それじゃ、のの香お姉ちゃん、行って来るね」

「はーぃ、はっちゃんはのの香に任せなさーぃ」

玄関まで見送りに来たのの香が、どんと胸を叩く

「のの香お姉さま、よろしくお願いします♪」

一撃でのの香の心を鷲掴みする初子（はつこ）

お姉さま、という言葉にクラッと来てしまった

「うわぁ、良い子だねこの子ぉ」

よしよしするのの香の横、佐和がぼそっと「オバサン」と呟き、

のの香に弓で殴られたりする

（元気じゃないか……）

幸四郎（こうしろう）は口に出さずつぶやいた

薙刀を背負った臥蛇丸（がじゃまる）が、庭からやってくる
「おーぃ、俺も一緒に行くぞ」
「お父しゃんって、大丈夫でしゅか（´・ω・`）？」
「なんてったって、もう三ヶ月も屋敷で図面を引いているからな…
…身体がなまって仕方ない」
そう言って笑う臥蛇丸
「でもお兄ちゃん、もしかしたらこれが最期の出陣になるかもしれ
ないよ……？」
丁度臥蛇丸の1才6ヶ月は、幸四郎たちの父・玄輝が亡くなった
のと同じ歳だった
「ああ、それでこそ、床の上では死ねんよ」
「そっか、分かったよ」

幸四郎、臥蛇丸、巻絵（まきえ）、佐和の部隊が結成される

「それじゃ初子、のの香お姉ちゃんとしっかりやるんだよ」
「はーぃ♪」
「ん、いい返事だね」
初子の頭を撫でる幸四郎
「それでは、壬生川（みぶがわ）家突撃！」

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

「それにしても、もうここもだいぶ慣れてきたな」
青の鳥居をくぐって、どんどんと先に向かう臥蛇丸

「そうだね、お兄ちゃんとお姉ちゃんの経験は、壬生川家にとってすごく大事なものだよね」
年長者を敬う幸四郎
「身体は衰えてきても、短命の呪いでは頭まで老いてはいかないようだな」

臥蛇丸の外見も、せいぜい２０台の前半にしか見えなかった

「ウワー、鳥居をくぐると見たことがない景色が！」
初めて鳥居千万宮を訪れた佐和は、おおはしゃぎだ

「あやかしの術なんでしょうかねぇ」
「あやかし！？　何ソレ、使えるの巻絵ちゃん！？」
「え、ええ、私は使えましぇんけど（´・ω・`）」
「ハーン、鳥居以下ね、巻絵ちゃん」
「……（´・ω・`）」
よく分からないとぼし方をする佐和
巻絵はしょんぼり顔

あやかしの術は使えないけれど、一同は＜速瀬＞の術の高速移動でサクサクと進んでいく
途中に出現する、狐の嫁入りの火炎系の術に苦戦しつつも、皆はこれまでとは変わった場所に到達する

――暗黒大鳥居

「今までとは違った、邪悪な気配が感じられるね……」
「どうする、この先に進むか戻るか？」
臥蛇丸の問いに、少し考えた後、答える当主
「そうだね、挑戦しよう」

「分かった」

みんなの体力をすばやく回復して、陣形を整える

「ワクワクしてキター！」

矢をばら撒く佐和

「落ち着いて、佐和しゃん……」

どうしてあの淑やかなのの香から、こんな娘が生まれたのか、疑問に尽きない巻絵だった

だが一方、臥蛇丸は思い出す、あんな感じの暴力的な女性が、かつてののの香の姉として君臨していたことを

（再来……）

何となく、巻絵の先行きが不安になってしまう

「さ、来たよ！」

その時、どこかから狐の雄叫びが響いてきた

稲荷ノ狐次郎（いなりのこじろう）「ケェエエエエエエエエエエエエエエエン！」

根元から三匹の狐が枝分かれして生えている化け物だ

真ん中の狐が口に咥えた鎌で攻撃してくるが、一撃７０ほどであまり痛くはない

「良かった、何とかなりそう！」

先々月に戦った仁王に比べたら、打撃は大した威力ではない

いつもの通り、前衛にガッチガチに＜防人＞を重ねがける巻絵と

佐和
　すかさず稲荷ノ狐次郎に＜矛折り＞の術を掛けられるが、巻絵が用意した神仙水（しんせんすい）によって効果が消される

「サー、幸四郎兄ちゃん、発進！」
「はいはい」
＜武人＞の術によって強化された幸四郎の一撃が、狐に深手を負わせてゆく
　途中、相手の＜花乱火＞によって１７５ものダメージを受ける臥蛇丸
　それでも怯まない
「く……＜白波＞の術の併せ、行くぞ巻絵、佐和！」
「はいぃ！」
「オウー（印、どう結ぶんだっけ！）」
　三人併せ五倍の＜白波＞で、１８０ダメージを与える
　しつこく臥蛇丸が狙われるが、それよりも早く幸四郎の刀が狐を切り裂く！

　光が瞬き、その瞬間、稲荷ノ狐次郎が霞になってゆく

「……ふぅ」
　ホッと息をつく幸四郎
　稲荷ノ狐次郎を討ち取ったのだ

　一方、疲労困憊の臥蛇丸
「大丈夫だ、巻絵、そんな焦って泉源氏を唱えぬども」
「お父しゃん……（´・ω・、）」
　健康度が低下している
　戻ろう戻ろうと主張する巻絵に、幸四郎と臥蛇丸は先に進もうと説得する

先のお稲荷御殿には、もうお馴染みの強敵、悪羅大将たちが跋扈していた

稲荷ノ狐次郎を倒して力が抜けたのか、気の入ってないところを襲われた一同は、悪羅大将の先制攻撃で、幸四郎が倒されてしまう

「ひいい！」

「幸四郎しゃん！」

その場に沈み込んで、気を失う幸四郎

「撤退だ、隊長がやられた、屋敷に戻るぞ！」

臥蛇丸が迅速に指示をする

一同は倒れた幸四郎を背負って、京に敗走していくのであった……

第二話－１３　「狐罠」　１０２０年2月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（幸四・臥蛇・巻絵・佐和）　訓練・のの→初子

第二話－１４　「御三」　１０２０年3月前編（前書き）

臥蛇丸　１才７ヶ月
のの香　１才６ヶ月
幸四郎　１才１ヶ月

巻絵　８ヶ月
佐和　６ヶ月
初子　２ヶ月

第二話－１４　「御三」　１０２０年3月前編

「幸四郎様！　これからはもう少し慎重に行動されますよう、イツ花からのお願いです！」

イツ花が目を吊り上げて、幾度となく繰り返したお小言を再度放つ

「いやーうん、ツメが甘かったみたいだな僕、ごめんねイツ花」

桜のつぼみが膨らみだす頃、布団に寝転んで、幸四郎が微笑んだ

その爽やかな笑顔に、イツ花ですらつい怒気を弱めてしまう、まさに年上殺しの幸四郎

「もう、幸四郎様ってば……あまり家の皆さんにも心配かけないでくださいネ」

「何だか僕、常勝無敗にはほど遠いよねぇ」

連敗続きだ

あははーと笑う

「あれ、そういえば、家がずいぶん静かなような」

いつもなら、ののの香にちょっかいを出された佐和の悲鳴や、巻絵を叱る臥者丸の怒声が、聞こえてくるものだが……

きょろきょろと見回す幸四郎に、イツ花が沈うつな表情で続ける

「それが――」

臥蛇丸とのの香が、京の都で流行っている病にかかったと聞いた

臥蛇丸1才7ヶ月、のの香1才6ヶ月の初春だった

＜巻絵の元服＞

「いやぁ、申し訳ないな、寝込んだままで」
寝巻きのまま、薄く笑う臥蛇丸
臥蛇丸の部屋には布団が一枚があり、巻絵はその近くに正座していた

「お父しゃん、わたし、きょうで元服致しました（、・ω・、）」
「うむ、おまえの晴れ姿、もっとよく見せてくれ、ああ、でも近寄るとマズイのか」

口元を押さえる臥蛇丸

「ううん、イツ花さんが、健康的な人ならうつることはないって言ってましたから、平気でしゅ」
「そうか……おまえのその子供っぽい言葉遣いも、そろそろ直した方が良いな」
笑いながら、巻絵の頭を撫でる臥蛇丸
「（、・ω・、）」
「早いところ、泉源氏より上位の治癒の術を覚えて、一家の皆を守ってやれよ」
「はぃ（、・ω・、）」

「……何だか少し疲れてきたな、ちょっと寝かせてもらうぞ」
そう言って、心配そうな巻絵が見守る中、臥蛇丸は再び眠りについた

＜のの香の部屋にて＞

「ネーネー、お母さんまだ良くならないのー？」
布団にかぶりついて、口を尖らせる佐和
「そうねぇ、今年の風邪はちょっとしつこいねぇ」
のの香は横になったままで、うふふと笑う

「それよりさーちゃん、ちゃんときょうのお稽古は済んだの～？」
「もう！　しっかりしているってばっ、いつまでも子供扱いシテー！」
もう６ヶ月なんだから、とぷんすかと頬を膨らませる
「そっかぁ～、もうオトナなのねさーちゃん、うふ」
「う、何かソレ、お母さんが言うとアヤシイ」
目をそらして、お盆の上にあるお茶を一口含む佐和
「好きな人でもできた？」
「ブフゥ！」
噴き出す

「あらあら、確かにこうちゃんは良いオトコだけど、ああでも叔父だから結婚はできないのかぁ」
現代社会の法律が混ざってきている
「は、なるほどそうか、初子ちゃんの方か」
「ナニが！？」
「佐和の想い人？　しかも従妹だから結婚可だよね～」
「色々間違っているカラ！」

あんなに可愛いのに、と漏らすのの香の前で、佐和が慌てて話題を変える

「そうだ夏海(なつみ)サン！　なんか猛烈に夏海お母さんのお話が聞きたいナー！」

「なぁに急に」

「イイカラ！」

そうねぇ、とのの香は布団から身を起こす

心配そうな顔をする佐和に、きょうは具合が良いから、と笑顔で応える

「夏海お母さんは、とってもステキだったわねぇ……」

ぽぅとした瞳で、どこかあらぬ方向を見つめる

そういう関係だったのだろうカ、と少し疑ってしまう佐和

「玄輝(げんき)おじいちゃんの亡くなったあとも、灯の消えたような壬生川家を、ひとりでずっと支えてきたのよ、夏海ママは」

「幸四郎オジサンより強かったって、本当？」

「うん、当時は臥者丸お兄ちゃんも、夏海ママには歯が立たなかったんだからね」

美化１２０％の笑顔で思い出されているようだ

「そんな夏海ママの娘でもあるんだからね、佐和」

ぽんと頭に手を置く

「でも臥者丸オジサンが言うには、ウチは夏海お母サン似だって」

「うん、そうなるように教育したから」

「そうナノ！？」

今明かされる、佐和への教育方針

「だって格好良かったんだもの夏海ママ……（顔はなっちゃんに似てくれなかったけど）」
「何かスッゴイ失礼なことを思われた気がする」

お母さんは、ふふ、と笑ってごまかす

「さ、そろそろ出陣の時間ね」
「エー、もうー？」
「何だか最近甘えん坊じゃない？」
「違うし！」
「続きのお話は、帰ってきてからね」
「……ハーィ、今月もめいいっぱい戦ってキマース」
名残惜しそうに、そう言って佐和はお部屋を出てゆく

＜出陣＞

「今回の出撃隊は、わたし、佐和しゃん、それに初陣の初子しゃんでしゅね」
「よろしくお願いしまスー♪」

えへと微笑む、初子

「三人娘ダっ」
嬉しそうな佐和
幸四郎がすまなさそうに告げる
「お兄ちゃんとお姉ちゃんはご病気だし、僕も大怪我で、申し訳な

いね」
「隊長の任、引き受けたでしゅ（、・ω・´）」
巻絵がきりっと眉をあげる
「初子は初めての戦なんだから、あんまり無理しないようにね」
「お父さまみたいにならないようにしますね♪」
「言うね」
じゃれあう幸四郎と初子を、何となく羨ましそうに眺める佐和
「それじゃ、行ってきますでしゅ（、・ω・´）」
マイペースな巻絵が携帯袋を担いで、先頭を歩く
「それじゃ、がんばってねー」
「ハーィ」
「はーい♪」
第三世代の三人娘はこうして、相翼院（そうよくいん）へと進撃するのであった

第二話－１５　「飛散」　１０２０年３月後編

＜相翼院（そうよくいいん）＞

薙刀士、弓使い、槍使いの三人娘が双翼院を＜速瀬＞で駆け抜ける
「今回は、何としてでも＜お雫＞の術を持ち帰るでしゅ（、・ω・´）」
使命感に燃える巻絵（まきえ）
「オオ、上級の回復術でシュネ！」
「佐和（さわ）さん、口癖が」
頬を赤らめて、控えめに突っ込む様が初々しい初子（はつこ）

槍使いとは剣士に似た職業ではあるが、槍の特性上、横一列の敵を貫ける便利な職業である

「オオー、ソレが槍使いかぁー！」
戦う様を初めて見る佐和が、大興奮する
「薙刀とは異なるのですね～」
巻絵の戦いを横目で見ながら、感心する初子
初戦だというのに緊張もなく、非常に落ち着いている
「薙ぐか貫くか、でしゅね（、・ω・´）」
つまり攻撃範囲が、横か縦かの違いなわけだ
「ちゃーんと、巻物でお勉強したんですよー♪」

本来親から子に伝わるはずの武芸だが、初子の場合は書物から古来の武術を復活させたのだった

「でも、幸四郎しゃんが教えてくれたんでしゅよね、槍使いの技」
「うんっ、お父さんも手伝ってくれましたよ♪」
「えええええ」

独学で、槍使いの技法を復活させたという初子
佐和が目を丸くする

「お父さんが、女の子のわたしは力がないから、刀より槍を使った方が良いって、一緒に勉強しよう、って♪」
「一緒に、って……」
「のの香お姉さんに手伝ってもらったりもして、わたしいっぱい学習したんですよー♪」

父親譲りの朗らかな笑顔で、語る初子
そんなまだ生後2ヶ月の戦の天才を見て、自分たちとは格の違いを感じてしまう巻絵と佐和であった

～～

「出ましゅたー（、・ω・´）」
突然大声を上げて喜ぶ巻絵
「え、ナニナニー、鼻血ー？」
「温泉でも出ましたかー♪」
「（´・ω・、）」
「いちいちしょげないの巻絵チャンっ」

父上同様、皆の玩具と化している最年長者が、巻物を掲げる

「これでしゅ、＜お雫＞の巻物でしゅ！」
「オオー」
「おおー♪」

やんややんやと手を叩く

「ヨーシ、そんじゃ――」
「残る期間精一杯奉納点稼いで、凱旋しましょー♪」
「イヤソレ、ウチのセリフだかｒ」
「はい？」
「いや良いけどイイケドッ！　カワイイし！」

なぜだか拗ねる佐和
それはともかくとして、壬生川三人娘は、一ヶ月を戦い抜き、
ついに悲願である中級回復の術を土産に、帰還したのであった

～～

ただいまー、と三人娘の明るい声が屋敷に戻ってくる
屋敷が一気に華やぐ

「ん、おかえりみんな」

出迎えたのは、いつもと変わらない笑顔の当主だ

「タダイマー、幸四郎（こうしろう）オジサンー！」
「お雫取れましゅたー（、・ω・、）」

「それは凄いや、あとで僕にも読ませてね」
ニコニコとした幸四郎の着物の裾を引っ張る、初子
「あの、お父さん？」
「うん、何だい？」

「何か、あったんですか？」

「んー、そうだね」
どう言おうか迷っているようだ
少しの間の後、
幸四郎は、頭をかいて、ゆっくりと口を開く

「臥蛇丸（がじゃまる）お兄ちゃんとののの香（ののか）お姉ちゃんが、倒れたんだ」

三人娘が息を飲んだ

幸四郎によれば、市中のはやり病は鎮まったが、
とうとう臥蛇丸とののの香の熱は下がらなかったという

「さっきはずいぶん苦しそうだったんだけどね、今はもう意識もハッキリしてて、落ち着いているみたいだよ」
峠を越えたわけじゃあない
巻絵と佐和を親子ふたりっきりにさせて、幸四郎と初子は居間で待機していた

「何ていうか、最後の力、なのかな。巻絵ちゃんと佐和ちゃんが帰るまでは死ねないって気迫が伝わってきてね」

いつに増して饒舌の幸四郎

「お父さんも、何だか疲れてますよ……」

先ほどは気づかなかった、目の下のクマが痛々しかった

「ちょっと、僕も看病が過ぎたかな、またイツ花に身体を無理させて……って怒られそうだ」

口元を歪ませただけで、幸四郎は笑い声は上げなかった

「次に死ぬのは僕で良かった」

初子を抱き寄せて、幸四郎は少しだけ目を閉じた

「もうこんな想いをしなくて、済むもんね」

「わたし、絶対忘れません……臥者丸叔父さまの事も、のの香お姉さまの事も……わたしの子にも、伝えます、絶対……」

初子は声を殺して、泣き出した

初子を抱いたまま、幸四郎は疲労の眠りへと落ちていった

程なくして、臥蛇丸が亡くなった

その生涯で三度の大怪我に見舞われながらも、最期は娘に見守ら

れながら、布団の上で眠ることが出来た事に、とても感謝していた
という

臥蛇丸「今、みんなで、鴨川のほとりを散歩している夢を、見たよ」

それを追いかけるように、数分後、のの香も永眠した
佐和が言うには、とても人生が終わる人とは思えない、安らいだ
笑顔だったらしい
今際に、自分は幸せ者だった、とも言っていた

のの香「あなたたちが大好き。それ以上でも、以下でもないよ……」

巻絵が泣きじゃくり、佐和も赤ん坊のように声を上げて泣いた
初子もしゃくり声を上げて泣いたが、幸四郎は泣かなかった

臥蛇丸　享年1才7ヶ月

のの香　享年1才6ヶ月

明日からも、壬生川家は生き続ける
臥者丸やのの香の居ない屋敷で、彼らの屍を乗り越えて

壬生川家が涙に満たされたその日、
庭には満開の桜が咲き誇っていた
新しい時代が訪れていた

第二話－１５　「飛散」　１０２０年３月後編（後書き）

元服→巻絵　出陣・相翼院（巻絵・佐和・初子）
臥蛇・のの・病死

第二話－１６　「黒狼」　１０２０年４月（前書き）

幸四郎　１才２ヶ月

巻絵　９ヶ月

佐和　７ヶ月

初子　３ヶ月

第二話－１６　「黒狼」　１０２０年４月

臥蛇丸（がじゃまる）とのの香（ののか）が居なくなった屋敷では、静かな風が吹いていた

あの日以来、巻絵（まきえ）と佐和（さわ）、初子（はつこ）は前以上に仲良くなっていた
居間に三人で書き物や、戦術に関する論、好みの神様に関する討論などをしている様を、幸四郎（こうしろう）は良く見かける

「やっぱり、土の神様が良いでしゅ（、・ω・、）」
「エー、頭堅そうー」
「しっかりものじゃないでしゅか（、・ω・、）」
「ウチは絶対風の神様！　独創的で、自由で、愛嬌があってェ～」

佐和は視線を上げたまま、でへへと笑う

「佐和しゃんと風の神様とか、大変な組み合わせでしゅね」
「どうして!?　ウチめっちゃ良い奥さんになるって、肩も揉むよ!」

イマイチ巻絵は基準が分からない
巻絵の好みも佐和の好みも、どちらも性格的には親の影を追っているようだ

「で、で、はっちゃんはダレが好み?」
でででーんと、交神（こうしん）の儀に使う神様一覧表を、初子に突きつける
「うーん、そうですねぇ～……」
初子は真剣に悩む

「でもわたしは、交神の儀は、ちょっと不満かなぁ」
パタンとメニューを閉じてしまう
「どうしてでしゅか？」
「だって、神様って、結婚するわけじゃないから、ずっと傍にいてくれないじゃないですかぁ」
「マァ、一回アレしちゃうダケだもんネェ」
「わたしはやっぱり、いつも傍に居て、眠たい朝の稽古の相手になってくれたり、ノドが乾いた夜中に、一緒に井戸まで行ってお喋りしてくれたり、出陣の際に背中を守ってくれたりする人がいいなぁ……♪」
夢見る初子の長セリフ
「はっちゃんは可愛いでしゅね」
思わずなでなでしてしまう巻絵
「朝の稽古……一緒に井戸マデ……」
なぜだか赤くなってしまう佐和

とまぁ、壬生川（みぶがわ）家の母親と父親を失っても、子供たちは元気に過ごしていた
６００日にも満たない人生で、そう悲しみに暮れる日々は続かないというわけだ

＜家族会議＞

もはや玄輝の部屋だった名残もない壬生川家会議室
そこには、新御三方の幸四郎、巻絵、佐和が向かい合っていた

「それじゃ、今後の方針について、再確認しようか」

口火を切ったのは、幸四郎だ

「大江山討伐まで残り7ヵ月、お雫の術も手に入った事だし、これから万全の準備をして、朱点童子との決戦を迎えたいと思う」

「あの～」

おずおずと手を挙げる巻絵

「初子しゃんは、会議に参加しないんでしゅか？」

「あー、えっとね」

情けなさそうに頭をかく

「初子がね、壬生川家の方針を決める会議は、これから三人で話し合った方が良い、って言うのさ」

「エー、娘の言いなり！？」

茶々を入れる佐和に、苦笑いの幸四郎

「いやぁ、偶数だと意見がまとまらないかもしれないし、親子の縁が入ると、情にほだされて、公正な結果が得られないからという事らしいよ」

「ナルホド、言いなりだ」

「僕の話聞いていた……？」

もっともらしく腕を組んでうなずく佐和に、幸四郎は汗ばむ

「でも、しっかりしてましゅねぇ……初子しゃん」

「本当にね、7ヶ月後には僕はおそらくもう居ないだろうけれど……それでも、気が楽なんだよね」

幸四郎はからからと笑う

「子供かぁ……」

「どんな気分なんでしょうかぁ」

ふたりは先ほどの居間での会話も混ぜて、それぞれ思いを巡らせる

巻絵が9ヶ月、佐和が来月元服と、もう子供も作れるお年頃なのだ

「そうそう、それ7ヶ月の配分なんだけれど」

幸四郎は巻物を床に広げる

「大江山まで巻絵ちゃん、佐和ちゃん、初子がそれぞれ交神して、残る三回を戦闘、それに8月の選考会に出ようかと」

後半部分を娘たちは聞いていなかった

「こ、こ、こ、交神（´・ω・`）！？」

「ヒャー」

慌てふためく巻絵と、なぜだか照れまくる佐和

「ど、どうしたの……？」

そんなふたりを、幸四郎はビックリして眺める

女の子たちの動揺には気づかない

「え、だ、だって……そんな、その……（´・ω・`）」

「ウチらほら、男の人と全然話したコトないし、ないし！」

そういえば壬生川家は現在、男ひとりに女性三人の家族となっている

「そういえば、年の近い男の子がいないんだね、ふたりとも」

「う、ウン……」

いつも騒がしい佐和が、大人しくなってうなずく

「大丈夫大丈夫、ふたりとも可愛らしいから」

あははーと笑う幸四郎の無邪気な言葉に、真っ赤になるふたり

「そ、そんなっ（´・ω・`）」

「幸四郎オジサンのバカー！」

「さ、というわけで」
幸四郎は予定表を閉じて、巻絵に笑いかける
「巻絵ちゃんから、今月、交神の儀をしようか」
「は、はぅぅうぁ（´・ω・、）」
今にも逃げ出しそうな表情の巻絵は、交神の儀を行うことになった

＜交神の儀＞

「それでは、交神の儀を始めますよー」
ニコニコとしたイツ花（いつか）の前、涙目の巻絵がいた
「は、はぃ……（´・ω・、）」
「大丈夫ですか、巻絵さま……？」
「は、は……ぃ……（´・ω・、）」

ロウソクの炎よりも頼りない顔で、うなずく
そんなところまで父親に似なくても、と思いつつも、精一杯励ますイツ花
「そんなに怯えなくても、目を閉じていればスグですって！」
「は、はぃ（´＝ω＝、）」
もはやされるがままの巻絵
「え、えと、お相手は決まってますか？」
「お、お任せ、で……あ、でも、なるべく土の神様が良いでしゅ…

…」

早くしないと消えてしまいそうな様子でつぶやく

「そ、それじゃ、安いけれど遺伝子が良いと評判の神様をお呼びしますネ！」

こくこくと首を縦に動かす巻絵、もうすっかり言いなり状態だ

そうして、呼び出された神様は……

十六夜伏丸「血が滾りそうだ……」

二足歩行の黒狼、獣の王、十六夜伏丸参上

「ひ、」

巨大な狼の化身が、暗がりから巻絵におぶり重なって……

「ひやあぁぁうあぁ；あがああｑｗせｄｒｆｇｔｙふじこｌｐ！！」

～～

「交神の儀って……怖イ……？」

「いや僕は、そんなことなかったけど」

「佐和お姉さま……よしよし」

居間にまで響いた絶叫は、佐和に大きな不安を残すこととなったという

第二話－１６　「黒狼」　１０２０年４月（後書き）

交神の儀・巻絵×十六夜伏丸

第二話－17　「庭藤」　1020年5月（前書き）

幸四郎　1才3ヶ月

巻絵　10ヶ月

佐和　8ヶ月

初子　4ヶ月

第二話－17　「庭藤」　1020年5月

＜佐和（さわ）の元服＞

藤の花が見守る中、佐和の元服の儀が滞りなく終わった

「アリガトウ、ありがとうー！」

咲いている藤に向かって、笑顔で手を振る
その様子がなんだかいつもと違っている気がして、幸四郎（こうしろう）は思わず尋ねる
「どうしたの佐和ちゃん？」
「アレ、お母さんなんですヨー」
「え？　藤？」
少しだけ大人びた笑顔で、佐和はうなずいた
「お母サンずっと、わたしは生まれ変わったら藤になる、って言ってたんですヨ、だからきっと、今年はウチの元服の日に花を咲かせてくれたんデス」
「そっかぁ」
幸四郎は風に揺れているピンクの花を見上げた
思わず笑みがこぼれる
「お姉ちゃんらしいな、それ」
「ウン、こんなトコでも、でしゃばりなんだカラー」
ののか）の香の元服から丁度1年が経ち、こうして佐和もまた8ヵ月となった

＜出陣前、控え室にて＞

手早く着替えた幸四郎が、女子控え室に声を掛ける

「じゃあみんな、準備ができたら出てきてね」

中から三人娘それぞれのハーィという声が聞こえてくる

「何だか、ホントに、そろそろ男の子が欲しいな……」

キャイキャイとはしゃぐ女の子たちの声に、少し照れる幸四郎

昔は姉に弄られて、当主になってからは姪っ子たちに頼られて、

つくづく女性と縁があるものだと思う

幸四郎は控え室の前で待ち、もやもやとした時間を過ごす

「ネーネー、まきちゃんサラシ巻くの手伝ッテー」

ずっとのの香にやってもらっていた佐和が、ひーんと声を上げた

「実はわたしも、お父シャンにやってもらってて……（´・ω・、）」

「あ、わたし手伝いますか？」

「オオ、すごいゾはっちゃん」

「のの香お姉さまに、色々と教わりまして……」

2月の件を思い出して、なぜか頬を赤く染める

「あ、僕がお手伝いする？」

一同の会話を聞いて、少し遅れて控え室を覗き込む幸四郎

目が合った初子（はつこ）に、なぜか睨まれた

「お父さま、エッチ……」
胸を手で隠したまま、冷ややかにつぶやかれる
「ど、どうしてさ！」
「はいはい、良い子ですから外で待っててくださいねー」
娘にていよく追い出される一家の当主

「夏海(なつみ)お姉ちゃんにも、のの香お姉ちゃんにも僕が手伝ってたのにな……」
閉められた扉の前で、年頃の娘の扱いの難しさに、思わずぼやく
幸四郎であった

＜相翼院(そうよくいん)＞

「よし、鳥居も九重楼(くじゅうろう)も中ボスぽいのは倒したから、次はやっぱり相翼院に行こう」
最近連日通っている相翼院へと進軍する
「はぃ、よろしくお願いしましゅ（、・ω・´）」
＜お雫＞も習得し、すっかり壬生川家の薬箱・巻絵(まきえ)
「アイアイサー、ウチの矢で妖怪のハートを射抜きマスッ」
性格はともかく、のの香譲りの術師に成長した佐和
「あはは、お父さまにカッコイイとこ見せてあげますね♪」
壬生川(みぶがわ)家随一の矛、次期当主の初子

今こうして、壬生川家の主力が勢揃いする

相翼院に着いてからも破竹の勢いで、次々と敵を蹴散らす壬生川家
非常にバランスの取れた構成で、歴代最強の出撃隊であることは

間違いないだろう
「初子、なかなか良い動きをするね……」

「槍は刀の三倍強いって、書いてましたから！」
さすがにいつもの笑顔を引っ込めて、槍で妖怪を薙ぎ払う初子
幸四郎はそんな娘の妙技に、思わず唸る
（これは、敗退した大江山（おおえやま）の仁王（におう）も、今年こそは……）
このまま巻絵や佐和も経験を積んで、雪辱戦と行きたいものだが
（僕が間に合いそうにないのが、何よりも……悔しい、ね）
歯を食いしばって、刀を振るう

奥の院では悪羅大将の軍勢にぶち当たったのだが
「やぁぁぁ！」
鬱憤を晴らすように、斬りかかる幸四郎
（幸四郎オジサン、戦場では別人ダヨネ）
（頼もしいけど、ちょっと怖いでしゅよね（´・ω・`））
どちらが鬼か分からない猛将ぶりを、後衛から援護する娘たち

そんな父親に続いて、初子も前線に躍り出る
「初子、危ないよ！」
「ううん……わたしももう、やれるもん！」
巻絵や佐和に向かう悪鬼たちを、身体を張って止める
「それにのの香お姉さま言ってましたもの、お父さまは昔から前線で戦っていた、って」
「そりゃ、僕は剣士だから」
後列から攻撃できる槍使いと違って、前に出ないと刀が当たらないのだ
「わたし、臥者丸お兄さまやのの香さまに病気を撒いた鬼を、絶対許さない」
戦場なのに、思わず幸四郎は初子を見た

幼子には似合わない迫力が、顔に張り付いていた

「……悪羅大将は手ごわい、絶対に気を抜かないように」

「はい！」

幸四郎は生まれて初めて、こんな小さな子すら鬼気に染める我が血の宿命を呪っていた

第二話－17　「庭藤」　1020年5月（後書き）

元服→佐和　出陣・相翼院（幸四・巻絵・佐和・初子）

第二話－１８　「鬼子」　１０２０年６月（前書き）

幸四郎　１才４ヶ月

巻絵　１１ヶ月

佐和　９ヶ月

初子　５ヶ月

第二話－１８　「鬼子」　１０２０年６月

大江山（おおえやま）の出陣まで、あと半年ということで
佐和（さわ）と初子（はつこ）が木刀を持って対峙する、壬生川（みぶがわ）家の庭

「佐和ちゃん、負けたらオヤツ抜きね」

審判・幸四郎（こうしろう）の声に、高らかに返事をする佐和
「ハハーン、余裕デスヨー！」
「ふふ、余裕、ね」
幸四郎の見立てでは、ふたりの実力は切迫しているようだ

「佐和お姉さま、お胸を借りますね♪」
「ウン、あんまりナイケド」
そう言って、駆け寄った佐和が木刀を横薙ぎに振るう
ガキャンと受け止められ、ガキーンと弾かれて、バッシーンと面を決められる佐和

試合時間、約3秒で一本

「ギャー痛いー！」
のた打ち回る
「あ、ああっ、ご、ごめんなさいっ」
「ズルイ、チョット、＜速瀬＞の術使った、使ったでしょう！？」
佐和は審判に講義する
「使ってない使ってない」
「意義アリ！　娘だからって黙認しているんだーウワーン、ウチは

苛められてる、イジめられているんだーー！」
佐和は泣きながら、屋敷の中に逃げてゆく

「あの子は、まったく……」
ののか
ののの香の血筋だけに、どうしたものかと思う
「ええとあの、どうしましょうお父さま……」
残された初子が、おろおろする
まきえ
「巻絵ちゃんは……ああそうか、イツ花さんのところか、じゃあ僕
と稽古を続けようか、初子」
「は、はーぃ」

＜第四世代＞

「十六夜伏丸さまより、新しいご家族がいらっしゃってますー」
「は、ははは い（、・ω・´）」
その名前を思い出して、ブルブルと震える巻絵
「ど、どうしたんですかｗ　あの、女のお子様だそうです」
「女の子……」

狼の神様から生まれた、女の子……
巻絵の頭の中に、何やらとてつもない化け物が連想される

「で、でもわたしの子でしゅから、が、頑張りましゅ（、・ω・´）
」
「ええと、その、将来の夢は当主になることだそうです、楽しみで
すネ！」
「えええええ（、・ω・、）！」

我が家には、初子という正統な次期当主がいるのに
そう思っていると、襖が乱暴に開かれた

「初めまして母、十六夜伏丸の元から参った。宜しく頼む」

浅黒い肌、緑の目を持つ少女が深く礼をする
巻絵にも十六夜伏丸にも似ていない、炎のような赤髪を持っていた

名前は蘭(らん)
初子とはまた違った種の、刀のような美少女だ、将来は素晴らしい美人になるだろう
職業は代々続く、薙刀士だ

「よ、よろしくでしゅ（´・ω・`）」
「言っておくが」
幼い顔から、重々しい口調で言葉が発せられる

「俺は鬼を討つ使命を持つこの家で、次期当主になる」
「えええええ！」

「そして俺の代で朱点を斬る、締めて、これからも宜しく母」

宿敵のような響きの「母」に、巻絵は冷や汗をかく
「え、えと、あの、これからもよろしくでしゅ……（´・ω・`）」
終始押されっぱなしの巻絵だった

＜出陣＞

いつものように、幸四郎、巻絵、佐和、初子の現時点最強の、四人組である

そこへ見送りに来る、蘭とイツ花

「それじゃ、イツ花しゃん頼みましゅた（、・ω・´）」

一児の母がふにゃけた口調で、子を預ける

「はい、お任せくださいネ！」

「それじゃ、行ってくるね、蘭ちゃん♪」

ニコニコとした初子を睨む蘭であった

＜白骨城（はっこつじょう）＞

「でも蘭ちゃんでしたっけ、綺麗なお顔立ちでしたよねー♪」

ドクロの軍団を斬り捨て、休憩中に初子が機嫌良さそうに思い出す

「そ、そうでしゅね（、・ω・´）」

「でもサー、何だかはっちゃんのこと睨んでなかっタ？」

佐和の洞察にビクッと震える巻絵

「そ、そそそうでしゅたか！？」

万引きがバレた子供のように動転する巻絵

まさか、初子が次期当主だと教えたから、敵意を持っているのではないだろうか

空気を気にしない当主が、あははーと笑う

「初子があんまり可愛いから、照れているんだよきっと」
「エエッ！」
脅威の親バカ発言に、佐和が反応する
「そんな、ダメダッテ！」
「どうしたんですか、佐和お姉さま？」
「え、あ、イヤ、ハ、ハハハー」
なぜだか狼狽する佐和

「それにしても、恨み足を倒して、ずいぶんと奥までやってきたね」
白骨城の宝物庫を越えて、壬生川一家は広間へとやってきた
「は、何だかヤな気配がしましゅ（、・ω・′）」
薬箱・巻絵が、薙刀を高く構えて辺りを警戒する
「骨！？」
左右から迫ってきたのは、巨大な骨の手だった

左カイナ・右カイナ「シャアアアアアアアアアア！！」

迫り来る二匹の骨を、一同は迎え撃つ！

武人に強化された幸四郎の刀によって、バラバラに砕かれる左カイナ
「ラクショーじゃーん！」
「……様子がおかしい、かな」

右カイナがすぐに、左カイナを蘇生させる

「エエー、ズルイ！」
「いやズルいて」

攻撃力も防御力も大したことはないが、両方を同時に砕かないと、決着がつかないようだ
「それでは参ります、＜業ノ火＞！」
印を結ぶ初子
「そうだね、全体攻撃の術で、一気に押しつぶす、併せ２人目！」
「併せ３人目ー！」
次々とのっかかる
「併せ４人目、参りましゅ（、・ω・´）！」
回復を中断して、術に集中する巻絵
いち早く印を結び終えた術師・佐和が、再び業ノ火を詠唱する
「業ノ火の併せ、５人目！」
二つ目の詠唱に入る、壬生川家きっての術師

五人併せ業ノ火、９倍撃の炎がカイナを襲う！

が、砕けたのは左カイナのみで、右カイナは未だに生きていた
「もしかしてこれ、右カイナが本体……？」
「そ、そうかも」
たらりと汗を流す
「ジャー、壬生川家右カイナに突撃ー」
一度やってみたかった号令をかける佐和

「斬り崩す、奥義……！」
蘇生される前に決着をつけようと、幸四郎の刀が瞬く
「疾風剣（しっぷうけん）――！」
振り上げた刀が、骸骨の指をぶったぎる

「ウワ、カッコイイ！」
「お父さま、奥義を編み出したのですね！」

砕け散る右カイナ
「ふぅ……」
補助に治癒に大活躍していた巻絵が、息をつく

奥義とは、俺の屍を越えてゆけの世界において、極めて強力な物理攻撃を放つ必殺技
ただしその代償として、健康度を犠牲にしてしまう
つまり、連続で撃ち過ぎると死に至ってしまう、諸刃の技だ
奥義の反動に、幸四郎は肩を抑えてうずくまる
「いたた、でも……何だかちょっと強くなった気がするな僕も」

「わーいわーい♪」
無事に勝利を収めた壬生川家が、歓声を上げる
「カッコイイ……奥義、ウチも次までに考えよう！」

こうして壬生川家は、大怪我することもなく、今月も無事戦い抜いたのであった

第二話－１８　「鬼子」　１０２０年６月（後書き）

出撃・白骨城（幸四・巻絵・佐和・初子）　蘭→薙刀士・初見

第二話－１９　「恋風」　１０２０年７月（前書き）

幸四郎　１才５ヶ月

巻絵　１才

佐和　１０ヶ月

初子　６ヶ月

蘭　１ヶ月

第二話－１９　「恋風」　１０２０年７月

＜奥義の説明＞

「奥義は一子相伝の技能にして、伝えられるのは同じ職業についた実子ひとりのみ！」

壬生川家の居間、セミの鳴き声が聞こえる

イツ花（いつか）に講習を受けているのは、幸四郎（こうしろう）と初子（はつこ）のふたりだった

「奥義を修めた者は子供を作り、その子が実戦部隊に入る前に奥義伝承の訓練を行ってください、これが叶わぬ場合、その奥義は再び自力で修得する方が現れる日まで幻となるでしょう」

眼鏡をかけて、黒板にカツカツと字を書き込むイツ花先生

「すごい、イツ花が物知りだ」

「本当に昼子神社の巫女さんだったんですねぇ、イツ花さん……」

「ただの家政婦だと思ってたんですかッ！？」

すっかり思っていた

「な、なので、せっかくのすっごい奥義が消えてしまわぬよう、お急ぎくださいませ！」

そうは言われても、

「僕は剣士だしなぁ」

「わたし、槍使いなんですよねぇ……」

「ま、マァ、そうですねぇ……」
遠くでししおどしが鳴る音が、聞こえた気がする
かぽーん、と

＜母子の訓練＞

「さ、きょうは出陣がないでしゅから、訓練するでしゅよ（、・ω・、）」
元臥蛇丸（がじゃまる）の部屋であり、現・巻絵（まきえ）の整った部屋に、親子が向かい合う

「そうか、ならば当主になるにはどうすれば良いか教えろ」
ちびっ子のくせに、いきなり高圧的な口調の蘭（らん）

「当主になるには……」
考えた事もなかった巻絵は、いきなり困った
「でも初子（はつこ）しゃんが当主でしゅものね……」
「初子が死ねば良いのか」
「いやいあいあやいやあいやいや」

ブンブンと首を振る巻絵
「だ、だめでしゅよそんな、暗殺とかっ（、；ω；、）」
「……鬼を根絶やしにする前に、何故自分の一族を殺してしまわないといけないんだ」
蘭は冷ややかに母を眺める

巻絵は自分の娘に、そんなこともしそうな雰囲気があるから、とは言えない

「ならば、初子よりも強くなれば良いのだな」
「え、ええ、そう、なんでしゅかね……（´・ω・`）」
「俺が強くなって、そして初子が認めれば良いのだろう？　次期当主に俺が相応しい、と」
「そうかも、しれま、せんでしゅけど……」

確かに初子の性格なら、自分より明らかに優れていたものが現れたら、あははーと笑いながら譲ってしまいそうだ
でも、幸四郎が死ぬ前に、あの槍の名手・初子を越えるなんて事が……
（できるんでしゅか……？」）
実の娘に無理とは言いたくないが、限りなく難しいだろう

「でも、どうして蘭しゃんは当主になりたいんでしゅか？」
「約定だ」
迷うことなく言い切る
「やく、じょう（´・ω・`）？」
「ああ、まだこの屋敷に来る前、お天道様の上で父上に会った」
「父上……伏丸しゃんに！？」

生まれてきた子供は、すぐには下界には来ず、人年齢で６－８才になるまで神様たちに育てられるのだ

「父上は、俺を作ったのは暇つぶし、と言った」
暇つぶしに身体を弄ばれた巻絵が、少し泣きそうになる
「俺が次期当主になって朱点童子（しゅてんどうじ）を斬れば少しは退屈紛れにはなるから、そうなれ、と言った」

「退屈紛れ、って……（´・ω・`）」
「俺は当主になって朱点を斬ると言った、親と初めて交わした約束だ、守りたい」
蘭は淡々と話した
「そうでしゅか……（´・ω・`）」
「さあ、稽古をつけろ、母」
「ううん、せめてお母しゃんって呼んでくだしゃい……」
そうして巻絵は、蘭に一ヶ月精一杯、薙刀の稽古をつけたのだった

＜交神（こうしん）の儀＞

「イツ花さん、よろしくお願いしマース」
佐和（さわ）が緊張した面持ちで、儀式の間へと現れる、が
「佐和さんも、わたしが巫女だって忘れてましたか！？」
いきなりイツ花に捕まった
「え、エエ？」
佐和は突発的な事態に弱い

「良いんです良いんです……うう、わたしはどうせ、元気しか取り得がありませんから……」
「ウンまぁ、ソレは良いから、交神の儀を」
「ええ、ええ、どーせわたしなんて、どうでも良いんですッ！」
佐和は神様の奉納点表（ほうのうてん）を眺める
「ウーン、風の神様がいいな……風の神様……イケメン……」

ずらーっと見ていく
神様の持っている遺伝子（能力値）には目もくれず、ひたすら顔だけ
「ン、ンンン！」
ビビビと来るものがあったらしい

「この人、この人にする、イツ花サン！」
「はい、どうでも良い人は、さっさと神様をお呼びしますネ」
拗ねイツ花

「うう、緊張してキタ……」
いざ呼び出される段階に来ると、あちこちが赤くなってきたようだ

鳳あすか「今度ふたりだけで、お茶でもどう？」

佐和が選んだのは、神様きっての美男子・鳳あすか
ニッコリとした笑顔に、胸を高鳴らせてしまったり……

その日の壬生川（みぶがわ）家には、一日中佐和の変な声が響いたが、
優しい家族の面々は、聞かなかった事にして、翌日も佐和に普通に接してあげたという

第二話－１９　「恋風」　１０２０年７月（後書き）

交神の儀・佐和×鳳あすか　訓練・巻絵→蘭

第二話－２０　「遊山」　１０２０年８月（前書き）

幸四郎　１才６ヶ月

巻絵　１才１ヶ月

佐和　１１ヶ月

初子　７ヶ月

蘭　２ヶ月

第二話ー２０　「遊山」　１０２０年８月

「幸四郎しゃんー」
「んー？」

居間で書き物を勉強していた幸四郎に、巻絵が声をかける

「あのー、蘭しゃん見ませんでしゅたか？（´・ω・、）」
「蘭ちゃん？　ああ、蘭ちゃんがどうかした？」
「薔薇」の字に苦戦する筆使い幸四郎

「いえ、あの、何でも、ないんでしゅけど……（´・ω・、）」
蘭の姿が見えないと不安になってしまうだけだ
「そっか、巻絵ちゃんももう立派な母親だねー」
あははーと笑う幸四郎の思っているような感情ではない、と巻絵は思う
もしかしたら蘭が初子をその手にかけるのではないか、と

「ほら、蘭ちゃんなら」
幸四郎が庭を指差す
薙刀使いの蘭と、槍使いの初子が、木製武器を持って対峙していた

「ぽげりゃー！？（´！ω！、）」
佐和のような叫び声を上げる巻絵

「まぁ、さっきから僕がちらちら見ているから、大丈夫大丈夫」
恐ろしがる巻絵を押しとどめる幸四郎

蘭が打ち込み、初子が薙刀を叩いてかわし、間合いを放し、実戦稽古のようだ
巻絵が見ても蘭の筋は良い、自分の子供の頃と比べたら一目瞭然だ

それでも、
「初子しゃん、すばやいし、振りが速いでしゅねぇ……」
戦場ではなかなか見る機会がないが、こうして訓練をマジマジと見てみると、やはり第三世代の中でも頭ひとつ抜けている
「でも蘭ちゃんも、よく食らいついているよ」
弾かれても避けられても、薙刀で飛び掛る
「良い薙刀士になるね、蘭ちゃん」
「そうでしゅねぇ……」

親たちが見守る中、激しい稽古で握力を無くした蘭が薙刀を落として、その場で片膝をつく
「きょうは、ここまでにしましょうか」
顎から汗をたらして、初子はにっこり微笑む
「……分かった」
「お疲れ様でした♪」
頭も下げずに、蘭が屋敷へと入ってゆく

その様子をハラハラしながら見守っていた巻絵の横で、書道具を片付けた幸四郎が声を上げる
「初子ー、これから京に行くから、湯浴みして着替えておいでー」
「あ、はい、では少し汗流してきますね」
パタパタと走って、初子が自分の部屋の方に戻ってゆく

「さ、巻絵ちゃんも、これから京に行くからね」
「ふぇ（、・ω・、）？」

「今月は、選考試合があるからね」
そう言って、幸四郎は微笑んだ

＜京の都＞

「ギャー、人が多いー！」
辺りをぐるりと見回す佐和が、奇声を発する
蘭はお留守番のため、いつもの幸四郎と三人娘での出陣だ

「うわぁうわぁ♪　これが京の都なんですねー♪」
「こらこら、はぐれるんじゃないよ」
幸四郎があちこちフラフラしたがる初子の手を掴む

「あ、ごめんなしゃい、あ、ごめんなしゃい（´・ω・`）」
遅れ気味なのは、人にぶつかっては謝る巻絵

「あ、お父さま、あちらにお団子屋さんが♪」
「ちょっと、僕の手をあんまり引かないで……」
「はっちゃん、あっちにお土産屋があったヨ！」
「わぁい行きます行きますー♪」

幸四郎の手を離して、初子が佐和の方へ走ってゆく

「ああもう、ちゃんと戻ってくるんだよー」
「ハーィ」「はーい♪」

幸四郎はやれやれ、と笑顔でため息をつく

去年の自分を見ているようで、相当恥ずかしかった

「変な男に捕まらなきゃ良いけど……」

佐和と初子のきゃあきゃあした声が、遠くの通りからでも聞こえてくる

「ふぅふぅ、あれ、二人は？（´・ω・`）」

ようやく追いついた巻絵が、周りを見回す

「観光中、かな……はは」

結局、佐和と初子が両手に袋を抱えて戻ってきたのは、御前試合（ごぜんじあい）が始まる直前だったという

＜御前試合＞

組み合わせが発表された

「京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）は、反対のブロックか……」

「え、何ですか？」

「去年、臥蛇丸お兄ちゃんやのの香お姉ちゃんたちとも、出たんだよね御前試合に」

控え室にて、幸四郎が珍しく思い出話にふける

「勝ったんですかお父さま？」

「いやぁ、三回戦で負けちゃったんだ、京阪傭兵組合にね」

キラキラした娘の目に、照れ笑いで応える

「アレが僕の初敗北だったけど、悔しかったなぁ」

防具を装備して、そのときの想いを振り返る

「じゃあ、きょうはお父さまにとっても、雪辱戦なんですね♪」
「……ん、そういうことだね」
微笑む幸四郎の体からは、すでに戦いの気が発せられていた

決勝まで当たらない京阪傭兵組合を目指し、一同は一回戦を迎える
一回戦は茶屋町自治会（ちゃやまちじちかい）、薙刀部隊が三人いたが、一瞬で勝負がつく
二回戦は三十三間会（さんじゅうさんげんかい）、弓使いが三人、連携に多少苦しめられたが、
それでもすぐに勝負がついた

去年敗退した準決勝の、相手は戻橋警護隊（もどりばしけいごたい）
京阪傭兵組合は、勝ち残っている、ここで負けることは出来ない
「壬生川家、突撃ー！」
相手は、剣士、薙刀、弓使い、手練の三人だった
術で攻められ続け、壬生川家は思うように戦うことが出来ない
「＜お雫＞！」
巻絵が一生懸命治癒の術を唱えるが、回復は追いつかない
佐和もまた、＜お雫＞の術で、幸四郎や初子を援護する
だが、壬生川家の頑張りも届かず、時間切れとなり、判定負けを
食らってしまった

鬼退治と御前試合の勝手の違いに、戸惑った三人娘だった

「うーん悔しい……でも、仕方ないね」
そうしてきびすを返そうとした幸四郎に、役人が声をかける

『それでは、これから三位決定戦を行う、壬生川一族は舞台に！』

「あれ、三位決定戦？」
きょとんとする幸四郎に、解説書を読んだ巻絵が付け足す
「なんだか、三位決定戦で勝つと、特別公認討伐隊に任命されるみたいでしゅね（´・ω・`）」
「何だろうそれ」
学問には疎い幸四郎
「よく分かんないケド、ガッキャーンとやって勝てばイイんじゃない！？」
「がっきゃーん？」
「いやソレは気にしないデ」

そんな軽いノリで三位決定戦、先ほどの敗北でコツを掴んだのか、壬生川家の動きは軽快だった
そうして無事三位に入賞した壬生川一族は、たくさんの支度金と三位の賞品を授与したのであった

第二話－２０　「遊山」　１０２０年８月（後書き）

選考試合（幸四・巻絵・佐和・初子）

第二話－２１　「天人」　１０２０年９月前編（前書き）

幸四郎　１才７ヶ月

巻絵　１才２ヶ月

佐和　１才

初子　８ヶ月

蘭　３ヶ月

第二話－２１　「天人」　１０２０年９月前編

＜俺屍に本当にある祭り１＞

「討伐隊選考試合でのご活躍、おめでとうございます！」
イツ花（いつか）がやんややんやと出迎えてくれる
「都での壬生川（みぶがわ）家の評価は、まさにウナギのぼりか鯉のぼりといった具合でございま～す！」
「評価もなんも……」
「おめでとうございま～す！」
何だか打楽器でも鳴らしかねないイツ花だ

「僕はそういうの、あんまり気にしないんだけどなぁ」
さすが１才数ヶ月の男の子、世間の噂話とは無縁の世界に生きている

忘れちゃいけないとばかりに、イツ花が手をポンと叩く
「そうそう幸四郎（こうしろう）さま、今月は途絶えていた京の４大祭りのひとつ、豊年ムキムキ祭りが、今年から復活するそうです！」
あまりの名前のセンスに目が点になる幸四郎

「豊年、ムキムキ……祭り？」
自分の二の腕を、何気に見てしまう

「豊年ムキムキ祭りは秋祭り！　幸四郎さま、秋と言えば！？」
「え、何だろう、イチョウ？」
「何そんな、好感度アップを狙ったような綺麗な答えをッ！」

ツッコミが激しいイツ花

「というわけで、秋と言えば？　で、壬生川家にアンケートを取ってきました」

（イツ花、暇なんだろうか）

最近初子や巻絵に家事まで奪われているイツ花は、したり顔で懐から巻物を取り出す

「まずH子さん、秋といえば実りの秋」

「いやそれ、全然隠してないから！」

「続いてS和さん、食欲の秋」

「明らかじゃない！？」

「M絵さん、体育の秋、ちなみにRンさんにはアンケートは断られちゃいました」

「う、うんまぁ、そんなものじゃない？」

しゅるしゅるしゅると巻物を閉じるイツ花

「と、いうわけで、今年の豊作と健康を神様に感謝し……」

「感謝し？」

「その喜びを若い男性たちが肉体で『あらわ』に表現する！　それが豊年ムキムキ祭り！」

ぽかーんとしてしまう幸四郎

「あ、あらわに……？」

「あらわに、ってトコが、何だかドキドキしませんか！？」

「い、いや、僕は……」

「ここでアンケート2、あらわにでドキドキする否か、S和さんはハイ、H子さんはどちらとも言えない、M絵さんは……」

「もういいからっ！」

イツ花の巻物を片付けさせる幸四郎

「いやあ、来月が楽しみですネ！　一緒に行きましょうねムキムキ祭り！」
「はいはい……」
幸四郎は苦笑いで、頷いたのだった

＜子供＞

「鳳あすか様の下より、新しいご家族をお連れいたしました！」
佐和（さわ）の待つ部屋、巻物を懐にしまいつつ、イツ花が笑顔で現れる

「え、エート、男の子？　女の子？」
「お喜びください、賢そうな女のお子様です！」
「オー」
幸四郎以来、五人連続女の子の誕生だ
壬生川家はついに、男女比が１：５になってしまった

「女の子カー、どんな子カナー」
ワクワクしながら待ちわびると、礼儀正しく襖を開いて、女の子が入ってきた

名前は夢見（ゆめみ）、のの香の代から続く弓使いの血を受け継いだ少女だ
のの香や佐和と同じ水色の髪を長く伸ばし、猫のような金色の瞳を持った利発そうな顔立ちだ

「初めまして……お母様」
ふんわりと微笑む、柔らかな涼気を感じさせる笑顔だ

「ウワ、誰の娘」
「鳳あすか様のお嬢様ですよ」
「ああ、ナルホド」
ものすごく納得する佐和

「うふふ、可笑しな方ですねお母様は」
「良く言われル」
幸四郎とか、初子（はつこ）とかに
そうして、イツ花が用事があるからと、先に去ってゆく

「まぁウン、これからも宜しくネ、夢見」
「はぁい、ユメちゃんって呼んでくださぁい」
「誰！？」
利発そうな顔立ちが、一瞬で崩れる
「鳳あすかパーパから言われたんですぅ、女の子は愛嬌だ、ってぇ」
「な、え、エエ、じゃあさっきの登場シーンはナニ！？」
「こっちの方がぁ、壬生川家の当主さまぁとかにぃ、印象が良いかなぁ～って」

夢見の後頭部をバシッと殴る佐和

「ちょっ、いたぁ～いっ、何するんですかぁママぁ～」
「なんだかムカついた」
「え～んえ～ん」

その場で泣き真似を始める夢見に、今度は弓の弦で横っ面をバチーンと叩く

「みぎゃ」

「今月は、ウチが礼儀を叩き込んでジャル！」
「え～～～暴力反対ですぅ～」

逆襲にと、佐和を蹴り返す暴力反対の夢見
佐和はお返しと、その頬にビンタをする
夢見は頬を押さえたまま、佐和の髪を引っ張る
佐和もまた、夢見の耳を無言で引っ張って……

「佐和お姉さま、そろそろ出陣の時間ですよ……って、何しているんですか！？」

元服の儀を終えた初子が呼びに来る頃には、佐和母子は取っ組み合いのケンカに発展していたという

＜出陣＞

今月の相翼院討伐に出陣するのは、幸四郎、巻絵（まきえ）、初子、蘭（らん）の四人だ
「あ、何だか親子×2だね」
一家の兄貴・幸四郎が、ぐるりと皆を見回してつぶやく

「そ、そそうでしゅね、蘭しゃん、ちゃんとお弁当も持って、薙刀も研いでありましゅよね……？」
「出陣の準備は万全だ……何故、そこまで心配する」
「だってっ、自分の子供の初陣でしゅものっ（´・ω・`）」
「ふむ……」
憮然とした表情の蘭が、巻絵に好きに世話されているのを見ると、

少し笑みがこぼれる幸四郎だった
何だかんだ言って、良い母子の気がする

「あれぇ、佐和お姉さまは出陣なさらないんですか？」
初子が小首をかしげて、娘の手に縄をつけている佐和を見る
「う、ウン、チョット、この屋敷での生き方を訓練しようと思ッテ」
「ユメ、そんなヘンなコト言ってないじゃないですかぁ～～っ」
じたばたと暴れる夢見を押さえつける佐和
「助けてくださぃ～、初子さまぁ～、蘭さまぁ～、虐待ですぅ～～」
「ああモウ、ソノ間延びした喋り方が腹立つ！」
のの香もこんなしゃべり方だったような、と幸四郎は思う

「ユメ、これから京に行って、お化粧品の新作買いに行かなきゃいけないんでうぐっ！」
佐和が夢見の首根っこを掴んで、廊下の奥へと引っ込んでゆく
「じゃあ頑張ってネー、幸四郎オジサン、まきちゃん、はっちゃんー」
「いやぁぁ～～～、ユメ弓よりお琴とか弾きたいぃぃぃ～～～～…
…」
何だか強烈な娘が入ってきたなぁ、と唸る幸四郎であった

第二話－２２　「天女」　１０２０年９月後編

＜相翼院（そうよくいん）前＞

「やあ！」

空からふよふよと降りてきたのは、懐かしのパシリ・黄川人（きっと）だった

首を傾げる幸四郎（こうしろう）

「あ、ええと、何だっけ、もしかして初めまして？」

「違うよ！　ボクは黄川人、神様から言われて君たちの手助けをする、アドバイザーのような役目だよ！」

１０１８年の１１月以来出番のない、不遇の人間・黄川人その人である

「え、でも、僕って初対面じゃないのかな……それに、何だか影が薄いような」

「えー……」

何だか寂しそうな黄川人

「でも、わたしは良く話してましゅよ？　突入前とかに（´・ω・`）」

「わたしも初めて見ました……」

初子（はつこ）は珍獣を見るような目つきで、黄川人くんを見つめる

「今月初めて出陣する俺とは初対面だな、宜しく、黄川人」

「体も透けてりゃ、印象も透けてる、なんてネ、ハハ、ハ……」

黄川人は、自分で言って涙を流す

「そうか、臥蛇丸(がじゃまる)お兄ちゃんの血筋には見えるんだ」

「ボクは霊か！？」

「なるほど、巻絵(まきえ)お姉さまは霊感が強いんですねぇ」

「違うからッ！」

ぜぇぜぇと息を切らす黄川人

「そ、それで、きょうはどうしましたか黄川人しゃん（´・ω・`）？」

「あ、ああうん、今日はね可哀想な天女の話を仕入れてきたけど、聞くかい？」

嬉しそうに問いかける黄川人に蘭(らん)が応える

「興味無いな」

「……すっごい面白いよ？」

「要らん、俺たちは先を急ぐ」

「……聞くと、みるみる背が伸びたり」

「間に合っている」

蘭はすでに身長で初子を抜かしていた

「き、聞いてくれたら……奉納点(ほうのうてん)、１０点」

懐から、光る玉を取り出す黄川人

「黄川人しゃん……（´・ω・`）」

よっぽど独りぼっちが寂しいのだろうか

黄川人の手から、蘭は奉納点を受け取る

「ならば、言え」

そんな態度の3ヶ月の少女に、うわぁと同時につぶやく幸四郎父子

「……ハイ」

自分のこの扱いは何なんだろうと思わないでもない

「昔……天女のくせに、地上の男に恋した女がいた……」
「わぁ♪」
ロマンティックな始まりに、目を輝かせる初子
「よせばいいのに、そいつの子供まで産んだんだ、だけど、それがバレちゃって天界に戻れなくなったんだとサ……」
ふぅ、と息をつく
「たかが色恋で、一生棒に振るかねェ、女ってサ……しょうがない生き物だよねェうべらっ！」
蘭と巻絵と初子に突かれて、どこかに吹き飛ぶ黄川人くん
そんな女性陣の横で、たらりと汗を流す幸四郎であった

＜相翼院＞

というわけで、蘭を加えての初出陣である
「きょうは後列にいて、あんまり無茶をしないようにね」
「承知した」
身の程をわきまえている、謙虚な蘭
「次期当主となる俺は、こんなところで倒れるわけにはいかないからな」
そうでもなかった
「ん、蘭が僕の生きている間に、初子に勝てたらね」
巻絵がひやひやして見守る中、幸四郎はさらりとかわす
「三本試合で完全勝利すれば良いのだろう」

「それも、術アリの実戦方式でね」
蘭が幸四郎に以前直訴したときに、そう言われたのであった
「俺はすぐに強くなる、時間の問題だ」
「あ、はは……」
蘭に睨まれて、冷や汗を流しながら笑う初子

（幸四郎しゃん……本当に良いんでしゅか？）
（んーまぁ、ほら、切磋琢磨って言うじゃない？）
あははーと笑う幸四郎
それよりも、屋敷で訓練をしている佐和と夢見の方が気になる幸四郎だった、家で大怪我してなければいいけれど
四人は通いなれた相翼院で、鬼たちを蹴散らしながら進んでゆくのだとか

「ハァ！」
伏丸の面影を残すように、力強く薙刀を振り回す蘭
幸四郎はまだ見ていないが、母親から受け継いだ術力も相当なものだとか

（大人しい性格の巻絵ちゃんより、戦いには向いてそうだなぁ）
薙刀を掲げて全体攻撃の術を唱える蘭は、もしかしたら今年の大江山討伐にも間に合うかもしれない
「お父さま、あらかた片付いたようですよー」
「じゃあ進撃しようか」
槍を持って幸四郎の元へとやってくる初子に、指示をする
今月で元服した初子は、もうどこに出しても恥ずかしくない立派な武芸者だ

「どうかしましたかぁ？」
小首をかしげる小さな娘に、ため息をつく
「僕が槍使いだったら、疾風剣幸四郎を伝授できるんだけどなぁ」

「あらお父さま、お父さまが槍使いでしたら、奥義を閃いてませんでしたよ♪」
ニッコリと微笑む初子に、そうだね、と相槌を打つ幸四郎
一同は迫り来る鬼を薙ぎ倒して、天女の小宮へと進んでいった

＜天女の小宮＞

「そうそう！」
行く手を阻むように突如として出現する黄川人
「うわ出ましゅた（´・ω・、）」
「出たな鬼」

「いやボクは違うから、違うから！　薙刀を構えない！」
後半必死になってゆく
「さっき言った、天界を追ン出された天女の話、続きがあるんだよ」
わざわざ語りに来てくれたなんて、ずいぶん律儀な神様だ
「奉納点、もう１０点くれるのか？」
「……ハイ」
後輩をカツアゲしているような少女、蘭

「それでね、天女の話、これが聞くも涙、語るも涙の物語！」
両手を前に出して、でろでろでろ～と演出する
「わが子を守るために、人間になぶり殺しにされちまったらしいんだよ」
「そんな、わが子を守るために、って……どうして、襲われていた

んでしょう」
「さァね、人間ってのは弱くてズルくて、意地汚いからね、やられる前にやれってサ」
「神に目も合わせられないような奴だったんだろうな」
ぼそりとつぶやく蘭

「実はサ、今もその天女の怨念が、この先のお宮のどっかに封じられてるそうなんだよ……」
相槌を貫ったことが嬉しいのか、くくくと語る黄川人
「鬼に……なってしまったのか」
思わず鳥肌が立つ幸四郎
「子供なんてまた作りゃあいいのに、イチイチ自分の命と引き換えて……みっともないよね、母親ってヤツは！」
「（´・ω・`）」
なぜだか語気を強めて、黄川人が去ってゆく

「わざわざ愚痴るために来たのか……」
「あの人って、お暇なんでしょうか……」
落ち込む母親の巻絵に比べて、新世代はのん気なものだった

＜奥の間＞
壬生川（みぶがわ）家一家は、相翼院を駆け抜けてゆく
初戦で悪羅大将に挑む蘭も大怪我もなく、順調に奉納点と経験値を稼ぐ
そうして一同は、奥まった場所にたどり着いた

「鬼子母の間……って書いてあるね」
酷く奇妙な光景だった
薄暗い室内の一面に、蝋燭が点っていた
見渡す限りに蝋燭が、数千本、数万本の炎が揺らめいていて、幻想的と言えば聞こえは良いが、何か怨念めいた気配が漂っていた

「何だか、気分が……」
いつでも笑顔の初子が、苦しそうに顔をゆがめていた

「……空気が腐っているようだな」
袖を口に当てる蘭

「何だか、泣き声が、聞こえましゅよ……？」
一同を引っ張って、幸四郎が先導する
そこに居たのは……天女だった
緑の長い髪を持つ美しい女性の姿をして、一目で風の女神と分かった

「捕らえられている、神様？」

だが、様子がおかしい、幸四郎の剣士としての嗅覚が、禍々しい気配を感じ取っていた
天女は泣いていた
何万本の蝋燭に照らされて、泣き続けていた
「え、君は？」
無防備に近寄ってゆく幸四郎

「私の首にまた縄をつけたいんでしょ？」
幸四郎がえっ？と聞き返す
「お父さま、ご様子がおかしいです！」

「いいわよ、見世物小屋の天井を何度だって飛んでみせてあげる……」
天女が顔を上げて幸四郎を見た
その瞳は悲しさを称えて、言いようの無い絶望に満ちていた
「もう逃げたりしないわ、だから……だから！」
「お父さま、お戻りください、お父さま！」
「だから、子供を返して！　私の子供を返してよ！　返してよ！　返してよぉぉ！」
天女が幸四郎にすがりつき、幸四郎は凍りついたように身動きが取れない
その瞬間、初子が天女の右肩を槍で貫いた
片羽ノお業（かたはのおごう）「イヤャアアアアアアアア！」

幸四郎が正気を取り戻す
「お父さま、この人はもう……鬼です！」
天女が宙に浮かび上がった
長くて美しかった緑の髪は屍鬼のように乱れ、その両眼は不気味に輝き、蝋燭は狐火のように燃え上がる
「そんな、そんなことって……」
幸四郎が刀に手をかけるが、どうしても抜けない、鯉口が切れない
少しの逡巡の間、お業の術が完成した

「返してよぉおおおおおおおお！」

風系最強の術＜芭蕉嵐＞が壬生川家を切り刻む！
平均体力３００の壬生川家のうち、全員に２００弱のダメージを食らい、一瞬にして半壊する一同

これまでに食らった中で、もっとも凶悪で無慈悲な術だった

「何て、術だ……」

「＜お雫＞、雫でしゅ！（，・ω・、）」

連続で二発受けたら、壬生川家は全滅してしまう

「こんな、相手って……くっそぅうう！」

刀を抜き、歯を食いしばりながら斬りかかる

初子もその隣に続き、波状攻撃を仕掛ける

巻絵が大急ぎで全員を回復させたところで、再び芭蕉嵐の直撃を受ける

常に体力の表示が真っ赤だ

「……やかましい！」

七光ノ御玉（ななひかりのみたま）を掲げる蘭

「ふ、伏丸しゃん！？」

しかしその呼び出した神様の一撃も、お業の羽の守りを崩せない

「ごめんよ、＜光無し＞！」

幸四郎の結んだ印は、お業の術技を封じ込める！

「＜お雫＞！」

あまり術が得意ではない初子も、今のうちに全員の回復を手伝う

「あああああああああああああ！」

声にならない叫びを上げ、幸四郎の術の封印を引き剥がす片羽ノお業

「く……」

三度目の芭蕉嵐により、ついに蘭が倒れた

「あああああっ、蘭しゃん！（，；ω；、）」

「槍が、あれ、あれ……？」

初子が手に力を込めるが、まるで鉛のようで、槍が持ち上がらない

「こ、この……＜光無し＞！」
再び唱えた光無しの術は、空を舞うお業に避けられてしまう
そしてやってきた、四度目の＜芭蕉嵐＞！
生き残った三人の壬生川一家が、嵐の中の羽虫のように、吹き飛ばされた
「私の子供を返してよォ！！」
こうして、壬生川家は全滅した
＜壬生川家＞
幸四郎がゆっくりと目を覚ます
「……ん、」
自分はどうやら、布団に寝かされているようだった
「……誰が連れてきてくれたんだろう」
全滅すると誰が屋敷に運んでくれるのか、ずっと気になっていた
「当主さま……」
「……どうしたの、イツ花、そんな顔をして……庭の藤が散ったかい？」

イツ花は静かに言った

「当主さまの、命の炎に、ついにかげりが見え始めました……」
ああそうか、と思う
どういう意味かはすぐに理解できた
「そう、か……だから、こんなに、眠いんだね」
あははといつもの笑おうとしたが、乾いた声しか出てこなかった

女性に振り回され、最期は女性にトドメを刺されるとは……
笑うしかないのに、笑い声が出ない

「……当主さまの名を継ぐにふさわしい者は、初子さまでよろしいですね？」
「そうだね……参ったな、遺書なんて気の利いたものは、用意できてないよ……」
部屋の中にいるのは、イツ花だけであった

イツ花は、幸四郎の手を抱くように繋ぐ
「おそばにお仕えできたこと、イツ花は生涯忘れません」
人間の生涯は長いから、忘れても良いよ、と少し思う

「他の、みんなは……無事？」
「はい……皆様酷い怪我をしておりますが、命に別状はありません」
「……それは、良かった」

なによりだ

ああ、笑えた、と思った

「長い間、お世話になりました……」

イツ花の声が、遠ざかる
どこかから、初子や家族の泣く声が聞こえる気がする

……お父さん、僕、結構頑張ったよ

玄輝（げんき）の声が、胸に響く
『生きてて良かった、死ぬ前にそう思えるような、一家にしやがれ、（。∀。）ノ』
玄輝の遺した遺書には、そう一行だけ書いてあった
父が死んでから、その言葉を胸に、刀を振ってきた

どうだろう、僕、出来たかな
良い家族、作れたかな

答えは、自分の中にあった
だから、死ぬ前に思う

声が、驚くほど、素直に出た

「うん、僕にしては上出来だった……満足だ、ありがとう……」

壬生川　幸四郎　享年1才7ヶ月

翌日、初子の当主就任の儀が、幸四郎の葬式と合同で行われた

幸四郎の最期の言葉をイツ花から聞かされた三代目当主・初子は、
「こちらこそ、ありがとうございました」と深々と頭を下げ、その
場でしばらく泣いたという

第二話－２２　「天女」　１０２０年９月後編（後書き）

元服→初子　出陣・相翼院（幸四・巻絵・初子・蘭）
訓練・佐和→夢見　幸四郎落命

第三話－1　「水神」　1020年10月（前書き）

巻絵　1才3ヶ月
佐和　1才1ヶ月
初子　9ヶ月

蘭　4ヶ月
夢見　1ヶ月

第三話－1　「水神」　1020年10月

幸四郎（こうしろう）の死から一ヵ月が経過し、壬生川（みぶがわ）家の雰囲気も元通りになって来た頃

「チョ、チョットはっちゃん！」

ガバッと初子（はつこ）の部屋（元幸四郎の部屋）の襖を開く

「聞いて見てコレ聞いて見テ！」

「は、はぃ？」

目を丸く初子の前に、立て札を突き出す佐和（さわ）

「……ていうか、これどうしたんですか？」

杭の部分に土がついている

「引っこ抜いてキタ」

「返してきなさい！」

初子の言葉に、とりあえず佐和は立て札を庭に放り投げておく、あとで薪にでもする気だろうか

「それより、ムキムキ祭りダヨ！　ムキムキ祭り！」

「何を剥くんですか……？」

「それもある意味エロイ！」

ひとりで身をくねらせる、最近めっきりののか（ののか）の香に似てきた一児の母、佐和

「じゃなくて！　豊年ムキムキ祭り、秋祭り！」

ノリツッコミで我に返る

「あ、はい」
放置して着替えようとしていた初子が、ちょっと静止する
「男たちが、半裸のふんどし一丁で筋肉を誇示しながら、町を練り歩くそうダヨ！」
（何のためにだろう……）
思わず考え込んでしまうが、祭りに意味など無いのだろう、きっと
「イツ花も、アレをこれから毎年見せられると思うと、少々気が滅入りますって言ってたほどのお祭り！」
「嫌がっているじゃないですか！」
打てば響くようなツッコミの初子
「わたしは行けませんよ」
「ブー、じゃあ巻絵ちゃんでも誘って行って来ようカナ」
「それに、わたしは今月予定あるんですもん」
「え、何、豊年ムキムキまつｒ」
「行きません！」
もう、と息を落ち着かせてから、初子はキッパリ言う
「私は今月、交神の儀をするんです」
「エエエエエ！？」
なぜか佐和が大声を上げた
＜交神の儀……の舞台裏＞
「ちょ、どうしよう、はっちゃんが交神の儀をスルッテ！」
交神の間の障子に耳を当てた佐和が、声を殺して叫ぶ
「どうしようって、順番じゃないでしゅか（、・ω・、）」

引っ張ってこられた人１

「え、でも、何か、こう、はっちゃんの純潔が……」
巻絵は、蘭を片手で軽くあしらう初子と純潔という言葉が、結びつかない

「……前から疑問だったのだが」
引っ張ってこられた人２が直球を投げる
「佐和は、初子が好きなのか」

「エ！？」

「そんな、今更でしゅよ」
「イヤイヤイヤ！」
首をブルブルと振る佐和だが、その耳が真っ赤だ
「はっちゃんは、良いお友達デシュヨ！」
ただのお友達にそんな反応、と思う巻絵母子

三人は交神の儀を行う部屋の隣、廊下に固まっていた

「そ、それを言うなら蘭ちゃんだって、最近何かはっちゃんを見る目つきが違うジャン！」
「……俺の場合は、倒すべき目標だからだ」
話を振られた蘭が、静かに語る
「そして四代目当主には俺がなる、それだけだ」
「ホントーに！？」
じーっと蘭の目を見つめる佐和
「……ああ」
目をそらす蘭
「ちょっと頬赤いシ！」

「……もう10月か、寒くなってきたな」
わざとらしく、着物の袖口に手を入れる

「ていうかエエ、好きですヨ！　好きだから何ヨ！」
ついに逆ギレが始まった

「……男の人が、ついに居なくなってしまいましゅたものねぇ……」
どこか達観しているのは、最年長の巻絵だ
「ていうかウチのユメも、何か初子さまって格好カワイーとか言っているシ、何その格好カワイーて」
ちなみに発音は、カッコカワイ、だ
巻絵がうーんと腕組みをする
「モテモテでしゅねぇ……初子しゃん……」
幸四郎が亡くなってから、すっかり気品と風格が出てきた従妹を思う

そのとき、中からイツ花の声が聞こえてくる
「え、ホントにこの方でよろしいんですかッ！？」
中から驚いた声

「どなたデスカー！？」
障子を蹴り破る佐和

ものすごくビックリしている初子の首根っこを掴んで、ガクガクと前後に振って問い詰める
「はっちゃん、チョット、誰とエロイ事する気！？」
壬生川家ナンバー2の実力者に渾身の力で揺さぶられ、あうがうあがあぐ、と声にならない声を上げる初子

「やかましい」

後ろから佐和の首を締め上げ、一瞬でオトす蘭
脳をシェイクされて目を回す初子の隣で、事態に着いていけなかった巻絵が呆気に取られていた
「いたた……な、なんですかァ」
障子の下から、下敷きになったイツ花が這い出してくる

「な、なんなんでしゅかね……（´・ω・、）」
「あれェ、どうして皆様がいらっしゃるんですか？」
「なぜでしゅかね……（´・ω・、）」
自分でも答えが分からなかったりする

蘭が代弁した
「散歩だ」
「よそでやってください！」
起き上がった初子が、たまらず叫ぶ
「え、ええっと……それより、ホントに良いんですかァ、この方で」
耳が象になる皆にも気づかず、初子が楽天的に応える
「はい、だって……優しそうじゃないですか♪」
あははーと太陽のように微笑む
「それに、わたしって水の遺伝子が不足していて、体力が低いんですよねぇ～、だから、これも運命です♪」
その笑顔を見て、なぜだか蘭があさっての方を向く
「蘭しゃん？」
「……何でもない」
微妙に声が上ずっていたり

「それじゃあ分かりました、この方をお呼び致しますね」

「いや、あの……恥ずかしいから、ちょっと皆さん、お外に出てもらいたいんですけど……」

白無垢姿の初子が、照れながら頼む
「あ、はい、ごめんなさいでしゅ（´・ω・`）」
代表して謝る巻絵

「ハ！」

蘭が佐和の足を引っ張っていこうとしたら、突然意識を取り戻す
「ていうか誰と交神するの！？」
佐和がイツ花の手から神様表を奪い取り、プライバシーを侵害する
ちゃっかりその後ろから覗き込む巻絵と蘭

優しそうで、初子の運命の人……

カッパだった
正真正銘の、ぬめぬめとしたカッパそのものだった

白波河太郎「顔はオイラに似ないと良いネェ」

……

佐和は夢見の訓練もサボって、三日間寝込んだという

第三話－１　「水神」　１０２０年１０月（後書き）

交神の儀・初子×白波河太郎　訓練・佐和→夢見

第三話－2　「前夜」　1020年11月前編（前書き）

巻絵　1才4ヶ月
佐和　1才2ヶ月
初子　10ヶ月

蘭　5ヶ月
夢見　2ヶ月

第三話－２　「前夜」　１０２０年１１月前編

＜佐和（さわ）の部屋＞

旧ののか）の香の部屋、佐和と夢見（ゆめみ）が正座で対面していた

「ユメ、ウチは奥義を編み出しタ」

「え～、枝毛を綺麗に刈り取る奥義ですかぁ～？」

髪の毛をいじる夢見に、こめかみを一瞬だけピクとさせたが、佐和が続ける

「弓術の奥義で、ウチの人生最高傑作ジャ」

「な～んだぁ～、つまんなぁ～ぃ」

ぴくぴく

「……その名も、連弾弓（れんだんきゅう）、ウチの特技を最大限に発揮した必殺技ジャ」

「ユメ、お外に遊びに行きたいなぁ～」

正座を崩してぺたんと座り、窓を眺める夢見

天晴れな秋晴れが広がっていた

夢見の顎を掴んで、無理やりこっちを向かせる佐和

「フミャー！」

「この奥義は、一瞬の間に三発の矢を相手に叩き込むノジャ」

トトトンと、夢見のオデコを三回つつく
「幸四郎（こうしろう）オジサンに教えてもらったウチの技を、全部つぎ込んだみたいナ」
「そ、それを、ユメが覚えろって言うんですかぁ？」
「ウン、これから教える」
（うぅ～～、疲れそぉ～～～）
「デモ、連弾弓佐和はあんまりにも身体に負担をかけるノデ、乱発できないノジャ」
「ど、どれくらい疲れるんですかぁ～？」
佐和は目を逸らして言う
「健康度、４０」
「え～～～～～～～！」
健康度１００のうち４０、使用後は大怪我人
寿命近くの人が使ったら、死すら招きかねない奥義だ
「そ、そんな無茶な技、ユメいらないですよぉ～」
「ダメ、教えてヤル」
「いやぁ～～～、助けて初子（はつこ）さまぁ～～～～～！」
「こんな技でも使わないといけない場面が、あるかもしれないノ！」
ジタバタ暴れる夢見の手を掴んで、佐和は夢見を道場に引っ張ってゆく
「いやぁ～～、ユメ実家帰るぅぅ～～、アイドル辞めて普通の女の子になるぅぅ～～～……」
よく分からない声が響いていた

＜巻絵（まきえ）の部屋＞

「蘭（らん）しゃん、コレは、京の都復興図でしゅ」
「何だこれは」
巻絵の部屋には、ほぼ京の都全都市を描いた図面集が保管されていた
素人の出来ではないそれらを、蘭は珍しそうに眺める
「ほう……母が書いたのか」
「わたしの分もでしゅけど、半分くらいは蘭のお爺ちゃんが書いたんでしゅよ（、・ω・´）」
「臥蛇丸（がじゃまる）、と言ったか」
京の都に私財を投げ打ち、たった一人で都の治安を復興させた男と聞いていた

「とっても立派な人だったんでしゅ（、・ω・´）」
「……で、それが何だ」
一方、早く薙刀の修行に行きたい蘭
「今月、大江山（おおえやま）に出陣しましゅ（´・ω・、）」
「知っている、俺も部隊の一人だ」

初子、巻絵、佐和、蘭の四人組だ

「わたしは、もう1才4ヶ月でしゅ……（´・ω・、）」
泣きそうな顔で、語りだす
「商業区も、まだまだ復活させたくて、装飾品店にも、綺麗な装身具を並べさせたいでしゅ……（、・ω・、）」
「……」
退屈そうに外を眺める蘭

「京都の町では、まだまだ鬼に男の人を殺された人も多くて、働けない人も、餓死者も多く出ているんでしゅ……」
巻絵は蘭の手を握る
「わたしの後を継いで、どうか、京都に生きる人たちを、助けてあげてほしいんでしゅ（、；ω；、）」
蘭は巻絵の手を振り解く
「そんなの、元を絶てば良いだけだろう」
「それは、そうでしゅけど……」
蘭はすっくと立ち上がる
「でも、じゃあせめて、この図面は蘭しゃんが職人さんに指示だけでも……」
「悪い」
蘭は障子に手をかけると、巻絵に背を向けたまま、つぶやく
「俺には……親の願いを二つも背負えない」
そうして部屋を出てゆく蘭だった

＜初子の部屋＞

幸四郎が亡くなって以来、初子には一人での時間が増えた
読書の時も、早朝の稽古にも、そういえば父は付き合ってくれたんだなぁ、と初子は思う
身辺整理、というわけではないが身の回りのモノを片付けている時、初子は幸四郎の日記を発見した
それには、大江山討伐前の緊張した心情がつづってあった

少し、ほっとした

去年の１２月、幸四郎が大江山を登ったのは１０ヶ月……つまり、自分と同い年の頃だったのだ
去年の大江山が初戦の佐和、さらに登頂経験のある巻絵が、我が家にはまだ生きている事に安心する

「あ、そうだ」
手をポンと叩いて、書道具を取り出す
「遺書とか、書いておいた方が、良いのかなぁ」
あんまり死ぬ気もなかったが、戦術家のさがで、どうしてもあらゆる事態を想定したくなってしまう

「生まれてくるコのためにも、何か記しておこうかな……」
引き出しから手紙を取り出す
だが筆を持ったまま、初子はすぐにうーんと考え込んだ
「こういうのって、書き始めるまで時間かかっちゃう……」
しばらく、頭を悩ませる

「お母さんは旅に出ます、探さないでください……ダメだ、イツ花さんとかが本気にしちゃったらどうしよう」
帰る家がなくなってしまう
「お母さんは月に帰ります……私は竹から生まれたわけじゃないし」
しばらく考え込んでいると、蘭が部屋の外から声をかけてきた
「初子、そろそろ出陣の用意をしろ」
「あ、うん、今行くー」
「いや、ゆっくりでも良いだが……」
キレの悪い声が、遠ざかってゆく

「……よーし、決めたっ」

一筆入魂

「遺書なんて、やっぱりまだ早いもん、あははー」

朗らかに笑う

「っていけないっ、早くお支度しなきゃ」

初子は筆を置くと、手紙を机の上に置いたまま、パタパタと駆け出した

机の上の手紙が、初子の開いたままの障子の隙間から差し込む風に揺られて、音を立てる

そこにはこう記してあった

「おかえり初子ちゃん　初子より」

壬生川（みぶがわ）家の第二回目大江山討伐が、今まさに始まる

第三話－3　「通夜」　１０２０年１１月後編

＜大江山（おおえやま）＞

昨年に比べ、著しく強くなったメンバーで挑む大江山
巻絵（まきえ）、佐和（さわ）、初子（はつこ）、蘭（らん）の四人は雪山の登山口に立っていた

「いよいよ……ですね」
珍しく緊張した面持ちの初子だったが、彼女にとっては巻絵の存在は非常にありがたかった

「それでは、先導お願いします、巻絵お姉さま」
「はい、わたしは二回目でしゅから（、・ω・，）」
「チョット、ウチも二回目なんだけど！」

いや佐和お姉さまは弓使いですから、とやんわり遠慮される

「……山頂は、吹雪いてそうだな」
目を細めて見上げるが、けぶっていて見えない
「てか、どうして１１月と１２月しか門が開かないんダロウ」
素朴な疑問を口にする
「門を閉めて、鬼に攻め込まれないように守っているとか？」
「……雪山を越えられない程度の武士では、とても朱点には太刀打ち出来ない、とかな」

たどり着くまでに、遭難したり凍死する人も多そうだ、と誰かがつぶやいた

「ま、行きましょうかぁ」
初子が口火を切る

「それでは壬生川(みぶがわ)家、第二回目大江山討伐隊……突撃！」
一同はこうして、鬼の総本山へと行軍を開始した

～～

昨年辿った道を繰り返す
巻絵の道案内もあり、雪山を迷うことなく突き進んでゆく
「こっちでしゅ（、・ω・´）」
「巻ちゃん、記憶力イイんだネ……」
一緒に登ったはずの佐和なんて、ほとんどが記憶から抜け落ちていたのに

「まぁ佐和しゃんは、初陣でしゅたから……（´・ω・、）」
矢をあちこちに笑いながらばら撒いて、道なんてすっぽり忘れているのだろう
先導する巻絵のおかげで、一同は一合目二合目を簡単に越えてゆく
当初の計画では、大江山の門が開いている二ヶ月間をめいいっぱい使って、登頂する予定だったのだが

いつの間にか壬生川一族は、五合目まで到達していた

悪羅大将のうろつくこの山道を越えれば、次は終合目だ
「去年は、ここらに着くまでに相当消耗していたそうですよね？」
幸四郎(こうしろう)の日記を見た初子が、経験者に尋ねる

「そうでしゅた、幸四郎しゃんの顔色もずいぶん悪くなっていて……」
対する初子、佐和は、まだ息も切れていない
「……」
さすがに出陣二回目の蘭は、疲労が蓄積しているようだ
「終合目を越えたら、すぐ仁王の門ですよね」
「でしゅ」
「そこまで着いたら、少し休憩しましょう」
皆の体調を気遣う三代目当主
「……承知した」
そんな蘭を、さりげなく支える巻絵

～～

さまざまな場所で悪羅大将の相手をしてきた壬生川家にとって、終合目はさほど問題のある場所ではなかった
一同は仁王の門前にたどり着く

「去年の武録を読みました、こちらの術を封じつつ、弱体化をしてくる二匹一組の鬼みたいですよね」
円陣を組んで立案するのは、この日のために作戦を練ってきた初子だ
「ですから、こちらとしては……短期決戦で仕掛けます」
地面に槍の柄で、陣形のようなものを描く
「……これは、」
「……どれが何か、全然分からナイ」
「わ、わたしに絵心がないのは、放っておいてください！」
棒人間が棒を持ってたり、棒人間が棒を持っていたりする、おそ

らくは薙刀と槍のつもりなのだろうか
顔を赤らめながら、初子が取り繕う
「そ、それでですね……時間が経てば経つほど、術を封じられるこちらは不利になるんですよね」
「こちらは、神仙水（しんせんすい）の量が決まっているからな」
携帯袋に入っている、状態異常回復の妙薬だ
「ですです、なので、短期決戦で行くというより、短期決戦しかないんです」
壬生川家で唯一術封じの術＜光無し＞を覚えていた幸四郎は、数ヶ月前に亡くなってしまった
「ですから、巻絵お姉さまと蘭さんは、後列から生命線をお願いします」
「はいでしゅ」
「任せろ」
しっかりと頷く
「わたしと佐和お姉さまで、一気に畳み掛けます」
「あ、アイヨー」
「以上です、頑張りましょう」

残り時間はあと半月、まだまだ余裕がある

「朱点打倒、壬生川家突撃！」
初子が槍を掲げ、門へと突き進んでゆく
その時、不気味にくぐもった声が響いた

両仁王「通さぬ……通さぬぞ！」

戦いの先手は、仁王が取った

術を封じる＜光無し＞に、こちらの命中率を下げる＜夢子＞、敏捷率を低下させる＜みどろ＞を重ねてくる
対する壬生川家は状態異常を物ともせず、前衛の痩せ仁王に攻撃を集中させる
＜お雫＞のおかげもあるだろうが、去年に比べて壬生川家の防御力が格段に上がっているため、致命傷を貰わず攻撃に専念できていた
「ハッ！」
槍使いの一撃は、前衛の痩せ仁王を貫通して、後衛の太り仁王にまで届く
名実共に壬生川家一の武人を中軸に、それを他の三人がサポートする

「……く」
ところが、仁王たちが狙いを定めたのは後列の蘭だった
体力が未成長の蘭へと、仁王は攻撃を集中させる
「蘭しゃん！」
術を封じられていた巻絵は、常盤ノ秘薬（ときわのひやく）を蘭に振りかける
「ああっ、そろそろ神仙水が切れちゃうでしゅ！」
あたふたとうろたえる

初子の猛攻により、そろそろ痩せ仁王は仕留められそうなのだがその前に蘭がやられるかどうかは、賭けだった

「ハ、ひょっとしてコレが！」
弓を構えた佐和が、屋敷での事を思い出す
こんな技でも、使わないといけない場面！
佐和の視界が狭まり、周囲の音が遠くなる
「奥義、連弾弓佐和（れんだんきゅうさわ）！」
一拍に打ち出された三本の矢が、痩せ仁王の胴体を貫通した

苦悶のうめきを上げて、鬼はその場に崩れ落ちてゆく
「佐和お姉さま、すごいっ！」
「ど、ドウダ、見たかっ」
頭がくらくらする、これが奥義の反動だろうか
残る太り仁王を初子が突き刺し、こうして一家は仁王の門を乗り越えたのだった

～～

佐和と蘭の体調が芳しくなかったが、それでも壬生川家は先へと進んだ
仁王の門を抜けた先には、京の都を模したような通りが延びていた
朱雀大路と言い、平安宮へと続く中央通りと同じ名前だ
そこは、あちこちを天狗が飛び回っていた
「つ、強そう……」
悪羅大将より、五割増しで凶悪そうに見える
その上、狭い道に密集しているため、避けて通るのも骨が折れそうだった
「でも、なるべく迂回して、先を急ぎましょう」
何かが乗り移ったような、初子の真剣な表情
平時であれば、佐和も蘭も顔を赤らめるような凛々しさだが、今はさすがにそんなことを言っている場合ではない
朱雀大路を抜けて、呪殺の碑へと入り込む
「ヤな名前だ……」
少しずつ顔色が悪くなって来ている佐和が、ぞっとしたようにつぶやく

雪の降り積もる通りを進んでゆくと、ついに見つかってしまった

崇奈鳥大将が、見たことのない妖怪を引き連れて、壬生川家に襲い掛かる！

合計七匹の妖怪を相手に、一同は苦戦を余儀なくされる

ひょっとしたら、仁王よりも強いかもしれない雑魚相手に、一戦で半壊にされる壬生川家

荒い息をつく一家だったが、そこは密集していた大路、治癒するヒマもなく、次の天狗が襲ってきた

「う……！」

相手の先制攻撃の術＜太刀風＞により、初子と蘭が切り裂かれる

「蘭しゃん！」

「はっちゃんんん！」

その場に倒れ込むふたりを背負って、壬生川家は敗走していった

大江山、通算二度目の敗退だった

＜壬生川家＞

結局、去年に比べて二歩ほど前に進んだだけだった

大怪我を負った初子は自室の布団に横になり、少し落ち込む

０才１０ヶ月の自分には、もう大江山に行くチャンスは残されていないのだ

「当主さま、ご加減はいかがですか？」

「あ、イツ花さん、ありがとう、もう良くなってきました」

さすが元服すぐの少女だ、傷の治りも早い

「それで、あの、」

イツ花が珍しく、視線を伏せる

「お迎えが近づきつつある方がいらっしゃいます……お気を強く持ってこちらへ」

初子の頭が真っ白になった

布団に臥せっていたのは、蘭だった

いまだ0才5ヶ月の蘭の、命のともし火が消えようとしている

初子、佐和母子、イツ花が沈痛な面持ちで、苦悶の表情を浮かべる蘭を見守っていた

「蘭ちゃん……」

「蘭さまぁ……」

一番年少の子が亡くなってしまうだなんて

頭痛に襲われていた初子を、イツ花が廊下に呼ぶ

「当主さま」

「何でしょう……」

少し疲れた顔で、初子が微笑む

「反魂の儀（はんこんのぎ）を志願される方が、いらっしゃいます」

「反魂の、儀……」

反魂の儀――

自らの魂を差し出し、相手の魂を救う呪法

魂を与えた者に訪れるのは、死

初子は居間に呼ばれていた
そこに座していたのは、正装の巻絵だった

「巻絵お姉さま……」
「初子しゃん」

正座して、頭を垂れる

「子の蘭しゃんなら、わたしなんかの何倍もこれから先、働くと思いましゅ！（、・ω・´）」
「でも、巻絵お姉さま……」
「どうか、反魂の儀……お許しくだしゃい」

初子は胸の前で、ぎゅっと手を固める

「でも、そうしたら、巻絵お姉さまは……」
初子の声が震える
「……わたしは、もう、十分生きたんでしゅ」
「そんなことって……」
初子の目から涙がこぼれたが、巻絵はにっこりと微笑んでいた
決断しろと言うのだ、彼女は
自分に――

そんなことって、あるだろうか

「これも、当主が決めないと、いけないんですね……」

「わたしは、もう……疲れちゃったんでしゅ、鬼を斬るのも、痛い思いをするのも……」
「そんな……壬生川家の生き方を、否定するような事……おっしゃ

らないでください」
「だから、わたしは、ここで引退でしゅ」
巻絵はもう一度、頭を下げた
「蘭のこと……よろしく、お願いしましゅ（´・ω・`）」
初子の嗚咽の音だけが、屋敷に響いていた

翌日、蘭は目を覚ました
蘭は初子から巻絵の想いを聞いて、一言「……そうか」とだけつぶやいた
蘇った蘭の髪は、炎のような赤から、母親譲りの緑髪へと染まっていた

壬生川　巻絵　享年1才4ヶ月

「自己満足かもしれないでしゅけど……私なりに　一所懸命やったつもり……ほめて、くだしゃい……」

蘭の枕元で、初子は反魂の儀を行った昨夜、見た夢を蘭に話した
鴨川のほとりで、臥蛇丸と巻絵が散歩している夢だった

無言で聞いていた蘭に、初子はぽつりと誓った

「こんな想いを味わうなら、私は、もう二度と負けません」

その日壬生川家に満ちていたのは、とても苦い煙のような空気だった

第三話－３　「通夜」　１０２０年１１月後編（後書き）

出陣・大江山（初子・巻絵・佐和・蘭）

第三話－４　「蘭契」　１０２０年１２月（前書き）

佐和　１才３ヶ月
初子　１１ヶ月

蘭　６ヶ月
夢見　３ヶ月

第三話－４　「蘭契」　１０２０年１２月

夢見（ゆめみ）は戸口から左右を伺っていた
「右よ～し、左よ～し……」
壬生川（みぶがわ）家は豪邸だが、京の外れにあるため、人通りは滅多にない
「さ、ユメちゃんの大冒険が、今始まるんですぅ……」
門から足を踏み出す

ガコン

「ひ――」
足首に縄が巻きつき、表の木に引っかかった数百キロの重石が落下すると同時に、夢見の身体が数メートルほど吊り上げられる

「いやあああああああぁ～～！」
着物の裾がはだけないように、必死に押さえる夢見

「ちょ、これ、え、何ですかぁっ！　え～～ん！」
手の端から巾着がこぼれ、それを誰かが受け取る

「……ふむ」
「ら、蘭（らん）さまぁっ！」
逆さになった視線で、上空から蘭を見上げる夢見
「ちょっとぉ～、降ろしてくださいぃぃ」
「……佐和（さわ）が、な」
「びくっ」

遠い目でつぶやく蘭

「自分の巾着がなくなった、って先ほど騒いでいたのだが……こんな模様だったな」

「お、お母様ぁから、お下がりもらっちゃったんですぅ～」

「……中身も、か」

封を開くと、子供が持つには少々多すぎる金額が入っていた

「……しばらく、そのままにするんだな」

「え～～～～ん！」

髪が逆さになったり、今にも裾がほどけて生足があらわになったりで、もういっぱいっぱいの夢見

「ユメ、もっと遊びたい～～～、京の都でお祭り行きたいのにぃ～～～！」

叫び声を後ろに浴びながら、蘭はつぶやく

「……京の都を再興するなら、要所要所に罠は必須だからな……もっと改良せねば」

何かが間違っている蘭だった

＜初子（はつこ）の子＞

初子と佐和が並んでいる中、イツ（いつか）花が満面の笑みでやってくる

「初子さま、白波河太郎さまから、新しいご家族を預かって参りました！」

「わーぃ♪」

「ひぃっ！」

反応が対照的なふたり

「出てきたのがまんまカッパだったら、ウチは、ウチはどうすればッ」

「いや、弓を構えないでください……」

だから具足姿なんですね……とつぶやく初子

「良い事思いついた！　仮面だ、鉄仮面だヨ！」

かぶって一生暮せば！と主張する佐和

「酷いこと言わないでください！」

「だって、だってぇ……」

しくしくと泣き出す佐和

「何で泣くんですか……」

自分の好きな人は、そこまで言われるほどか、と少し悩んでしまう

「で、あの、続けてもよろしいでしょうかァ」

袖で待っていてくれたイツ花

「あ、はい」

子供にすごく会いたい初子と、会うのがすごく怖い佐和

「おめでとうございます、かわいい男のお子様です！」

幸四郎（こうしろう）以来、六人目の子供でついに男の子が産まれた

「可愛いってアレか！　小さなカッパみたいなコを指して、ほら可愛いデショってか！」

やわらイツ花に掴みかかる

「きゃッ」

「お、落ち着いてください！　お姉さま！」

初子がふたりを引き剥がす

「ど、どちらかと言えば、母君似のようですよ！」

「どちらかと言えばって何だッ、違いは明らかジャナイ！　イツ花

の目は節穴か！　あるいははっちゃんの腐った好みが乗り移ったか！」

最後に少し本音が出た

「佐和お姉さまっ！」

力いっぱい引き剥がしたら、佐和が転がって、そのまま頭を障子に突っ込ませて停止する

「まったく、もう……」

さすがは壬生川家一の膂力を持つ女傑である

「……何の騒ぎだ」

蘭がふと部屋を覗き込む

「ちょっと、佐和お姉さまが暴走しちゃって……」

「いつもの事か」

納得する

「それより……この小僧が、部屋の前でビクビクしていたのだが」

首根っこを掴んで引き上げると、そこには子羊のように震える男の子がいた

○「ひ、ひぃぃ……」

蘭の仏頂面に怯えているのか、半泣きだったが、その端正な顔立ちにはどこか壬生川一家の面影があった

「ん……？」

目を細めて、少年の顔をマジマジと見つめる

食われるんじゃないか、と思う少年

「こいつは、もしや……？」

「は、白波河太郎さまから預かってきたお子様！」

部屋の前で呼ばれるのを待っていたところを、蘭に捕獲されたら

しい
「ええっ」
カッパに似ても似つかない、可愛らしい顔立ちをした男の子だ
「ほれ」
首根っこを掴んだまま、初子に息子を手渡す蘭
ネコか何かですか、とイツ花は思った

名前は以蔵（いぞう）、初子の素質を受け継いだ槍使いの少年だ
緑色の長い髪の毛を、藍色のリボンで後ろで縛っている

「それは……もしかして、私の飾り布？」
以蔵の後ろ髪をまとめてあるリボンを見て、初子は尋ねる
あの交神の時に髪が乱れて、両房を縛っていたリボンがどこかに行ってしまったのだ
父親に貰ったものでしばらく探したのだが、布団の近くからは出てこなかったため諦めていた

「あ、うん、お父さんがお母さんの思い出だからって、とても大事にしてて……でも、これは地上の物だから、お前が身に着けていろって」
「そっかぁ」
初子は以蔵の髪を撫でる
「それじゃあ、それは以蔵が持っていてね、お守りなんだから」
「うん、大事にする！」
話自体は良い話なのだが、蘭やイツ花の頭に浮かんでくるのはあのカッパ男のため、どうにも感情移入が出来ない

「あいたた……もう、はっちゃんってばカゲキ……」
頭を振りながら起き上がる佐和
「あ、何か丁度良いから、みんなを紹介するね♪」

息子に微笑みかける初子
「こちら、一家最年長1才3ヶ月で弓の使い手、佐和お姉さま」
「ウン、母親になったはっちゃんも良い……じゃなくて！　ヨロシク！」
以蔵と握手を交わす佐和
「あ、何だかすぐ友達になれそう！」
「それはウチの精神年齢が同じくらいだって言いたいのかｇなｇ，あ！」

後ろから半笑いの初子に羽交い絞めにされる佐和
「佐和お姉さま、暴れないでください！……こ、こちらは0才6ヶ月の蘭さん、頼りない一家を支えてくれる頼りになる人です」
「ふむ……宜しく」
差し出された手に、怯えながら握手する以蔵
「ど、どーも」
なまじ美人であるがためか、怖ええ、と以蔵はこっそり思う

「それでこちらが、一家のお手伝いさんこと、イツ花さん……ずっと私たちを見守ってくださる方よ」
「初めまして、よろしくお願いしますッ」
「よろしくです！」

元気よく挨拶する以蔵

「えーと、後は、きゃっ」
佐和を羽交い絞めをしたままだった初子が、突然手を離して悲鳴を上げる
「へ、ヘンなとこ触らないでくださいよ！」
「（；゜∀゜）＝3」

「何ですかその顔は！？」
初子が照れ隠しに佐和を突き飛ばし、転がった佐和が再び障子に頭を埋める
「……障子の張替えが大変だな」
気に食わないのか、助けない蘭
「……お、お母さん、こええ」
ぽつりとつぶやく
「あれ？」
周囲を見回して、イツ花が怪訝そうな声を上げる
「そういえば、あの……夢見さまは？」
「は……」
蘭が珍しく驚いた顔をした
「忘れ……ていた」
夢見が吊り上げられてから、すでに二時間が経過していた
「う、うーん……」
夢見がくらくらした頭を押さえて、目を覚ます
「……気がついたか」
「ひっ」
蘭を見て怯える夢見
どいつもこいつも……とは思うが、実際悪いのは自分なので何も言えない蘭
「あ、あのぉ、ここはどこでしょぉ……？」
「俺の背の上だな」
「はひっ！？」

夢見は蘭におぶさられていた
「オー、気がついたか、ユメちゃん」
「あ、あれ、ここどこですかぁ？」
寝ぼけた目をこすりながら、蘭の背中で揺られる夢見
周りはどうやら、屋敷ではないようだが……？
「九重楼（くじゅうろう）だ」
「はひっ！？」

というわけで――

＜九重楼＞

「な、なんでユメちゃんこんなところにいるんですかぁ！？」
「鎖帷子付きの夢見は、さすがに重かった」

夢見を降ろして、首を回す蘭

「今月は、ウチと蘭とユメの三人で出陣なのダヨ」
先月大怪我した初子は、以蔵の訓練のために屋敷に残っていた
「いやそうじゃなくてぇ」
「初出陣で、緊張しているのか」
「違ーいーまーすぅー！」
「ユメのために、比較的楽そうな九重楼にしたノニー」
「いや場所が問題じゃなくてぇ！」
夢見の衣装は、誰が着替えさせたのか分からないが、頭からつま先まで、完全武装が整っていた
弓の手入れも万全だ

「ユメ、全然こんな話聞いてませんのにぃ！」
「初出陣は、誰でも緊張するものだ」
「きょうは気楽に頑張ろうネ」
「ああっ、誰か会話できる人を連れてきてくださいぃ！」
夢見の叫び声も、壬生川家待機中の初子の元には届かない

「ユメ、ここで帰りますぅ……」
意気消沈した夢見が、すごすごと後ろを向く
「ふむ……しかし」
夢見の前に幾匹もの妖怪が立ちふさがる
「ひっ――い、いやぁぁぁぁ～～！」
「俺たちとはぐれるのも、危険だと思うが」
「助けてぇ、お母様ぁ～～」
佐和の胸に飛び込む夢見
「……死にたくなければ、戦うんだな」
「うぅぅ～……」

「サー、壬生川家、突撃ー！」

こうして三人は、夢見を宥めつつ、扱いつつ、九重楼を進撃し、多数の戦利品を持って凱旋したのであった

第三話－４　「蘭契」　１０２０年１２月（後書き）

出陣・九重楼（佐和・蘭・夢見）
以蔵→槍使い・初見　訓練・初子→以蔵

第三話－5　「雪景」　2021年1月（前書き）

佐和　1才4ヶ月
初子　1才

蘭　7ヶ月
夢見　4ヶ月
以蔵　1ヶ月

第三話－5　「雪景」　１０２１年1月

明けましておめでとうなその日、壬生川家は一面銀世界に包まれていた

「ゆ～～き～～～～～～♪」
喜んで庭を駆け回る犬……こと、三代目当主・初子
あちこちをばたばたと走っては、真っ白な雪に足跡をつけてゆく

その様子を居間から、コタツにもぐって眺めている佐和や蘭たち
お茶をすすりつつ、雪の中で戯れる美少女を鑑賞するという風流な光景だ
「平和デシュねぇ……」
「……冷えるな」
コタツにすっぽりと埋まる蘭
「ねぇねぇ、雪合戦やろうよー！」
手を頬に添えて皆を呼ぶ初子
「おー、やってみるー！」
「わ～ぃ～、ユメちゃんも仲間に入れてくださぁぃ～」

初子に飛びつく以蔵、夢見の若い衆

「雪合戦だってヨ」
「……俺は、寒いのは苦手だ」

かたや居間でゴロゴロする、年寄りふたり（佐和1才4ヶ月、蘭7ヶ月

「佐和お姉さまも、蘭さんも一緒に一緒にー♪」
こちらに手を振ってくるが、曖昧に微笑む佐和
「ウチは、一番好きなの秋だしナァ」
「……すまんな」
つまりは、ふたりとも寒い外に出たくない、と

「ふーん、いいですよーだ」
それならばと背を向けて、初子は以蔵や夢見たちと雪合戦を楽しむ
置いてけぼりにされた感のある、佐和と蘭
しかし寒いなら障子など開けなければ良いのだが、初子の遊ぶ姿は見たいらしい
「あーソウダ、蘭ちゃん」
「……ん」
今にも眠りそうな蘭
「この前、蘭ちゃんやユメと一緒に九重楼（くじゅうろう）に行ったときに、何個か術法の巻物を見つけたんダケド」
コタツの上みかんの隣に、コトリと巻物を置く佐和
「……むにゃむにゃ」
「起きろナサイ」
蘭の頬を引っ張る
「……起きている、少し気を失っていただけだ」
そっちのがヤバくないか、と佐和は思う

「デ、コレ、＜お地母＞」
「ふむ」
誰もが忘れている事実だが、いまや壬生川（みぶがわ）家一の術士となった佐和が、効果を蘭に解説する
「治癒の術なんだケド、なんと隊全員の体力を８０前後回復するのダ！」

「ほう……」
蘭が億劫そうにコタツから手を出して、巻物を広げる
「母が生きていれば、大層喜んだろうにな」
「ウチはもう覚えたカラ、次は蘭ちゃんが読むとイイゾ」
「ん……預かる」

治癒の術には、これまでの戦況を一変させる可能性が秘められている
臥蛇丸や巻絵がずっと大事にしていたそれらの術を、こうして蘭もまた、受け継いでゆくのだった

～～

しばらくすると、初子が夢見と以蔵を引っ張って、居間に戻ってきた
「あー楽しかった♪」
あははーと快活な笑みを見せる初子
「ちょっとやりすぎちゃって、ゴメンね、夢見ちゃん、いっくん」
「う、うぅん、ユメちょ～楽しかったですぅ～」
夢見にぎゅ～～っと抱きつく初子
その様子を、佐和がとがめる
「チョット、ユメ、あんまり引っ付いてはっちゃん嫌がっているジャナイ」
「え～、初子さまぁ、お嫌ですかぁ～？」
胸元から初子を上目遣いに見上げる夢見
「ううん、別に嫌じゃないよ」
「良かったぁ～～～、初子さま良い匂いがしますぅ～～」
「あ、あはは」

母よりも真っ先に初子に甘える夢見に、佐和の拳がぷるぷると震え出す

「何だか、お母様より柔らか～ぃ……胸元とか」

「コラー！」

一気に夢見を引き剥がす佐和

「弓使いには胸なんて邪魔ナンダ！　大きいと引くときに引っかかるんだぞ！　引っかかると痛いんダゾ！　ウチは引っかかったことないケド！！」

最後の方は涙交じりだった

（必死な……）

蘭はコタツにもぐって＜お地母＞の書を読みながら、横目に思う

「そ、それじゃぁ～、お母様は無くて良かったですねぇ～～」

皮肉たっぷりの夢見の笑顔

「ホントにネー、ってこのッ！」

「きゃ～～、きゃ～～～～」

夢見を追い回す佐和

親子は居間をぐるぐると回る

「な、何か、母さんってすっごい人気者だよね」

屋敷に来たばかりの以蔵が、異常な光景に目を奪われる

慣れっこの初子は、あははーと笑うだけだ

「そうそう初子……これなのだが」

「え、どうしました？」

蘭が初子の横に座り直し、＜お地母＞の書を広げる

「俺は母と違って、新たな術を覚えるのが苦手でな……良ければ、

初子も一緒に訳してほしいのだが」
「うーん、わたしも術得意な方じゃないですからねぇ……」
眉を可愛らしくしかめて、巻物の古語を拾う初子
その横顔を見つめながら、さりげなく蘭が初子の肩に腕を回すが、巻物を読んでいる初子は気づかない

「……初子」
さりげなく抱き寄せ……ようとして、見つかった
「チョット、何やってんの！」
「いくら蘭さまでも、それはダメですぅ！」
「――！」
母子が蘭の両手を掴んで一気に持ち上げ、そのまま庭に思いっきり放り投げる
ズボッと音を立てて頭から雪に埋まり、動かなくなる蘭

「皆様、三月に行われる春の選抜試合の出場要請の使者が、壬生川家にお見えになりました！」
イツ花が居間に顔を出した時には、初子が巻物に夢中になり、佐和と夢見が取っ組み合いのケンカをしつつ、蘭が庭の雪に埋まっていた
「春の選抜大会は参加するだけで栄誉、運良くいい成績を残せれば、一気に名家に仲間入りです……って、何だか様子が変ですネ」

「な、何なんだ、この人たち……」
早くも未来に不安を抱える以蔵であった

結局使者にはイツ花が対応したため、壬生川家の現状を知られることはなかったという

＜出陣＞

「それじゃ、行って来ますねー♪」
イツ花と以蔵に手を振るのは、先ほど＜お地母＞の術を習得したばかりの初子だ
「うぅ、ユメちゃん本当は戦いたくないんですけどぅ……初子さまと一緒なら、頑張りますぅ……」
「イチイチ引っ付かないノ！」
こうして、すぐに親子喧嘩が始まる

「えと、母さん……気をつけて」
何やら含みをはらんだ以蔵の声に、あははと笑顔で応える初子
（オレの言葉の意味、本当に分かってんのかな……）
美少女の母を持つ一人息子の心配は募る

「あ、そうそう蘭さま」
「……ん」
ダルマのように着膨れしている蘭が、鼻をすする
「投資の結果ですけど、国中から職人さんが集まって、復興も順調に進み、すっごく斬れる刀とかすっごい丈夫な鎧とか、お品が揃ったみたいですッ」
「……そうか」
嬉しい報告を聞いても、仏頂面のままの蘭
「え、蘭さんも、投資なさってたんですか？」
「……ああ、１００００両ほどだがな」

「いちまんりょーぅ！？」
夢見が驚いた声を上げる、それだけあれば美人画を何枚書いても

らえるか

「オー、蘭ちゃんも巻ちゃんの後を継ぐんダネ」
「……鏡を見るたび、鬱陶しくて叶わんからな」
反魂の儀によって、巻絵の緑色の髪を受け継いだ蘭は、性格もどこか温和になった気がする初子だった
「それじゃあいっぱい戦って、いっぱいお金稼いできましょうね、京の皆様のためにも♪」
おー、と掛け声が上がった

鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）に出陣した初子、佐和、蘭、夢見の四人は、一部（初子を巡る）トラブルがあったものの
年が明けて復活した中ボス狐次郎（こじろう）を打ち砕き、無事一ヶ月を戦い抜いたのであった

第三話－5　「雪景」　1021年1月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（初子・佐和・蘭・夢見）

第三話－6　「決闘」　1021年2月前編（前書き）

佐和　1才5ヶ月
初子　1才1ヶ月

蘭　8ヶ月
夢見　5ヶ月
以蔵　2ヶ月

第三話－６　「決闘」　１０２１年２月前編

＜蘭（らん）の部屋＞

「……今月で俺も、元服、か」
鏡を見ながら思う
「子供を遺す事が、出来る年になったとは言え……」
鏡の中の緑色の髪の自分は自分のようで、誰かに操られた化身のようにも思える

「……ふぅ」
壬生川（みぶがわ）家において元服は、望めば正装して冠を被り、髪を結い直す儀式があるのだが、特に強制されてはいなかったため蘭は辞退していた
珍しく億劫そうに、息を吐く

と、そこへ、
「ちょ、ちょっと蘭姉、匿って！」
「えーん」
障子を開けて、ばばっとちびっ子ふたりが蘭の部屋の中に入ってくる

「……何だ？」
今月でようやく実戦部隊入りした以蔵（いぞう）はともかく、夢見（ゆめみ）はもう５ヶ月になるのだがどうにも幼さが抜けないな、と蘭は思う
そんな幼いふたりは、蘭の部屋の押入れにどたどたと潜り込んだ
「……隠れん坊、か？」

しばらくして、部屋の前を熊のような足音が走り抜ける
「……？」

いぶかしんでいると、すぐに戻ってくる
「チョット！　蘭ちゃん！」

「……やかましいぞ」
巨木も打ち抜けそうな大弓を担いだ佐和（さわ）が、息を切らして蘭につめよる
「ココに、ユメが来なかった！？」
「……いや、見てないが」
「あのコドモ！　ウチの大事な大事なはっちゃんに描いてもらったウチの絵をッ」
「絵を……どうかしたのか？」
「あろうコトか、ラクガキだと思って、矢の的に使って遊んでたノヨ！」
蘭は無意識に押入れを見ようとしたが、自制する
「初子（はつこ）の絵は確かに……」
「きぃぃぃ、お前の頭を代わりに矢の練習代にしちゃるデシュ！」
「……殺すなよ」
蘭の制止も聞こえたのか聞こえなかったのか、佐和は再び走ってゆく
確かに、自分もそんな真似をされたら激怒するかもしれない、と思いつつ、押入れに声をかける

「……鬼は行ったぞ」
「ホッ……」
「ううん、痛いってば夢姉……」
転げるように出てくる夢見と、鼻を押さえている以蔵
「だってぇ、暗闇にまぎれてユメにいやらしいことしようとしない

でくださぁい～」
「しねーってば、夢姉には……」
「なんですかぁそれ、酷いぃ蘭さまぁ～～」
がしっと蘭に引っ付く夢見

「……それより、何でお前らあんな事を」
「ユメは反対したんですけどぉ、いっくんが『何この汚い画、今日はこれで遊ぼうぜ』ってぇ～」
「いっくんは止めろ……つか、それ全部まんま夢姉のセリフだろう！」
「ユメは『ぜ』なんて言いませんしぃ～」
「語尾を変えただけじゃねーか！」
要するに、ロクな理由があるわけではないのか、と蘭は納得する
確かに初子の絵は言われて見なければ、ただのうねうねにしか見えまい

「ていうかぁ、どうしてママって初子さまのことになると、羽が取れちゃった矢みたいに飛んでっちゃうんですかぁ？」
「……羽が付いていても、佐和の射る矢はそんな感じだが」
うーむと唸る

「オレの母さん美人だからじゃない？」
「え～、だって女性が女性をなんてぇ～」
夢見には何やら理解できない部分があるらしい
「ていうかぁ、蘭さまもですよねぇ？　どうしてですかぁ？」
エサをねだる猫のように、蘭の裾を引っ張る
「佐和は、二人の生まれた時期が近かった事もあるのだろうが……」
あの二人に蘭の母・巻絵（まきえ）を加えた三人が、当時の親友同士だったとは聞いたことがある
「俺の場合は……そうだな、」

何か例えようとしたが、言葉が出てこない
想いが宙をさまよう
「……まぁ、初子は良い」
「それじゃぁ～分かりませぇん～」
夢見はぶーぶーと蘭の周りをじゃれる

「あ～でもぉ、初子さまの笑顔は良いですよねぇ～」
ぱっと手を離して、天井にキラキラとした目を向ける
「あれは確かにぃ、ユメちゃんもこう、頭がぽーっとしちゃいますぅ～」
「夢姉は、普段からだろ」
「きぃぃ、そういういらないツッコミは、いりませぇん～！」
むきーと遠慮なく怒る夢見を見て、蘭はその将来がまるで佐和になるんじゃないだろうかと不安に思えた
夢見の怒声が響いたその瞬間、蘭の部屋の戸がバッと勢いよく開かれる

「はひっ！？」
「う」
恐る恐る振り返る夢見と以蔵だったが……
「……初子？」

「蘭さん」
キッと初子は蘭を見る
「交神の儀をなさらないって、どういうことですか」
初子が当主の部屋に置いてきた直訴状を、蘭の顔の前に突きつける
蘭は、静かにため息をついた

＜旧・玄輝（げんき）の部屋＞

「……鬼退治の時にしか見せない顔で乗り込んでくるものだから、夢見と以蔵が怯えていたぞ」

場所を移して、ふたりは会議の間に対面していた

「お話をはぐらかさないでください、どうして交神（こうしん）の儀をなさらないのですか」

まるで槍のような目をする初子

「……俺の勝手、ではないか？」

「じゃないです、これは壬生川一家の問題です」

「……一家の問題なら、当主の権限で介入してくるのか」

「はい介入します、わたし当主ですもん」

怒っているのか何なのか分からない、初子のセリフだ

「というか、どうして交神の儀をなさらないのですか」

というわけで、ここにお話が戻るわけで

「……面倒だ」

「嘘です」

斬り捨てる初子

「……俺のひいお婆様の遺言で」

「ありえないじゃないですか！」

蘭はチッと舌打ちをする

「子供が戦死すると、母親は反魂の儀を行わなければいけないのだろう」

少しだけ、無表情を崩した

「そのような事は面倒だ……俺にはそこまでの覚悟はない」

「そんな、重く考えすぎです！」
「8ヵ月も生きれば、自分の性分というものは曲げられなくなるものらしい」
「何でもかんでも、自己完結しちゃうんですからぁ」
不満げに口を尖らす

「大体、いっつもいっつも一人で何でも決めちゃうから、蘭さんのそういうとこ、わたし好きだけど嫌いです」
「どっちなんだ……？」
危うくコケそうになる蘭
「でも、蘭さんはわたしが言っても、自分の意見を曲げませんよね」
「……そうだな」
実際子供を作る気は毛頭なかった
「わたしも、絶対蘭さんには子供を作ってほしいです、それを変える気はありません」
「……平行線だな」
「ええ、ですから、こういう時は賭けです」
初子のまっすぐな視線には、自信が宿っていた
「賭け……賭けだと？」

蘭は思う、自分は初子のこんな目に弱い、と

「以前にお父さまがおっしゃってました、三本先取の方法です」
「……ほう」
何て真剣な目をするのだろう、壬生川家という絶望的な現状を過ごし、どうしてそんな目が出来るのか
「わたしが先取した時は、蘭さんに交神の儀をしてもらいます」
「……ならば俺が勝った時は、四代目当主の座は貰う」
「はい、構いません」
「良かろう」

最後に戦ったのは幸四郎が死んだ翌月、去年の１０月、今から４ヶ月前のことだ
あの頃から蘭は体も大きくなり、力も技も付いた、あの頃の自分とはまったく違う
お互いの武器は薙刀と槍、条件はもはや互角

「……初子」
５ヶ月年上の初子を、蘭は睨みつける

お前のやり方では、甘すぎるのだ初子
ひとつの家に三つの血では交神する神の質は下がってしまう、自分の代でひとつの家を潰し、その後濃い血筋を引き継いでいけばいいのだ
幸せな家族も、そこに生きる人々の想いもいらない
全ては朱点童子（しゅてんどうじ）を倒すために、それ以外のものは不要だ

「俺は勝つぞ、初子」
「はい、でもわたしも負けません」
二人の少女の想いが、こうしてぶつかりあう

第三話－7　「血統」　１０２１年2月後編

審判も呼ばずにひっそりと、ふたりは道場で対峙していた
壬生川家の指針を決める戦いが、今始まる

「……冷える」
不満げにつぶやく蘭
「冬の道場に裸足で入れば、それは……」
「……これが嫌で、俺はずっと朝の稽古を手を抜いていたのだ」
「手を抜いていたんですか！？」
衝撃の事実発覚だ
「……術はそういえば、有りだったな」
「ええ、たぶんそんな暇ないと思いますけど」
初子が剛の槍だとすれば、蘭の薙刀は守りの技に秀でていた
治癒の術と、多くの術法、さらに身のこなしに優れている蘭

「……では、行くぞ」
「はい」

蘭が勝利すれば、壬生川家でひとつの血が絶たれ、初子が勝利すれば、壬生川家の歴史は変わらず皆は普段通りに過ごす事となる
後世の人間にとっては、自分は酷い女に思われるだろう、と蘭は自嘲する

蘭は薙刀を上段に構え、初子を強襲した
「――双光斬」
「え、奥義！？」

蘭の目が見開いて、その身体がゆらりと揺れる
道場に激烈な打ち込みの音が、響き渡った

やがて、ふたりの三本勝負に決着が付く

～～

「はぁ……はぁ……ズルイですよ、蘭さん……奥義だなんて……」
「……ふざけるな、一体、健康度を……いくつ使うと思うのだ……」
道場に横になっているふたり

たった三本の勝負に、かかった時間は数時間
板の間敷きの道場の壁は、四方のうち一方が非常に風通しが良くなっており、オマケに板の間や壁も何十という箇所が斬り裂かれていた

「この……化け物、が……」
蘭は毒づく

４ヶ月前と結果は同じ、三本中一本すら取れなかった
こちらの振りは全て叩かれ、相手の振りを弾こうとすると手に痺れが残る、技の威力の差が如実に現れた勝負だった

「鬼子め……」
寝転がっていた初子が、蘭の手を掴む

「……約束は、約束、ですからね」
初子が満面の笑みを見せる

畜生、と思った

蘭は手を振り解くと、右肩を押さえて立ち上がる
そして、つぶやく
「……交神をするなら、初子が良い」
「え、何か言いました？」
初子の問いかけが届くが、あえて無視をする
道場を出て、イツ花にでも手当てをしてもらおうかと思った
初子に打たれた場所がひどく熱を持ってもはや感覚がない上に、
奥義を放った両腕は少しでも動かすと悲鳴が出そうなほど痛い
回復術で治そうにも、術力は＜速瀬＞や＜武人＞＜防人＞に使い切ってしまった
散々な一日になった
本当に、散々だ

「ちょっと、何ですかー？」
黙って出ていこうとする蘭に、初子が座ったまま尋ねた
蘭は少しだけ振り向くと、無防備そうに首を傾げている初子に聞こえないように漏らした
「……俺が男なら、今この場で襲ってやるものだが……口惜しい」
今はそれだけが悔やまれた

＜交神（こうしん）の儀＞

というわけで、手当ての済んだ蘭が憮然とした表情で、交神の間

に座る

「それでは、きょうも元気に交神の儀をいたしましょうッ！」
「……」

今にも舌打ちしそうな目つきの蘭

「ほらほら蘭さま、どなたになさいます？」
「いやまぁ……どいつでも良いのだが」
「それでは、お任せコースですか？」
「ああ」
「イツ花（いつか）の気まぐれコースとか、いかがですか？」
「いやそれは」
少しお茶目がすぎるイツ花に、いやいや、と首を振る
「当主さまに頼まれたんですから、ちゃんと蘭さまが交神なさるように、って」
「よく手を回すものだ……」
暇なんだろうかと思ってしまう
「ほらほら、誰になさるんですかァ」

「じゃあ、コイツだ」
自分に足りない筋力を補うため、火の神を適当に指差す
「は、はい、承りました」
そのあまりのやる気の無さに、イツ花が少し引く
もっとも蘭にしてみれば、目的の人と交神出来なければ、誰でも同じと言ったところだろう
それにしたって、蘭の選んだ神様は……

蘭の耳に、何かの獣の雄叫びのような奇声が聞こえる
うなり声のような、数台の馬車が走り回るような……

「……なんだ？」
障子を突き破って、鉄の雲に乗った火の神が、蘭の前に出現する
蘭もさすがに目を丸くした
テメェか俺様の交神相手ってのはよ、良い女じゃねーか、との声
に、思わず呆然としてしまう

三ツ星凶太「全開バリバリで、ぶっ飛ばすぜ！」

まるでチンピラのような神を前にして、
蘭の頬に、一筋の汗が流れる
……やっぱり、散々な一日だったな、と蘭は思った

第三話－7　「血統」　１０２１年２月後編（後書き）

元服→蘭　交神の儀・蘭×三ツ星凶太

第三話－8　「制勝」　１０２１年3月（前書き）

佐和　１才６ヶ月
初子　１才２ヶ月

蘭　９ヶ月
夢見　６ヶ月
以蔵　３ヶ月

第三話－8　「制勝」　１０２１年3月

春の兆しが見え始め、徐々に暖かくなってきた毎日

「うわ何このツボ」
以蔵(いぞう)が佐和(さわ)の部屋で、何か面白そうなモノを発見する
「わかんなぁい、ママがある日洞窟から拾ってきたのぉ～」
以蔵は夢見(ゆめみ)の部屋によく遊びに来るようになっていた
自分の部屋（初子(はつこ)の部屋）に居るとどこからか佐和や蘭(らん)が来るのだ
それに佐和の部屋には面白そうなものもいっぱいある

「洞窟から……でも何か、良いツボだな」
「何か、持っていると偉くなった気がしますぅ」
以蔵と夢見は、とりあえず床の間に飾られているツボを拝む
やっぱり、面白そうというより変なモノばっかり置いてある気がする

「オーイ、ふたりとも、準備準備ー」
「あれ、佐和さん」
「初子さまのトコで、イチャイチャしてたんじゃないんですかぁ？」
「いやイチャイチャは終わったケド、ていうか明日もスルシ」

それはいいとして、と佐和は話を戻す

「ホラ、今から京に行くヨ」
「ええっ！？」
夢見の目がキラキラと輝く

「京の都に……マジで！？」
以蔵と夢見が手を取り合って喜ぶ
夢にまで見た、花の都だ

＜春の御前試合＞

騙された、と以蔵がつぶやいた
「あれ、どうしたの夢見ちゃん？」
「なんでもありませぇん……」

帝の前で、よよよと涙を流す夢見

（……まさか、京都観光だとでも思っていたのだろうか）
蘭が腕組をしながら冷ややかな目で見る
「つーか、完全武装で京の都に行く時点で気づくべきだったよな……」

初めての都に浮かれていた自分を恥じる以蔵

「壬生川（みぶがわ）一族ー、特にはっちゃんー、ガーンバーガンバー！」
「皆様頑張ってくださいネー！」
応援席で手を振る、のんきな二人

「ママ変わってくださいですぅ～」
「ウチ、今忙しくテ」
「お団子食べているだけじゃないですかぁ！」
あーん美味しいと悶える佐和を見て、夢見の弓を持つ手がぷるぷると震える

「ほらほら、佐和お姉さまが見ててくださるんですから、しっかりしないとね♪」
「ぅ～……」

ほどなくして、帝の挨拶があった
そうして、舞台が始まる

「ここに集めたものはいずれもその道の達人！
日ごろ鍛えし腕前、存分に競い合うがよかろう
では第九回春の「朱点童子(しゅてんどうじ)公式討伐隊　選考試合」
開催を宣言する！！」

場所を変え、控え室に待機する四人
夏の御前試合に出場した人で残っているのは、今では初子と佐和のみ
今回の参加者は、初子、蘭、夢見に、初陣の以蔵だ

「以蔵も、不平は言うが訓練はサボった事がないしな」
「いっくんなら、緊張せずにいけるいけるって♪」
大きいのと小さいのから、肩をぽんと叩かれる

「……何かオレ、この家に来てから、初めて人に期待された気がする」
3ヶ月の槍使いの性格は、すでにずいぶん捻じ曲がってしまっているようだ
「うぅ、ユメ帰りたいですぅ……」
「終わって時間余ったら、一緒に京都の町を見て回ろ？」
「う……それなら、ユメ、何とか頑張りますぅ……」

初子にしがみつく夢見

「……そうだな、俺も、京都の町も視察せねばな」

つぶやく蘭の頬が、少し赤くなっていた

その後、呼びに来た使者に促され、第一回戦の準備を整える一同

～～

第一回戦の相手は、前々回に苦渋を舐めさせられた京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）だった

傭兵隊長「おや、アンタ……夏の試合に出てきた、お嬢さんか？」

「はい、去年はお世話になりました」

傭「そうかいそうかい、にしても……少し見ない間に、でっかくなったもんだなァ」

いぶかしそうに初子を見つめる

傭「それは良いとして、あの人の良さそうな剣士さんはどうしたい？　戦いたかったが、去年は当たらなくて」

「父は……夏の戦いのすぐ後に、命を落としました」

傭「そうかァ……まァ、人生色々あるもんだよな、今回はお手柔らかに頼むぜ」

「はい、こちらこそ」

ぺこりと一礼する初子

第一回戦が始まる

その中で特に善戦したのは、前回初子に負けた鬱憤を晴らそうと

気を張る蘭だった

「――双光斬(そうこうざん)！」

相手の前列をまとめて薙ぎ払う奥義によって、致命傷を次々と与えてゆく

「うわぁ～……」

「蘭姉、こええ……」

「下郎が！」

段々とテンションの上がってきた蘭

初子と蘭が次々と相手の連携を破ってゆく中、怯えるちびっこたちは後衛から支援に徹する

「……えい！」

槍の一突きで、傭兵隊長が後ろに吹っ飛んでゆく

○「それまで、一本！」

緊張の糸が途切れて、夢見と以蔵がワッと声を上げる

こうして壬生川一族は、京阪傭兵組合を見事に打ち負かしたのであった

～～

その後、第二回戦の大原野魔術団(おおはらのまじゅつだん)を軽くあしらった壬生川一家は、続く決勝戦ぽんと自警団(ぽんとじけいだん)を、一本で制した

「最後までよく戦ったぞよ！

では第九回　春の「朱点童子公式討伐隊　選考試合」最終結果の発表じゃ！

最後にシ烈な試合を制し、頂点を極めし者に、惜しみない拍手を！
優勝は……！
壬生川一族じゃ！！
そちたちの力で今年こそ京に平和を取り戻してくれい！！頼むぞ
「壬生川一族」筆頭公式討伐隊の任を命ず！」

三代目当主・初子率いる壬生川家が、京都最強の称号を手に入れた瞬間であった

その後、一同は支度金２１２３０両と多くの宝物を貰い受け、京都の観光を楽しんで、屋敷に帰還したのだった

第三話－8　「制勝」　１０２１年3月（後書き）

出陣・選考試合（初子、蘭、夢見、以蔵）

第三話－9　「残春」　1021年4月前編（前書き）

佐和　1才7ヶ月
初子　1才3ヶ月

蘭　10ヶ月
夢見　7ヶ月
以蔵　4ヶ月

第三話－９　「残春」　１０２１年４月前編

初子（はつこ）が蒼白の表情で、佐和（さわ）の部屋から出てくる
その様子を目ざとく見つけた人がいた

「あれぇ、初子さまぁ？」
「あ、な、なに？」
その様子にむしろ夢見（ゆめみ）が驚いてしまう
「いや、ママの部屋から、どうしたんですかぁ？」
「ううん、何でもないの……ただ、佐和お姉さまの具合を見に、ね」

初子はいつものように微笑むと、自分より背の高い夢見の頭を撫でて去ってゆく
少し様子がおかしかった気がする、と夢見は首をひねった
「謎ですぅ」

自分の部屋に戻ると、佐和が術の勉強をしていた
「ただいまですぅ」
「オカエリー」
どこも変わった事はないように思える
「ママって元気ですぅ」
「どうしたノイキナリ」
夢見はたたみの上にごろりと転がる
「だってぇ、もう1才7ヶ月なのにぃ、寝込んだりしないで机の前で学問しているんですぅ～」
「ハッハッハ」

少し誇らしげな佐和

「そらウチは８０才まで生きるコですカラ」
「壬生川（みぶがわ）家でそんなことが起きたら、化け物ですぅ……」
夢見がたらりと汗を流す

「……マァ、はっちゃんには見抜かれちゃったケド」
ぽつりとつぶやく

佐和の前にある書物の頁は、先ほどから一枚も進んではいなかった

＜蘭（らん）の子供＞

「三ツ星凶太さまの元より、お子様が参っております！」
「来たか……」
蘭は口をへの字に結んだままだ
「何で嬉しそうじゃないんですか、蘭さま」
「どうしてだろうな……」

賭けに負けて産んだ子だから、とは言えない蘭

「それはそうとォ……お喜びください！」
イツ花は笑顔でパチパチと拍手する
「膝がしらとくるぶしの形がまん丸で可愛い、もちろん女のお子様です！」
「……女か」

あまり男女の優劣がない壬生川家ではあるが、戦の面で言えば少々不満な蘭だった

○「初めまして、母上」
髪を後ろにまとめた凛々しい少女が入ってくる

名前は鈴鹿（すずか）、蘭の家の伝統を受け継いだ薙刀士だ
枯れ葉色の髪を後ろで桃色の飾り布を使ってまとめた、碧眼の凛々しい少女である

「お前の母だ、よろしく」
「よろしくお願いします、母上」
かしこまって正座する鈴鹿
「ふむ……しっかりしているな」
蘭がうーむと見た感想を言う
「はい、私はしっかりしています」

少し……違和感を感じる

「……いや俺は、お前と夢見を比べて、そう思ったのだが」
「そうですか」
不思議な沈黙が訪れる
何だろうこの間は、と思う

「……俺は、あまり人の親にはふさわしくない人物だ」
蘭がぽつりとつぶやく
本来産む気もなかったしな、とはさすがに言わない
「だから親らしいことを、俺に期待するな、そういうのは初子に頼め」

「はい、一切期待しません」
鈴鹿がバカ正直にうなずく
「……まぁ、屋敷の皆に紹介するか」
蘭はダルそうに腰を上げて、鈴鹿を手招きした

＜居間＞

「……居るか、初子」
「母さんなら居ないぞー」
居間でだら～っと座っていたのは、以蔵（いぞう）ひとりだった
「何か、イツ花の知り合いにお医者さんがいるみたいで、良い漢方薬を貰ってくるってさ」
「漢方薬……？　安いものではなかろうに、なぜだ」
「さー、母さん長生きする気なんじゃねーの？」
「ふむ……まぁ、初子は長生きしてほしいな」
それよりさ、と以蔵が話を変える
「その子誰よ」
以蔵が尋ねたのはもちろん、蘭の後ろにいる鈴鹿のことだ
まさかどこかから孤児でも拾ってきたとか、と言う以蔵に、蘭は首を振る
「俺の娘だ」

「はい！？」
「鈴鹿です、よろしくお願いします」
「え、マジで蘭姉の娘さん！？」

生真面目そうな少女を見て、愕然とする以蔵

「蘭姉と交尾するなんて……なんて勇敢な神がいたもんだ」
「……」
以蔵はぺこりと頭を下げる娘に、したり顔で話しかける
「いやでも大変だな、鈴鹿も」
「大変なんですか？」
首をかしげる鈴鹿に、以蔵はうなずく
「ああ、この家は短命、種絶の呪いだけじゃなくてーな、他にももうひとつ呪いを抱えているんだ」
「そんな話、父上からは聞いてませんが」
「いいや、神様たちは知らねーんだ、壬生川（みぶがわ）家の伝統みたいなものだからな」

蘭が見守る中、以蔵は調子に乗ってどんどん続ける

「それはな、年の差は絶対の呪い、ってーヤツだ」
「年の差は絶対の呪い……」
顔をこわばらせて恐怖する鈴鹿
「ああ、コイツは曲者でな、自分の年上の人には何があっても逆らえない、長く生きるまで下が来るまでは、地獄のような日々だ……」
「地獄のような日々……」
鈴鹿が反芻する
「夢姉には玩具にされ、蘭姉には疎まられて、母さんには相手にされず、佐和姉には邪魔者扱いされる始末……」

その場で泣き真似をする以蔵
ここ数ヶ月の鬱憤を晴らすように喋る

「以蔵兄上、可哀想に……」
「しっかーし！」
急に復活する
「そんなオレの位置もきょうまでだ！　これからはその最下層は、鈴鹿が引き継ぐんだ！」
ビシッと指差す

「そ、そんな……私にそんな奴隷なんて大役が、務まるでしょうか……」
わなわなと震える鈴鹿
そこで以蔵は、ん？と我にかえる
「何かこのコおかしくねーか、蘭姉」
ツッコミを放棄して、以蔵の読んでいた年上に好かれる魅力作り！の続きを眺めていた蘭が、顔を上げる
「どうやら……」
と前置きして、話しを続ける
「鈴鹿は、人を疑うということを知らないのか覚えていないのか……バカ正直らしいな」
「ええっ」
あまりにも突拍子も無い話に、引く以蔵

「私はただ……人を疑ってはいけない、と教わっただけです」
「しかし、限度というモノがあるだろう」
「誰とでも拳を交わえば分かり合える、と父上は申しておりました」

お前は壬生川家全員と拳を交えるつもりか、と以蔵が思う

「これは、佐和姉や夢姉には会わせないほうが良いんじゃねーか、蘭姉」
「……むしろ、お前にも会わせたくなかったなと、今思ったが」
やはり鈴鹿の面倒は初子に見てもらおう、と誓う蘭であった

第三話－１０　「懺悔」　１０２１年４月後編

蘭（らん）の鈴鹿（すずか）箱入り計画は頭から崩れた
「蘭さん、準備整いましたかぁ？」
「……ああ」
衣裳室から出てくる蘭
当然というか何と言うか、今月も出陣はあるのだ

＜出陣＞

「それじゃ、鈴ちゃんはウチが預かった！」
後ろからがばっと鈴鹿を抱きとめる佐和（さわ）
玄関に立つのは、初子（はつこ）、蘭、夢見（ゆめみ）、以蔵（いぞう）の四人
「頼みましたね、佐和お姉さま♪」
「フハハー、返して欲しくば代わりにはっちゃんを置いてけー」
蘭が初子の首根っこを掴んで引っ張ってゆく
「要らん」

「ああっ」
佐和が名残惜しそうな声を上げる

「それでは、行ってらっしゃいませ」
恭しく礼する鈴鹿に、以蔵や夢見が手を振る

＜九重楼（くじゅうろう）＞

壬生川（みぶがわ）家は、慣れた九重楼を上へ上へと登ってゆく
七天斎八起（しちてんさいはっき）も開放したため、道を阻む敵は居ず、順調に奉納点を稼いでゆく

「今頃……」
戦いの合間、初子がふっと顔から力を抜く
「佐和お姉さまは、何を考えていらっしゃるんでしょうねぇ……」
「……何故、佐和の話題が」
蘭は不満そうな顔で尋ねる

「鈴鹿ちゃんがいて良かったです」
「……待て、何の話だ」
「わたしだったら、大事な時間を一人で屋敷で過ごすなんて、とっても耐え切れないと思いますから……」
初子らしくない薄い表情に、蘭は違和感を覚える
「ちょっと待て、それでは……まるで」
蘭の脳裏に、佐和の笑顔が思い浮かぶ

佐和は今月で、1才7ヶ月になるのだ

「わたしもお父様のように、最期は戦場で過ごしたいです」
そう言って初子は、着物の裾を払って立ち上がった
「母さん、なかなか拳法家の指南書出ねーよー」
「ユメ、もうくたくたですぅ～……」
「えー、九重楼にあるって都の人が言ってたもんー」
子らに振り返る初子
その表情は、すっかりいつもの当主・初子のものへと戻っていた

その後壬生川家は、一ヶ月九重楼で善戦を続けるも、結局目的の指南書は出ないままであった

＜壬生川家＞

戻ってきた初子を迎えたのは、曇った表情のイツ花だった

「当主さま、あの」

「覚悟は出来ております」

初子はイツ花のその顔で、全てを察する

「……命の炎が燃え尽きようとされている方がいらっしゃいます」

目を閉じて歯を食いしばる初子

足にしっかり力を込めないと、崩れてしまいそうな身体を支える

「お気を強く持ってこちらへ」

「……はい」

＜佐和の部屋＞

「ママ！」

「佐和姉！」

戦場から帰ってきた家族が、佐和の部屋を訪れる
「オー、オカエリぃ」
布団に横になったままニコリと笑う佐和
隣で看病していた鈴鹿がぺこりと頭を下げて、退室してゆく
「イヤァ、鈴ちゃんは飲み込みが早いネ、良い術師になるヨ」
「……そうか」
「佐和お姉さま……そんな、最後まで」

夢見が佐和にすがって、ママ大丈夫ママ大丈夫？と何度も尋ねる

「いや何か、もうダメみたいダワ」
「そんな……」
「ユメはあんまりワガママ言って、はっちゃん困らせるんじゃないゾ」
そう言って、佐和は夢見の頭を撫でようとするが、腕に力が入らなくて撫でられなかった
そんな力ない佐和を見て、蘭が目を伏せる
「……いつも騒がしくて、鬱陶しい女だと思っていたのだがな」
「ウチ自身もこんな日が来るなんて、思ってなかったヨ」

ハハハ……と笑う

「こんなに若くてお綺麗なままなのに……」
「……何か遺言があるなら、聞いてやるぞ」
蘭が同じ人を好きになったよしみとばかりに、佐和に尋ねる

「……はっちゃんの全てが欲しイ」
「他の遺言にしろ」
死にゆく人に対しても、キッパリと断る蘭
「もう、何を言っているんですかこんなときに……」

「じゃあ済まナイケド、はっちゃんと二人きりにさせてチョーダイ」
蘭を見上げて、そうつぶやく
「……変なことをするなよ」
佐和にすがって泣く夢見を立ち上がらせて、以蔵と共に部屋を出る蘭

初子は立ち上がって、佐和の枕元に座り直す
「ネー……はっちゃん」
「はい……」
佐和が勇気を出して、初子を見つめる
「あの、その……お願いが、あるんダケド……」
「わたしにできることでしたら、なんでも」
「いやあ、でもナア……うーん……」
この期に及んで逡巡する佐和

顔色が悪いのに、潤んだ瞳で上目遣いにちらちらと初子を覗く
その姿は、まるで恋する童女のようだった

「あの、あのネ……もしかして、もしかしてだけど……はっちゃんが、ウチのことを、忘れないようにって、サ……」
「そんな、忘れるだなんて」
「モシモの話だから、ね、それで……」
そこで咳き込む佐和
「お姉さまっ」
「だ、ダイジョウブ、まだ平気……それで、その」
あれほど普段、自由でいた佐和がここまでためらうことなんて
初子は佐和のお願いを待つ
「い、一度でいいからその……ウチに」
下唇を噛み、目を閉じて、佐和が言った

「あの……ウチに、口付け、してもらってもイイ……？」

言ってしまった直後に、佐和がかぶりを振った

「あ、いや、ソノ、コレは変な意味じゃなくて……あくまでも、その、思い出ってコトで……」

慌てて言葉を続ける

「べ、別にウチそういうんじゃなくて、そういうんじゃないけど、はっちゃんも、多分そういうんじゃないって知っているケド……その……」

「お姉さま」

初子の真剣な瞳が近づいてくる

「……は、はっちゃん、その」

少し暗い部屋で、初子と佐和の影が一瞬だけ重なる

部屋の前で待っているであろう蘭たちに聞こえないように、佐和はう～～、と唸る

「こんなに簡単だったナラ……もっと前から、頻繁におねだりしておけば良かった……すっごい後悔ダ」

「そんなことしたら……照れて、翌日なんてまともに顔見られませんよ……」

口元を押さえながら、初子がつぶやく

「……蘭ちゃんにはナイショだからネ」

「言えませんってば……」

うふふぅと漏らす佐和

「ウチホント、はっちゃんと同じ年代に生まれて……ホント感謝ダ

ヨ」
「佐和お姉さま……」
初子は枕元に座って、佐和の手を握る
「……ごめんなさい、こういう大事な時に、何て言えば良いか分からなくて……」
生まれた時からずっと傍にいた親友との別れ
初子は佐和の手をさすって、必死に涙をこらえていた

「お母さんとか、幸四郎オジサンは、死ぬ前に笑ってたんだヨネ」
佐和はそんな初子を、ずっと見つめていた
「ウチも死ぬ前になれば、そんな気持ちになるのかナ……って、思ってて……でも」
佐和の息が細くなってきた
初子はまるで引き止めるように、佐和の手を強く握り締める

「でも……全然分からないよ、ウチ」
佐和の大きな瞳から、涙がこぼれた
「格好悪くて、無様だけど……分かんない、死にたくナイよぉ」
「佐和お姉さま……そんな、格好悪くなんて無いです……」
精一杯最後まで生を願う人を、そんな風に言える人なんているはずがない
「……ウチ、死にたくない……死にたくない、いきたくないよ……はっちゃん……」
ノドを震わせて、かすれ声を上げる
「こわいよ……こわいよ、もっと壬生川家にいたいよ……はっちゃんたちと、あそびたい……あそびたい……」

段々とその声が、小さくなってゆく
佐和の手首から、力が抜けてゆく

「はっちゃん……だいすき……もっと、もっといっしょにいたかった……だいすき……」

「わたしも……佐和お姉さまのこと、大好きです……」
初子が、佐和の手をさする
ほとんど聞き取れないほどの声で、佐和がつぶやく
「はっちゃん……」

こうして佐和は、淡く恋心を抱いていた人に看取られて、この世を去った
無念をその身に抱えて……

佐和の手を握ったまま、初子は泣いた
想いは言葉にならず、感情は涙となって溢れた

大好きだったのに救えなかった、初子はそう言いながら泣き続けた

壬生川　佐和　享年1才7ヶ月

「ウチのてをしっかりにぎってて……からだが、どこかへ……とんで、いきそうなの……」

こうして初子は一家の最年長になり、
少しだけ、大人になった

第三話－１０　「懺悔」　１０２１年４月後編（後書き）

出陣・九重楼（初子、蘭、夢見、以蔵）
鈴鹿↓薙刀士・初見　訓練・佐和↓鈴鹿　老死・佐和

第三話－11　「婿探」　1021年5月（前書き）

初子　1才4ヶ月
蘭　11ヶ月
夢見　8ヶ月
以蔵　5ヶ月
鈴鹿　1ヶ月

第三話－１１　「婿探」　１０２１年５月

佐和が亡くなった翌月、落ち込んでいた夢見も初子の元に引き取られ、
壬生川家は、代わり映えのない平安な日々を送っていた

「アレ、元服の儀？」
「はい、たった今終わりましたァ」
寝坊した以蔵が居間を訪れたとき、後片付けをしているイツ花と出会った
「今月誰か元服したの？」
あれと首を傾げる
「何をおっしゃってるんですかァ、以蔵さま」
軽く笑いながら、イツ花は片付けを終えて去ってゆく

取り残された以蔵は、腕を組んだ
オレはまだだし、蘭姉はこの前やったしなぁ、と考え込む

唐突に、以蔵の視界が柔らかなものによって塞がれた
「だ～れだぁ～」
「……お前、いくらなんでも同じ家で暮らしていて、間違えねーよ」
以蔵は顔に当てられた手を外しつつ、振り返る
「まったく、白波河太郎の親父だろ」
「家に居ないですぅ！」
そこには夢見が髪を結って、藍色の儀礼服を身にまとっていた

「何だか、テンション高いな夢姉」
「ふっふぅん～」
その場でくるりと回って見せる
「どーした」
「きょうのユメ、何だかオトナっぽいと思いませんかぁ？」
以蔵は真顔になって、考え込む
「……すまん、時間をくれ」
「え～」
「来月までには考えておくから、な」
「長すぎますぅ！」
夢見がポカリと以蔵の頭を叩く
いつもと違ったノリの良さに、違和感を覚える以蔵

「……何か、機嫌が良いな夢姉」
「そりゃぁ、元服したんですものぅ～」
「なッ――」
以蔵は絶句した後、何かに気づいたように指折り数える
「ってことは夢姉……蘭姉と、3ヶ月しか年が変わらねーのか！」
「そっちにビックリするんですかぁ！？」

現在、蘭11ヶ月、夢見8ヵ月、以蔵5ヶ月である

「信じられねぇ……こんなにちっこいのに」
夢見の頭に手を置く以蔵、三つの血筋で一番背丈が小さい家系の以蔵だが、すでに夢見を越えている
「ふふぅん、もうユメちゃん交神だってできるんですからぁ～」
「カッパと？」
「しませぇん！」
ぼす！と以蔵の腹を強打する夢見
「もぅ、最近いっくんナマイキですぅ」

夢見がぷんすか怒りながら部屋を出てゆく中、その場に崩れ落ちた以蔵が腹を押さえてうめき声をあげる

「……訓練はサボりまくりのくせに……良いパンチじゃねーか」

調子に乗ってからかいすぎた以蔵に、訪れた罰

以蔵はその後、初子が出陣を誘うまで、床を転がり続けたという

＜出陣＞

「それじゃぁ、出陣しましょうー♪」

元気よく手を挙げる初子に夢見と、やる気のない以蔵

「あれぇ、どうしたんですかぁ、いっくん～？」

「腹が痛いんだが……」

つーかいっくん言うなよ、と続ける

「痛いの痛いのとんでけー？」

「いやそんな笑顔より、もっと実益のある＜お零＞とかが……」

こんな能天気な母親から、どうして自分のような枯れた息子が生まれたのか、未だに理解できない以蔵

「あれぇ、蘭さまはお出かけなさらないんですかぁ？」

夢見は、土間にいる蘭と鈴鹿に首を傾げる

「……今月は、俺は出陣せずに鈴鹿を訓練する」

以蔵がぽつりと、あんなに戦大好きな蘭姉が、とつぶやく

「……鈴鹿（すずか）に訓練できるのは今月で終わりだからな」

「つまり、今月を逃すともう奥義が伝承できないんですねぇ」
「……初子には通用しなかった技だがな」
蘭は拗ねたようにそっぽを向く

鈴鹿が蘭の袖を引っ張って尋ねる
「母上は、当主さまより弱いんですか？」
「……」
思わず沈黙する蘭

「でも、そんな蘭姉も、オレたちよりはずっと強いけどな」
「ですぅ」
図式に表すと、初子＞蘭＞夢見≧以蔵という形だろう

「ううん、いっくんも夢見ちゃんも、最近めっきり強くなっているじゃないですか♪」
幸四郎が亡くなって以来、壬生川家最強の座を守り続けている初子が謙遜する
「まー夢姉からは一本取れるようになったしな」
「ユメはぁ、武道なんて野蛮なことしませんもぉん～」
「じゃ、どーするんだよ」
こんな壬生川家で、とつい口走りそうになる

「ユメ、子供を産んで、引退しますぅ！」
小さな握り拳を天に掲げる夢見
「え、えーっと、あはは……」
初子が困ったように微笑む
「よしじゃー、旦那さんでも探しに行くか、夢姉」
「え、京の都ですかぁ！？」
宝石のようなキラキラした瞳で、以蔵を見つめる、が
「いや九重楼（くじゅうろう）」

「いやぁぁぁぁ～～、そんなところにユメの未来の旦那さまはいませぇぇぇん～～～～」

蘭と鈴鹿のお見送りを背中に受けながら、夢見を引っ張って、初子と以蔵は出陣したのだった

＜九重楼＞

「しくしくしくしく……」
「ほらほら、いつまで泣いているんですか」
初子が少女を宥める中、かたや以蔵はさっさと先に行ってしまう
「お」
何かを発見したように、振り向く
「おーい、夢姉、未来の旦那さま発見したーぞ」
「ぐすっ……ど、どれですかぁ？」
「コレ」

紅こべ大将を夢見の前に突き出す

「はひぃぃぃぃぃぃ！？」
大慌てながらも、バスバス、と至近距離から矢を連射する夢見
「あーあ、旦那さま穴だらけで昇天、ひでーな、ドメスティックバイオレンスだよ」
「ど、どっちがひどいんですかぁ、うわぁぁん初子さまぁぁぁぁ！」

ビックリしたためか、当主の胸に飛び込んでわんわん泣き出してしまう

「もぅ……いっくん、あんまり意地悪しないのー」
相変わらず怒っているんだか怒っていないんだか分からない初子のふくれっ面に睨まれて、以蔵はむむぅとつぶやく
「朝の仕返しのつもりだったんだけど、何かこれ以上やると、嫌われちまいそーだな……」
「いっくんなんてぇ～、き～らい～ですぅ～～」

お世話にも、後ろから援護射撃が飛んでくる

「むぅ」
「まったくもぅ、ケンカするほど仲が良い、もほどほどにするんですよ二人とも」
初子に撫で撫でされながらも、夢見は仲良し違いますぅ～～と首を振る
以蔵が少し離れて、やりすぎちまったかな、と思いながら先に進む
「……ん」
と、先ほど以蔵の倒した鬼から、淡い光がにじみ出てきて……

「オイ、夢姉」
「なんですかぁー」
「本当に、お前の未来の旦那さまが出てきたかもしれねーぞ」
「ふぇ……」

巨大な妖怪の身体の中から、神気が発せられ、神々しい御姿が浮かび上がる

○○「助かったぞ、人の子らよ……！」

その光は天に昇り、そして火の粉を振りまいて見えなくなった

「未来の、旦那さまぁ……？」

ぽーっとした表情で夢見が、小さくつぶやいた

その後三人は九重楼を上へ上へと登り、大量の奉納点（ほうのうてん）を手土産に、

壬生川家へ帰還したという

第三話－１１　「婿探」　１０２１年５月（後書き）

元服→夢見　出陣・九重楼（初子、夢見、以蔵）　訓練・蘭→鈴鹿

第三話－12　「空嘘」　1021年6月（前書き）

初子　1才5ヶ月
蘭　1才
夢見　9ヶ月
以蔵　6ヶ月
鈴鹿　2ヶ月

第三話－１２　「空嘘」　１０２１年６月

以蔵（いぞう）がブラブラしていると、居間で術のお勉強をしている鈴鹿（すずか）が目に入った

「きょうは蘭（らん）姉と一緒じゃないのか」
「母上なら、稽古場で当主さまと一緒のはずです」
そう言って鈴鹿は、再び＜お雫＞の術書へと目を落とす

以蔵は、そういえば夢姉は今月交神の儀だった、と思い出す
暇つぶしにでもなるかな、と以蔵は鈴鹿に声をかけた

「そういえば鈴鹿、知っているか？」
唐突に告げる
「はい？」
「蘭姉って、男なんだぞ」
「そうなんですか！？」

すごい勢いで食いつかれた
ちょっと引く以蔵

「あ、ああ、だからほら、うちの母さんのことが好きなんだよな」
「なるほど……それは、気づきませんでした」
あんなに女性用のお着物が似合ってらっしゃるのに……とつぶやく鈴鹿

「あんなに腕っぷしが強いのも、納得だよな、うん」

「え、でも、当主さまの方が強いんですよね？」
「ああ、母さんはイカ人間だからな」
「イカ人間だったんですか！？」

信じるのかよ、と思いつつも続ける以蔵

「槍で突くときに、間接を外して微妙に距離を伸ばしたり、イカみたいに身体を和らげて遠心力をつけて威力を倍増させたりするんだ」
「すごい……それも、魚介類の力なんですね」
「ああ、ピンチになると二本のお下げからスミを吐くからな」

もはや止まらない以蔵

「そんな人のお子様なんですね、以蔵さま」
「……」
思わず黙る以蔵
すなわちイカ人間とカッパの混血、以蔵
「ま、だからこの家でマトモに強くなろーなんて、バカらしいってことさ」
「な、なるほど……」
「蘭姉は男で、母さんはイカ人間だしな」
「凄いですね……あ、母上、当主さま」

以蔵の動きが硬直する

後ろから、何か、強烈なオーラを感じて、冷汗がだらだらと流れる
「……男、か」
以蔵の右腕が万力のような力で掴まれる
「うふふ、イカ人間、ですかぁ」
以蔵の左腕が鎖で締め付けられるように、握られる

「まぁ何だ、鈴鹿……今のは全部ウソだから、信じるなよ……は、ハハ……」

蘭と初子の、稽古しましょ稽古しましょの掛け声に引きずられて、以蔵はどこかへと連れて行かれていった

「……？　ウソ？」

きょとんとした鈴鹿を置いて

＜交神（こうしん）の儀＞

「それでは、張り切って参りましょー」

今月は夢見（ゆめみ）の交神の儀である

「あのぉ、イツ花（いつか）さぁん」

もじもじして、照れながら夢見がイツ花を上目がちに見つめる

「はいはい、神様表はここにキッチリ用意してますよォ」

「先月ぅ、九重楼（くじゅうろう）から開放された神様って、ご存知ですかぁ……？」

「あー、えっと待ってくださいネェ」

ぺらぺらとメニューをめくるイツ花が、新、と振ってある神様を発見する

「居ました居ました、ひとつめ入道から開放されたタタラ陣内さまですネ！」

「タタラ陣内さま……」

ぽーと熱い瞳で天井を見つめる夢見
「あ、あの、どうしましたァ？」

「そ、その方でお願いしますですぅ！」
「ちょっと奉納点が低い神様ですケド、よろしいんですか？」
「運命の人なんですぅ、構いませぇん！」
勢いに押されて、思わず頷くイツ花

「で、ではお呼びしますね」

タタラ陣内「俺を選ぶとは、見る眼があるぞ」

～～

やがて夜も更け、交神の儀が終わり……

「あの……タタラ陣内さまぁ？」
「……何だ、人の子よ」
「あの、あの……ユメを、タタラ陣内さまの奥様にしてもらえませんかぁ……？」
「……そうだな、お前が朱点童子を倒せば、考えてやろう」
「……約束、ですよぉ……」

その後、ぽーっとした夢見が部屋に戻ろうとして、
ボロ雑巾のように廊下に倒れていた以蔵を思わず踏みつけたのは、

関係のない話

第三話－１２　「空嘘」　１０２１年６月（後書き）

交神の儀・夢見×タタラ陣内

第三話－１３　「身重」　１０２１年７月（前書き）

初子　　１才６ヶ月
蘭　　１才１ヶ月
夢見　　１０ヶ月
以蔵　　７ヶ月
鈴鹿　　３ヶ月

第三話－１３　「身重」　１０２１年７月

夏の暑さにも負けない活発な少女が、壬生川（みぶがわ）家を駆け回っていた

「……出陣の準備は整ったか？」

分厚い袴を着ていながら、汗ひとつかいていない涼しげな表情で、部屋を巡る

寒さに弱く、暑さに滅法強い、爬虫類系少女こと蘭（らん）だ

「蘭姉、みんな整ったら起こしてくれぃ……」

一方、夏バテの代わりに１年中バテている風貌の以蔵（いぞう）が、居間の机に寄りかかって居眠りを始める

「……出陣前に眠れるとは、図太いのか、バカなだけか」

「……いや一応、まだ聞こえてっから」

以蔵のつぶやきは気にせず、初子（はつこ）の部屋に向かう蘭

「……整ったか、初子」

障子をがらりと開ける

「あ、ちょ、ちょっと待って」

丁度下着姿でさらしを身体に巻きつけている初子がチラと見えた

「……細いな」

「な、なんですか」

なめらかな背中を向けつつ、初子は顔だけ振り返って尋ねる

その頬がわずかに紅潮している

「いや……その身体から、どうしてあんな力が出るのか、と思って

な」
「だ、だからって着替え中にマジマジと見つめなくても！」
「……ほら、出陣の時間だ、早く着替えろ」
「じゃあ閉めてくださいっ」
分かった……と、しぶしぶと障子を閉める蘭
「……何故、女同士なのに照れるのだろうな」
誰かがその場にいたなら、なぜ女同士なのに蘭の顔が赤いのかと、問い詰めていただろう

それはそうとして、最後に夢見の部屋に向かう蘭
「……夢見（ゆめみ）、出陣だ」

相変わらずの無表情の蘭の顔が、障子を開けた途端にポカンと呆ける
夢見が布団に寝転んでいた、大きなお腹を抱えて

「あ、蘭さまぁ」
「……夢見、それは何の真似だ？」
「うふふぅ～、ユメぇ、ママになるんですぅ～」
自分の膨らんだお腹を撫でて、幸せそうに微笑む夢見
「ほらぁ、先月交神（こうしん）の儀をしちゃいましてぇ……えへへぇ～」
「……ふむ、では出陣はどうする」
「あんまり動くとぉ、ユメ、子供のために悪いですかｒ――」

蘭は持っていた薙刀で、夢見の腹を一閃する

「はひぃいいいいいっぃ！？」
夢見の膨らんだお腹の切れ目から、羽毛が溢れる

鳥の羽だらけになった夢見の部屋で、蘭が憮然とした表情でつぶやく
「これで戦場に出られるな」

「ひぃぃぃ……」
「……まったく、腹に布団を丸めていれて、何をしている」
「うぅぅ～～……」

その場でぐずぐずと泣き出す夢見に、蘭はため息をつく、と

「ちょっと、蘭さん何をしているんですかっ」
慌てて着物を身なりを整えたためか、珍しく髪を下ろした初子が蘭に駆け寄る
厄介なところを見つかってしまった、と蘭はチッと舌打ちする
「ちょっと、何ですかこの部屋……鳥……？」
「……ああ、サギが１００羽ほど来て、夢見の部屋で暴れていたから、薙刀で追い払ったのだ」
「うわぁ、それは大変でしたねぇ……ってそんなわけないじゃないですか！」

見事なノリツッコミを披露しつつ、夢見に駆け寄る初子

「ユメちゃん……普通の女の子になりたかったんですぅ……」
「夢見ちゃん……」
ぐすぐすと布団の中で泣く夢見に、初子が悲しそうな表情を見せる
戦いが得意ではない夢見にとっては、子供も産めず、好きでこんなところに生まれついたわけではない、ということだろう

横から蘭が告げる
「……無理だ、諦めろ」

「ら、蘭さん！」
「この家で戦いたくないと言うなら、死ぬしかない……他に生きる道はない、なんだ初子」
「だからって、言い方ってものがあるでしょう！」

うっ、と引く蘭
徐々に怒気を宿してきた初子の闘気に、部屋の羽毛がぱらぱらと舞う

「……だからと言っても、俺の言い分が間違っているわけではあるまい」
少し揺れた声色で弁解する
初子を怒らせるのは色々な意味で怖い
「蘭さんの意見は正しすぎるんです、それ以外の意見を封じ込めちゃいます」
初子は夢見を抱きしめながら、優しい声で慰める
「ほらもう、こんなに怯えて……」

（……何故、俺が悪いみたいな雰囲気になっているんだ）

出陣をサボろうとしていた夢見が初子に慰められ、かたや蘭は初子に睨まれる立場になってしまっている
「そんなやり方じゃ、四代目当主なんてあげられません、まだ以蔵のが頼りになりそうですもん」

「……な」
その言葉には、さすがに絶句する
（俺の何が悪いというのだ……）
理不尽に感じる
各人の嗜好を尊重したからと言って、身体能力や術の威力が急に

伸びるわけでもあるまいに

「分かりました、夢見ちゃんは今月お休みしましょうね」
「初子さまぁ……」
「初子……」
ぽんと手を叩いて、蘭に振り返る初子
「そうだ、代わりに鈴鹿（すずか）ちゃんを連れて行きましょう？　今月から実戦部隊に入りましたもんね」

つまり、初子、蘭、以蔵、鈴鹿での四人部隊ということになる

「……それは、甘やかしているだけじゃないのか？」
「自分の人生くらい、自分で歩み方を決めてもらいたいです」
蘭の非難する視線を、初子は真っ向から受け止める
「良いじゃないですか、戦わなくたって、夢見ちゃんの人生ですもん」
部屋に散らばった羽毛を集めながら、初子ははっきりと言う

「……初子のそういう甘いところは、俺は好きだが、やはり嫌いだ」
蘭はそう残して、鈴鹿を呼びに自分の部屋へと戻っていった

＜出陣・白骨城（はっこつじょう）＞

というわけで、やってきました白骨城

「夏だけにしか出ない、幻の城なんだぞ鈴鹿」
「へー、不思議ですね……」

鈴鹿を引き連れた以蔵に叱責する蘭
「……以蔵、毎度毎度ウソを教えるんじゃないぞ」
「これはホントのことじゃねーか！」

その二人の間で鈴鹿は、え、ウソなの？　と挟まれる

「さぁさぁ、行きましょうー♪」
ズンズンと進んでいく初子の後を追う三人
「鈴鹿は初出陣だからなー、オレらの後ろで引っ込んでるんだぞ」
「はい」
生真面目な顔で頷いて、後方から＜泉源氏＞で援護する鈴鹿
「いやだからって、たまには薙刀で攻撃しても」
「はい」
3回泉源氏の後、1回攻撃という、まるで機械のような正確さで戦う鈴鹿
「……ま、まーいいが」

鈴鹿の動きは悪くないのだが、身近で蘭と初子という熟練者を見て育った以蔵にとっては、将来有望なのかどうなのか今ひとつ分からない

「鈴鹿のキレってどーなの」
蘭に聞いてみた
「……今の初子には遠く及ばないな」
「いや当たり前だから」

アンタは母さんしか見てないのか、と思わず言いそうになる

「じゃあ母さん、鈴鹿の動きってどーなの」

今度は前線をゆく母親に聞いてみる
「あ、見てなかった」
どうしようこの家族、と以蔵はふいに不安になるのであった

かたや戦績の方は、初子・蘭タッグにより、恨み足と左右のカイナを撃破し、
白骨城の１７階まで登ったところで、今月の進撃は終了したという

第三話－１３　「身重」　１０２１年７月（後書き）

出陣・白骨城（初子、蘭、以蔵、鈴鹿）

第三話－１４　「次期」　１０２１年８月（前書き）

初子　１才７ヶ月

蘭　１才２ヶ月

夢見　１１ヶ月

以蔵　８ヶ月

鈴鹿　４ヶ月

第三話－１４　「次期」　１０２１年８月

＜夢見（ゆめみ）の子＞

そわそわしながら待つ夢見の元に、ニコニコ笑顔のイツ花（いつか）が現れる

「タタラ陣内さまより新しいご家族を預かって参りました！」

「わ～ぃわ～ぃですぅ～」

夢見が待ち望んだ自分の子だ

「おめでとうございます！　男のお子様ですよ！」

「男の子ぉ、やりましたですぅ～～」

手を叩いて喜ぶ

「あらァ、夢見さまは男の方が良かったんですか？」

「はいですぅ、だってぇ、女の子に女親だとあんまり言うこと聞いてくれないかもしれないじゃないですかぁ」

親が夢見ならどっちでも同じだろ、と以蔵がいたなら言ったかもしれない

「口元が母君にソックリなんですネェ、それではお呼びいたしますよー」

がらりと障子を開けて入ってきたのは、派手な赤い髪に白い肌の少年だった

鼻の上に大きな傷のようなアザがあり、どことなく不敵な面構えをしている

○「初めましてお母さん！　よろしくっす！」

名前は門司（もんじ）、のの香（ののか）から代々続く弓使いの家系に生まれた初の男子だ

「よろしくですぅ、門ちゃん～」

「俺っち、お母さんの力になれるよう、頑張るよ！」

「え～、別に力にならなくても良いですぅ～」

「へ」

ニコニコと微笑む夢見に、気の抜けた顔を見せる門司

「ユメ、自分の子供が出来ただけで、十分幸せですぅ～」

「は、はぁ？」

小さな門司を抱きしめて、頭をよしよしとする母

「しいて言えばぁ、元気な子でいてほしいですぅ」

「げ、元気な子っすか……そうだ、じゃあ俺っち、特技を披露するよ！」

「わぁ、特技ですかぁ？」

ぱぁっと顔が明るくなる夢見・母子

「あ、ああ！　俺っち人を驚かせるのが大好きで、よく天界でやってて何度も殺されそうになってたんすよ！」

「うわぁすごいすごい、見せて聞かせてぇ～」

何だこのバカ親子は、とでも言いたげなイツ花の冷めた視線も気にせず、盛り上がる二人

「ワハハ、俺っち、実は夢見お母さんの子供じゃないんですよ、お父さんが浮気して別の女にうませｔぐぇ、ちょ、おかあＳ――」

「何ですってぇぇ〜〜〜〜、ユメぇぇ、門司を殺してユメも死にますぅぅぅ〜〜〜〜〜」

夢見が渾身の力で門司の首を絞めるのを、その場に残っていたイツ花が助けを呼び、慌てて駆けつけた鈴鹿（すずか）が夢見を止めたのだった
それ以来、当たり前だが門司にはドッキリ禁止令が出たという

＜以蔵（いぞう）の元服＞

長い後ろ髪を結び直した以蔵が正装で、儀礼の間から退出してくる
誰もいなかった

「いや……予想通りだけどな……」
屋敷を通り抜ける夏風が、以蔵の心の隙間に吹きすさぶ
「何だろうな、オレのこの家での扱いって……」
なまじ当主の息子に生まれてしまったことが、よりいっそう寒風を立てるのかもしれない

思えば幼児の頃から、母を周囲の大人に取られて、遊び道具は槍のみ
唯一の話し相手の夢見は浮かれきった幸せな性格だし、ツッコミ以蔵の枯れっぷりはますます増していったという
そんな、壬生川（みぶがわ）家にしては珍しく消極的な少年、以蔵
あるいは壬生川家に育った男は、皆不幸になるという呪いでもあるのだろうか

以蔵は人知れず、ため息をつく

居間を訪れると、そこには初子（はつこ）、蘭（らん）が難しい顔をして対面していた

「ん……」

またこの前のような言い争いだろうかと思い、早々に立ち去ろうとした以蔵を初子が呼び止める

「そうそう、いっくんこっちこっちー」

「何さ」

初子が座布団を叩いて、以蔵を導く

その軽い口ぶりに、多少安心して輪に入ってゆく

「さ、というわけで、」

押し黙っている蘭の前、何となく気まずさを感じている以蔵の隣で、初子がニッコリと微笑む

「四代目当主でも決めましょうか♪」

「……」

「母さん!?」

明るっ、とツッコミを入れる間もなく、初子はさっさと話を進める

「わたしはお二人の方で、やりたい方がやれば良いと思います」

「……なら、俺がやる」

「早いですね蘭さん」

初子はそれから以蔵に顔を向ける

「いっくんは、どうなのー?」

「……蘭姉がなるんだろ？　じゃあオレは何も言わねーよ」

「そっか、いっくんはやりたくないんだ」

「誰もやりたくねーとは言ってないけど……」

以蔵は蘭の強面な顔を見て、ため息をつく

そんな以蔵の脳裏に、ふいに泣いている夢見が映し出される

（何で、夢姉が……）
戦場に出たくないと、駄々をこねて、いつも笑っていて、変な喋り方で
「……夢姉も、戦に？」
「え？」
「夢姉も、戦に連れて行くのか、蘭姉」
「当然だ」

少しも迷わずに、蘭は言い切る

「……夢見には実力がある、佐和譲りの弓の腕に、その技力だ」
蘭は夢見を嫌っているわけではない、その能力を買っているだけだ
初子や以蔵ほどの矛性能はないが、技力、守りの術は佐和以上の
素質を見せている夢見を、出陣させないのは惜しいと考えているのだ

表情を見せない蘭だが、その分かりやすいほどの実利主義は以蔵にも分かっていた
今年の大江山（おおえやま）はもはや三ヵ月後に迫っている
やってきたばかりの夢見の子供では、経験が豊富な夢見の代わりは務まらない以上、出陣するのは夢見でなくてはならない

理屈では分かっているのに、この胸のモヤモヤは何だろう
「……もーちょっと、時間とかもらえねーかな」
「良いけれどでも、あんまり、ないんだよね」
初子の前には、飲みかけの漢方薬が置いてあった
「母さん……もしかして、身体、」
以蔵を見て初子は、あははと笑った
少年の心に、その笑顔が染み渡る
迷わない蘭や、一生懸命な初子が、羨ましかった

「……そーか」
以蔵は立ち上がって、そのまま部屋を出て行った
今月は夏の選考試合がある、その準備をするために

＜選考試合＞

京の都に行くというのに、夢見は門司の訓練に勤しむと励んでいた
それ自体は大変結構なことなのだが、どうにも夢見の言動なだけに蘭と以蔵は信じ切れなかったが
とはいえ、その申し出をあっさりと受け入れた初子は、蘭、以蔵、鈴鹿の三人と共に選考試合に出場した

壬生川家の出場三度目となる夏の選考大会にて、
初子率いる、剛守の蘭を中心とした壬生川一族は、初めての優勝を遂げたという

春・夏の選考試合連覇により、
ついに壬生川家は、京の都に並ぶ者無しの武勇を手に入れたのであった

第三話－１４　「次期」　１０２１年８月（後書き）

元服→以蔵　出陣・選考試合（初子、蘭、以蔵、鈴鹿）
門司→初見・弓使い　訓練・夢見→門司

第三話－15　「死期」　1021年9月前編（前書き）

初子　1才8ヶ月

蘭　1才3ヶ月

夢見　1才

以蔵　9ヶ月

鈴鹿　5ヶ月

門司　1ヶ月

第三話－１５　「死期」　１０２１年９月前編

幸四郎（こうしろう）が努力の剣士なら、初子（はつこ）は壬生川家槍術の創始者であり、天才だった
２ヶ月になった初子が実戦部隊に入った当時、その突きの速度は父親の幸四郎をすでに超えていたとも言われている

初子の朝は早い
日の登る頃に目を覚まして、井戸水で顔を洗い、同じく早起きのイツ花（いつか）が作る料理のお手伝いをする
それから槍の素振りをして、朝食の完成する時間になったら、皆を起こしに回るのだ
それが初子の日課であったが、この日は一層早く起きてしまった

むっくりと布団から起き上がる
隣には最近めっきり上背がついて、頭を撫でるにも背伸びをしないと届かない以蔵（いぞう）が寝ていた

「……どうしよ」
最近、毎日少しずつ早起きになってきている気がしていたのだが
「……仕方ないなあ」
以蔵を起こさないよう静かに寝巻きを脱いで、洗い立ての稽古着に着替える
そろりそろりと部屋を出て、初子は顔を洗ってから、居間に向かった

誰もいないと思った居間に人の気配があった

「……イツ花さん？」
「あらァ当主さま、お早いですネェ」
微笑むイツ花が、居間の柱を磨いていた
「こんな暗いうちからお掃除なんて、いつ寝ているんですか？」
「巫女ですから、日の出前に起きて、昼子さまにお祈りするんですよォ」
胸を張るイツ花

「それにしては……イツ花さん、よくお昼寝してますよね」
「巫女だって眠くなるんですよッ」
その言い方が面白くて、初子はあははと笑った
「当主さまこそ、どうしたんですかこんな朝早くに？」
「うーん、どうしたんでしょうねぇ」
首をひねる初子が着替えた格好をしているのを見て、イツ花はあーあー、と声を上げる
「ダメですよ当主さま、いい年しておねしょなんてェ」
「し、してませんって！」
間髪入れず叫ぶ初子
「もう……それじゃイツ花さん、からかった罰として、温かい渋茶を淹れてきてくださーい」
「からかったわけじゃないんですケド……」
「本気で言ってたんですか！？」
早朝とは思えない声で突っ込む初子に押されて、イツ花は台所に消えてゆく

まったく……と息をついて、初子は縁側に座り込んだ
明け方の涼気がひんやり心地良くて、つい気持ちが高まってくるとても静かな壬生川家で、初子は空を見上げる
言葉に表せないさまざまな思いが浮かび、消えてゆく

とても綺麗だと思った

白む空に光る星も、朝露に濡れる葉々も、藤のつぼみも、橙色に光る日の出も
いつの間にか茶を載せたお盆を持って傍に来ていたイツ花が、初子に微笑みかける

「当主さまは、ホントに泣き虫ですね」
その時初子は、自分が泣いていることに初めて気づいた

〜〜

また初子は、学問熱心な戦術家でもあった

玄輝（げんき）、幸四郎と続く男系当主が個々の力量を重視した戦法を取っていた事に比べて、女性当主・初子は一家での連携の和を重んじ、特に回復の術を愛していた
彼女自身打たれ強い娘ではないことが、用心の芽を育み、やがて彼女はただのひとりも重傷者を出さない戦い方を体得した

老いるということは、昨日出来たことがきょうは出来なくなる、その繰り返しだ
少しずつ、そうして初子の見ていた人は老いて、亡くなっていった

〜〜

お昼、稽古場で汗を流していた初子の下へ、蘭（らん）が駆け寄る

「初子、先月の選考会で頂戴した１３３２０両の使い道なのだが…」

「はーい？」

「……全額、京の商業に投資しても良いだろうか」

「うん、良いと思いますよー♪」

あまりにも簡単に引き受けられたため蘭はたまに、初子が何も考えてないんじゃないか、と思ってしまう

「……それはそうと、ちゃんと昼の漢方は服用したか？」

「千金人参の粉末なら、いただきましたよー」

あんまり美味しくありませんでしたけど、と舌を出す

「……それならいいがな、四代目当主の件は決まったか？」

「あー、うーん」

槍を持ったまま腕を組む初子

「……やはり初子も人の親、自分の息子を当主にしたいと思うか？」

「いえ、それは全然」

キッパリと否定する

「でもいっくんは、ああ見えてみんなのことをちゃんと考えてくれてますから」

蘭の印象では以蔵は、何を考えているのか分からない地味な少年、としか思ってなかったのだが

「ふむ……では初子、あの時の賭けはまだ有効か？」

「賭けって、当主のことですか？」
「無論だ」
蘭は稽古場の壁に立てられている薙刀を取る
「そうですね、丁度良い機会ですし、構いませんよ」
初子はニッコリと笑って、槍を構え直す

蘭は初子に対峙して、その力量に改めて驚嘆する
１才８ヵ月という高齢でありながら、その覇気に衰えはなく、未だに蘭を圧倒している
「道場を壊したら、またイツ花さんに泣かれちゃいますね」
半身に構えた初子が、冗談っぽくつぶやく
「……行くぞ」
蘭は薙刀を振り回し、けん制に払う

絶え間ない蘭の薙刀を槍で押さえ、後退しながら避ける初子
上段に構え、蘭は裂帛の気合と共に初子の肩に打ち下ろす
「……ハァ！」

初段を受け止められ、翻す二段目――
初子の手から、槍が跳ね飛ばされていた

「あ……」
初子は困惑したようにつぶやく

蘭は初子に突きつけていた薙刀を、無言で下ろした
「あはは、負けちゃいましたね……」
「……初子は稽古の後だからな、疲れていたのだろう」

薙刀を床に放り投げて、蘭は道場から退出してゆく
初めての勝利だというのに、少しも嬉しくなかった

何故こんなにも苦いのか、蘭は自分でもその理由は分からなかった

残された初子は道場に寝そべって、天井を仰ぎ見た
稽古場はとても静かだ
最近自分が早起きになってきたのは、とても綺麗な朝焼けを一日でも多く見たかったからだった、と初子はようやく気づいた
以蔵が出陣の呼びかけに来るまで、初子はそのまま寝転んで、天井を見上げていた

第三話－１６　「志貴」　１０２１年９月後編

＜相翼院（そうよくいん）＞

「さ、それでは参りましょう♪」
蘭（らん）、以蔵（いぞう）、鈴鹿（すずか）を引き連れて槍を掲げる初子（はつこ）

「つーか、母さん身体大丈夫なのか？」
「うん、漢方薬も飲んだし、バッチリ！」
「本当かよ……」

そのＶサインが何よりも信じられない、とでも言いたそうな以蔵

「え、じゃあウソ」
「ウソ！？」
あははーと笑う初子の横、鈴鹿が心配そうに見つめる
「でも、先月より動きが僅かですが、鈍ってます」
「……お前の目には、スカウターでもついているのか」
カラクリ鈴鹿を見て腕を組む蘭
「いえ、付いてません」
「見れば分かるから」

そんな光景を眺めて明るく笑う初子を、蘭も気遣う

「初子……体調が悪いなら、今月の出陣はこれまでにしても」
「わたし今朝ね、夢見ちゃんと、もしわたしたちが壬生川（みぶがわ）家に生ま

れてなかったらどうしたかな、って話してたんですよ」
先に進んでゆく以蔵と鈴鹿を眺めながら、初子は蘭に語る
「そうして考えたのが、わたし、夢見ちゃんと違って、京の町でやりたいことが何もなかったんです」
「……」
槍に体重を預けて続ける初子の声に、静かに蘭は耳を傾ける
「わたしはやっぱり、鬼を斬って生きていたかったんです、だから、最期の時も父と同じように、戦場に向かいたかったんです」
初子は蘭に微笑みかける
「相翼院に向かったのも父の倒れた場所で、これってやっぱり公私混同ですよね？」
「……そうだな」

蘭は遠くを見つめたまま、ふと漏らす
初子はきっと、その目は幸四郎（こうしろう）の面影を探しているのだと思った

「……佐和や夢見がお前を慕った理由が、今、初めて実感として理解できたよ」
「ふぇ」
「……何のことはない、お前は今まで……俺よりずっと難しい道を選んできたのだな、勝てなかったわけだ」
「勝てなかったって、一本取ったじゃないですかぁー」

悔しいのか、口を尖らせる初子に蘭が笑う

「今度は健康度が万全のときに、また一勝負な」
そう言って、蘭は以蔵や鈴鹿の様子を見に、駆けてゆく

その背中を見つめながら、初子は気丈に微笑んだ
「その約束は、守れそうにないですけどね」

その後壬生川家は相翼院で一ヶ月戦い抜き、鈴鹿と以蔵は、母親たちに匹敵するほどの実力を身につけてゆくこととなる……

＜壬生川家＞

「当主さま、お帰りなさい」

帰るなり、イツ花（いつか）がにっこりと初子たちを出迎えてくれた

「ただいま、イツ花さん」

以蔵があー疲れた……とつぶやき、鈴鹿が蘭に連れられてゆく、きっと戦場での汚れを取りに湯浴びにゆくのだろう

「ってあのォ、当主さま、ちょっとお顔の色が……？」

「嫌ですねぇ」

自分で可笑しくなって、つい微笑む

「いくらお勉強したからって、自分の事まで当たらなくても良いのに」

「当主さま……当主さま！」

初子はその場に倒れこみ、屋敷にはイツ花の悲痛な声が響いた

＜初子の部屋＞

「最期には、雪が見たかったですね……」
布団に横になりながら、初子がつぶやいた
「雪……ですかぁ？」
交代で看病していた夢見が、その声を拾う
「ええ、雪……わたしが壬生川家に来たときに初雪が降っていて、だからわたし、初子って言うんですよ」
「雪……」
「あーあ……あとたった3ヶ月だったんですけどね」
あはは、と微笑む初子の顔は青ざめていて、夢見にはその笑顔が痛々しかった
「初子さまぁ……」
「どうしたの、夢見ちゃん」
夢見は初子の手を握って、涙目で言う
「初子さまぁが居なくなっちゃったら、ユメが壬生川家に居たい理由が、またひとつ無くなっちゃいますぅ……」

元服しても泣き虫な夢見の頭を、初子は静かに撫でる
「門司（もんじ）くんが生まれて、理由がひとつ増えたでしょう？」
初子は子供に言い聞かせるように、優しく語り掛ける
「何事もね、順番なの……だから、これで良いの」
泣く夢見の頭を撫でて、初子は微笑んだ
それから間もなく、初子は少しの眠りに落ちていった

初子が次に起きたとき、部屋にはイツ花が待っていた

「当主さま、お目覚めですか……？」

「うん、おはよう……？」
部屋が暗い、夜になっているようだ
「当主様、お別れのときが近いようです……」
「みたいですねぇ……」

夜明けまで生きていたいと思ったけれど、それまで起きていられる自信はあまりなかった

「最後のお務め、新当主ご指名の任、責任をもって全うなさいませ」
「……壬生川家四代目当主は、蘭さんでお願いします」
「かしこまりました」

初子は安心したように息をつく

「長い間のお務め、ご苦労様でした」
「イツ花さんも、ずっとありがとうございました」
「……これからも近くから一族の行く末を見守っていてくださいませ」

イツ花の声に、初子はにっこりと微笑む

「はい」

初子の目に、光が差し込む
朝になったのだろうか、いやこれは、もっと暖かくて……

声が聞こえる

臥蛇丸（がじゃまる）さん、のの香（ののか）お姉さま、お父さま、巻絵（まきえ）お姉さま、
そして、佐和（さわ）お姉さま……
短い人生を頑張って生きてきたわたしを、祝福してくれているのだろうか

そうだったら、喜んで良いんだよね……、と初子は誰にでもなく尋ねる

６００日の人生において、１３回の戦場に出陣し、
大江山（おおえやま）以降の全ての戦いにおいて、無敗を貫いた稀代の知将が、
そっとまぶたを閉じる

光は天から伸びている
これを辿ってゆけばいいんだね、と初子はつぶやく

冷たい刺すような感覚に、光が遮られた
「雪だぞ！」
以蔵の声だ
初子の手に、とても冷たいモノが押し付けられていた
「い、以蔵さま」

「母さん、雪だ、雪が降ってきたんだよ！」
初子がうっすらと目を開けると、泣いている以蔵の顔と、その後ろに夢見が見えた
「いっくん……」
「なぁ、今年の初雪だよ、気の利かねー神様が頑張った母さんにって、こんなギリギリまで勿体ぶりやがって……畜生」

初子は手に当てられた冷たいモノを握って、頬に持ってゆく

「ああ……」
顔が綻んで、自然と声が出た
「つめたい……」

氷を千切りにした塊を持ったまま、初子は微笑んだ

「ありがとう、いっくん……あなたは、本当に優しい子だったよ……」
自分のために、こんな季節、どこまで行って氷を取ってきたのかあんなに慌てて、大変だったろうに
「母さん、庭にはもっと雪が積もってて……だから、ほら、オレと一緒に、庭に……おい、母さん！」
以蔵が初子の手を握って、怒鳴るように声を上げる

その以蔵の背中を夢見が抱きとめて、「もうやめなよぉ……」と

涙声でつぶやく
「でも……思いつめるところがあるのは、やっぱりわたしに似たのかな……あはは」

初子は最期の間際に、本当に嬉しそうな顔で微笑んでいた

「わたしは幸せだったって……ちゃんと思ってるから平気だよ……」

壬生川　初子　享年1才8ヵ月

その顔はまるで雪のように白く、綺麗だったという

第三話－１６　「志貴」　１０２１年９月後編（後書き）

出陣・相翼院（初子、蘭、以蔵、鈴鹿）
訓練・夢見→門司　老死・初子

第四話－1　「風鈴」　1021年10月（前書き）

蘭　1才4ヶ月
夢見　1才1ヶ月
以蔵　10ヶ月

鈴鹿　6ヶ月
門司　2ヶ月

第四話－1　「風鈴」　１０２１年１０月

以蔵が交神の間に向かおうとしていると、どこかから笑い声が聞こえてきた

「ん……？」

初子が亡くなって以来、少しだけ活気のなくなった我が家で、突き抜けたような明るい声が響く

何だか頭が痛くなってくるが、ちらりと庭に目をやる

「うふふぅ、そ～れぇ～」

「ワハハー、行くぞお母さんー」

１０月だというのに羽子板に興じるバカ親子（夢見と門司）を見て、以蔵は顔を押さえた

「門司は羽子板もお上手ですぅ～」

「俺っち実は、世界羽子板選手権で、優勝したんすよ～、前世だけど～」

「わぁ、門司はすごいですぅ～」

パコーンパコーンという音が響く

テンション高いふたりに突っ込むのも面倒で、以蔵は静かに後ろ手に障子を閉めた

＜交神の儀＞

「それではァ、今月は以蔵さまの交神の儀ということでェ」
「ああ、よろしく頼む」

以蔵の前、ちょこんと鈴鹿（すずか）が座っていた
イツ花（いつか）の頭が、何故、の二文字で埋め尽くされる

「お相手は……鈴鹿さまですか？」
「ちげーよ」
以蔵は鈴鹿の頭にチョップをかます

「……いたい」

本当に思っているのかどうか分からない無表情で、頭を押さえる鈴鹿
「お前、蘭（らん）姉と一緒に京の都の復興手伝いに行ったんじゃなかったのか」
「母上が、心配だから家に居ろ、って言ってました」

俺はそこまで信用されてないのか、と思う

「で、何でこの部屋にいるんだ」
「……交神の儀、ってどんなものなのかな、って」
淡々と喋る鈴鹿に、以蔵は眉をひそめる
「どんなものか、って……お前、交神の儀って何をするのか知らねーのか？」
「はい」

参ったな……、と頭をかく以蔵
どう説明すればいいのか、分からない

「蘭姉は、何か言ってなかったのか？」
「母上は、試練だ、とおっしゃってました」
あの人らしい言い方だ、と思う
「でも夢見さんに聞いたら、お琴と演奏者のお戯れです、とおっしゃりまして」
「……それで、どっちが本当か分からねーから、自分の目で見にきたってことか」
「はい」

以蔵は鈴鹿の頬を引っ張る

「痛いです」
「……じゃあ、いっそオレとするか鈴鹿」
枯れた以蔵の口調に、鈴鹿は、えっ、と珍しい反応を見せる
「初子さんは、交神の儀は好きな人とするものだ……とおっしゃってました」
その頬がぽっと赤くなってゆく

ありえない反応に、以蔵は戸惑ってしまう、ちょっと待て、ちょっと待て鈴鹿

「ですから、以蔵兄上とはちょっと……謹んで、お断りさせていただきます」
「……そんなオチだろうとは思ったが」
以蔵はうなだれた
見抜けなかった自分が、ふがいなく思える

「じゃあほら、さっさと出てけ出てけ、邪魔だ邪魔だ」
鈴鹿の背中を押して、シッシッとする以蔵
「でも、そんな私を兄上は好いてくださるのですね、光栄に思います」
「言葉のアヤだ」
そう言い切って、ぴしゃりと障子を閉める

「……それに、お前よりかはナンボか夢姉のがマシ、だ」

それまで事態を眺めていたイツ花が、ぽつりとつぶやく
「何だかそれ、フラレ男の言い分みたいですね、以蔵さま」
「……放っておいてくれ」

それから以蔵は、己の弱点を補強するために、水の神との交神を選んだ

白銀の髪飾りをつけた、眉目秀麗な美女の神様であり、
奉納点にして１３０００を越える、天界でも中堅に位置する女性だ
「よろしくお願いするよ、神様」

鳴門屋渦女「さぁ、わらわの渦にお入り……」

そういえば、とカッパと交神した母親を思い出し、
とりあえず今だけは、男に生まれたことを感謝する以蔵であった

第四話－1　「風鈴」　1021年10月（後書き）

交神の儀・以蔵×鳴門屋渦女

第四話－2　「晶晶」　１０２１年１１月前編（前書き）

蘭　　１才５ヶ月
夢見　１才２ヶ月
以蔵　１１ヶ月

鈴鹿　７ヶ月
門司　３ヶ月

第四話－2　「晶晶」　１０２１年１１月前編

道場で以蔵（いぞう）の打ち込みの掛け声が響く

「破！」

木の槍を振るい、藁人形の頭部を一撃で吹き飛ばす
荒く息をつく以蔵に、後ろから声がかかった

「……悪くない」
「蘭姉（らん）？」
気づかなかった
以蔵は手の甲で頬の汗を拭う
「……最近、以蔵は訓練ばかりをしているな」
「あー、うんまぁ、暇だしな」

初子（はつこ）が亡くなって以来、ひとりで居る時間が増えた以蔵は、その空き時間のほとんどを道場か庭で槍を振ることに費やしていた
蘭がいつもの無表情でつぶやく
「夢見（ゆめみ）を息子に取られたからか」
「ちげーから」
そっぽを向いてつぶやく
「……その夢見は先ほど、門司（もんじ）と鈴鹿（すずか）と一緒に、被って叩いてジャンケンゲームで遊んでいたぞ」
一緒に叩いて、額でも割ってやれば良かったのに、と以蔵は思う

「蘭姉も、お喋りになったじゃねーか」

「……対外交流というものは、なかなか面倒なものだからな」
よく見れば他所行きの着物を羽織っている、先ほどまで京の都を訪れていたのだろう
あの蘭が、だ
初子の生きていた頃からは想像もできない
「……誰もが我々を奇異の視線で見る、鬼の一族、とな」
蘭は疲れたように上着を脱ぐ
「俺は良い……鬼のようなものだからな、だが……かつて壬生川（みぶがわ）家に生きた巻絵（まきえ）や初子（はつこ）に、鬼の異名は少々物々しすぎる」
「……そーだな」
壁に立てかけてある薙刀を取り、蘭は袖をくくる
「少し、身体を動かさせてもらうぞ」
「ああ」

以蔵は槍を水平に構えて蘭と対峙する
かつてあれほどに届かないと思っていた蘭の薙刀が今はただの木の棒に見えていた

「なぁ蘭姉、蘭姉は母さんのライバルだったんだろ」
「……俺が初子に勝てたことなぞ、術法とにらめっこくらいなものだった」
その真面目くさった言い方に、以蔵は少し吹き出してしまう
「二番目のは何だよ、それ」
「何が面白いのか、初子はな……俺の顔をじっと見ると、すぐに笑い出すのだ、困ったよ」

今思えば、何て失礼な人なんだろう、と以蔵は思う
それから以蔵と蘭は数合ほど打ち合った
道場に、乾いて澄んだ、気持ちの良い音がこだまする

木の棒を打ち合わせながら、以蔵は蘭に尋ねる
「全盛期の母さんと、今のオレ……どちらが上だった？」
「初子だ」
蘭は迷うことなく断言する
「ひいき目じゃねーだろうな」
「失礼な」

１才５ヶ月の蘭が、０才１１ヶ月の以蔵を目を細めて眺める

「お前はまだ若い青年期だろう……成熟期の初子には、まだ届かない」
「……そーか」

以蔵は蘭に稽古をつけてもらいながら、その言葉を噛み締めていた
大江山（おおえやま）への出陣は今月であり、恐らく自分にとって来年はない

蘭の去っていった道場で、顎を伝う汗を拭きながら、以蔵は必死に考えていた
戦うことでしか役に立てないのなら、初子に及ばない自分は一体なんなのか

生きている意味があるのか？

以蔵は道場の床を拳で叩く
痛みはなく、衝動は発散もされない

「朱点を……討つ」

結局はそれが、母親にしてやれる唯一の恩返しであり、名誉を手にする唯一の道なのだ
それしかないのだ

＜夢見の部屋＞

騒がしい部屋の前に立って、以蔵は障子をがらりと開けた

「……夢姉、入るぞ」

夢見が琴を弾いて、門司が歌っていた
「はなァー、はなァー、どんなはなァァァーーー！」
どこかで聞いた曲だったが、そんなにコブシは効いていない、と思う以蔵

ぽろろんぽろろんと弾いている夢見に、声をかける
「夢姉」
「ぽろろ～ん？」
「喋れよ」
どこで覚えたのか知らないが、夢見は琴を横に置いて、以蔵と向かい合う
「どうかしましたかぁ、いっくん？」
「いっくんは止めろって、ずっと言ってるだろーよ……」

「だってぇ、いっくんはいっくんですぅ」
変わらず微笑む夢見を見て、ため息をつく以蔵
「悪いけど門司、ちょっとあっち行っててくれ」
「はなァー？」
舌を引っこ抜いてやろうか、と思う
「えー、じゃあ暇だから遊ぼうっちよー以蔵っち兄さんー」
「良いぞ」

うなずくと以蔵は、夢見の部屋に転がっている鞠を掴んでがらりと障子を開き、庭に向かって思いっきり投げる
凄まじい速度で、林に吸い込まれていった鞠の方角を指差す

「取ってこい、門司」
「俺っち、こんな無茶な命令を受けたのは壬生川家に来て初めてだ！」
泣きながら、走っていく

やれやれ、と以蔵は障子を閉めて、再び腰を下ろした
「ユメに遊んでもらえないからってぇ、門司に八つ当たりしちゃダメですよぉ？」
「ちげーから！」

思わず声を荒げる以蔵
どいつもこいつも、だ

「ユメは教育ママなんですからぁ、もう遊んでばっかりいられないんですぅ、子供が一番大事なんですぅ、良い学校出てぇ、良い大学に入ってぇ」

「少し黙れ……うん、元気そうで何よりだ、ハハ」
睨まれたので、軽くフォローを入れておく

そういえば、門司が生まれて以来、久しぶりの会話らしい会話だ
以蔵は槍術に、夢見は子育てに夢中だった
改めて問う
「今月、大江山に出陣するんだが、夢姉はどーすんだ？」
「どうするもなにもぉ、蘭さまに拉致されるに決まってますぅー」

口を尖らせる夢見に、どうかな、と呟く

「今の蘭姉なら、きっと、オレと鈴鹿と三人で行く気さ」
「そんなことどうして分かるんですかぁ」
ユメを二時間も逆さ吊りにしてたくせにぃ、と意外に根に持つ夢見
「どーして……んー、どーしてだろーなぁ」
「説得力が全然ありませぇん～」

頬を膨らませたり、そんな風な振る舞いをしていると、とても1才2ヶ月の一児の母には見えない

「でも、蘭姉はもう無理に夢見は引っ張っていかない、門司もだ」
「むぅ……」

もし、無理矢理連れ出そうとするなら、オレが……と言いかけて、以蔵は口をつぐんだ
その途端、夢見が弾かれたように叫ぶ

「わっかりましたぁ！」
「な、何がだ？」
「ユメ、大江山に出陣しますぅ！」

「なにぃ！？」

何を思ったのか夢見は突然立ち上がり、目を輝かせる

「すっかり忘れてましたぁ！　夢見家族計画を完了させるためにはぃ、朱点童子を討たなきゃいけないんですぅ！」

タタラ陣内さまと約束したのだ、朱点を討てばお嫁さんにしてくれる、と

「ユメ、初子さまとお喋りしたんです、朱点を倒したら京の都におうちを建てて、そこで、子で暮らすんだ、って……」

手を組んで、キラキラ目で天井を見つめる

もはや以蔵は幼年期のように、黙って聞くしかできない

「は、はぁ？」

「お庭にはお犬を飼ってぇ、門司とお犬が競争してぇ……門司とお犬が芸を磨いて、門司とお犬がコンクールに出てぇ」

「門司はお前のペットか」

「それで、ユメはタタラ陣内さまとぉ、幸せに過ごすんですぅ……あ、いっくんもたまになら遊びに来てもいいですよぉ」

思い出したように付け加える

「たまに、なのか」

軽く傷つく

「毎日こられたらぁ、ユメとタタラ陣内さまの営みがぁ……」

ぽっと頬を染める夢見に、以蔵は呆れた顔をする

「でも、ま……楽しみにしているよ、お呼ばれするのも」

以蔵はそう言って、立ち上がる

「はぁぃ、そのために打倒・朱点童子（しゅてんどうじ）、ですぅ！」

握り拳を突き出す夢見に、以蔵は思わず笑った

打倒・朱点……、夢姉には、なんて似合わない言葉なんだろう

「今月、頑張ろーな」

「はいですぅ～」

そう言い残して、以蔵は夢見の部屋から出てゆく

＜蘭の部屋＞

蘭が静かに部屋に戻ると、暗がりの中に鈴鹿がいた

「……驚いたぞ」

「おかえりなさい、母上」

蘭に背を向けて、鏡を見つめながら、ぶつぶつとつぶやいている

鈴鹿

怖すぎる

「何をしていたのだ鈴鹿」

「しりとりです」

「……ひとりで、か」

背中を向けたまま、鈴鹿はこくりとうなずく

「自分の語彙がどれほどあるのか、時間はかかりますが、検索できます」

する意味はと聞きたかったが、おそらく蘭には理解できないのではないかと思う

「私の語彙の中では、日常身の回りの物が1割7分で、もっとも高

い比率でした」

記憶しているのか……、何だか身の毛がよだってきたので、蘭は話を変えることにした

「そうだ鈴鹿、これより出陣するぞ」
「出陣……大江山、ですか？」
「ああ」

鈴鹿がこちらに振り返る
その目はいつもと変わらぬようで、なにかを言いたそうにしているようにも見えた

「どうした、鈴鹿」
「母上は、ウソつきでいらっしゃいました」
「……何の話だ？」

鈴鹿は蘭の目を見て、淡々と続ける

「母上は、屋敷に来たばかりの私に、自分は人の親にふさわしくない人物であるから、親らしいことを期待するな、とおっしゃいました」
「……ああ、確かに言った」
「ですが、私は母上の薙刀のご指導を受けて、感じました」
鈴の青い目が、わずかに燃え上がる
「母上は、人の親にふさわしくない人物ではありませんでした、私は母上から実に色々なことを教わりました、術、薙刀、作法、様々なことをです」
「……」
「ですから私、鈴鹿は母上をウソつきだと申し上げています」

「……そうか」

蘭は袖口に入れていた手を、鈴鹿の頬に当てた

「……ありがとう、鈴鹿」

「いえ……これまでの人生、ありがとうございました、どうか立派な最期を」

少し、違和感を感じた

「……まるで、俺が死ぬような言い草だな」

「え、違うのですか？」

「……」

蘭は押し黙る

「母上は死ぬ気だと、以蔵兄上は申しておりました」

「……あのバカ者」

余計な事を言って、とつぶやく

「俺はただ……大江山で朽ちても、悔いはないと思っているだけだ」

「それは、どう違うのですか？」

素直に聞かれて、つい黙り込んでしまう

「……そう、だな、違わないかもしれないな」

蘭は思わず、ふふ、と微笑を漏らしてしまった

「だが俺はウソつきだ……大江山で朽ちて悔いが残らないなど……やはり、ウソだ、帰ってきたいな」

「そうですか、安心しました」

鈴鹿は相変わらずの無表情のまま、うなずいた

こうして、四者四様の決意を込めた、大江山への出陣が始まる
幸四郎（こうしろう）の大敗より二年、巻絵（まきえ）の死より一年が経過していた

〜〜

少年は倉庫の門を開いて、一番奥のつづらの中に目当ての物を探し当てた
つい最近に九重楼で入手したものだった
家族で一番にも、英雄にもなれない少年は、その選択を選んだ
自分の運命をある日突然変えるような、そんな雷鳴のような出来事を信じて

最奥に封じられているそれは、身につけたものをことごとく鬼へと変えてしまう異形の魔具だった

「……朱点を倒せば、全てが……終わるんだ」

力が欲しかった

それさえあれば、皆が救われて、皆が幸せになれるのだ
夢見が戦わずに済み、蘭も鈴鹿も穏やかに暮らせるようになる

だから――
震える手で、鬼の秘宝を取り出す

「オレはオレ自身の栄光のために……朱点を、討つ」

朱の首輪（しゅのくびわ）を、以蔵はゆっくりと装着した

第四話－3　「登頂」　１０２１年１１月中編

＜出陣＞

最後に以蔵（いぞう）がやってきた

「遅いですぅ～」

玄関でもう草履を履いて待っていた夢見（ゆめみ）が、ぷんすかと怒る

「うんああ、悪い」

そんな以蔵の首に巻かれた朱色の首輪を見て、蘭（らん）がつぶやく

「それは……朱の首輪（しゅのくびわ）か？」

「……まぁ、そーいうことだ」

朱の首輪――技の能力値を著しく上昇させる代わりに、呪われ、使用者は正気を失うという諸刃の剣だ

「……ゲーム内で装備すると忠誠心が下がり、下手すれば付けたものは、屋敷から居なくなってしまうという危険な品だな」

「母上、何を言っているんですか」

鈴鹿（すずか）が突然意味不明なことを口走った蘭を心配する

「え～～、ダメですぅ～～～」

話を聞いていた夢見が、以蔵の首輪をバッともぎ取る

「お、おい、なにするんだよ夢姉」

「そんな、こんなのダメですぅっ」

間近でぶんぶんと首を振るから、以蔵の顔に夢見の長い髪が当たって痛い
「普通に止めろ、痛いから」
「まっすぐ立ってくださぁい」
疑問符を浮かべながらも、その場で直立する以蔵に、夢見がにこっと笑う
カチャリ
以蔵に首輪をつける夢見、小さな手を出して実に嬉しそうに告げる
「お手」
「咬みちぎるぞ」
出された手に犬歯を剥く以蔵
「何だか、いっくん凶暴ですぅ」
鈴鹿の背中に隠れる夢見
「ふむ……どうやら朱の首輪には、暴力性を高める効用があるらしいな」
それならばと、鈴鹿は以蔵の耳の後ろをくしゃくしゃと撫で回す
「……なんだよ」
「イヌを馴らすときにはこうするものだと、文献に書いてありました」
「お前も咬まれたいのか、つか何だ、お前らそーいうプレイがお望みか」
くだらないことを言ってないで、と口を開く蘭

「……そろそろ、出発するぞ」
「はぁぃ」
「はい」
「あいよ」

あまりやる気のない声が続く

「それではイツ花、後のことはよろしく頼む」
蘭は屋敷に残るイツ花を見て、告げる

「はァい、まっかせてくださーい！」
どんっと胸を叩くイツ花
「皆様と門司さまがバーンとォ無事に戻ってこれるよう、昼子さまのプロマイドに祈ってますからッ！」

そう笑うイツ花の言葉に、以蔵と夢見は顔を見合わせた

「……ま、まだ帰ってきないんですかぁ？」
「オレたちが戻るのと、どっちが早いだろーな……」
以蔵がボールを遠投してから、ゆうに数時間は経過していた

＜大江山＞

「やァ、壬生川家の皆サン！」

大江山の登山口に立っていると、何かがふよふよと降りてきた

「おや……」

その非常に懐かしい顔に、目を細める蘭

「奉納点(ほうのうてん)をくれた男」

「そんな覚え方しかしてないのかいッ！」

まるで近所の暇なオジサン呼ばわりされる、へらへら幽霊こと黄川人(きっと)

鈴鹿が首を傾げる

「どなたですか？」

「おっと、今回も初お目見えの人が多いネ、ボクの名前はこの世とあの世の境目のォ、黄色い川を泳ぐ人、黄川人さ」

「この世とあの世の境目のォ黄色い川を泳ぐ人さん、初めまして」

「……黄川人、でいいよ」

「はい、黄川人さん」

そのやり取りを横から、不気味そうに見つめる以蔵と夢見

「お、おい、誰と喋っているんだ……？」

「怖いですぅ、蘭さま鈴鹿さまぁ……」

「ボクが見えないの！？」

そりゃ景色が透けて見えるような体だけどサ！、と黄川人が叫ぶ

「あっ、何か聞こえるよーな……」

「目を半開きにして、焦点をあわせるとうっすら見えるようなぁ……」

「ボクってどんな存在！？」

もはや半泣きの黄川人

「それはいいとして……また奉納点でも持ってきてくれたのか？」
「この体でかき集めるのも、骨が折れてネェ……きょうは、ちょいとマジな話なんだ」
黄川人は、寂しそうに蘭に微笑む
「……そうか、では行くか」
大江山に薙刀を掲げる蘭
「いいかい鈴鹿ちゃん、これをたかりと言って、犯罪行為の一つだからね」
「はい、覚えておきます」

るるるーと泣きながら黄川人、蘭に奉納点の光る玉を渡す

「今回は5点か、少ないな……」
壬生川家四代目当主がまるで取立て者のような台詞をはく
「……あのね、君たちの重荷になると思って今まで隠してたけど……ボクも君たちと同じようにあの鬼の呪いを受けてるんだよ」

蘭と鈴鹿のリアクションは、ふーん、だった

めげそうになりながらも黄川人は続ける
「たぶんだけど！（。д。）　あいつを倒せばボクの体が、この世に戻る！」
オーバーアクション気味に身振り手振りで演出するが、なかなか食いついてくれない
「そ、そうすれば君たちと戦え……」
「朱点を倒したら、戦は終わりですよね？」
「ハ……う～ん、そりゃ残念、ボクこう見えて意外と強いんだけどね、アハハ」

ふわふわ浮きながら、手を頭の後ろで組む黄川人

「……奉納点を5点稼ぐのもやっとのくせにか」

「いやホント、ホントだってば！（ｉДｉ）」

それだけは譲れない、と必死で否定する

「……それなら、そうだな」

蘭は大江山の山頂を見上げて、ふっと顔から力を抜いた

「もし朱点を討ち、お前の体が戻ったのなら……共に手合わせをしてやっても、良い」

「……今の君たちなら、きっと勝てる、それだけの苦労をしてきたこと、ボクは知ってる……ずっと見てきたんだ、信じてるからね！」

黄川人はそう言って、ニコリと笑った

ふふ、と蘭は口元だけで笑みを浮かべる

「鈴鹿……ああいう男を、ストーカーと言うのだからな」

「はい、覚えておきます」

何とも言えない表情を浮かべながら、去ってゆく黄川人

「それでは……行くか」

「……ああ」

以蔵の声に合わせたように、朱の首輪が赤く光る

「……壬生川家、突撃」

百兵を率いる英傑のように、蘭は低くつぶやいた

第三回大江山討伐隊が、山を駆け上がる時が来た

〜〜

一合目から五合目まで、一同は＜速瀬＞の術を使って全力で進軍した
かつての討伐隊が苦戦した積雪の獣道を、風の加護を受けた壬生川家は、まるで滑るように走り抜ける
去年の大江山にも出陣した蘭の術力はもはや、巻絵（まきえ）や佐和（さわ）と競っていた頃の比ではなかった

終合目、その果てが見えてきた

〜〜

蘭が思い出すのは、去年の戦いだ
初子（はつこ）が戦術を立て、その通りに巻絵や佐和が動き、何とか双仁王を相手に勝利を収めた
しかし、今度もまたそう巧くゆくだろうか

仁王の門が視界に入り、一同はその前で休憩を取ることにした

「あれが母上の言っていた、痩せ仁王と太り仁王ですか？」
「……ああ、去年の俺が死にかけた相手だ」

あの時の失敗以来、人一倍防御のすべを磨いてきた

「……鈴鹿、俺をかばったりするなよ」
「はい、絶対かばいません」
「……」

そこまでキッパリと断られると、思わず返す言葉のなくなる蘭

「ですが、今そう思っていても、実際戦場でどう動いてしまうかは、やってみないと分かりません」
「……そうか」

夢見の声が、ふたりを緊張に引き戻した

「いっくん！　危ないよぉ！」
蘭が気づくと、以蔵が仁王たちの前に立っていた
「バカな、いつのまに」
ついさっきまで隣にいた、気づかないはずはなかったのに

痩せ仁王・太り仁王「通さぬ……通さぬぞ！」

両仁王が以蔵に向け、その刀を振り下ろす
蘭は薙刀を担いで加勢に向かうが、とても数瞬は間に合わない
「以蔵！」
槍を持つ以蔵の後ろ姿が、初子と被って見えた

次の瞬間、痩せ仁王が空洞となった胸を押さえてその場に倒れた
続けざま、崩れ落ちてゆく鬼の背後にいた太り仁王の頭部を、以蔵の槍が吹き飛ばす

声をかけるのも忘れ、蘭は絶句する
三発、たったの三発だった

「以蔵……お前は、」

風に吹かれて黒煙となって崩れ落ちる仁王の骸に槍を突きつけたまま、以蔵は動かない
蘭の横を通って、二体の仁王をたったの三撃で仕留めた以蔵に夢見が駆け寄る

「きゃぁ～、いっくんすごぉぉい～～！」
そのままの勢いで、夢見が以蔵に抱きつく
何か嫌な予感を感じて、蘭は叫ぶ
「待て夢見、危険だ！」
夢見に抱きつかれた以蔵の体が、ふるふると震え出す

「……朱の首輪の光が、増してきています」

蘭の横に並んで冷静につぶやく鈴鹿
「夢見、戻れ！」
「……だ、か、ら、」
振り返った以蔵の瞳が、赤く輝いた

「オレをいっくんて呼ぶなぁあああああああああああああ！」

べごっ

「はひっ！？」

槍の柄で側頭部をぶっ叩かれて、真横に吹き飛ぶ夢見

「……」
「……暴力性が、増していますね」
蘭は熟考して、つぶやいた
「……仁王を葬ったのも、自分より大きくて偉そうだったから、とかではないだろうな」

～～

朱雀大路に入っても、以蔵の凶暴性は留まるところを知らなかった
「うぜーー！」
昨年初子たちが包囲された崇奈鳥大将の軍勢を一撃で消し飛ばしながら、叫ぶ
「オレは以蔵だーー！」
まるで修羅のようだ
「いっくんだったら、イツ花もいっくんじゃねーーかーーー！」

「……いや、いっちゃんだろう」
蘭がぼそりと突っ込むが、聞こえていないのか声が届かないのか、どんどんと先にゆく

「というか、気にしていたのですね、兄上」
「うぅ～、痛いですぅ……もうぜったいぃ、いっくんなんて呼んであげませぇん……」

目を血走らせて鬼を始末する以蔵のあとを、のんびりと追う三人
呪殺の碑に入り、段々と以蔵の怒りパワーにも疲れが見え始めていたため、＜みどろ＞で鬼の速度を鈍くしつつ、回避して奥へと侵

入する

「がー、がるるー！」

「……もはや獣だな」

5×7は？と聞いてみるも、反応がない

「朱の首輪を長くつけていると、この状態が戻らなくなるのですね」

己の心に身を任せてしまい、理性のタガが崩壊してしまうのだろう

「……家出というか、我を忘れ、帰る家が分からなくなるのだな」

冷静に観察する親子

「は、ユメ、良いこと考えましたぁ」

嬉しそうにぽんっと手を叩いて、夢見は以蔵の朱の首輪に手近な縄を繋ぐ

「どうですかぁ、これで我が家に一匹ぃ、鬼っぽいイヌぅはふぃ！？」

以蔵に横っ面を叩かれて、再び吹っ飛ぶ夢見

「……あの夢見に手を上げるとは、本当に我を失っているのだな」

（でも、夢見さんもどうして懲りないのでしょうか……）

鈴鹿の疑問が増えてゆく

順調に進んでいった四人は、朱点閣猿橋へと足を進めた

～～

「……ここまで来れば、残りの鬼はせいぜい一匹かニ匹だ」

最後の鬼が眠る天守閣へと続く大橋の前、蘭が皆を見回す

「ゆくぞ」

鈴鹿がしっかりとうなずく

「はいぃ！　ユメの未来の旦那さまのためにぃ！」

「がー！」

気合の入った雄叫びが続いた

蘭が先頭に立ち、大橋を進んでいると、突如城門が開く

「……ん」

こちらを迎え撃つつもりか、と蘭が暗がりを睨みつける

門の中から圧倒的な威圧感を持つ、巨大な影が進み出てきた

その姿は仁王をニ体合わせたよりも大きな巨躯に、四本の腕を持つ化け猿だ

二対の腕にはそれぞれ、投げ輪、中華刀、巨槍、錫杖を持ち、知能は低そうだがその怪力は侮れそうにない

石猿田衛門「ウキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

甲高く、猿が鳴いた

獰猛そうな雄叫びを上げ、以蔵が真っ先に猿田衛門へと飛びかかる

「がるぁあああああああああああ！」

猿田衛門はその凄まじい速度の奇襲を中華刀で受け止め、体重の軽い以蔵を、木片のように地面に叩きつける
「いっくんっ！」
思わず叫ぶ夢見に、同時に猿田衛門の放った円月輪が襲い掛かる
「ひ」
「……ぼさっとするな」
地獄の投げ輪を蘭が代わりに受け止め、以蔵にすかさず鈴鹿が＜お零＞を唱えた
「ぐ……雑魚が、なめやがって……！」
起き上がった以蔵が、低い体勢で槍を構え、牙を剥く
「やれやれ……俺はこいつも庇いつつ戦わなければいけないのか」
猿田衛門の長い手足をかいくぐり、以蔵と蘭が攻めに回る
放たれた必殺の突きを蘭が薙刀で弾き、その猿田衛門のがら空きの腹に、以蔵は渾身の力で槍を突き刺す
猿田衛門「ギイイイイイイイイイイイイ！」
三桁のダメージを受け、猿田衛門は苦しみに刀を振り回す
「夢見、鈴鹿……以蔵に＜武人＞を集中させろ！」
刀の軌跡を目で追いながら、蘭が叫ぶ
「でも母上に＜防人＞は、」
「……必要ない！」
以蔵が猿田衛門の肩の肉をそぎ取り、そのまま後方へと飛び退く

三人を背にまとい、蘭はたったひとり前列として巨躯の大猿の前に立ちはだかった

「さぁ……貴様なぞに後れを取るものか」

蘭は薙刀を構えて、壮絶に口の端を釣り上げる

猿田衛門が四方八方から立て続けに四つの腕で、蘭を激烈に攻め立てる

迫り来るうなる刀、地獄の投げ輪、必殺の突きを蘭はその身に受け止め、いなし、捌き続けた

そのたびに＜武人＞により筋力を強化された以蔵が、猿田衛門の体を深くえぐってゆく

猿田衛門「ウギッ、ギッ、ウギイイイイイイイイイイイ！」

杖を振りかざし、猿田衛門は自らの防御力を強化する防人上位の術＜石猿＞を唱えた

「……根競べだ」

蘭は見上げるほどの化け猿相手に、一歩足りとも引かない

壬生川家当主の横を以蔵が跳躍して、猿田衛門に挑みかかった

「が……ぐるぅ！」

が、＜石猿＞によって岩盤ほどに硬くなった猿田衛門の皮膚に、以蔵の槍が突き刺さってしまう

猿田衛門の肩甲骨の上に乗って、槍を引き抜こうともがく以蔵を、猿田衛門がぎょろりと睨み、虫を払うように、猿田衛門が以蔵を吹き飛ばす

「がっ！」

猿田衛門が以蔵に追い討ちの投げ輪を掲げたところで、夢見と鈴鹿の術の併せが完成した
『＜花連火＞！』
巨大な火の玉が猿田衛門の顔面に着弾し、その視界を奪い尽くす
猿田衛門「ウッ、キ、キイイイイイ……！」

火炎に悶え苦しむ猿田衛門の横を走り抜け、蘭は以蔵の傍で回復の術をかけた
「平気か、以蔵……？」
追い討ちは夢見と鈴鹿が寸でのところで阻止したが、ここで以蔵が倒れてしまっては、とても朱点まで届かない

以蔵は頭を振りながら身を起こす
「……あのサル、もう中華料理の具じゃ済まねー…」
「お前、」
以蔵の朱の首輪は、なおも赤く輝き続けている
「……斬り落とす！」
蘭に＜お零＞を貰い、以蔵はゆっくりと立ち上がった

猿田衛門の首に突き刺さったままになっている自分の槍を、睨むように見上げる
体の火を振り払った猿田衛門が、蘭と以蔵に向けて、激怒と共に四つの腕を振り上げた
猿田衛門「ウッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

瞬間、以蔵と蘭は全速力で突進する

「……初子ほどの槍さばきでは、無い！」
蘭は槍の穂先を斬り飛ばし、返す薙刀で以蔵に放たれた投げ輪を叩き落す
以蔵が中華刀の刃先を跳び抜け、首の根元に突き刺さった槍を渾身の力で引き抜く
「あらァァァッァァァァァァッァァア！」
会心の一撃は――猿田衛門の首をぶった斬った
満身創痍の一同は、全身に治癒の術をかけ合うと、最後の門をくぐった
大江山最奥、朱点閣（しゅてんかく）
ついに壬生川一族は辿りついたのだ

第四話－４　「撃攘」　１０２１年１１月後編

四人は朱点閣（しゅてんかく）に、足を踏み入れた

ひんやりとした空気が、熱くなった体を覚ましてゆく

「ついに……朱点か」

口に出すとここまで来たのだな、という実感が湧き出す

「おっよめっさん～、おっよめっさん～」

妙な歌を口ずさむ夢見（ゆめみ）が、邪魔で邪魔でたまらない

「……」

「本当にこんな場所に住んでいるのでしょうか」

がらんとした大きな空間だ、その奥にぽつんと巨大な寝台が置いてあった

一同が朱点閣の中央まで進んだとき、太い声が響いた

○「おンやァ！？」

寝台が揺れ、その赤黒い身体が四人の前に姿を現せる

ぶよぶよとした体格が揺れ、乱食い歯の伸びた下品な顔が壬生川（みぶがわ）家をぐるりと見回す

「うぁ……」

悲鳴を上げて、口元を手で押さえる夢見
「ひ、酷いですぅ……朱点童子（しゅてんどうじ）があんな顔だなんてぇ、ユメ、もっと美系の人かと思ってましたぁ！」
「確かに……小悪党って感じですね」
「……漫画なら、出てきた瞬間に死亡フラグが立ってそうな顔だな」
容赦ない評価を下す女性陣

「ずいぶん前に男と女が来て以来、誰も俺を訪ねてくれねェから、ちょっと寂しかったゼ、しかもこんなべっぴんさん揃いでナ」
げへへと下卑た笑いを浮かべる朱点童子に、いーっと歯を剥く夢見

「がる……油断すんなよ……」
そんな三人の前に、以蔵（いぞう）が身をかがめて立ちふさがる

「やる気マンマンだナ……おンやッ……！？　その額の光は！？」
朱点童子が目を見開いて、一族の額に埋め込まれた壬生川家の象徴とでも呼ぶべき緑の結晶を睨みつける

思わず額を押さえて、嫌そうな顔で後ずさる夢見
「まさか、あの時のガキ……？　ククク…そういうことか！！」

今にも飛びかかりそうな以蔵を手で制しながら、蘭（らん）が眉をひそめる
「……何を話している？」
「分かりません、けれど……私たちの呪いと何か関係があるようですね」
朱点童子は巨大な口をめいっぱい広げて、豪快に笑う
「またあいつら、こっちの世界にチョッカイ出したのかい！？　懲

りねぇなぁ……！」

やれやれ、と蘭は首を振った

「父と母に誓い、貴様を斬ると決めていたが……」

薙刀を手に、ため息と共につぶやく

「何だかどうでも良くなってきた……こんなヤツのために、母も初(は)子(つこ)も死んだとはな……フフ」

思わず笑みがこぼれた

「……俺は、俺のために貴様を討つ」

決めたところで、夢見と鈴鹿(すずか)がでしゃばる

「ユメは旦那様のためにぃ！」

「じゃあ私は、家内安全のために……ご利益があるとは思えませんが」

それぞれが宿敵に武器を構え、突きつける

朱点童子は大きく伸びをして、叫んだ

「たとえ鬼でもなあ！？　一度生まれりゃ、命はてめェのもんだ、そっちの勝手な都合で死ねるかよ！」

ぎょろりとした両眼が、壬生川家ではなく、その先を見据えてドス黒く光った

蘭は以蔵を解き放つ

「ぐるるる……がああああああああ！」

目を血走らせて、以蔵が槍を振るう

それらは朱点童子の硬い皮膚を深く貫いた

「以蔵の槍は……朱点にも通用するのだな」

先ほどと同様、＜武人＞を以蔵に重ねがける夢見と鈴鹿

「痛ェなあ！　痛みってのも久々だゼ！！」
以蔵の胴ほどもある腕を振り上げ、朱点童子は拳骨を蘭に叩きつける
「が……！」
「気丈だなあ、良いね良いねェ！」
「……ほざけ！」

蘭が注意を引いている隙に、以蔵が朱点童子の死角から槍を突き刺した

「あ痛ェ！」
無茶苦茶に腕を振り回すが、もはや獣と化した以蔵を朱点童子は捕らえきれず、朱点閣の柱が何本か崩れ落ちてゆく
巻き込まれまいと蘭が走り回る中、剛腕が柱を砕きながら真横からヌッと出現した
避けきれず、朱点童子の一撃まともに受ける蘭

「がはっ……！」

蘭は体力の半分を奪われ、朱点閣の地面を転げまわる
柱を砕きながら姿を見せた朱点童子が、瓦礫に足を取られる以蔵を叩き潰した
「あああっ」
夢見が慌てて全体回復の＜お地母＞を詠唱するが、今追撃されたら間に合わない！

巨体を現した朱点童子がニタニタと笑いながら、蘭の上に足を乗

せる
「ど、どいてくださぃーぃ！」
「言っても無駄です」
鈴鹿は薙刀を水平に構えて、朱点に駆け出した
「――双光（そうこう）、蘭斬（らんざん）！」
母親譲りの奥義――
朱点童子の足を二連続で切り裂き、痛みに思わず足を引いた朱点童子の下から、鈴鹿は蘭を引き抜いた

「相変わらず、恥ずかしい名前だと思います」
「……なら、叫ぶな」

夢見の＜お地母＞により意識を取り戻した蘭が、鈴鹿につぶやく
「すっごい鈴鹿ちゃんっ！」
手を叩いて喜ぶ夢見の奥、朱点童子が牛も丸呑みに出来そうな口蓋を広げる

「これでも食らいなあ！」

その大きく開いた口から噴出される硫黄色に染まった息に、壬生川家の四人が包まれ、手足がわずかに重く感じられる
「……なんだ？」
「臭い息、味方全体攻撃力ダウンの技みたいですね」
まるで他人事のような鈴鹿の発言に、蘭は口元を手で押さえる
「以蔵に引き続き＜武人＞をかけておけ……」

蘭が前に出てくるやいなや、朱点童子はその場で力を溜め始めた

「クク……今度は一撃でぶっ飛ばしてやるぜえ！」
蘭が薙刀を構えると、後方から蘭に＜防人＞が届く

「……鈴鹿め、＜武人＞にしろと言っていたのに」
「現在、アレな状態なもので」

鈴鹿の指差す先、以蔵が瓦礫の中から姿を現した

「ぐるあああああああああ！」
その目は完全に理性の光を失っている
朱点の首輪に飲み込まれようとしているのか、とにかく危険な状態のようだ
「うわ生きてたぁ」
叫び声をあげる夢見

以蔵は槍を振り回し、朱点に向かって再び突撃する
「……開け、当主ノ指輪（とうしゅのゆびわ）！」
以蔵の猛攻を支援しようと、蘭は左手の指輪を高々と掲げ、先祖の英霊を召喚する
その源太の闘気が、朱点童子を圧倒し、その身を滅多に切り裂いた

「ぐ、が……おらあ！」

存分に力を溜めた朱点童子の拳骨が、蘭に迫る――
――が、蘭は半身をずらしてその豪腕をひらりと避けた
蘭の頬がその拳圧によって裂ける中、以蔵が叩きつけられた朱点童子の腕を駆け上り、槍を耳に突き刺して、振り落とそうと振り回した朱点童子のうなる拳を避け、蘭の真横に着地した
「観念しろ、朱点……もう終わりだ」
「ぐるる……」
蘭と以蔵が長柄を朱点童子に突きつける

「……俺だって生きてェんだ！　＜円子＞！」

自らに上位治癒の術をかけ、一気に傷を癒やしてゆく朱点童子
「……もう思い残すことなど何もあるまい、やれ」
蘭、鈴鹿、夢見三人からの＜武人＞に包まれた以蔵が、術を唱える朱点童子の正面に立ち、高々と吼えた
「あああああああああああああ！」
視界が白く弾け、槍一閃、４８３のダメージが朱点童子を貫いた！
「うがあぁぁ…」
朱点童子が口から大量の血を吐き、その場に膝をつく
「ククククク…とうとう鏡を…割っちまいやがった…」
その瞬間、まばゆい光が朱点童子の身体から発せられる
数柱、十数柱の神が、一斉に解放されてゆく光だ
「……最後に何を言っていたのだ？」
蘭が薙刀を下ろし、ぽつりとつぶやく
夢見が鈴鹿に抱きついて、大声で歓喜の声を叫んでいた
壬生川家は、朱点童子をついに討ち取ったのだ

～～

傷を癒やした一同が、荒れ果てた朱点閣を背にした時、
朱点童子の遺体がぴくりと痙攣した
その口の中から、二本の手が現れる

「……何だ？」

服を脱ぐように、よいしょ、と朱点童子の皮の中から現れたのは、
どこかで見たような顔だった

○「ああ～ぁ」

引き締まった裸体を見せ付けるように少年はニッコリと微笑むと、
片手を挙げて壬生川家に声を掛けた

○「アハハ…こんちわ！」

夢見が弾かれたように叫ぶ
「だ、誰ですかぁ！？　見たこともありませぇん！」

○「まだ引っ張るのか！　ボクだよ、黄川人（きっと）だよ！」

黄川人は両手を広げてアピールをする

「そうか……そういうことだったのか」

蘭は歯を噛み締めたまま、つぶやいた

「こいつの中からボクを助け出してくれるのは、やっぱり君たちだった、ボクはね、これでも皇子なんだ！」

「あの、どういうことですか？」

鈴鹿は暗い顔の蘭の袖を引っ張る

「昔、ここに小さいけど都があったんだ、ある日、悪い奴らが来て、火をつけて燃えちゃったけどね…」

「ストーカーかと思ったら……正体は露出狂だったのだな」

「それはもう良いよ！」

堂々と腰を突き出した姿勢の黄川人を、汚いモノを見るように言う蘭

「……みんな殺されたよ、父さんは女に化けたヤツに後ろから斬られた……母さんは自分から身を差し出したんだ、ボクと姉さんを助けるためにね……」

さすがに蘭の目が気になったのか、黄川人が手を振ると、その身体に一瞬で着物が巻きついてゆく

「ヤツらは母さんをさんざん弄んだ後で、ボクに呪いをかけた…ボクの力を封印するためにね、それでボク、鬼の中に入ってたってワケさ……酷い話だろ？」

酷いですぅ、と同意する夢見の後頭部を叩く蘭

「はぅ」

「バカか……あれは恐らく、俺たちの先祖のことだ」
ええっ、と驚く夢見に、黄川人が声を荒げて続ける
「だから！　同じお返しをしたくらいじゃ、ゼンゼン足りない！！」
朱点閣に散らばっていた瓦礫が舞い上がってゆく

「ボクはあの日誓ったんだ、奴らと奴らの家族、子孫までひとり残らず呪い殺してやるってね！　ボクは君たちを断じて許さないッ！　生まれ育った都を焼き払い！　両親を殺した！　あいつらと京の人間どもをね！」

黄川人が吼えた瞬間、その地面に巨大な魔方陣が出現する

「貴様……」

「アハハハハ…そうそう、君たちには感謝してるよ！　あのカッコの悪い鬼の姿のまんまじゃ、ボクの力は半分も出せなかったんだから」

蘭は再び薙刀を構え、歯を食いしばる
「お前が本体、なのか……この呪いすら」

朱点童子「さあ！　復讐の本番はこれからだ！！」

黄川人ならぬ朱点童子は床に生まれた魔法陣の中に飛び込む
その中央から顔だけ出して、ニッコリと微笑んだ

「また会おうゼ、兄弟」

蘭が手に持った薙刀を投げつけるが、朱点童子の入り込んだ魔法陣が消え去り、薙刀は硬い地面を転がってゆく

「……大変なことになりましたね」

鈴鹿が無表情でつぶやく

「え、えええ、って、短命の呪いは消えないんですかぁぁぁ!?」

パニックに陥る夢見の横、蘭はため息をついた

「そうだな……とりあえず」

蘭は横で低くうなっていた以蔵の朱の首輪を、パチンと外す

その瞬間、気を失ってその場に倒れこんだ以蔵を見て、蘭は鈴鹿と夢見に告げた

「とりあえず、屋敷に戻るか……以蔵をこのままにはしておけない」

どうしてどうしてぇ、と叫び続ける夢見を鈴鹿が押さえて、蘭は以蔵を背負い、

……壬生川一族は、大江山（おおえやま）をひっそりと下山していった

第四話－４　「撃攘」　１０２１年１１月後編（後書き）

出陣・大江山（蘭、以蔵、鈴鹿、夢見）

第四話－5　「変異」　１０２１年１２月前編（前書き）

蘭　　１才６ヶ月
夢見　１才３ヶ月
以蔵　１才

鈴鹿　８ヶ月
門司　４ヶ月

第四話－5　「変異」　1021年12月前編

＜壬生川家＞

先月の遠征が終わり、壬生川家には重苦しい雰囲気が残っていた

「……12月、雪か」

居間から外を眺めると、今年の初雪が降り出していた
寒い季節が苦手な蘭は、コタツに潜って首を縮める

「母上、」
「……鈴鹿か、夢見の様子はどうだった？」

覇気のない蘭の声に、鈴鹿は静かに首を振る

「ダメです、布団に潜り込んで……門司さんが付いていますけれど、少なくとも今月は休養を取ったほうが良さそうです」
「……そうか」

蘭はぼんやりと、夢見はもう戦えないかもしれない、と思う
あの朱点童子を打倒したというのに、新たな朱点童子が現れ、夢見は精も根も尽き果ててしまった

「……雪を見ると、思い出す」

まぶたの裏に、初雪が降って喜びに駆け回る初子の姿が、走馬灯

のように浮かぶ
母と友の仇は討てなかった、と悔やまれた

「母上、どうかしましたか？」
「……ああ、いや、少し眠りそうになっていた」
結局は、蘭も少し疲れてしまったのかもしれない
「そういえば、以蔵兄上の容態ですが……」
「……目覚めたか」

朱の首輪（しゅのくびわ）の多用で昏睡していた以蔵に、先月のことを伝えなければいけないな、と蘭は立ち上がる

「先月起こったことは、全て伝えておきました」
「……そうか」

あの朱点童子を討つために、その身を犠牲にした以蔵の気持ちを思うと、心苦しくなる

「……どうかしたか、鈴鹿？」
僅かにぎこちない鈴鹿の表情に、蘭は少しだけ違和感を感じて尋ねる
「あ、いえ……それで、兄上は今交神の間にいます」
なぜか慌てて首を振る鈴鹿に、蘭は聞き間違えたのかと思った
「交神の間に？」
「はい、お子様がいらっしゃっております」
「ああ……なるほど、以蔵の子か」

自分が死んだ後の当主は恐らく以蔵になるだろうと思っていた蘭は、それならばと居間の障子を開く

「……少し、顔でも見に行くか」
「はい」
蘭と鈴鹿は、連れ立って儀式の間へと向かった

＜以蔵の子供＞

「ぱんぱかぱーん！」
イツ花は手を叩いて喜ぶ
「新しいご家族を預かって参りましたー！」

「ん」

以蔵はぼーっとしたまま、イツ花の話を聞いていた
「あらァ、以蔵さま嬉しくないんですかァ？」
「嬉しくないっつーか、嬉しいっつーか」

以蔵は首を傾げる

「なんかこう、朱の首輪の影響が残っているのか知らんが……あんまり心動くことがなくてな、よくわからねえんだ、自分の考えていることが」
「大変ですネェ」
イツ花はすっごい他人事そうに慰める
「まぁいーや、呼んでくれよイツ花」
「はいそれではー、とにかくよく笑う女のお子様の登場ですー」
女の子なのか、と以蔵は反芻する

すると障子を開いて、髪を短く刈った少女が入ってきた

○「初めまして、お父さん！」

ちゅーっす、っと元気良く挨拶する朗らかな娘に、以蔵は伽子（とぎこ）と名をつけた

草色の髪に紫煙色のつぶらな瞳を持つ、槍使い第三世だ

「よろしくっすっ！」

ビッと手を挙げる

「……髪の色も目の色も、以蔵に良く似ているな」

「とてもかわいらしいと思います」

「どっから入ってきた母子」

蘭は、その幼い容姿を目を細めて眺める

何となく、その笑顔が持つ雰囲気に、見覚えがあるような気もした

「……名前は、伽子か」

「はーい、どうもよろしくでっす！」

太陽のような輝く笑顔で、伽子は蘭に元気良く挨拶する

「……何だか、初子（はつこ）さまの面影がありますね」

鈴鹿の漏らした言葉に、雪の日に来たしな、と同意する蘭

「ああ、ついでだ伽子、こっちの着膨れダルマが蘭、壬生川家の四代目当主だ」

「……寒いのだ」

着物の上からちゃんちゃんこを三枚羽織っている蘭が、不機嫌そうにつぶやく

「で、こっちの表情の一切変わらないのが、壬生川家お手伝いロボ、鈴鹿だ」

「ロボットじゃありません」

一字一句をしっかりとした発音で、キッパリと否定する

「りょーかいです、ランランにリンリン！」

妙な間があった

（ランラン……？）

（リンリン……？）

物怖じしない少女のつけたパンダのような名前に、思わず戸惑う親子

「二人合わせて、鈴蘭？」

「花になったな」

無口で無愛想で無表情なのか、と以蔵が思うんー、とその場でくるっと回って伽子は、今度は父親に笑いかける

「じゃあ、以蔵お父さんは、イトウさん？」

「他人かよ」

そのツッコミがツボに入ったのか、あははははははと笑い転げる伽子

物静かな三人組は、そんな表情豊かな少女を見つめながら、

「こういう童が生まれると……まだまだ、俺たちも生き続けないと

な、とつくづく思わされる」
悔やんでいる暇などないと、蘭は自分に言い聞かせる
「まったくだな、ランラン」
「呼ぶな」

こうして、以蔵の娘・伽子がお天道様のような笑顔と共に、壬生川家の一員となったのだった

第四話－６　「奇矯」　１０２１年１２月後編

＜居間にて＞

伽子（とぎこ）への屋敷案内を鈴鹿（すずか）に任せ、蘭（らん）と以蔵（いぞう）は居間でイツ花（いつか）の話を聞いていた

「当主様、まさに青天のヘッきれきィです！」

イツ花の心から嬉しそうな顔に、白けた目を向ける以蔵

「ん」

「腰を抜かす用意はいいですか！？」

「よくないが、続けてくれ」

横目で蘭を見ると、コタツにもたれてうとうとしていた

（寝やがった）

「実はですね、朱点の中に封じられていたたくさんの神様が天界に戻っていらっしゃったンです！！」

「……あー」

そういえば鈴鹿から、朱点童子（しゅてんどうじ）の中に本物の朱点童子と共に、おびただしいほどの神が閉じ込められていたと聞いていた

正気を失っていた以蔵は、そのこと自体をうっすらとしか覚えていなかったが

「何と、２０柱もの神様でーす！」

「……そりゃ凄いな」

「この騒ぎで天界は連日連夜、もォ飲めや歌えの大宴会！！　お酒を召した太照天夕子様と昼子様のおふたりがあられもないお姿で舞

をまわれたとか…」

私も見たかったと言わんばかりのイツ花に、はぁ、と相槌を打つ以蔵

「いえ、そりゃもォ、大ウケ！…という雲の上の話はこれくらいにして……何ですけど、あのォ、以蔵さま当主さま」

急に声のトーンが下がって、イツ花が恐る恐る上目遣いで見上げてくる

「当主寝ているけどな」

「……寝てなどいない」

明らかに寝息を立てていた蘭が、細目で偉そうにつぶやく

「あの…本物の朱点童子について何も知らされてなかったコトで、天界に不信感をお持ちなのでは？」

「……ずいぶんとぶしつけだな、さすがイツ花」

「えへ」

何を勘違いしたのか、頭に手を当てて微笑むイツ花

「不信感か、それは持つ……当たり前だ」

蘭が歯に衣を着せずに告げる

「私の頭じゃ難しいことはよくわかりませんけど……」

イツ花がうーんとうなる

「朱点を解放する危険を冒しても捕らわれていた神様を今奪い返しておくことが……先々壬生川（みぶがわ）家の力になると、昼子様が判断されたのだと私は思います！」

神の解放と朱点の釈放、天秤にかけて前者を選んだということなのだろう

「神を奪い返すのは良い……だが、それを黙っているのは解せぬ」
いつもの蘭の重い口調を、以蔵が受け取る
「……神様たちはあくまでも、オレたちの復讐に手を貸してくれている立場だったしな、十分な見返りがなけりゃそんなことしねーだろ」
「朱点を釈放しても、俺達ならば滅ぼせると読んだのか……迷惑な」
「そ、そうですよ、きっと壬生川家への期待はそれだけでっかいンですよ！　だからもっと自信を持って！」

そんな風に以蔵や蘭を励ますイツ花を見て、ふたりはため息をついた

「……しかし、イツ花に言っても仕方のないことなのだな」
「半人前の巫女だもんな」
「しっかり一人前ですッ！」

それから以蔵と蘭は、鈴鹿と共に出陣の用意を整えるのだったやることはこれからも変わらず、鬼を斬り、奉納点を稼いで、一族を強くすることなのだ

真なる朱点童子を倒すために――

＜出陣＞

「初・出・陣！」
ぴっかーんと小振りの弓を掲げる門司（もんじ）
「これがかの朱点童子1を打ち倒した、伝説の弓か！　すげぇ！」
その夢見さんの弓は朱点に二桁のダメージでしたけど、と鈴鹿が

ぽつりとつぶやく
「……しかし、弓を譲ったということは」
蘭は、四人を見送りに来た夢見を見つめる
「それじゃユメぇ、皆様のお帰りをお待ちしてますぅ」
ぺこと頭を下げる、割烹着姿の夢見
「……何だその格好は」
「ユメ、壬生川家のお手伝いさんになったんですぅ！」
三食に昼寝つきですぅ、と言い張る夢見に、それは羨ましいとつぶやく以蔵
「……そうか」
あまり深く追求しない
「じゃあ伽子、夢姉に色々教えてもらってな」
「ちゃーっす」
元気よく手を挙げる伽子に、夢見がニコニコと微笑む
「じゃあ、屋敷の抜け出し方とかぁ、親のサイフからこっそりお金をくすねてもバレない方法とかぁ」
夢見の頭をぎりぎりと掴む蘭
「頼んだぞ」
「あぅあぅあぅあうぅ～」
そうして四人は不安ながら夢見に伽子の訓練を任せ、壬生川家を後にしたのであった
～～

行き先を決めながら街道に向かう一行を追いかけてきたのは、イツ花だった
「一大事でございます！」
「……どうしたイツ花、血相を抱えて」
「突如、都の四方に新たな鬼の巣窟が三つも出現したとのこと！」

がーんと頭を抱える門司
「おにのすくつがだって！？」
誰も何も言わず流した

「遠征の折、ご自身の目でお確かめください……ご油断なきようお願いします！」
「うむ……わざわざありがとうイツ花」
頭を下げて、イツ花が屋敷に戻ってゆく
その後ろ姿を眺めつつ、槍を抱えた以蔵が言う
「……行ってみてーな」
「ですが、門司さんは初陣です」
無理です、とキッパリ言う鈴鹿に、門司が声を張り上げる
「大丈夫！　俺っち、世界タフな男選手権で2年連続一位を取った男だから！」
「2年生きたことが快挙だな、我が家」
面倒そうに突っ込む以蔵

考え込んでいた蘭が、顔を上げる
「そうだな……朱点討伐隊が三人も揃っている以上、この目で見に行こう」
「分かりました」
「ん」
「俺っちやりますよー！」

叫ぶ門司を鬱陶しそうに見る以蔵の肩に手を置き、鈴鹿がささめく

「殺すのは、重犯罪です」
「何かすげぇこと言われてる！？」
バカ、やんねーよ、と抗弁する以蔵は、
「……でも鬼の仕業に見せかければ」
「以蔵っち兄さん！？」
「そうですね、それなら出来るかもしれませんが……」
鈴鹿もともに、顎に手を当てて考え込む
「……もうそこらへんにしておけ、以蔵、鈴鹿」
「ああ、やっぱり当主姉さんだ、ありがとっす……」
仏を見るように拝む門司
「……あまりやかましいようなら、俺が黙らせる」
「この三人怖いっすよ！」

叫ぶ門司に蘭が冷たい視線を向けると、ヒィッと怯え声が上がる

「では、行くか……」
こうして、四人は新たな迷宮へと足を進めていった

＜親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）＞

三箇所のうちひとつ、親王鎮魂墓

「ここは……古代の都の王の、墓か」
「そうみたいですね、相当深いようです」
新たな洞窟の地下一階に降り、一同は鉄クマ大将の縄張りを進ん

でゆく
　夢見から息が長い指導を受けただけのことはあり、門司は性格からは思えないほど丁寧な弓の腕をしていた
「ビシッ、バシッ！」
　初陣でさすがに緊張している門司の横、以蔵が世間話を始める
「いちいち叫びながら射るヤツって、すごくバカそーだな」
「そうですね」
「うおい、俺っちのことじゃないですか！？」
　聞いていたのか、とつぶやく以蔵
　初めて潜る巣窟で、慣れない地形に多少苦戦しながらも、一同は地下二階に降り立った
「……指南書？」
　すると、たまたま撃破した相手から武芸の書を入手することが出来た
「やはり……新しい場所に行くのが、良いのかもしれませんね」
「ふむ、そうだな」
　妖怪たちが落とす道具の中にも、初めて見るものが多く混ざっていた
「以蔵兄上、なんだか、楽しそうですね」
「え？　オレが？」
　槍を振るう以蔵が驚いたように振り返る
　その頬には、鬼の血がこびりついていた
「はい、イキイキとしています」
「……ジョーダンだろ？」
「さすが、武芸者ですね」
　以蔵は自分の手のひらをじっと見つめて、それから首を振る

「……なに言ってんだよ、鈴鹿、鬼を殺して楽しいやつがいるかよ」

不本意そうな以蔵の態度は、いつもと同じく淡々としている

「……そう、ですね」

なぜだか不安そうに鈴鹿がうなずく

蘭がその様子を無言で眺めていた

本当はもう、以蔵も気づいていたのかもしれない

～～

「じゃあ、そろそろ戻るか」

新たな化け物・軽足大将に、初めて悪羅大将を見たときのような苦戦をしつつも、さすがに朱点を打倒した三人は健康度を減らされることなく無事だった

「……門司は、どこだ？」

「どこでしょう？」

「さて、どこだろーな」

三人から離れたところ、軽足大将についばまれる門司の姿があった

「あ」

体力が全快の状態から、二発で戦闘不能にされていた

「ギャーーーーー！　門司ここに眠るーーー！」

断末魔のような声が墳墓に響く中、以蔵は何事もなかったかのように告げる

「……じゃあ、そろそろ戻るか」

「そうですね」

こうして三人は無事なまま、新たな指南書を得て帰還したのであった

重傷を負ったが、一応門司は生きていたらしい

第四話－６　「奇矯」　１０２１年１２月後編（後書き）

元服→鈴鹿　出陣・親王鎮魂墓（蘭、以蔵、鈴鹿、門司）
伽子→初見・槍使い　訓練・夢見→伽子

第四話－7　「住劫」　1022年1月前編（前書き）

蘭　　1才7ヶ月
夢見　1才4ヶ月
以蔵　1才1ヶ月

鈴鹿　9ヶ月
門司　5ヶ月
伽子　1ヶ月

第四話－7　「住劫」　１０２２年１月前編

＜新年の壬生川家＞

「明けましてぇ、壬生川家ぇ～」
（おめでたくはないんだな）

お正月の挨拶に、エプロン姿の夢見が頭を下げる

「うおー、旨い食事に暖かい家族、幸せだー！」
右腕を包帯で吊った門司が、満面の笑みで叫ぶ
「みんなで食べると、美味しいよねー！　お腹すいたすいたー！」
箸で茶碗をチャンカチャンカ叩く伽子と門司

「んー、蘭姉がまだ来てないけど、先に食べるか」
「そうですね、私も訓練で……今にも倒れそうです」

野鹿のように細く締まった身体を持つ鈴鹿が、ぽつりとつぶやいた

「お前、たまには間食とかしろよ……」
先月無事元服を果たした鈴鹿にそう言いながら、吸い物をすすって、以蔵は噴き出した
「辛ぇ！」
「甘いんすけど！？」
「苦ぁいっ！」

被害が流行り病のように拡大してゆく

「あー……夢姉」
口元を拭いながら、思い当たった
「はぁい？」
ニコニコと微笑む夢見に、以蔵（いぞう）が告げる
「お前、お手伝いクビな」

「がーん」
衝撃を受けたように夢見が頭を揺らす

「がーんじゃねぇ、お前この味付け自分で食ったのかよ、七色に味が変化するって何だそれ、七味唐辛子ってそういう意味じゃねーから」
「うぅ～～、せっかくイツ（いつか）花さんに教えてもらって作ったのにぃ～～」
「さ、伽子、夢姉が作ったモンは全部どけるぞ」

ごっめんなさーい！と言いながら、せっせと端に寄せてゆく伽子

「ちょ、いくら以蔵っち兄さんでも人の母さんの作ったものを、そんな風に扱わないでくださいっすよ！」
ぐすぐすと泣きそうな夢見を、門司が格好良くかばう
「よし伽子、全部それ門司の皿に乗っけろ」
「りょ、りょーかぃ」
「え」

冷や汗を流す門司の皿に、元は食べ物だったものが次々と盛り付けられる

「その出し巻き卵っぽいものも、夢見が作ったやつだな伽子」
「隣のおにぎりも、ユメが握りましたぁ～」
「だそーだ、そのおにぎりっぽいものもゴミ処理場行きだぞ伽子」
「いちいちぃ、っぽいものって言わないでくださぁぃ！」
ツッコミながら、自分はイツ花の漬けたお新香をパクつく夢見
「良いことを思いついた、後で蘭姉に一個食わせてやろーか、あの顔が崩れるかもしれんぞ」
と、そこで以蔵は鈴鹿を見て、
「……って思ったが、何だか効かなさそーだな」
「なんですか」

夢見のものを普通に食す無表情の鈴鹿を見て、以蔵は考えを改めた

「うぐぐ……俺っち、頑張る、っす……」
「おお、よく持つな、まだまだあるぞ頑張れ」
「何だか、顔色が悪くなってきましたね」
「漢方薬の対極のよーな食事だな」
口々につぶやく以蔵と鈴鹿
「ああもうっ、ユメ怒りましたぁ！」

きぃぃと夢見はその場で立ち上がる

「いやいや、だったらちょっと一口食ってみろよ、健康度下がるぞコレ」
「もうそこまで言われたらぁ、ユメお手伝いさん辞めますぅ！」
「だから食えよ、ホラ、ホラ」
「お手伝いさんやめて、メイドさんになるんですぅぅ！」

以蔵の突き出した黒豆を手で弾いて、夢見は泣きながら去ってゆく

「どう違うのでしょうか」
「……食べ物を粗末にしやがって」
黒豆を拾って、湯飲みの中の茶で洗ってから、門司の皿に丁寧に乗せる
泣きながら皿の上のモノを片付けていく門司をよそに、以蔵と鈴鹿、伽子は穏やかな新年を迎えたのであった

＜蘭の部屋＞

その頃蘭は、先月、親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）で入手した指南書の解読を進めていた

「……分からぬ」
大筒と呼ばれる、新兵器を使った戦略が記入されているらしいのだが……
その機械構造、原理、戦術に組み込んだ場合の運用方法、事細かに書かれたそれらは、蘭には少し高度過ぎた

「……寒い」
途端にコタツが恋しくなってきた
指南書を後で蔵にしまおうと思いつつ、蘭は自室を出て居間に向かう
「うわぁぁぁん……！」
その横を泣きながら夢見が過ぎていった
「……」
あまり気にせず、蘭は一家のくつろぐ部屋に立ち入る

「あ、母上、いらっしゃいませこんにちはー」
「ん……？」
鈴鹿が両手を広げて出迎えてくれた
「お風呂にしますか、それとも私とですか？」

いつもと変わらない鈴鹿の声色が、何だか艶を帯びているような気もする

「……以蔵、鈴鹿に何をした？」
オレかよ、とつぶやく以蔵の着物の前がはだけている
彼は足を崩して座っていた
「イツ花の持ってきた甘酒だよ」

肩をすくめる以蔵の横、門司が泣きながら皿の上食事を平らげていた

「そいつも酔っているのか」
「いや……まぁこれは気にするな、それより鈴鹿がな、甘酒を飲んだ途端にぽぅっとしやがって、故障か」
「……ネジが外れたのか」
ぎゅぅと蘭の腕にしがみつく鈴鹿
「……母上、母上はどうして母上なのですか？」
上目遣いに見つめられ、蘭は少し困る
「何故と聞かれてもな……」
「それはな、コウノトリの仕業じゃなくて、男と寝ｔ」

蘭に蹴られて転がる以蔵

「……もう1才7ヶ月のくせに、まだまだ元気な」
逆さで足を屏風に突っ込ませたまま、以蔵がつぶやいた

傍らでは、同じく甘酒を飲んで桜色に頬を染めた伽子が、あははははと笑い続けていた
「お父さんとランラン、超ウケるー！」
あははははははははと伽子がその場で床を叩く
「……」
鈴鹿に抱きつかれ、伽子に思いっきり笑われ、蘭はふと庭を眺めた
こんな空気が、何だか懐かしく思えた

「そうだな……体力が有り余っているようだ、皆で雪合戦でもするか」
「やるー！」
真っ先に手を挙げる伽子
「母上、雪合戦とは何ですか？」
春生まれの鈴鹿が、蘭に問いかける
「も、もちろん俺っちも！」
「それ全部食ったらな」
以蔵の非情な言葉に、さめざめと泣く門司

新雪が積もる庭に行こうとする皆の前に、戻ってきた夢見が立ちふさがる

「ふっふーん、話は全部聞かせてもらいましたぁ！」
「……寒いな」
それは気温なのか夢姉の演出がなのか、とつぶやく以蔵
「蘭さまの弱点は寒さですぅ、ユメがぁ思いっきり雪玉をぶつけてやりますぅ～」
うふふぅと嬉しそうな夢見の顔に、そういえば、と蘭は思い出す

「……去年の一月だったか、夢見は借りがあったな」

「え、えええぇ、まだ覚えていたんですかぁ……？」
悪役のように口元を吊り上げる蘭に、少し怯える夢見
唯一蘭が夢見に土をつけられた件だ
「……では、俺と鈴鹿、門司の組と、夢見に以蔵、伽子の組に別れるか」
「こっちは二人かよ」
「絶対ユメのこと数に入れてませぇん！」

夢見がきぃぃと、以蔵の後頭部をぽかぽか殴りつける

激動の年末を過ごした壬生川家の新年は、
一家全員での、熾烈だが平穏な雪合戦で始まったのだった

第四話－8　「呪言」　１０２２年1月後編

＜出陣＞

一同は、雪合戦の後に玄関に集まる

「あー楽しかった！」

「結局、全然遊べなかったっす……」

明暗のはっきり分かれた若いふたりだ

「じゃ、そろそろ出陣すっか」

槍を担いだ以蔵（いぞう）が皆を見回して、おや、と怪訝な顔をする

「あー……そーいえば、今回は出陣するのが俺と蘭姉（らん）と鈴鹿（すずか）だけなのか」

伽子（とぎこ）はまだ戦場に出られず、門司（もんじ）は先月大怪我を負ったのだった

夢姉は……と思いついて、以蔵はすぐに考えを打ち消した

見送りに来ないで、夢見は居間のお掃除をイツ花としているのだ、

わざわざ戦いに巻き込むこともない

「まぁ、なんとかなるだろ」

いまだに健康度が１００から減らない当主に、矛能力に特化した

以蔵、さらに支援も攻撃も万能にこなす鈴鹿

朱点討伐隊の名は伊達ではない三人だ

「……それは良いのだが」

黙っていた蘭が、重くつぶやく

「……大丈夫なのか、鈴鹿」
さっきからずっと自分の腕にしがみついている鈴鹿に、酔いは醒めたのかと問いかける
「すこぶる大丈夫です」
「いやお前、蘭姉が何を心配しているのかも分からねーだろ」
「軒並み例年にも増して平気です」
顔色も表情も変わらないだけに、本気で心配だ

「……まぁ、いきなり後ろから斬りつけてくるような真似はしまい」
そこまでしたら返品だな、と思う以蔵
「それでは行ってくる……伽子は、夢見から術と武芸をしっかり教わっていろよ」
「りょーかーい！」

ビッと敬礼のポーズをする幼子に、蘭はうなずき、その様子を見ていた以蔵が注意を入れる
「いくら母さんの孫だからって、人の娘に手をつけるなよ」
「……くだらないことを言ってないで、ゆくぞ」

さっさと道なりに出発する蘭に、はいはいと言いながらついてゆく以蔵だった

＜忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）＞

ここは、新たに出現した三つの迷宮のうちひとつ、古い上水道で

ある

「天界でも最高クラスの実力がある神が、人間のために造った上水道ねぇ」

膝まで漬かる水をじゃぶじゃぶかきわけながら、三人は奥を目指す

「……来なければ良かった」

震えながら自分の肩を抱く蘭

「冬に来る場所じゃねーな……」

寒さには強い以蔵だが、珍しく泣き言をつぶやく

突き刺さるような水の冷たさに、徐々に足の感覚が麻痺していった

「……」

押し流されそうな水の流れに逆らって、三人は何とか上流を目指す

そんな三人に、初めて見る、金トラ大将が一同に襲い掛かった

鉄クマ大将によく似た姿をしている

「……鉄から金はともかく、クマからトラは、強くなっているのか分かんねーな」

以蔵が足を取られる川の中で、そうつぶやく

「極東ロシアでは、食料難の際にヒグマが若いトラを狩っていたという記録が残っているそうです」

「何でそんなこと知ってるんだ」

そんなことを言っていると、全体攻撃の＜血火弾＞により、１０００強のダメージを受ける壬生川（みぶがわ）家

「強いじゃねーか……」

「……油断しているからだろう、馬鹿者が」

以蔵の横を駆け抜けた蘭が、薙刀で金トラ大将の首を刎ね飛ばす

「……さぁ、先に進むぞ」

息も乱れぬ様子で、蘭が先陣をゆく

「……あいつ、1才7ヶ月だったよな」

「お元気ですね、母上」

呆れたように二人はささやきあった

～～

大疎水（＝給水・発電などのため、土地を切り開いてつくった水路）上流を抜け、一同は人魚の滝布と呼ばれる地に足を踏み入れた

「……こんなところに、滝が？」

「人魚の滝布ってからには、人魚がいるんだろーな」

疑いの半眼で、あちこちを眺める以蔵

「……不老長寿の象徴である人魚か……俺達には何ら関係ないな」

その肉を食べれば、人は永遠に死なない身体になると言われているが、それが本当だとしても、肉程度であの朱点童子の呪いを打ち破れるとは思えなかった

「跳ねました」

突然鈴鹿が、滝の左側を指差した

「どーした鈴鹿、まだ酔ってんのか」

「いえ、何か……とにかく、何かが潜んでいます」

珍しく歯切れの悪い言葉で、執拗にその辺りを指差す
「ふむ、先に進む道もない……調べてみるか」
蘭はそう言って、以蔵の肩を叩く
「オレかよ」
「……寒いのは苦手なのだ」

知ってっけどさ、と言いながら、以蔵は腰まで漬かりながら滝つぼを調べようと、水面に目を凝らして、

○「あら、こんにちは、この私……敦賀ノ真名姫（つるがのまなひめ）に何かご用？」

人魚を見た

「……本物か？」
情の深い笑みを見せながら、人魚はぼちゃんと水面から顔を出す
「……人魚、なんでしょうか」
「……」
蘭が眉をひそめた、この匂いはどこかで嗅いだことがある……

スタイルの良い身体を見せた人魚が可愛らしく微笑みながら、以蔵に尋ねる
「ウフフ…どうせあなたも、私の肉がお目当てなんでしょ？」
「……そんなお伽話に、付き合っている暇なんてねぇよ、お前は何者だ」

一歩引いた以蔵に、人魚が一歩迫る
「みんな最初はそう言うのよ、でも人間なんて結局同じなの」

さらに一歩下がった以蔵に、まるで抱きつくように近づく真名姫

「おおぜいの人間が永遠の命を求めて、私の体をむさぼったわ……
でも効果がないとわかると、それを黙って私を他の人に売るの」
「……不幸自慢なら、よそでやれ」
以蔵は真名姫の身体を押し返し、蘭の前まで下がった
「最後のヤツなんてだまされたと知って、私を犬の群れにほうり込んでくれた…」

黙って、真名姫の肌に触れた自分の手を見る以蔵

「……なんだ、お前」
肉ではなく……その感触は、まるで岩のように硬かった
「ウフフ…こんな私でよけりゃ…いいわよ、どこからでも食べて…」
真名姫は再び頭を下げて、水中に潜ると、勢いをつけて飛び出してきた

「さあ、この私の体！　むしゃぶりついてごらんなさいよ！！」

その身体が無残に変貌していた
眼球のない目、海草のようにゆらゆら乱れた髪、
銛を構えた白骨死体のようなその身体には、肉の欠片も残ってはいなかった

「……そうか、あの時の……！」
先々代当主・幸四郎（こうしろう）が殺された時の記憶が蘇る
一同は得物を構え、真名姫に向かって構え、
「＜真名姫＞ェェェェェェェエ！」

くぐもった声が、滝を爆発させた

以蔵に見えたのは、荒れ狂う水流に、蘭と鈴鹿が押しつぶされてゆく光景だった

左右の水が手足をちぎるほどに暴れ、その術に以蔵は壁の端から端まで流された

途切れた意識が戻った頃には濁流が引き、全身がめちゃくちゃに打たれた痛みが残り、鈴鹿の姿はなかった

「……なんだって」

槍を持つ手が真っ赤だった

隣で薙刀に寄りかかる蘭を見て、それは自分の血なのだと気づく

「……しまったな」

蘭が淡々とつぶやいた

「……俺達には、まだ早かった……今さら言っても、どうしようもないか……」

全身から噴き出した血によって青い羽織を深紅に染めた蘭が、触れてはいけないものに手を出してしまった愚かさを呪う

そして、真名姫から二発目の＜真名姫＞が轟音を立てて、壬生川家を強襲した

全員に４００のダメージを受け、かつての朱点童子討伐隊は一蹴された

「あなたたちは死ねるんでしょ？　うらやましいわね……」

真名姫の狂気を帯びた声は、人魚の瀑布にいつまでも……響いていた

＜壬生川家にて＞

壊走した三人の中で、ただひとり、致命傷を受けた者がいた

蘭は一度目の死を思い出す

光も希望もなく、ただ全身が蝕まれ、焼けつくような熱さがあり、手足を微塵も動かすことは出来なかった

少しずつ、死んでゆこうとしていた蘭を救ったのは、巻絵だった

「……母から貰った命も、ついに尽きたか……」

呆気無いものだ、人の身というのは

たかが全身が千切られそうになっただけで、死んでしまうのだから

布団に横になって、蘭は熱い息をはいた
あの日と同じく、熱い……、全身が熱を持って、あの日から寒さが苦手になったのだ

「当主さま……」

傍にイツ花がいた
視界が濁ってよく見えなかったのだろう、と蘭は思う
「当主さまに残された時間は、もうわずかしかありません……」
その言葉の意味は、熱に侵された蘭の耳にも届いた
「最後に新当主ご指名の任、立派に果たされますようお願い申し上げます」
「……俺は、夜明けまで、生きられるか？」
蘭は見えない目で天井を見つめたまま、尋ねた
「……恐らくは、もう」
その言葉で、全てを察する

「……わかった」

鬼に殺されるのは、自分の運命だと受け入れられた
だが、蘭にはまだ果たすべきことがあった

「……以蔵を、呼べ」

「えっ、鈴鹿さまではなくて、ですか？」

「早く……以蔵を、ここに呼べ！」
蘭は力を振り絞って叫ぶ

「はッ、はいただいま！」
その後で苦しくせきをして、蘭は再び短い昏睡に落ちていった

～～

「……人が来たのに、寝てんのかよ」
「……起きて、いる」

全身に包帯を巻き、当て木で右足と左腕を固定している以蔵が、蘭の枕元に座り込んでいた

「……次の当主は貴様だ、以蔵……手を貸せ」
手を伸ばして、以蔵を見上げる蘭
「無茶すんなよ」
以蔵に引っ張られ、四肢が千切れてしまいそうな強烈な苦悶に顔をゆがめながらも、蘭は身を起こす

「ぐっ……！」

「おいおい……」
「……構わない、あのままでは眠ってしまう」
蘭は以蔵の胸元を掴み、自分の口元に引き寄せた
「……蘭姉、接吻でもするのか」
「神に頼るな」
短く、誰にも聞かれないように小さく放った
「……なんだって？」
「奴等を利用しろ……それが、壬生川家の生き残る術だ……わかっ

たな」
「……どういうことだよ、蘭姉」
布団に座り、蘭は荒々しく胸を締め付けていた包帯を剥ぎ取る
「……以蔵、鈴鹿を頼む」
少し呼吸が楽になり、声が通るようになった
もう延命の必要などない、伝えたいことは伝えた
「……ああ、出来る限りのことはする」
蘭のもう何も見えなくなった目に、以蔵の夜叉のような槍さばきが映る
「……お前はもう、初子を超えた……これからも、鬼を斬り続けろ」
熱が全身を、脳を焼き尽くす
「……朱の首輪に喰われて、何も感じなくなったその心で……鬼を殺し、砕き、屠り続け……鬼の屍の上で死ね」
蘭は呪詛のように言う
「……知っていたのか、オレのことを」
以蔵の驚きの声
彼の身体はもう、とっくに変異していたのだ
「……見ていれば、わかる……あれは朱点童子の作った魔具だ、貴様はただでは死ねんだろうな……」
全身を永続的に苛む業火の痛みに、蘭の口元が釣りあがる

「それを知った上で……オレに呪いをかけるんだな」
「……そうだ、呪いだ……夢見のような者はもう出すな……何の疑いもなく、鬼を殺せ、それがこの家の宿命なのだ……」

蘭の口からうめき声のような笑みが漏れた
もし蘭が今の自分の顔を鏡で見たならば、かつて出会った相翼院の天女や、白骨の人魚と同じような形相だったと気づいたろう

「願いが叶わず、呪いが叶うなら……いくらでも呪うとも……呪いこそが相応しい！」

ぷつん、と、世界が閉じた

蘭は、ついに耳が何も聞こえなくなったのだ、と理解した
熱が逃げてゆく
蘭の身体を侵し続けていた熱が、指先から、髪の先から、首の裏から去ってゆく

「……俺の呪いだ、以蔵……この怨み、憎しみ……必ず、伝えてゆけ……！」

誰かに届くように、手を伸ばす
痛みが遠のく
吼えるように、蘭の中から激情が抜けて消えた

暗闇の中、光はない
初子（はつこ）も、巻絵（まきえ）も、誰も、誰一人として蘭を迎えには来ない

孤独の闇に蘭は堕ちてゆくが、蘭の心中は晴れていた

願いではなく、祈りでもなく、純粋な憎しみがその身に満ちていた

誰よりも壬生川家を想い、誰よりも気高く生きた猛将は最期に、
託すように、呪いの言葉を発した

「真っ暗だ……俺にはもう、明日が見えない……貴様が、代わりに、
見ろ……壬生川家の明日は、貴様が……以蔵！」

そう叫んで、
壬生川の戦鬼は、生涯ただの一度も涙を見せず――絶命した

壬生川　蘭　享年１才７ヶ月

葬儀の際、寒さが嫌いな彼女のために、
鈴鹿は土葬の土を多く盛り、その上に一杯の茶を線香代わりに乗
せたという

第四話－8　「呪言」　１０２２年1月後編（後書き）

出陣・忘我流水道（蘭、以蔵、鈴鹿）
訓練・夢見→伽子　討死・蘭

壬生川家家系図―四代目まで―

＜壬生川家　家系図＞

玄輝――伊織

臥家――臥蛇丸――巻絵――蘭――鈴鹿

　　――夏海

香家――のの香――佐和――夢見――門司

幸家――幸四郎――初子――以蔵――伽子

初代　玄輝
二代目　幸四郎
三代目　初子
四代目　蘭

男子・五名
女子・十名

老衰・玄輝　幸四郎　佐和　初子
戦死・伊織　夏海　蘭

病死　臥蛇丸　のの香
反魂　巻絵

〜〜

＜閑話休題＞

『俺の屍を越えてゆけ』は、本当に良いゲームですね

猛将の死と共に、物語は中盤戦へ突入してゆきます

登場人物全員に思い入れがあると言えばその通りなのですが、
その中でも第三次大江山討伐隊の四人は、特に気に入っています

母の死によって新生した蘭、
壬生川家に生まれながらも、普通の女の子として生きたがる夢見
完全に主人公のポジション、以蔵
そして、無表情なツッコミ、鈴鹿

これから彼らはどのように生き、死に、あるいは子を遺していくのでしょうか
よろしければ今しばらく、壬生川一族の波乱に満ちた物語に、お付き合いお願いいたします

伽子ちゃんかわいいよ伽子ちゃん！

……ええと、感想など、お待ち申し上げております
それでは

第五話－1　「鈴奏」　1022年2月（前書き）

夢見　1才5ヶ月
以蔵　1才2ヶ月

鈴鹿　10ヶ月
門司　6ヶ月
伽子　2ヶ月

第五話－1　「鈴奏」　1022年2月

＜夢見（ゆめみ）の部屋＞

修行やお勉強がない時の伽子（とぎこ）の遊び相手は、もっぱら夢見だ

「メミぃー、お手玉しよー」

夢見に引っ付く伽子は、がうーがうーと遊んで攻撃を仕掛ける

「でも伽子ちゃん、きょうのお勉強は終わったんですかぁ？」

「うん、ちゃんと＜お雫＞も半分くらい覚えたよ！」

「全部覚えないと使えませんよぉ」

これから覚えるもの！と胸を張る元気な少女を見て、夢見はよしよし、と頭を撫でる

「やっぱり、女の子は良いですぅ……ユメもホントは女の子が欲しかったんですよねぇ」

今月戦闘部隊に入ったばかりの伽子を見て、はふぅと息をつく夢見

「ちょっと母さんん！？」

部屋の隅、＜お地母＞の書をめくっていた門司（もんじ）が、ありえない言葉に思わず叫ぶ

「何かねー、メミぃはお姉ちゃんって感じー！」

「うふふ、伽子ちゃんは、可愛い妹って感じですぅ」

下に物怖じしない鈴鹿を持つ夢見は、なおさら伽子が可愛らしいのだろう

「ねぇねぇ、メミぃ、そういえばこの前からお父さんの元気がないんだよね」

伽子が言っているのは、以蔵（いぞう）が五代目当主の名を継いでからの話だ

「いっくんも、偉くなりましたしねぇ」

「ねぇねぇ、メミぃ」

夢見の袖を引っ張って、伽子が無垢な目で尋ねる

「やっぱり、お父さんってランランのこと、好きだったのかな」

聞き耳を立てていた門司が、ぶっ、と噴き出した

「え～～～、それはないですよぉ～～～」

全力で否定する夢見

あれだけ貴様やら無表情女やら呼び合っていたふたりのことだ、万が一もそんなことは、と夢見は思う

「あーじゃあ、もしかしてリンリンの方ー？」

「それならまだぁ、あるかもしれませんねぇ」

女性の話に花が咲く

（俺っち、この部屋にいても良いんだろうか！）

門司は気まずさを感じながら、黙って読書を続ける

「あたしも良いなぁ、そういう恋してみたいなぁ」

伽子は両手を胸元で組んで、夢見る少女のまなざしで天井を仰ぐ

「あ、でも伽子ちゃんのおばあちゃんは、ユメのママとラブラブだったんですよぅ」

「ええっ、マジですか！？」

大げさに驚く伽子に、夢見は続ける

「そこになんと蘭さまも加わってぇ、伽子ちゃんのおばあちゃんを挟んだ三角関係が出来ていたんですからぁ」
「うわー、修羅場マーチー」

初めて聞くはっちゃけ話に、伽子は瞳を輝かせる

「初子おばあちゃん、モテモテだったんだねー！」
「強くてぇ、格好可愛くてぇ、とーっても優しかったんですよぉ…
…よく笑う人で、ぽっ」
あははは一と笑う伽子が、邪気なく言う
「でもお父さんが笑ったとこ、あたし見たことないやー！」
「昔はよく笑っていたんですけどねぇ、いっくん」
夢見はちっとも深刻に見えない顔で、うーんと思い出す

「顔は悪くないんですけどぉ、たまに、何か怖いっていうかぁ、人を人とも思わないていうかぁ、冷酷残忍、極悪非道って感じぃ？」

以蔵の話題になった途端、大江山で何度か殴られた怨みが再発したらしい

「えーでもでも、お父さん超ウケるよー？」
「そうなんですぅ、鈴鹿ちゃんにも優しいんですぅ、もぅ、うちでユメにだけ嫌がらせをしかけてくるんですぅぅ！」
きぃぃと歯噛みする横、門司が「え、俺っちは？」という顔をしている

夢見が散々以蔵をけなすのを、伽子はあははは一と笑いながら聞き、そんな女性二人を門司は「女ってこ、こわいっす……」と思いながらビクビクと勉強を続けていたという

＜交神（こうしん）の儀＞

先月鈴鹿（すずか）と以蔵は大怪我を負ったため、休息の意味合いも兼ねて、
今月は交神の儀に励むことになった

「それでは、よろしく頼みますイツ花（いつか）さん」
巫女装束に着替えたイツ花に、深々と頭を下げる鈴鹿
「はァーい」

その横で、以蔵が憮然と座っていた

「何故、オレがここに……？」
鈴鹿に引っ張ってこられたのだ
「交神の儀が、どうやるのか分からなくて」
「……分からなくて？」
何か嫌な予感がして、以蔵は静かに尋ね返す
「だから、教えてもらおうと思います」
「付きっ切りで、か……？」

鈴鹿はこくん、と無言でうなずく
以蔵は鈴鹿の頬をベチと叩いて、黙って去ってゆく

「……どうして」
叩かれた頬を押さえて、鈴鹿は不満げにつぶやく
「モノを知らないっていうのも、罪なものですネェ」
イツ花が自分のことを棚上げにして、そう感想した
「では、イツ花さんが教えてくれませんか？」

「え、いやァ、あはは……そ、そう！　それじゃ神様にバーンとォ教えてもらいしょう!?　ネ?」

ふむ、と鈴鹿は口元に手を当てて、
「そうですね、神様ならウソをついたりはぐらかしたりしなさそうです」
得心したようにうなずく

「アハハ、じゃあ、この表からお目当ての神様を選んで選んでェ」
イツ花の差し出した神様一覧表から、鈴鹿が選んだのは土神だった
「……私に足りないのは、体、技ともに土の遺伝子です、ですからこの方でお願いいたします」
鈴鹿が合理的に選んだのは、ダルマこと七天斎八起だった
たらりと汗を流すイツ花
「こ、この方で良いんですネ?」
「この方ですと、何か不都合があるんですか?」
きょとんと尋ね返す鈴鹿に、イツ花は笑いながら後頭部に手を当てる
「あ、イヤイヤ全然そんな!　そ、それではァ、楽しんでくださぁい!」
イツ花は神様をおよび立てして、廊下に下がって襖を閉じる

部屋の中から、神様の「人生七転び八起きじゃ……」という低い声が聞こえてくる

「うぅ、何だか私、すっごい悪いコトした気分ですッ……」
イツ花は廊下で、交神の間に背を向けながら、そうつぶやいた

〜〜

翌月、以蔵が鈴鹿に、交神の儀はどうだったんだよ、と尋ねると、鈴鹿は「……やはり、よく知らない方とは……もう、やりたくないです」と、珍しく弱音を吐いたのだった

第五話－1　「鈴奏」　1022年2月（後書き）

交神の儀・鈴鹿×七天斎八起

第五話－2　「空涙」　1022年3月（前書き）

夢見　1才6ヶ月
以蔵　1才3ヶ月

鈴鹿　11ヶ月
門司　7ヶ月
伽子　3ヶ月

第五話－2　「空涙」　１０２２年3月

＜庭にて＞

「それでは、初めです」
鈴鹿（すずか）が手を振り下ろすと、門司（もんじ）と伽子（とぎこ）の間に緊張感が走った

「へへっ、相手が悪かったっすね、何てったって俺っちは世界・神術選手権で第二位を記録した――」

門司の台詞の途中で、伽子の結んだ術が完成する
「ええーい、死ねモンチー、＜お焔＞！」
小さな火球が、門司の足元で弾けて火の粉を撒き散らす
「熱いっ、熱いっすよっ、てか死ねって何っすか！？」
わたわたと慌てる門司に、鈴鹿がぽつりと、
「口上が長かったですね」

そこへ、いつも眠そうな眼をした以蔵（いぞう）が通りかかる

「……何やってんだ？」

庭に距離を開けて対峙する門司と伽子、その手前に鈴鹿が赤と白の旗を持って立っていた
「兄上、模擬戦です」
振り返って、鈴鹿がそう言う
門司が印を描いて＜白波＞の術を唱え、その衝撃波を伽子がひらりと避ける

「……術のみでか、夢見（ゆめみ）に師事した門司に、伽子が勝てるとは思わねーけどな」

現在、壬生川（みぶがわ）家を分別するのは、以蔵、鈴鹿、夢見それぞれの家系だ

術に秀でた弓使いの家が夢見、門司の血筋なのに対して、以蔵の流派は剣技・槍術に重きを置いている根っからの仕留め役だった

先々代の当主である初子が、夢見の母で４ヶ月年上の佐和に武芸で勝っていたのも、そういう遺伝子の特化によるものだ

「でも、伽子さんの術力は大したものです」

文武両道を志した蘭（らん）の血を引き継ぐ鈴鹿が、やんわりと以蔵の危惧を否定する

門司が＜業ノ火＞の術を唱えている間に、伽子が＜暴れ石＞を早口で結ぶ

「傍若無人に今し方・古今東西の荒石こぞり……ああっ、続きなんだっけ!?」

伽子が途中で頭を抱えて、印を中断してたところで、門司がにやりと笑う

「ワーハハ、勝ったっ、まだちっちゃい伽っちには負けるわけにはいかないっす！」

ビシッと伽子を指差す門司

鈴鹿が冷静に告げる

「門司さんも、術中断ですが」

「しまったっす！」

以蔵がこそこそと伽子に囁く

「荒石こぞりて、削岩突起寄り合わせ、喧々諤々大崩し、だ」
「3秒ルールです、まだ間に合いますね」
鈴鹿も伽子にうなずく
「ありがとーっ、古今東西の荒石こぞりて……削岩突起寄り合わせ・喧々諤々大崩し！」
きゅぴーんと伽子の指が光り、周囲の砂岩がざわめく
「もう3秒とか、とっくに過ぎているじゃないっすかー！」
「術なんて適当でも大体発動するからな」
「夢見姉上がよく間違っているのに無理矢理放ったりしてましたね」
のんきな言葉に、門司が何やら納得できないとわめきたてる
「＜あーばれーいーしー＞！」
門司の叫び声は、怒号を立てて押し寄せる岩々に一緒になって押し潰されていった
その光景を眺めて、以蔵は鈴鹿にぽつりと漏らした
「こりゃ、ダメだ」
「……何がですか？」
「何回やっても……相手が門司だったのが、勝因になっちまう」
「……そう、ですね」
鈴鹿も同意する
伽子の放った＜暴れ石＞が去ると、そこには伸びてぴくぴくと痙攣する門司の姿が残されていた
「ぶい！」
嬉しそうにVサインをする伽子に、以蔵と鈴鹿は頭を抱えていた

＜選考試合前・京の都＞

あちこちを包帯で結んだ門司を、伽子が引っ張ってゆく
「ねぇねぇモンチー、あたし水あめ食べたいっ」
門司が呆れながら返す
「あのっすね、そういうのは以蔵っち兄さんに頼めば良いじゃないっすか」
「えー、じゃあ、あたしがモンチーに、買った水あめを少し分けてあげるってのでどう？」
「でもそれ俺っちのお金っすよね！？」
そんなふたりを、以蔵と鈴鹿が遠くから眺める
「なんだかんだで仲良いな、あいつら……」
「以蔵兄上が門司さんをからかうのを、すっかり覚えてしまいましたね伽子さん」
鈴鹿が冷静に分析する
「そーか、門司の存在が教育上良くなかったんだな」
「曲解し過ぎです」

それよりも、と以蔵は話を変えた

「夢姉の様子、変だったな」
いつもなら、あれほどはしゃぐ京の都だというのに夢見は着いて来なかったのが、以蔵は不思議でならなかった
「門司も来るんだし、家に居る理由なんてねーのにな……」
夢見の様子を思い起こすと、家を出る自分たちに向けた言葉はそっけない「行ってらっしゃいですぅ」だけだった
「何でだろーな鈴鹿」

「分かりません」
「……あっそ」
「人の気持ちは、その本人にしか分かりません」

まぁそりゃそーだわな、と以蔵がため息をつく

「あっ、何かそうやっていると、夫婦みたい！」
いつの間にか戻ってきていた伽子が、頭に狐のお面をつけたまま
以蔵と鈴鹿を指差す
思わず顔を見合わせる年長者ふたり

「……鈴鹿と、か」
「……以蔵兄上と、ですか」
ほぼ同時につぶやいた

「何でそんな嫌そうな顔するの！？」
突っ込む伽子の後ろ、荷物持ちと化した門司がよろよろと歩いてくる
「俺っち、一応怪我人なんすから……」
両手に出店の菓子やら、京土産の羅生門ちょうちんやらを重そう
抱えたまま、るるるーと涙を流す門司
伽子はきょとんと目を丸くさせる
「え、モンチー怪我しているの？」
「あなたが怪我させたんすよね！？」
ごめんごめんあははは一、と笑う伽子に鈴鹿がうなずく
「やはり、以蔵兄上のお嬢さんですよね」
「……さ、そろそろ会場に行くか」
聞こえなかったフリをして、以蔵は先に進んでいった

＜選考試合＞

伽子の初陣となる春の選考会で、壬生川家は当主・以蔵による圧倒的な強さを見せつけ、堂々の夏・春連覇を果たした
その伸び伸びと戦う伽子の幼い姿が、京の町でも密かな人気を博したのは、壬生川家の知るところではない話だった

＜壬生川家＞

「ただいま」
選考試合の疲れも少なく、槍を担いで戻ってきた以蔵が屋敷に戻る

いつもなら真っ先に出迎えて来るはずのイツ花の姿が見えない
「……まぁ、夢姉のお迎えとかは期待してなかったけどな」
そう言いつつ何となく虫の知らせを想い、様子のおかしかった夢見の事が気にかかって、ひとりで早く帰ってきたのだ
「当主さま！」
玄関に座り込んで足袋を脱いでいた以蔵に、イツ花のただ事ではない声が届いた
「イツ花……どーした、そんな慌てて？」
血相を変えたイツ花が、以蔵の目を見据えて、ただ一言つぶやいた
「夢見さまが……お倒れになりました」

以蔵はその瞬間、槍を投げ捨てて駆け出した

＜夢見の部屋＞

遅れて鈴鹿が夢見の部屋に着いたとき、以蔵が夢見の布団の前でうなだれたように座っていた
寝ている夢見は顔色が青く、一目で弱っているのが見て取れた

「以蔵兄上……」
「夢姉は、きっと死ぬよな」

以蔵は夢見の手を握ったまま、そうつぶやいた

「……夢見姉上は1才6ヶ月、そろそろ難しいかもしれません」
「門司はまだか」
鈴鹿は以蔵の隣に腰を下ろす
「先ほど早馬を手配しましたが……なにぶん、門司さんは伽子さんと一緒ですから」
伽子の荷物を背負い、歩幅の短い子供のお守りをしているのだ、壬生川家に帰ってくるまでまだ少し時間がかかるはずだった

「目、覚ますかな、夢姉」
以蔵の声は穏やかだった
「分かりません」
「……お前そこは、ウソでも、覚ますって言う場面だぞ」
「そんなウソは、つけません」
鈴鹿は静かに、そう答えた

「イツ花が教えてくれたんだ、夢見の言葉、何だと思う？」
「分かりません」
淡々と以蔵は続けた
「ごめんなさい、だってよ……わたしでごめんなさい、ひたすら、ごめんなさいだとさ」
「そうですか」
「……夢姉をこんな風にしたのは、やっぱりオレたちなんだよな」

鈴鹿は首を振る

「私には、分かりません……」
以蔵は枕元にあった濡れた手ぬぐいで、うなされている夢見の額の汗を拭き取る
「……ただ、私が母上から聞いた話があります」
「蘭姉の言葉か……」
「……生まれてくる赤ん坊は、天界の神にくじ引きを引かされて……当たりに当たったが最後、壬生川家に生まれ落ち、死ぬまで、神の退屈しのぎに鬼を殺し続けるそうです……私には、意味が分かりかねましたが……」

くじ引きで決まった罰か、と以蔵がつぶやく
少しの間があり、
ふたりの前、夢見がうっすらと瞳を開けた

「う……うぅ……」

「……夢姉」
以蔵が夢姉の手を強く握る
「わたし、ごめんなさい……誇れることが何もなくて、こんな娘で……ごめんなさい、ママぁ……」

夢姉の目から、涙がこぼれた
「夢姉……お前は良く頑張ったよ、もう……ゆっくり、寝るんだ」
「親不孝ものでしたけど……許して、ください……ママ……」
その震える唇を見て、以蔵が強く首を振る
「……夢姉は良くやった、オレたちと朱点を討ったんだからな……誰にも出来なかったことを、成し遂げたんだよ……」
泣きながら、夢見は最後の力を振り絞り……かすれ声でつぶやいた
「私、もうダメみたい……しょうがない、ですよね……ごめんなさい……」

壬生川　夢見　享年1才6ヶ月

以蔵はいつまでも、夢見の手を握っていた

「なぁ……鈴鹿」

呼ばれて向いた鈴鹿は、以蔵の表情を見て、驚きを隠せなかった
夢見の手を握る以蔵は、まるで能面のような無表情だった

「おかしいだろ、オレ……何も感じねーんだ……」

彼は呆けたように、夢見の亡き顔を見つめていた

「夢姉の死を、ただ受け止めていて……悲しくもねーし、寂しくもねーし……ただ、あった事を事実として、受け止めているんだ、オレ……大切な、家族だったのにさ……」

「以蔵、兄上……」

鈴鹿が痛々しいと思ってしまうほど、以蔵の声は普段と何も変わってはいなかった

「オレ、好きだと思ってたんだけどな、夢姉……弱虫だったオレをいつも、引っ張り回して……いなくなったら、泣けるって、どっかで信じてて……それが、最後の望みだったんだけどな」

屋敷から騒がしい声が聞こえてくる、門司が到着したのだろう

「オレ、狂っちまったのかな、何も感じなくなって、このまま死ぬんかな……」

夢見の亡骸を前に、以蔵は恐怖すらも感じることができない
朱点（しゅてん）の首輪に喰い尽くされたこの心は、もう枯死しているに違いない

蘭はこの世を呪いながら死んでいった、あれはきっと、自分の行く末なのだ
だから蘭は、鈴鹿ではなく以蔵を呼んだのだと、以蔵は今になってようやく理解した

ただこの心が波打つのは、鬼を討ったその時だけ――
以蔵は己の胸を強く握る

「そうだ、オレは……失った心を取り戻そうとあがくたびに……鬼を殺し、砕き、屠り続けて、最期には鬼の屍の上で死ぬんだな……」

以蔵は幽鬼のように音もなく立ち上がると、黙って部屋を出てゆく

入れ替わりに、泣きながら門司と伽子が入ってきた

「兄上……！」
鈴鹿は部屋を出て、以蔵を追いかける
だが、その以蔵の背中から立ち上る鬼気を見て、息を呑んで足を止めてしまった
鈴鹿はふいに、選考試合で彼の情け容赦ない強さを妬んだ者から囁かれていた、以蔵の二つ名を思い出していた

鬼斬り以蔵

壬生川五代目当主は、こうして一族の最年長となった

第五話－2　「空涙」　1022年3月（後書き）

選考試合（以蔵・鈴鹿・門司・伽子）　老死・夢見

第五話－3　「臥家」　1022年4月前編（前書き）

以蔵　1才4ヶ月
鈴鹿　1才
門司　8ヶ月
伽子　4ヶ月

第五話－3　「臥家」　1022年4月前編

夢見(ゆめみ)が亡くなって、門司(もんじ)は読書をすることが多くなった

元服した門司は広い部屋をひとりで持て余しながら、術の勉強をしていた

「モンチー、暇ー？」

ただ、そのほとんどの時間は、屋敷をうろちょろする伽子(とぎこ)に邪魔されていたが

「伽っち、鈴っち姉さんのとこに遊びに行ったんじゃなかったんすか？」

書物の上に頭を乗せて門司を見上げる伽子が、口を尖らせて言うまるで読書を邪魔する猫のようだ

「何だかね、きょうリンリンの子が来るみたいで、お父さん引っ張ってっちゃった」

「はぁ、いつも一緒っすねあの二人」

「もう夫婦だよね、夫婦」

あんな父親とあんな母親を持つ伽子に、思わず同情してしまう門司

「で、何やってたのー？」

門司の背中に乗っかって、伽子は肩越しに教本を覗き込む

「いたた、ちょっと重いっすよ、＜くらら＞の巻物っす」

「え、もしかしてあたしに教えてくれるために予習？」

「どんだけポジティブなんすか！？」

ちゃうわっ、と伽子を振りほどく門司

「なーんだ、せっかくモンチーにお兄ちゃんっぽいことをさせてあげよーと思ったのに、優しいお伽ちゃんが」
「それが教えられる立場の言い分っすかね！？」
あははははーと笑って伽子は話を変える
「それはそーと、モンチー暇ー？」
「俺っちの声聞こえてたっすか！？」
げしげしと門司のわき腹を突きながら、伽子は一方的に話を進める
「もし暇なら、お花見しなーい？　お花見ー」
そういえばと、門司も＜くらら＞の書から目を上げて、外を眺めるなんだかんだで、伽子のペースに乗ってしまうのだ
「もう桜の季節っすかぁー」
「世界でもっとも綺麗なお花なんだってよ、七色に輝いて、夜になると自ら輝いて、さらに見る角度によって色が変わったり、花びらの大きさが3メートル強だったりするのかな」
いまだ桜を見たことのない伽子が、勝手に想像する
「何かもうそれ、花の妖怪っすね」
「えっ、花の妖怪なの桜って！？」
「へ？」
血相を変えた伽子に、門司が嫌な汗を流す
「そんなまさか、壬生川（みぶがわ）家の敷地内にまで妖怪が入り込むなんて…
…この正義の槍使い、お伽ちゃんが成敗ー！」
そう言って猛ダッシュで部屋を出て行った伽子を、慌てて追いかける門司
「ちょ、俺っちが悪かったっすから！」
父子ともに、以蔵（いぞう）の家系からは振り回され続ける門司だった

＜鈴鹿の子＞

儀礼の間に腰を下ろして、鈴鹿はイツ花の言葉を聞いていた

「鈴鹿さま、七天斎八起さまより、新しいご家族を預かって参りましたァ！」

心持ち嬉しそうに正座する鈴鹿の横、以蔵が憮然とした顔であぐらをかいていた

「……何でオレはいつも、お前のお守りをせにゃいけねーんだ」

「一家を守るのは、当主の務めだと母上は常日頃から言ってました」

子供を迎え入れる作法がわからなくて不安だからついてきてほしい、と鈴鹿が頼んできたのがつい先ほどのことだ

「……それは蘭姉の信条で、ってまーいいか……来るのは、臥家の五代目、だったか」

「がけ？」

聞きなれない言葉に、鈴鹿は首を傾げる

「ああ、そろそろ三つの家も特徴が明確になってきたし、ここらで呼称でも考えよーと思ってな、初代が臥蛇丸だから、臥家」

「臥家二代目が巻絵さんで、三代目が母上、四代目が私ですか」

代々の薙刀士の家系である

「そういうこと、門司んとこは香家、んでオレが幸家だ」

鈴鹿は、分かりました、とうなずく

「でも、兄上の家は幸家ではなく、本家でも良かったと思いますが」

「母さんの代ならともかく、現当主がオレじゃ、おこがましいよ」

そう言って、以蔵は肩をすくめて、イツ花を見る

「悪い、話し込んじまったな、続けてくれ」

「はァーい」

ニコニコとイツ花が続ける

「おめでとうございます、男のお子様です！」

「男、か、増えたもんだな我が家も」

壬生川家に来てから門司が生まれるまで、ずっと一家で男ひとりきりだった以蔵がつぶやく

「なんだか、ただ者じゃない眼の輝きをお持ちです！」

鈴鹿がちょっぴりだけ嫌そうな顔をしたのを、以蔵は見た

「ただ者で、良いのですが……」

「それでは、お呼びいたしまーす！」

「よろしくお願いしまーす！」

障子を開けて現れたのは、派手な金の髪を持つ、肌の黒い少年だった

愛嬌のある顔立ちの子に、鈴鹿は英雄（ひでお）と名づけ、薙刀士の道を歩ませた

「なかなかの美少年だな」

ふーん、と以蔵が感想を口に出す

「よろしくお願いします、英雄さん」
自分の息子に対しても敬語で頭を下げる、バカ丁寧な鈴鹿
「ぼ、ボク、頑張りますっ」

そう言って、英雄ははにかみながら微笑む
「最近の壬生川家にはいらっしゃらなかった、まともそうな方ですネェ」
「いやせめて、伽子はまともでもいいだろ」
イツ花の感想に、あれくらいの笑い上戸勘弁してやれよ、と以蔵がつぶやく
「英雄さんもどうか……この壬生川家で、まっすぐに育ってください」
「お母さん……」
鈴鹿が英雄の頭を良しと撫でる
「ありがとう、お母さん、ボクもこんな美人な人がお母さんで良かったっ」
「美人だなんて……そんなこと言われたの、初めてです」
ちらりと以蔵を眺めながら頬に手を当てる鈴鹿
なんとなく面白くなさそうにしている以蔵が、横からしゃしゃり出る
「でもな、この壬生川家に生きる以上、何か特技は必須だからな」

まっすぐなだけじゃダメだぞ、と付け加えて以蔵は鈴鹿を指差す

「例えばこいつは、どんなにマズイものでも顔色ひとつ変えずに食べれる化け物だ」
「人をそういう風に言わないでください」
聞こえないフリをして、以蔵は続ける
「オレなら、どんな相手にも揺るがない、淡々としたツッコミ」

「え、特技だったんですか？」
そこで以蔵は、さあ、と小さな子供に詰め寄って、
「さ、英雄は何があるんだ」

「え、ええっ！？」

以蔵の無表情に、英雄は思わず大きな瞳に涙を浮かべる
「怖がっているじゃないありませんか、兄上」
「そ、そんな……ぼ、ボク、特技なんて……ぐすっ」
鈴鹿が英雄を抱き、非難するように以蔵を見る
「オレは昔っから女に優しくするよう、母さんや夢姉にしつけられたが、野郎はそれに該当しねーもんでな」
「そうでしたか、門司さんを虐めていたのは、てっきり夢見姉上を取られたからだと思っていましたが」
「なかなか言うじゃねーか鈴鹿、よし表に出ろ」
「もしかして英雄さんにも、そういう感情を抱いていらっしゃるんではないでしょうか？　と思っただけです」

以蔵と鈴鹿の口論をイツ花が横で、夫婦喧嘩は犬も食いませんからネェ、と傍観していた

「も、もうやめてっ」
そこに、涙をいっぱいに浮かべた英雄が、ふたりの間に割って入った
「よ、よくわかんないけど……でも、け、ケンカはダメだよっ」
潤んだ瞳で見つめられ、以蔵と鈴鹿は何となくそっぽを向く
すると、英雄が突然ニッコリと微笑んだ

「ボクの特技、こんなのでどう？」

「……え？」
「……は？」
呆気に取られて、二人がつぶやく
「天界でも、ボク結構みんなに可愛がられてたんだー、えへへ」
愛らしく微笑む英雄を前に、以蔵が思う

（……なんてガキだ）

「……？」
鈴鹿はそんな息子に、しばらくきょとんとしたままであった

第五話－４　「轟駆」　１０２２年４月後編

＜出陣＞

「それじゃ、行って来るか」
身軽な装備に槍を担いだ以蔵（いぞう）が、眠そうな目で辺りを見つめる
「英雄（ひでお）は今月自習か……訓練要員も、いなくなっちまえば不便だな」
「それ、誰のことですか？」

鈴鹿（すずか）の問いかけに以蔵は何も言わず、ひとりで先に行ってしまう

「もう……あの人はまったく」
「頑張ってね、鈴鹿お母さん」
まるで天使のような笑顔で、英雄は鈴鹿に抱きつく
「わ、可愛い！」
目を輝かせる伽子（とぎこ）に驚いて、鈴鹿の後ろに隠れる英雄
「あ、ごめんごめんびっくりさせちゃったかな、あたし伽子、よろしくね！」
「あ、あの……よろしく、お願いします、お姉ちゃん」

もじもじしながら、英雄は伽子の差し出した手を掴む

「おー、俺っちは門司（もんじ）だ、よろしくっす！」
「あ、うん、よろ」
ぼそぼそとつぶやく英雄
「何すかその態度の差は！？」

いきなり怒鳴りだした門司に、伽子と鈴鹿が怪訝そうな目を向ける
「何ですか、門司さん？」
「ど、どうしたのモンチーいきなり、顔が良い子が気に食わないの？」
女性陣から奇異の視線を浴びせられ、門司は口をもごもごしながら英雄を指差す
「い、いや、その子がっすね……」
門司から指差された英雄は、再び鈴鹿の陰に隠れる
「ぼ、ボク……あの、何も……」
「ちょっとちょっとー、何イジめているのモンチー、この世界心狭い選手権一位めっ」
目を吊り上げる伽子に、門司はあうあうと口をぱくぱくさせた後に、
「う、うわぁぁぁん！」
泣きながら走っていった
「何だったの……？」
「何でしょう……」
鈴鹿と伽子に頭を撫でられながら、英雄はこっそりと勝者の笑みを浮かべていた
＜紅蓮の祠＞
以蔵、鈴鹿、門司、伽子という選考試合に出場した四人が訪れた

のは、灼熱の洞穴だった

火山に繋がっているのか、あるいは冥府への入り口なのか、洞窟にはマグマが噴き出し、進軍は困難を極めた

「……暑いですね」

「お前が、言っても……説得力が、ねーよ……」

以蔵のツッコミも、心なしか冴えない

現れる妖怪は強敵の上、全体回復の術＜お地母＞を使えるのが、経験豊富な以蔵と夢見（ゆめみ）の術力を継承する門司のふたりだけという有様

鈴鹿は土の遺伝子が極端に欠落していたし、伽子は今回が出陣二回目だ

そういうわけで治癒の術に苦労しながらも、以蔵を中心とした圧倒的な攻撃力により、壬生川（みぶがわ）家は何とか奥へと進んでいった

「目的は奉納点（ほうのうてん）を稼ぐことと、新しい洞窟の探索、それに門司さん伽子さんのご成長です」

「履き違えてはねーよ」

槍を振り回し、火妖の腹に次々と風穴を空けてゆく以蔵が、呼吸を整えながら返事をする

以蔵は口元に手を当てていた

油断すると、顔が笑みを形作ってしまいそうで

そんな顔を娘に見られてしまいそうで恐ろしかったのだ

「あまり先に行かないでくださいね、兄上」

「……分かってる」

鈴鹿の言葉で気負う気持ちを抑えると、以蔵は若人たちと歩調を合わせて、共に先へと歩む

炎奏廊（えんそうろう）と呼ばれる回廊を抜け、一同は熱波の中を奥へと辿ってゆく

「あっつーーい！　お父さん脱いでも良い！？」
もう我慢できないと言った顔で、伽子が以蔵に尋ねる
「ちょ、伽っち」
たしなめようとした門司を手で押しのけつつ、以蔵が短くつぶやく
「門司が喜ぶから、やめとけ」
「あー……うん、そっか、じゃあガマンする」
「ちょ、どういうことっすか！？　何でそれで納得するんすか！？」
心持ち伽子は、門司から距離を取った
そんな気全然ないのに……と、涙を流す門司

「水分が勿体無いです」
顔色ひとつ変わっていない鈴鹿に、さらにトドメを刺された

～～

４ノ宴、５ノ宴……と一風変わった名前の横穴を抜けてゆき、
強力になった妖怪により健康度を削られながらも、一同は開けた空間に出た

四人がたどり着いたのは、炎舞廊（えんぶろう）という名の広間だった
「嫌な……臭いがするな」
以蔵が眉をひそめて、槍を構える
「私には感じられませんが……」

「いや……背中が、ピリピリしやがるんだよ」

周囲を警戒してろ、と以蔵は言いつけると、ひとり一歩前に踏み

出した
　並の人間なら気づかない、わずかな振動が足に伝わった
「お父さん、何か来るっぽいよ！？」
「……伽子も、か」
　地面から伝わってくる音は、どこかで聞いたことがある、以蔵は記憶を巡らせる

「鈴鹿はオレと前へ、門司と伽子は後ろでいつでも術を撃てる準備をしておけよ」
「りょーかい！」
「うっす！」
　元気の良い声を流しつつ、脳裏をよぎる音を照らし合わせる
（これは、そうだ、京の都で……？）
、以蔵の中で段々大きくなってくる音と記憶が一致した

「……これは、車輪、か！」
　以蔵はその瞬間槍を放り、隣で薙刀を構える鈴鹿を抱いて、右後方に大きく跳んだ
　直後、岩盤を砕いて出現した一騎の車が、先ほどまで以蔵のいた位置に突っ込んでいく

　その荷車は、体長が壬生川家の蔵ほどはありそうな、化け物だった
　跳ね飛ばされていたら一撃で葬られていただろう

「……は、ありがとう、ございます」
「気づくのがおせーよ……」

　鈴鹿を抱いて着地した以蔵の前に、壁に突進して停止した車――
　燃え盛る火炎の車が方向転換してその正面を向けてきた

火車の上に、巨大な蛇の胴体を持つ燃える髪を生やした男が乗っている

「え、人間？」
「なはずがねーだろ……」

鈴鹿を降ろして、以蔵は投げ捨てた槍を拾う
炎の車に乗った益荒男は、荒々しく怒鳴った

鳴神小太郎「燃え尽きよ！」

小太郎は大きく叫び、火炎系全体術＜双火竜＞を発動させた
竜の尾を模した二本の熱線が暴れ回り、伽子や門司、以蔵や鈴鹿の身体を薙いでゆく
全員に１５０ほどのダメージを受ける壬生川家

「ひい……＜お地母＞っす！」
間髪入れずに門司が治癒の術を唱える
「……門司さんだけじゃ、回復が追いつきません」
「チ……＜お地母＞！」
以蔵が下がって印を結び、代わりに鈴鹿と伽子が前に出て、小太郎に飛びかかった

「壬生川正義の一番槍、参りまーーーっす！」

小太郎が縦横無尽に振り回す灼熱の髪の毛を避け、切り落としながら、鈴鹿と伽子がその懐に潜り込む
だが真っ先に飛び込んだ鈴鹿の薙刀では、その身体に引っかき傷

程度のダメージしか与えられない
伽子も続くが、同じく表皮を傷つけただけで、肉まで届かない
小太郎「稲妻よ！」
それどころか、十分にひきつけられたところで小太郎の＜雷電＞をまともに浴びてしまう
ぼて、と後方に倒れる伽子と、身を守ったまま以蔵の横に着地する鈴鹿
「無茶すんなよ……＜お雫＞！」
「……普段と何だか逆ですね」
以蔵が振り返ると、伽子に門司が駆け寄って＜お雫＞を唱えている場面が見えた
「鈴鹿、＜武人＞何回で行けそうだ？」
「……そうですね、五回六回……遠そうです」
敵一列を攻撃する特性上、弓以上にボス戦には不向きな武器が薙刀なのだ
「ホント我が家は、全体攻撃を持つ敵に弱いな……」
少し距離を離した途端に、＜双火竜＞と＜雷電＞の猛攻撃が放たれてくる
溶岩を撒き散らしながら飛来する熱光線と雷に、壬生川家は翻弄され、直撃は避けつつも１５０と２００を与えてくる全体攻撃術の威力にジワジワと体力を削られてゆく
回復の術で手一杯になり、どうにも反撃の糸口が掴めない！
「このまま俺っちの技力が尽きたら、終わりっすよー！　＜お地母

＞！」
「ひーん」
あまりの消耗の激しさに、伽子も後方から＜お雫＞の援護に切り替えた
「兄上、このままでは……！」
暴れ狂う炎によってあちこちに火傷を負っている鈴鹿が、果敢に小太郎に挑みかかりながら、以蔵に怒鳴る
「……術は面倒だな、糞」
軌道の読めない雷撃に、以蔵もまた手足からボタボタと血を流して、それでも何とか槍を構えていた
せめて近づければと歯噛みをしている中、ついに伽子が膝をついた
「うわぁん……もう、ダメ……」
「伽っち！」
門司が駆け寄ろうとした瞬間、伽子の姿が、放たれた火炎に覆い尽くされる
それどころではなく、続いて鈴鹿までも小太郎の＜雷電＞に捕らえられた
「……土の遺伝子の欠乏による、術抵抗力の不足、ですか」
虚ろな目をして、その場に倒れこむ鈴鹿
「うわぁぁ、もうダメっす！」
伽子だけではなく、蘭（らん）の血を引く守りに秀でた鈴鹿が倒れたことにより、門司は頭を抱える
門司の前、以蔵が小さくため息をついた

「……やりやがったな、お前」

唱えていた＜お地母＞を中断し、槍を水平に構えて、以蔵は小太郎を睨んだ

「蘭姉の次は鈴鹿か？　ざっけんなよ、殺すぞ」

口角を吊り上げて犬歯を剥く

小太郎「散れェ！」

小太郎が傷ついた壬生川家当主に向けて、幾重もの火炎の螺旋を吐き出す……が、以蔵はそれらを振り回した槍で弾きながら、小太郎へと詰め寄る

「え、え、以蔵っち兄さん!?」

鈴鹿や伽子があれほど苦労していた間合いに、以蔵は三拍子で入り込んだ

一瞬の出来事に戸惑う小太郎の眼前で、以蔵は槍を振るう

鈴鹿の狙っていた、小太郎の眼球に向けて

――突き刺した

小太郎「ぐおおおおおおおおお」

苦悶に震え、怯む小太郎を、以蔵は滅多刺した

頭を、腹を、手を、胸を、耳を、肩を以蔵は刺し貫く

その容赦のない猛攻に、門司は息を呑む

童子が虫を解体するように、以蔵が鬼を細切れに斬り裂いてゆく

小太郎「燃え尽きよォオオオ＜花乱火＞！」

血まみれの小太郎の絶叫が響き、以蔵は至近距離で火炎球の直撃を受けたように門司には見えた、が、以蔵は信じられない行動に出た
小太郎の腹の肉を槍でえぐり、その蛇の胴体の中に身を潜め火炎をやり過ごすと、以蔵はそのまま渾身の力で背中を突き破った

小太郎「あああああああああああああああああああああ」

空気を振るわせるほどの叫喚が響き渡り、背中から這い出た以蔵はその小太郎の頭部に槍を打ち下ろす
凄惨な音と共に火の粉となって散ってゆく小太郎

相手は鬼とは言え、姿を変えられた神に対するあまりの仕打ちに、門司は絶句する
「い、以蔵っち、兄さん……？」
鬼の血を浴びて、全身を真っ赤に染めた以蔵がゆっくりと振り向く
「ひっ」
思わず門司は短く悲鳴を上げた

「……ん」
以蔵は自分の頬に手を当てる
「……どーした、門司」
「い、いえ……な、なんでも、ないっす」

とても口に出すことなど、できるはずがない
一瞬、以蔵が鬼に見えてしまったなどと
爛々とした赤い眼に、耳まで裂けた口が笑っているように見えたのだ――

以蔵は、倒れた鈴鹿、うつ伏せでぴくぴく痙攣している伽子を介抱してから、髪を縛っていた藍色の飾り布を解き、再びため息をついた

「……汚れちまった、な……」

もはや赤紫に染まった飾り布を再び髪に巻きつけ、以蔵は撤収の指示を門司に出した

こうして一同は鳴神小太郎を撃破し、二名の重傷者を出しながらも大量の奉納点（ほうのうてん）を稼ぎ、紅蓮の祠から帰還したのであった

第五話－４　「轟駆」　１０２２年４月後編（後書き）

元服→門司　出陣・紅蓮の祠（以蔵・鈴鹿・門司・伽子）
初見・英雄→薙刀士

第五話－5　「門人」　1022年5月（前書き）

以蔵　1才5ヶ月
鈴鹿　1才1ヶ月
門司　9ヶ月
伽子　5ヶ月
英雄　1ヶ月

第五話－5　「門人」　1022年5月

＜鈴鹿（すずか）の部屋にて＞

「ちょっと……兄上……」
「馬鹿野郎、じっとしてろっての」

部屋の中から、押し殺した声が聞こえる

「強く……しないでください……」
「……細いよな、お前」
「ん……っ」

くぐもった声が、空気を震わせる
その外、たまたま前を通りかかった怪我人・伽子（とぎこ）が、障子を耳にぴたりとつけていた

（ちょ、そんな、えっ……！）

中の囁き声に、思わず聞き耳を立ててしまう

「ほら、ジッとしてろ……すぐ終わっから」
「やめて……ください……」

衣擦れの音が聞こえてきて、伽子は思わず喉を鳴らした
（ど、どうせこんなの、絶対、オチがあるに決まってるねっ！）
ぷるぷると震える手で、障子に指をかける伽子

中から聞こえてくる艶のある声に、思わず尻込みするが、えええいっと手に力を込める
バシーンッ
「お父さん、リンリン、何を、し、て」
上半身裸で嫌がる鈴鹿の上に、以蔵(いぞう)がまたがっていた
父と目が合う伽子
伽子は無言で障子を閉めようとする
「ご、ゆっくり～……」
「待て」
素早く伽子の襟首を掴んで、以蔵は中に引きずり込む
「まったく、このエロ娘……」
腕組みをする以蔵の奥、鈴鹿が顔を赤らめてそっぽを向いていた
「え、え……あの、アレ終わった、の？」
「なにがだ、なにが……」
わたわた慌てる伽子にため息をつく以蔵
「良い教育をされましたね、兄上」
「……いやここらへんは、夢姉の領域だと思うんだけどな」
鈴鹿の皮肉に、以蔵は頬をかく
「……鈴鹿の火傷の手当てをしてただけだぞ、オレは」
手のひらで顔を覆いながら、指の隙間からこっちを見ている伽子に、一応釘を刺す以蔵
「えー……そう、だったんだ」
安心なのか期待ハズレなのか、複雑な年頃の伽子だった
「お前は、自分の父親が義妹に手を出していたら、面白かったのか

「……」

そう言いながら、以蔵は包帯を握り締めたまま、鈴鹿に近づく

「さ、そろそろ観念しろ鈴鹿」

「……大丈夫です、ひとりで出来ます」

鈴鹿の身体にはまだ、先月に受けた火傷の跡が色濃く残っていた

「お前、両手も満足に使えず、自分にどうやって自分で包帯を巻くんだ」

「……く、口で」

「馬鹿野郎」

以蔵は嫌がる鈴鹿を押さえつけて、その身体を手ぬぐいで拭きつつ、包帯を巻いていく

「……」

「そんな嫌そうな顔するなよ……門司（もんじ）にされるよりはマシだろ」

どこらへんが嫌そうな顔なんだろう、と伽子が鈴鹿の様子を観察するが、彼女の目にはいつもの無表情にしか見えない

「……いたいです」

「傷なんだから当たり前だろ……」

「兄上は、乱暴です……」

「それなら、蘭（らん）姉はもっと優しくしてくれたか」

「母上の治療は……」

何かを思い出したように、鈴鹿の動きが停止する

「……そうか、大変だったな」

鈴鹿の心中を察しながらも、以蔵は手早く療治を続ける

「切り傷だらけだな、お前の身体も」

鈴鹿の滑らかな肌を拭きながら、以蔵がつぶやく
「……それは、兄上も同じです」
「オレなんかと鈴鹿は違う」
「……」
「全然違う」
「……そうですか」

丹念に手当てされながら、鈴鹿はそういえば、と口を開いた
「伽子さんも、包帯をお取替えしなくてよろしいのですか？」
「……あーそうか」
手を休めて、顔を上げる以蔵
先月重傷を負ったのは伽子も同じだったが、あまりにも元気だったために以蔵はすっかり忘れていた
「あはは、あたしもー？」
「薬箱はここに揃っているしな、ついでに伽子もやっちまうか」
「はーぃ」

以蔵は伽子にバンザイさせて、その薬液に染まった包帯と新品のものを取り替えていく
父親に珍しく構ってもらえて、心なし嬉しそうにする伽子

「でも、やっぱり傷の治りが全然違うんだな」
伽子の弾力のある肌を眺めて、以蔵が感心する

「私ももう、1才1ヶ月ですから」
「オレはもう1才5ヶ月か……お互い老けたよな」

和やかに鈴鹿の部屋で介抱を行っていたところ、先ほどまでイツ花と遊んでいた英雄が戻ってきた

「お母さん、ただいまー」
障子を開いて……英雄は笑顔のまま固まる
そこには、敷かれた布団に座って、半裸の鈴鹿と伽子に囲まれている以蔵の姿があった
英雄は真顔で、とことこと以蔵に近づいて、
「師匠！」
「誰がだ」
以蔵は何かを勘違いしている英雄の頭に、拳骨を落とした

＜交神（こうしん）の儀＞

一方その頃、こちらは儀式の間
「何だかさっきから、屋敷の方が騒がしいっすね……」
ぼんやりと鈴鹿の部屋の方を眺める門司は、この部屋で待たされてから一時間近くが経過していた
「それではァお待たせしました、交神の儀やりましょうかー」
先ほどまで門司のことを完璧に忘れて、英雄とあやとりで遊んでいたとは言えないイツ花が、そそくさと現れる
「色々準備とか大変なんすねぇ」
「そ、そうなんですよォ、アハハ」
冷や汗を流しながら、イツ花は神様一覧表を門司に渡す

「さッ、どなたになさいましょーかッ」
「俺っち、一度で良いからおしとやかな人に会ってみたかったんすよね！」
おしとやか、という言葉の意味を反芻するイツ花
「そういえば……初子（はつこ）さま以来、そのような方は長らく見ていらっしゃらないですネェ」

鈴鹿はどちらかというと、淑やかというより機械的だ

「ですから、水の遺伝子を補充するためにも、この方をお願いしまっす！」
門司が選んだのは、髪の長い美人の女神だった
「えーと、泉源氏お紋さま、でいらっしゃいますネ」
「俺っちたちが散々お世話になった＜泉源氏＞を作った神様なら、きっと慈悲深くて優しくて、女性的に違いないっす！」
最近手厳しい周囲のツッコミに、癒しを求める門司である
「それではァ、お呼びいたしますね」
「お願いしまっす！」

部屋に湿り気のない幻のような霧が立ち込めたかと思うと、門司の後ろ、寝屋の部屋を開いてひとりの女性が登場した
うおう！とビックリして振り返る門司に、女神はニコリと微笑みかける

泉源氏お紋「こちらの準備は出来ててよ」

「は、はいっす！」

その自信の込められたお姉様言葉に、門司は思わず犬のように返事をしてしまう

も、もしかしてこの人って……、と門司が思っていると、その手を引かれて、門司は寝床へと連れ込まれてゆく

「よ、よろしく……お願い、するっす」

「ふふ、悪いようにはしないわよ……」

結局、その後門司がお紋に癒されたかどうかは、定かではなかった

第五話－5　「門人」　1022年5月（後書き）

交神の儀・門司×泉源氏お紋　訓練・鈴鹿→英雄

第五話－６　「過刻」　１０２２年６月前編（前書き）

以蔵　　１才６ヶ月
鈴鹿　　１才２ヶ月
門司　　１０ヶ月
伽子　　６ヶ月
英雄　　２ヶ月

第五話－６　「過刻」　１０２２年６月前編

＜壬生川（みぶがわ）家の居間＞

以蔵（いぞう）はどこでもよく眠る
自室でも稽古場でも、居間でもすぐにうとうとするが、その代わりに眠りは浅く、野良猫の気配ですら目覚めてしまうほどだ

暇になるとすぐ眠ってしまう以蔵がきょう選んだのは、居間だった
大きなちゃぶ台に寄りかかって寝ていた以蔵の肩に、そっと毛布がかけられた

「……ん」
寝ぼけ眼を擦りながら、以蔵は辺りを見回した
「ずいぶん、深くお眠りでしたね」
すぐ近くに、鈴鹿（すずか）がいた
いくら慣れ親しんだ相手と言っても、この距離まで気づかなかった自分に少し戸惑う

「……鈴鹿、ここ2、3日姿を見せなかったな、工場で修理でもされていたのか……って」
以蔵はそこで、鈴鹿の格好を改めて眺めた
普段は飾りっ気のない無地の藍色の装束をまとっている鈴鹿が、きょうは艶やかな緋色地に藤の花をあしらった着物を身に着けていた
おまけに髪も結い直し、まるでどこぞの公家のお嬢様のように見えた

「どうか、いたしましたか？」
耳にかかる髪をかき上げながら軽く首を傾げる鈴鹿に、以蔵は腕組みして考え込んでから、告げる
「……鈴鹿、バージョンアップか？」
「意味がまったく分からないのですが……」
困ったような鈴鹿に、以蔵は問いかける

「でもそんなに馬子にも衣装して、どこ行くんだお前」
「これ、母上のお着物なんです」
「……って、蘭姉（らん）の？」
以蔵の疑問に、鈴鹿はこくんとうなずく
「お婆上が母上に作ってくださって、結局母上は着なかったのですけれど、イツ花（いつか）さんが私に持ってきてくださりまして」
相変わらずの無表情だが、以蔵の目には鈴鹿がほのかに母恋しくしているように思えた
「蘭姉の着物か……格段に防御力が上がりそうだな」
「ただの布ですから」

何だか嫌そうに眉をひそめる鈴鹿が、それに、と続ける

「これから行くのではなく、もう行って来ました」
鈴鹿は軽く息をついて、以蔵の右隣に腰を下ろす
「んー……京の都に、蘭姉の後を引き継いで復興支援とか、か？」
「ええ、英雄（ひでお）さんと伽子（とぎこ）さんもご一緒に」
眠っていた以蔵は、全然気がつかなかった
肩にかかった毛布が何だか重く感じられ、以蔵はうつらうつらしながら、違和感を感じていた

「ちょっと待てよ、もう、行ってきた、って……」

思考に靄がかかって、上手に考えられない
「兄上……？」
「オレは一体……何日寝ていた、んだ？」
まぶたが閉じられ、飛びそうになる意識の中、鈴鹿の声が聞こえる
「……きっと、お疲れなんですね……ごゆっくりおやすみください、兄上」

そうして以蔵は再び、深い眠りへと落ちていった

＜門司（もんじ）の部屋にて＞

門司が訓練を終えて自分の部屋に戻ろうとすると、部屋の中から笑い声が聞こえてきた
「へ……」
なぜ自分の部屋からと思って障子を開くと、そこには二人の人影があった
「それで、その時ボクの前で茶屋のお姉さんがさ」
「あはははは」

よそ行きの格好をして、自分の部屋で談笑するふたりに、門司が叫ぶ

「ちょ、俺っちの部屋で何をしているっすか！？」
伽子は、門司を見て気さくに手を振る
「あ、モンチー、ただいまー」
「帰ってきたのは俺っちっすけどっ」

部屋の中には茶菓子が散乱して、何だかもう、汚れ放題

「違う違うよ、京の都からあたしたちが、だよ」
「あ、おかえりっす……って、京の都！？」
見えない金棒で頭を殴られたように、足元をふらつかせる門司に英雄が声をかける
「うんっ、ボクと伽ちゃんとお母さんとー」
「がーん、なぜ俺っちだけ屋敷に……」

自分の部屋の前で、両膝をついて落ち込む

「どこでもそんな風な役割の人っているよねー」
朗らかに笑う邪気のない？　声が門司をさらに、ビシバシ攻める
「モンチーのお部屋借りてたのも、ちょっと居間でお父さんとリンリンが良い感じだから、通りにくかったんだよねー」

ねー、と顔を見合わせる伽子と英雄

「そ、そうっすか……」
英雄が現れてからより一層、なんだか自分の扱いが低くなったように感じる門司、もうすぐ一児の父であった

＜出陣＞

鈴鹿が集まった四人を眺めて、うなずく

「それでは、参りましょうか」
玄関に集結したのは、鈴鹿、門司、伽子に、初実戦の英雄だ
「ボ、ボク……ちゃんと、戦えるか心配だよぉ」
伽子の細い腰辺りに手を当てながら、すがりついて泣く英雄に、
「だいじょーぶ、何かあったらおねーちゃんが守ってあげるから」
あははと微笑みかける伽子

集まった家族を見て、門司がもっともな質問をした
「それはそうと……以蔵っち兄さんはどうしたんすか？」
「兄上は……」
視線をさまよわせながら、鈴鹿は答える
「兄上は、あの、今月は京に美人画を買いにいく、と飛び出して……」
「明らかにウソじゃないっすか！」

門司のツッコミに「男の方は、みんな大好きなものじゃないのですか……」と何だか落ち込む鈴鹿

「鈴鹿さまァ、当主さまならお部屋の方にお運びしておきましたヨォ」
そこにニコニコと笑うイツ花が登場する
「あ、そ、そうですか」
鈴鹿は門司から目をそらす
「お部屋の方って、どうかしたんすか？」
きょとんと尋ねる門司
鈴鹿はイツ花を見て、口元に人差し指を当てる
「当主さまぁ、先々月に負った火傷が、ゼンッゼン良くなってないんですネェ」

口止め効果はゼロだった

「えええ、お父さん大丈夫……？」
「あの、鬼みたいな強さの義父さんも、怪我するんだ……怖いよぅ……」
さりげなく義父さん呼ばわりしたり、結構余裕がありそうだ
「なるほどっす、だから今回この四人なんすね、合点がいったっす」
でもどうして、と門司は鈴鹿に聞く
「何で鈴鹿っち姉さんは、怪我のこと隠してたんすか？」
門司の問いに、今月の出陣隊隊長が憮然と答える
「……兄上が黙っていたのなら、それは意味のあることだと思いました」
「健気ですネェ」
うんうん、とうなずくのはバラした張本人
「今回ご療養している兄上のためにも、たくさん奉納点を持って戻りましょう」
鈴鹿が皆を見回して、そう言う
おー、という声の中、当主を欠いた討伐隊は出陣していった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7910w/

はてしない物語＝壬生川一族、かく戦えけり＝

2011年10月12日08時56分発行